千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第55集

銚子市大久保遺跡

― 国道126号八木拡幅事業埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

令和７年３月

千葉県教育委員会

銚子市大久保遺跡

ちょうしおおくぼいせき

— 国道126号八木拡幅事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —

（1）SI006 出土土器

（1）SI006 貯蔵穴遺物出土状況

序　　文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡が埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会では、埋蔵文化財の保護と各種開発事業との調整、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的とした諸活動に加え、千葉県が行う開発事業に係る埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について実施しております。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第55集として、国道126号八木拡幅事業に伴って千葉県教育委員会が実施した、銚子市大久保遺跡の発掘調査報告書です。

この調査では、旧石器時代から中・近世まで各時代の遺構・遺物が確認されました。主体となる古墳時代中期の集落は、方墳をはじめとする墓域を伴って検出されており、これまで当該時期の集落がほとんど知られていなかったこの地域の歴史を知る上で、貴重な成果を得ることができました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する理解を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

令和７年３月

千葉県教育庁教育振興部
文化財課長　　四 柳　隆

凡　　例

1　本書は、千葉県県土整備部による国道126号八木拡幅事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書は、千葉県銚子市八木町1154ほかに所在する大久保遺跡（遺跡コード202-003）の成果を収録している。

3　千葉県県土整備部の依頼を受け、千葉県教育庁教育振興部文化財課が平成26・28・29、令和３・４年度に発掘調査を実施し、平成27～29、令和４～６年度に整理作業を実施した。

4　調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は、第１章第１節に掲載した。

5　本書の執筆は、第２章第２節を文化財主事　荒木昂大、第４節を久我谷渓太と鈴木彩奈が行い、それ以外を鈴木が行った。また、編集については鈴木が行った。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで以下の機関及び方々から御指導、御協力を得た。
千葉県県土整備部道路整備課、千葉県県土整備部銚子土木事務所、銚子市教育委員会、栗田則久、小林清隆（敬称略）

7　本書で使用した地図の座標値は、世界測地系にもとづく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。

8　土器観察表及び本文中に記載した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖2007年版』に基づいている。

9　本書で使用した地形図は下記のとおりである。
第１～３・８・９図　銚子市発行　1/2,500　銚子都市計画図を編集
第５図　千葉県発行　土地分類基本調査　表層地質図　1/50,000「銚子」・「八日市場」を編集
第６図　国土地理院発行　1/25,000「銚子」・「八日市場」を編集

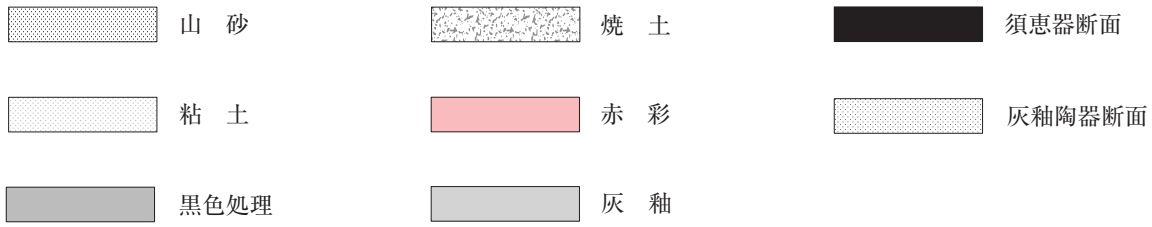
10　写真図版１で使用した遺跡周辺航空写真は、国土地理院昭和58年撮影のものを使用した。

11　主な遺構・遺物の縮尺については、以下のとおりである。
遺構　竪穴住居跡1/80、土坑1/60、方形周溝墓1/80、古墳1/100、溝状遺構1/100
遺物　石器・鉄製品2/3、石製品・縄文土器・弥生土器1/3、土師器・須恵器・陶器・中世土師質土器1/4、土製品1/2、玉1/1

12　挿図中の「K」は攪乱の略である。

13　遺構種別の記号は以下のとおりである。
SI：竪穴住居跡　SK：土坑　SM：古墳　SD：溝状遺構

14　遺構や遺物の図面に使用したスクリーントーンの用例は次のとおりである。



本文目次

第１章　はじめに……1
第１節　調査の概要……1
１　調査に至る経緯と経過……1
２　調査の方法と概要……3
第２節　遺跡の位置と地理的環境……3
１　遺跡の位置と地質環境……3
２　周辺の地形……6
３　周辺の遺跡……7
第２章　調査の成果……13
第１節　調査区の概要……13
第２節　旧石器時代の遺構と遺物……13
１　第１ブロック……16
２　第２ブロック……16
３　上層遺構中出土遺物……16
第３節　縄文時代の遺構と遺物……22
１　陥穴……22
２　遺構外出土の遺物……22
第４節　弥生時代の遺構と遺物……25
１　竪穴住居跡……25
２　土坑……29
３　方形周溝墓……33
４　遺構外出土の遺物……33
第５節　古墳時代の遺構と遺物……37
１　竪穴住居跡……37
２　土坑……56
３　古墳……59
４　遺構外出土の遺物……59
第６節　奈良・平安時代の遺構と遺物……64
１　竪穴住居跡……64
２　土坑……70
３　遺構外出土の遺物……77
第７節　中・近世の遺構と遺物……80
１　土坑……80
２　溝状遺構……82

3　遺構外出土の遺物……85
第３章　総括……87
第１節　弥生時代……87
第２節　古墳時代～奈良・平安時代……87
1　古墳時代の土器について……88
2　古墳時代集落の特徴について……88
3　奈良・平安時代の土器について……90
4　奈良・平安時代集落の特徴について……92
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　周辺地形と調査区…… 2
第２図　上層トレンチ配置…… 4
第３図　下層確認グリッド配置…… 5
第４図　房総半島の地質概況…… 6
第５図　銚子地域の表層地質および周辺の地形…… 7
第６図　周辺の遺跡…… 9
第７図　基本層序…… 13
第８図　遺構分布（１）…… 14
第９図　遺構分布（２）…… 15
第10図　第１ブロック…… 17
第11図　第２ブロック…… 18
第12図　（１）上層遺構中出土石器（１）……20
第13図　（１）上層遺構中出土石器（２）……21
第14図　（１）SK010・SK023…… 23
第15図　遺構外出土の遺物（１）……23
第16図　遺構外出土の遺物（２）……24
第17図　（１）SI002（１）……26
第18図　（１）SI002（２）……27
第19図　（１）SI003……28
第20図　（１）SI001……30
第21図　（１）SK002～SK006・SK012……31
第22図　（４）SK003 ……32
第23図　（５）SS001…… 34
第24図　遺構外出土の遺物……35
第25図　（１）SI005（１）……38
第26図　（１）SI005（２）……39
第27図　（１）SI006（１）……40
第28図　（１）SI006（２）……42
第29図　（１）SI006（３）……43
第30図　（１）SI007……45
第31図　（１）SI008……46
第32図　（１）SI009……47
第33図　（２）SI013･SI014（１）……49
第34図　（２）SI013･SI014（２）……50
第35図　（２）SI015……50
第36図　（４）SI001（１）……51
第37図　（４）SI001（２）……52
第38図　（４）SI003……53
第39図　（５）SI001……54
第40図　（１）SK001・SK007・SK008……55
第41図　（４）SK004・（５）SK002～SK005……56
第42図　（１）SM001……58
第43図　遺構外出土の遺物……59
第44図　（１）SI004……65
第45図　（１）SI010……66
第46図　（２）SI011……67
第47図　（２）SI012……68

第48図　（４）SI002……69
第49図　（４）SI004・SK006 ……71
第50図　（１）SK009・SK013……73
第51図　（１）SK016・SK021・SK024・SK027
Ａ～Ｃ・（２）SK028……74
第52図　（１）SK030・（２）SK029・（５）SK001……76
第53図　遺構外出土の遺物……77
第54図　（１）SK019・SK020・（２）SK031・
（４）SK001……81
第55図　（４）SK002・（４）SK005Ａ・SK005Ｂ……83
第56図　（２）SD002～004・006・007・010……84
第57図　遺構外出土の遺物……85
第58図　古墳時代土器集成図……89
第59図　奈良・平安時代土器集成図……91

表目次

第１表　発掘調査および整理作業…… 1
第２表　旧石器時代石器属性表……19
第３表　縄文時代陥穴一覧表……22
第４表　縄文時代石器属性表……24
第５表　弥生時代竪穴住居跡一覧表……25
第６表　弥生時代土坑一覧表……25
第７表　弥生時代方形周溝墓一覧表……25
第８表　弥生時代石製品観察表……36
第９表　弥生時代土製品観察表……36
第10表　古墳時代竪穴住居跡一覧表……37
第11表　古墳時代土坑一覧表……37
第12表　古墳一覧表……37
第13表　古墳時代土器観察表……60
第14表　古墳時代玉類観察表……62
第15表　古墳時代石製品観察表……63
第16表　古墳時代土製品観察表……63
第17表　古墳時代鉄製品観察表……63
第18表　奈良・平安時代竪穴住居跡一覧表……64
第19表　奈良・平安時代土坑一覧表……64
第20表　奈良・平安時代土器観察表……78
第21表　奈良・平安時代石製品観察表……79
第22表　奈良・平安時代鉄製品観察表……79
第23表　中・近世土坑一覧表……80
第24表　中・近世溝状遺構一覧表……80
第25表　中・近世土器観察表……86
第26表　中・近世鉄製品観察表……86

図版目次

巻頭図版　（１）SI006出土土器・貯蔵穴遺物出土状況
図版１　大久保遺跡周辺航空写真
図版２　調査前風景、第１・第２ブロック・下層確認グリッド（１）SK010（１）SK023
図版３　（１）SI002（１）SI003（１）SI001
（１）SK002・SK003・SK012
（１）SK004（１）SK005（１）SK006
（４）SK003
図版４　（４）SK003（５）SS001（１）SI005
（１）SI008（１）SI006
図版５　（１）SI006（１）SI007
図版６　（１）SI008（１）SI009（２）SI013
（２）SI014（２）SI015
図版７　（４）SI001（４）SI003（５）SI001
（１）SK001（１）SK007
図版８　（１）SK008（４）SK004（５）SK002
（５）SK003（５）SK004（５）SK005
（１）SM001
図版９　（１）SM001（１）SI004（１）SI010

（４）SI002
図版10　（４）SI004（４）SK006（１）SK009
（１）SK013（１）SK027A ～ C
図版11　（２）SK028（２）SK029（５）SK001
（２）SI011（２）SI012（１）SK019
図版12　（１）SK020（４）SK001（４）SK002
（４）SK005（２）SD002 ～ 004・006・007
・010
図版13　第１・第２ブロック出土石器・（１）上層遺構中出土石器・縄文時代遺構外出土の遺物（１）
図版14　縄文時代遺構外出土の遺物（２）
図版15　（１）SI002出土遺物
図版16　（１）SI003出土遺物
図版17　（１）SI001出土遺物
図版18　（１）SK003（１）SK004（４）SK003
（５）SS001出土遺物
図版19　弥生時代遺構外出土の遺物
図版20　（１）SI005（１）SI006（１）SI008出土遺物
図版21　（１）SI007（１）SI009出土遺物
図版22　（２）SI013（２）SI014（２）SI015
（４）SI001（４）SI003（１）SM001
（５）SI001・古墳時代遺構外出土の遺物
図版23　（１）SI005（１）SI006出土遺物
図版24　（１）SI006（１）SI007出土遺物
図版25　（１）SI008（１）SI009（２）SI015
（４）SI001（４）SI003出土遺物
図版26　（５）SI001（１）SM001（１）SI004
（１）SK009（１）SK013（４）SI002
（４）SK005（１）SK020（４）SK002
出土遺物
奈良・平安遺構外、中世遺構外出土の遺物
図版27　（１）SI004（１）SI010（４）SI002出土遺物
図版28　（４）SI004（１）SK007（１）SK009
（１）SK013（１）SK027（１）SK030
（２）SI012（５）SK001
奈良・平安時代遺構外出土の遺物

第１章　はじめに

第１節　調査の概要

１　調査に至る経緯と経過（第１表・第１図）

国道126号は、銚子市から東金市を経由して千葉市稲毛区に至る延長約80kmの一般国道で、山武・東総地域と首都圏や千葉市等を結ぶ幹線道路である。八木拡幅は旭市八木から銚子市三崎町までの約６kmを事業区間とし、交通混雑の緩和や線形不良による事故多発区間の改善、幅員狭小区間における歩行者の安全確保等を意図して計画された。

平成18年８月７日付けで千葉県海匝地域整備センター銚子整備事務所長より協議依頼があり、平成21年５月８日付けで事業地内には周知の埋蔵文化財包蔵地４か所が所在する旨の回答を行った。この回答に基づき、埋蔵文化財の取扱いについて千葉県県土整備部、千葉県教育委員会、銚子市教育委員会、旭市教育委員会で協議を行った結果、事業の性格上、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなった。

今回報告する大久保遺跡は銚子市八木町に所在し、平成26・28・29年度および令和３・４年度に発掘調査を実施、平成27～29年度および令和４～６年度に整理作業を実施した。各年度の調査組織および担当者・期間・内容は以下のとおりである。

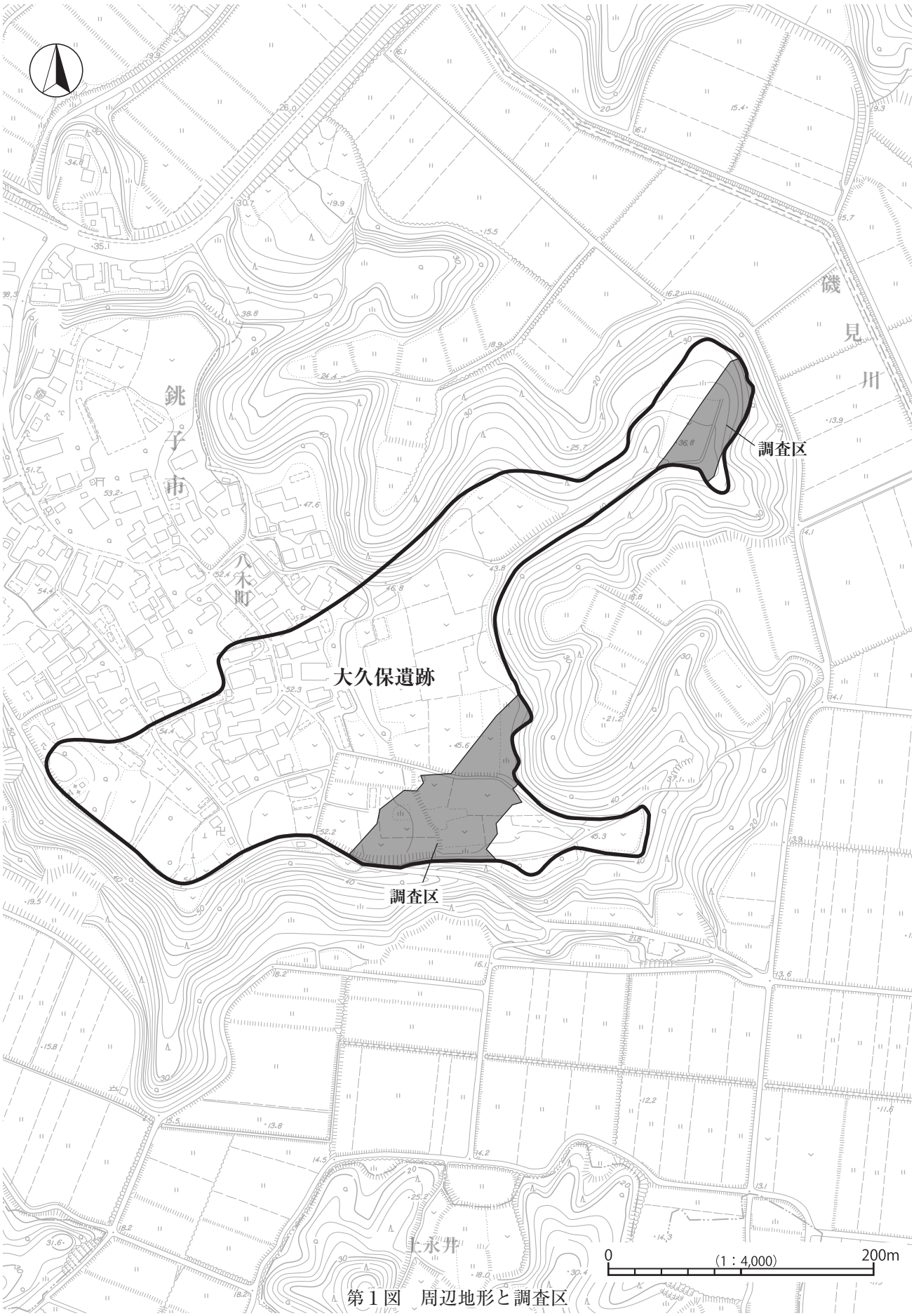
第１表　発掘調査および整理作業

【発掘調査】

年　度	調査期間	調　査　体　制			担　当　者	対象面積（㎡）	上　層		下　層	
							確認調査（㎡）	本調査（㎡）	確認調査（㎡）	本調査（㎡）
平成26年度（１次調査）	H26.7.1～H26.10.30	千葉県教育庁 教育振興部 文化財課	発掘調査班	課　長　永沼律朗 副課長　金丸　誠 班　長　蜂屋孝之	上席文化財主事 黒沢　崇	3,996	400	1,370	106	—
平成28年度（２次調査）	H28.10.11～H28.12.9	千葉県教育庁 教育振興部 文化財課	発掘調査班	課　長　永沼律朗 副課長　大野康男 班　長　田井知二	上席文化財主事 黒沢　崇	2,020	200	540	32	—
平成29年度（３次調査）	H29.6.12～H29.7.10	千葉県教育庁 教育振興部 文化財課	発掘調査班	課　長　萩原恭一 副課長　島立　桂 班　長　山田貴久	上席文化財主事 黒沢　崇	2,780	360	—	84	—
令和３年度（４次調査）	R3.6.1～R3.8.31	千葉県教育庁 教育振興部 文化財課	発掘調査班	課　長　田中文昭 副課長　髙梨俊夫 班　長　吉野健一	文化財主事 小澤政彦	869	869	600	16	—
令和４年度（５次調査）	R4.4.12～R4.5.18	千葉県教育庁 教育振興部 文化財課	発掘調査班	課　長　金井一喜 副課長　四柳　隆 班　長　黒沢　崇	文化財主事 倉橋裕真	651	651	500	12	—

【整理作業】

年　度	整理期間	整　理　体　制			担　当　者	内　容
平成27年度	H27.4.1～H28.3.31	千葉県教育庁 教育振興部 文化財課	発掘調査班	課　長　永沼律朗 副課長　大野康男 班　長　蜂屋孝之	上席文化財主事　黒沢　崇	記録整理～実測の一部まで
平成28年度	H28.4.1～H29.3.31	千葉県教育庁 教育振興部 文化財課	発掘調査班	課　長　永沼律朗 副課長　大野康男 班　長　田井知二	上席文化財主事　黒沢　崇	実測の一部～挿図の一部まで
平成29年度	H29.4.1～H30.3.31	千葉県教育庁 教育振興部 文化財課	発掘調査班	課　長　萩原恭一 副課長　島立　桂 班　長　山田貴久	上席文化財主事　黒沢　崇	記録整理の一部～挿図の一部
令和４年度	R4.4.1～R5.3.31	千葉県教育庁 教育振興部 文化財課	発掘調査班	課　長　金井一喜 副課長　四柳　隆 班　長　黒沢　崇	主任上席文化財主事　蜂屋孝之	水洗
令和５年度	R5.4.1～R6.3.31	千葉県教育庁 教育振興部 文化財課	発掘調査班	課　長　稲村　弥 副課長　四柳　隆 班　長　黒沢　崇	文化財主事　森　裕樹	分類接合・実測・トレース・挿図・図版・撮影・原稿補助
令和６年度	R6.4.1～R7.3.31	千葉県教育庁 教育振興部 文化財課	発掘調査班	課　長　四柳　隆 副課長　大内千年 班　長　髙梨友子	文化財主事　鈴木彩奈	原稿執筆・刊行・移管



第１図　周辺地形と調査区

2　調査の方法と概要（第２・３図）

発掘調査にあたっては、今回の発掘調査対象地全体を覆うように、世界測地系（第Ⅸ座標系）の公共座標に基づくグリッド設定を行った。グリッドの基準は、X=-31,900、Y=83,140を起点とし、40m×40mの方眼網を設定して大グリッドとした。名称は北から南へ１・２・３・・・、西から東へA・B・C・・・とした。

大グリッドは更に４ｍ×４ｍの小グリッドに100分割し、北西隅を00、南東隅を99とした。大グリッドと小グリッドを組み合わせて10B-66のように呼称した。

大久保遺跡における発掘調査は５次にわたるが、全ての調査で上層・下層確認調査を実施した。４次および５次調査は対象面積が1,000㎡以下のため、全面表土除去をし、上層確認調査を実施した。そのほかの次数は、約２ｍ幅のトレンチを設定して上層確認調査を行った。調査の結果、３次調査を除いて竪穴住居跡などの遺構を確認したため、遺構の分布する範囲を本調査範囲とした。下層は、全ての次数で２ｍ×２ｍのグリッドを設定して確認調査を実施した。１次および３次調査で石器が出土し、周囲を拡張したが、それ以上の出土はなく、確認調査で終了した。

記録作成に際しては、全体図と遺構平面図の実測図面を平板測量で実施した。写真撮影は、フィルムカメラ（120mmモノクロ、35mmカラーリバーサル）およびデジタルカメラ（RAW+JPEGデータ）によって行った。個々の遺構は、種類ごとに定めた記号（竪穴住居跡：SI、溝状遺構：SD、土坑：SK、古墳：SM）と３桁の通し番号とを合わせて、「SI001」のように表記した。なお、発掘調査を複数年度で実施しており、遺構が検出されなかった３次調査を除き、１次と２次は遺構番号が連番となっているものの、４次と５次は各次数で、頭から遺構番号を付けている。そのため、「SI001」等の同一遺構番号が複数存在することから、今回は頭に調査次数を付けて「（１）SI001」、「（４）SI001」のように報告する。

整理作業は、出土遺物の水洗・注記作業を行った後、種別・器種分類をし、実測・拓本作業を行った。出土遺物の写真撮影は、デジタルカメラで行った。発掘調査で作成した調査図面・写真等の記録整理の後、挿図・写真図版を作成し、それらをもとにデジタル編集によるトレースや写真補正等を行った。その後、原稿執筆・編集・校正作業を経て、報告書刊行に至った。また、報告書編集中に報告書に基づいた収納整理作業も併せて実施した。

第２節　遺跡の位置と地理的環境

1　遺跡の位置と地質環境（第４・５図）

大久保遺跡が所在する銚子市は、北側を利根川、東側から南側を太平洋に囲まれた千葉県北東端部の市である。令和６年度現在の人口は約５万５千人で、県北東部の中核都市となっている。市域は東西約16km、南北約13km、面積約84㎢の範囲におよび、産業面では、日本有数の水揚量である銚子港を擁し、江戸時代から続く醤油産業も盛んである。また、下総台地が太平洋の荒波によって削られ、形成された屏風ヶ浦は、銚子市から旭市まで約10kmに及ぶ海食崖であり、国の名勝および天然年記念物に指定されている。

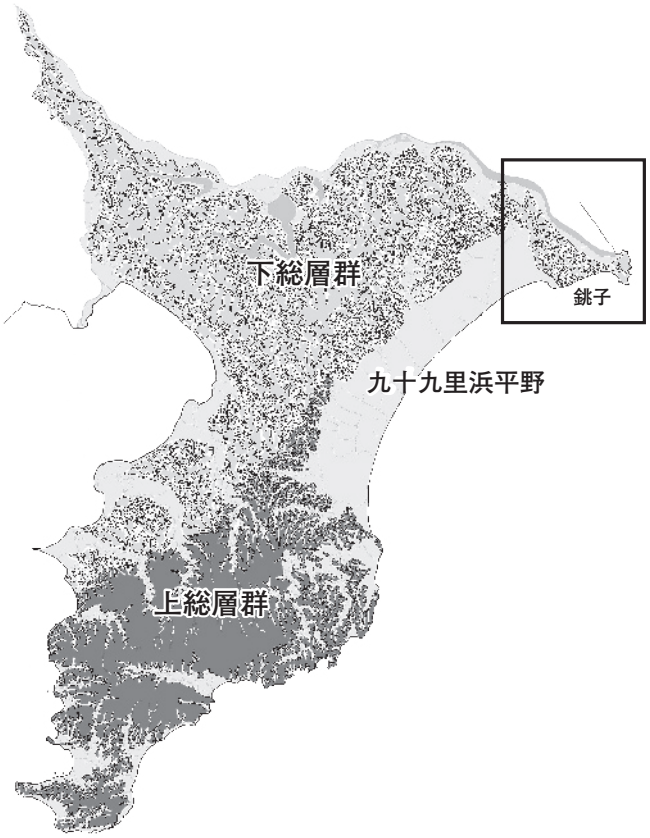
房総半島の地質は、おおむね南部の第三紀層からなる上総層群、北部の第四紀層からなる下総層群、南東部・九十九里平野の沖積層に分けられる。屏風ヶ浦は、本地域における下総台地の表層地質を容易に観察できる環境で、第三紀鮮新世から第四紀更新世の海成層からなる地質である。下部層は犬吠層群と呼ばれる上総層群に属し、下位から名洗層、春日層、小浜層、横根層に細分されている。また、その上部は不整合面で接する内湾的な環境で堆積した第四紀更新世の香取層が不整合に堆積しており、さらにその上には

第２図　上層トレンチ配置

第３図　下層確認グリッド配置

関東ローム層が堆積する。下位部である下末吉ローム層は、愛宕山周辺や屏風ヶ浦周辺など標高の高い地域に限定され、上位部の武蔵野ローム層と立川ローム層はほぼ普遍的に堆積する。

そのような地質構造の中にあって、銚子地域は局所的に中生代の地層（愛宕山層群・銚子層群）が露出する特異な地質環境を呈している。この中生代の地層のうち愛宕山層群からはチャートが産出され、旧石器時代の石器や礫が多数出土した市内の三崎３丁目遺跡でも石材として利用されていた[1)]。同じく中生代の地層で、銚子層群と呼ばれる砂岩質の層群は、通称「銚子石」と呼ばれ、江戸時代初期から石造物などの石材として切り出されている。銚子層群からは琥珀も産出され、粟島台遺跡では銚子産とみられる琥珀の原石や未成品、剥片などが大量に出土している[2)]。今回の発掘調査でも砂岩製の砥石をはじめ、琥珀製の勾玉、チャート製の石核が出土しており、市内で採取された石材を使用した可能性がある。



第４図　房総半島の地質概況

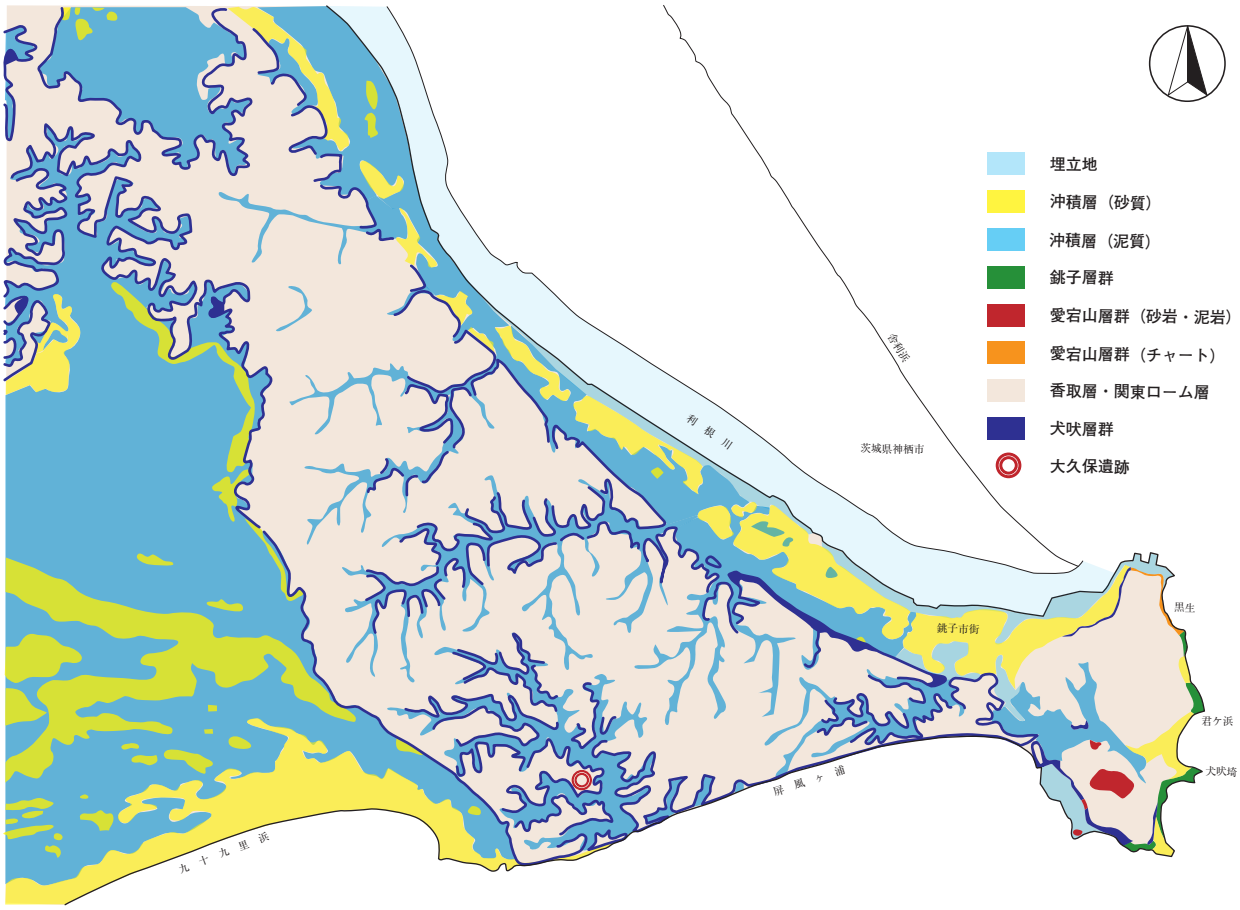
このように、銚子地域は千葉県内にあっては珍しい砂岩、琥珀、チャートといった石材の産出地であり、古くから石器などに活用されてきたことがうかがえる。

２　周辺の地形（第５図）

大久保遺跡は銚子市の南西部に位置し、旭市との市境にほど近い台地突端部にあたる。標高は50mほどで、台地の西側は縄文海進時の旧海食崖となっている。台地東側には太平洋に注ぐ磯見川が流れ、北側と南側は磯見川に繋がる小支谷によって樹枝状に開析されている。

銚子地域は下総台地の東端部にあたるが、本地域内の下総台地は北に向かって緩やかな傾斜がみられる。市の北側を流れる利根川沿いには沖積低地が細長く連続し、この低地に繋がる小支谷もまた、台地を樹枝状に開析している。利根川周辺の低地には、縄文海進の頃に霞ケ浦・印旛沼・手賀沼までつながる古鬼怒湾と呼ばれる広い内海が形成されていた。古鬼怒湾は鬼怒川が形成した浸食谷に海水が流入してできた内海で、縄文時代前期をピークに茨城県下妻市付近まで広がった後、鬼怒川をはじめとする河川が運ぶ土砂の堆積と海退によって縮小し、沖積低地が形成されていった。利根川沿いの沖積低地には縄文時代後期以降の集落遺跡が点在しており、少なくとも縄文時代後期には離水し、砂州が発達しつつあったことが読み取れる。その後、江戸時代初期に鬼怒川の流路に利根川が付け替えられ、現在に至っている。

台地を樹枝状に開析する小支谷は利根川に繋がるものが大半で、太平洋側に開くものは磯見川とその小



第５図　銚子地域の表層地質および周辺の地形

支谷に限られる。屏風ヶ浦は1960年代に浸食対策工事が行われ、現在は侵食がゆるやかになっているが、それ以前の海岸線の後退進度は、1888年作成の地籍図と1950年の地形測量の結果から、60年で30mと計算されている。この計算結果をもとにかつての海岸線を復元すると、6000年前には海岸線は現在よりも約３km沖にあったと推定されるという[3)]。大久保遺跡は海岸に近い環境にあるが、それはあくまで激しい海食による現在の地理的環境であり、遺跡が形成された当時とは異なることに留意しなければならない。

３　周辺の遺跡（第６図）

大久保遺跡〈１〉の周辺で、発掘調査歴のある遺跡はさほど多くない。ここでは、報告書等で調査成果が報告されている遺跡を中心に、時代ごとに記述した。

旧石器時代　銚子市内において、調査歴のある旧石器時代の遺跡は非常に限られている。三崎３丁目遺跡〈２〉で３つの文化層が検出されており、石器･礫の総点数は7,500点にのぼる。銚子市内で産出されるチャートを石材とした石器が多い。第１文化層（Ⅲ層～Ⅳ層最上部）では、小形のナイフ形石器を中心に削器、掻器、彫刻刀、錐器などが出土した。第２文化層（Ⅲ層中位～Ⅵ層上位）では、東内野型尖頭器のほか、ナイフ形石器、切出形石器なども多くあり、掻器、削器、彫刻刀などの石器も出土した。第３文化層（Ⅶ層）からは、製品の出土はなく、剥片や石核であった。

このほか第６図の範囲外だが、野尻遺跡〈３〉は利根川に面した標高約50mの台地上に位置し、昭和51年

に調査が行われた。ナイフ形石器２点が出土している。

縄文時代　縄文時代の遺跡もまた、調査歴のあるものは限られている。大久保遺跡〈１〉周辺では、調査歴はないものの、磯見川を挟んで対岸に位置するカシ小田遺跡〈４〉や北西側の榎木内遺跡（八祖遺跡）〈５〉など、後期を中心とした時期の遺跡が点在する。榎木内遺跡（八祖遺跡）〈５〉は標高８ｍ前後の台地斜面裾部に位置し、狭い範囲ではあるものの、昭和46年に調査が行われた。後期の土器が多数出土したほか、土製品や石器も出土した。

学史上著名な遺跡として、利根川に注ぐ高田川東岸の標高約７ｍ浜堤上に余山貝塚〈６〉がある。前期～晩期まで遺構が確認されているが、主体となるのは後・晩期である。多量の人骨や遺物が出土することで、明治期より注目され、大正13年に最初の発掘調査が行われた。その後は大小さまざまな調査が複数回調査が行われている。貝塚はチョウセンハマグリを主体とし、出土した遺物は土器や石器のほか、土製耳飾りや大量の貝輪、骨角器などである。貝輪の未成品も出土しており、貝輪の製作地であったとみられる。骨角器もまた、種類・量ともに豊富であり、釣り針・モリ・ヤスなどが確認できる。

第６図の範囲からは外れてしまっているが、粟島台遺跡〈７〉もまた余山貝塚〈６〉と並ぶ著名な遺跡で、早期～後期まで遺構が確認されている。太平洋に面する舌状台地上とそれを取り巻く低湿地に位置する。粟島台遺跡〈７〉もまた、昭和と平成に複数回調査されており、貝塚も確認されている。中心となる時期は前期と中期である。本遺跡からは、琥珀の原石や未成品などが大量にみつかっている。低湿地部分では漆塗り製品も多数出土している。

団子塚遺跡〈８〉は標高55mの台地上にあり、平成15年の調査で陥穴１基を検出した。

弥生時代　当該時期以降は、調査歴のある遺跡数および確認された遺構数がやや増加し、台地上を中心に遺跡が確認されている。調査された遺跡は全て中期末～後期であり、中期末以前のものは今のところ確認されていない。大久保遺跡〈１〉周辺では、南側に位置する番匠野遺跡〈９〉や上永井東遺跡〈10〉で遺物の散布がみられるようだが、詳細は不明である。

大久保遺跡〈１〉から７kmほど東に位置する佐野原遺跡〈11〉は学史上著名な遺跡で、標高48mの台地上にある。昭和49年の調査で、後期の竪穴住居跡７軒を検出した。この調査時に出土した連弧文が施文される土器をもとに、鈴木正博は「佐野原式」を提唱した[4)]。

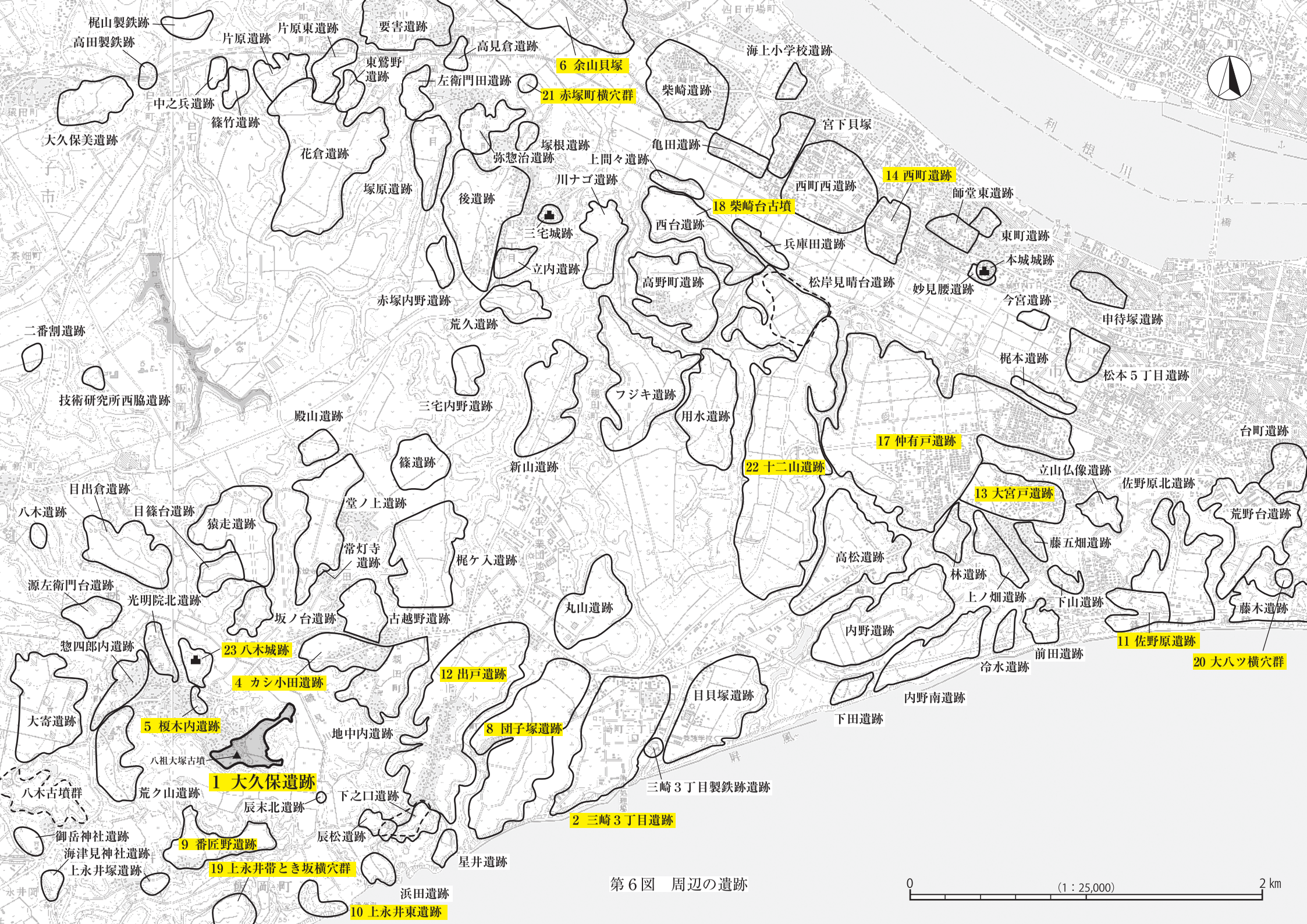
団子塚遺跡〈８〉では、中期末～後期初頭の竪穴住居跡２軒を検出した。

野尻遺跡〈３〉は遺跡の東端に沿う形で後期の竪穴住居跡10軒を検出し、２軒の住居跡からは炭化米が出土している。

古墳時代　弥生時代に続いて、台地上の遺跡を中心に調査歴のある遺跡が複数確認できる。検出された竪穴住居跡の数は後期が最も多く、後期において、比較的大きな集落が複数展開する様子が看取される。古墳は、調査歴のあるものが極めて少ない。周溝のみが検出され、詳細な時期が判断しがたいものもあるが、後期～終末期とみられる円墳や方墳が台地上に認められる。消滅した古墳もあるものと思われるが、全体数は少なく、群集墳は小規模なものがごくわずかに認められる程度で、単独のものが目立つ。

大久保遺跡〈１〉周辺でも、カシ小田遺跡〈４〉や榎木内遺跡（八祖遺跡）〈５〉、出戸遺跡〈12〉など後期の土器が確認できる遺跡が多い。銚子市域全体でみた場合、前期の集落は少ないながらも存在するが、中期の集落は大久保遺跡〈１〉以外みあたらない。

団子塚遺跡〈８〉で後期の竪穴住居跡１軒を検出したほか、標高約50mの台地に位置する大宮戸遺跡〈13〉


梶山製鉄跡
高田製鉄跡
片原遺跡
片原東遺跡
要害遺跡
高見倉遺跡
6 余山貝塚
東鷲野遺跡
左衛門田遺跡
21 赤塚町横穴群
中之兵遺跡
篠竹遺跡
大久保美遺跡
花倉遺跡
塚根遺跡
弥惣治遺跡
上間々遺跡
川ナゴ遺跡
塚原遺跡
後遺跡
三宅城跡
立内遺跡
赤塚内野遺跡
荒久遺跡
二番割遺跡
技術研究所西脇遺跡
三宅内野遺跡
殿山遺跡
篠遺跡
新山遺跡
フジキ遺跡
用水遺跡
目出倉遺跡
目篠台遺跡
八木遺跡
猿走遺跡
堂ノ上遺跡
常灯寺遺跡
梶ケ入遺跡
源左衛門台遺跡
光明院北遺跡
坂ノ台遺跡
古越野遺跡
丸山遺跡
惣四郎内遺跡
23 八木城跡
4 カシ小田遺跡
12 出戸遺跡
大寄遺跡
5 榎木内遺跡
地中内遺跡
8 団子塚遺跡
八祖大塚古墳
1 大久保遺跡
八木古墳群
荒ク山遺跡
下之口遺跡
辰末北遺跡
三崎３丁目製鉄跡遺跡
2 三崎３丁目遺跡
御岳神社遺跡
9 番匠野遺跡
辰松遺跡
海津見神社遺跡
上永井塚遺跡
19 上永井帯とき坂横穴群
星井遺跡
浜田遺跡
10 上永井東遺跡
海上小学校遺跡
柴崎遺跡
宮下貝塚
亀田遺跡
14 西町遺跡
西町西遺跡
18 柴崎台古墳
西台遺跡
兵庫田遺跡
師堂東遺跡
東町遺跡
本城城跡
妙見腰遺跡
松岸見晴台遺跡
高野町遺跡
今宮遺跡
申待塚遺跡
梶本遺跡
松本５丁目遺跡
17 仲有戸遺跡
22 十二山遺跡
台町遺跡
立山仏像遺跡
佐野原北遺跡
13 大宮戸遺跡
荒野台遺跡
藤五畑遺跡
高松遺跡
林遺跡
上ノ畑遺跡
下山遺跡
藤木遺跡
内野遺跡
11 佐野原遺跡
前田遺跡
20 大八ツ横穴群
冷水遺跡
目貝塚遺跡
内野南遺跡
下田遺跡
利根川
0
(1：25,000)
2 km

第６図　周辺の遺跡

で、前期の竪穴住居跡２軒を検出した。方墳１基も検出されているが、出土遺物がなく詳細な時期は不明である。

利根川の河口から約６km上流に位置する標高７m前後の砂堤上に、西町遺跡〈14〉がある。西町遺跡では昭和57年～58年と平成２年に調査が行われ、古墳時代後期の竪穴住居跡３軒をはじめ、土坑や溝状遺構、土器溜りを検出した。

西町遺跡〈14〉の北西に位置する余山貝塚〈６〉でも、古墳時代の遺構が検出されており、奈良時代にかけての竪穴住居跡６軒、土坑１基、溝状遺構４条が確認されている。古墳時代とみられる住居跡から羽口が出土したほか、土坑からは剣形石製模造品が出土した。

第６図の範囲からは外れてしまっているが、余山貝塚〈６〉よりさらに上流の標高６m前後の砂堤上に、椎柴小学校遺跡〈15〉がある。椎柴小学校遺跡〈15〉では、平成７年に調査が行われ、弥生時代終末期～古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡４軒と後期の竪穴住居跡22軒を検出した。後期の住居跡からは石製模造品が出土している。西町遺跡〈14〉、余山貝塚〈６〉、椎柴小学校遺跡〈15〉と利根川沿岸の微高地にこの時期の遺構がまとまって確認されており、古墳時代における低地への集落展開として注目される。

野尻遺跡〈３〉では、前期の竪穴住居跡３軒、後期の竪穴住居跡39軒のほか、円墳２基と方墳３基を検出した。円墳は墳丘が一部遺存していたが、方墳は墳丘が検出されず、方形に廻る周溝と埋葬施設が検出された。方墳１基からは人骨が検出された。円墳と方墳は遺跡の南側に位置し、住居跡は遺跡の北側で濃密に分布している。

このほかの古墳の調査例としては、第６図の範囲から外れてしまっているが西粟１号墳〈16〉が挙げられる。標高51mの台地上に位置する円墳で、墳丘の一部は削平されていたが、トレンチ調査により二重周溝の円墳で周溝を含めた径が約60mとなることがわかった。埋葬施設は検出されず、古墳に伴う遺物は出土しなかったが、市内最大規模の円墳として注目される。また、仲有戸遺跡〈17〉は長塚遺跡群として遺構確認調査が行われ、二重周溝をもつ方墳をはじめとして、複数の古墳の存在が確認された。これらはみな、墳丘は遺存しておらず、周溝のみが検出されている。

西台１号墳（柴崎台古墳）〈18〉で箱式石棺から複数人骨と金環が検出された。大久保遺跡〈１〉範囲内にも八祖大塚古墳という径12mの円墳が所在しているが、未調査のため詳細は不明である。

また、千葉県北東部の海食崖でしばしばみられる横穴墓も、大久保遺跡〈１〉の南に位置する上永井帯とき坂横穴群〈19〉をはじめ、複数確認されている。調査歴のあるものとしては、佐野原遺跡〈11〉の東側に大八ツ横穴群〈20〉、利根川低地を臨む台地斜面に赤塚町横穴群〈21〉が挙げられる。赤塚町横穴群〈21〉では少なくとも６基の存在が認められ、調査が行われた２基で人骨が検出された。

奈良・平安時代　大宮戸遺跡〈13〉で、竪穴住居跡８軒のほか、掘立柱建物跡２棟、土坑15基と柵列１条を検出している。住居跡は８世紀中頃のものが１軒で、残りは９～10世紀である。土坑のうち１基は、覆土の状況から墓坑の可能性がある。本遺跡では、住居跡と土坑から「本」などの文字が書かれた墨書土器が複数点出土したほか、石帯が土坑から出土している。

このほか、椎柴小学校遺跡〈15〉で、竪穴住居跡４軒、掘立柱建物跡１棟、土坑１基、野尻遺跡〈３〉では８世紀代の竪穴住居跡３軒、粟島台遺跡〈７〉でも、10世紀中葉とみられる竪穴住居跡を１軒検出している。

長塚十二山遺跡〈22〉は標高56mの台地上に位置し、昭和61年に調査が行われた。８世紀後半と９世紀前半に空白期間を挟みつつも、８世紀前半～10世紀初頭に集落が展開している。検出した住居軒数は30軒

であり、最盛期とみられる９世紀後半のものは８軒であった。鉄斧、鎌、鋤先といった鉄製品が多数出土したほか、墨書土器も出土している。本遺跡の北東側に位置する仲有戸遺跡〈17〉では、鉄滓・羽口など製鉄関連の遺物が出土しており、長塚十二山遺跡で出土した鉄製品の供給源であった可能性がある。

中・近世　中世以降の遺跡・遺構は城跡を除けば、わずかに確認された土坑や溝状遺構が中心であり、台地整形を伴うような遺構群は確認できない。城跡としては、大久保遺跡〈１〉の北西側に八木城跡〈23〉があり、多郭構造であることがわかっている。このほか、第６図の範囲外だが、利根川に面した標高約40mの台地上に築かれた中島城跡〈24〉は海上氏の本拠であった可能性が高く、注目される。空堀、土塁が認められ、東西約500m、南北約400mを城域とした大規模城郭である。戦国期の資料が存在しないものの、主郭や空堀の特徴から、戦国期の城郭とされる。周辺には海上氏の歴代の墓もあり、少なくとも鎌倉時代にはこの地域が海上氏の本拠地であったとみられる。中島城〈24〉の南側には経塚があり、「建長四年」との銘文のある経筒が出土している。

近代　この地域、すなわち太平洋岸を臨む沿岸には第２次世界大戦の末期に、いわゆる「トーチカ」が建設された。トーチカなどの防御施設は日本各地に残っているが、銚子市や旧飯岡町の海食崖に沿って点在し、長い年月による風化や浸食が進んでいるものの、現在でもその姿をとどめているものもある。今回の調査対象範囲からは除外したが、遺跡内にはコンクリート製のトーチカとその付帯施設が１基その姿を残していた。近隣住民からの聞き取りでは、ドーム状の円形施設は長らく開口したままであったが、出入りが可能で危険であることから、土砂を詰めて塚状にする対策が図られて今日に至っている。円形のドームには付帯するコンクリート製の地下施設が東側にあって、地表にその天井部が確認できた。弾薬庫などの施設と推測される。トーチカからは退避用とみられる数本のトンネルが海食崖に向かって掘られていたという証言が得られているが、その位置や規模については定かではない。次第に風化する、いわゆる戦争遺跡については、今後の取扱いが検討課題となっている。

注

１）　東総文化財センター　1997『東総文化財センター年報１（平成３・４年度）』
２）　銚子市教育委員会　1974『粟島台遺跡－1973年発掘調査概要－』ほか
３）　川崎逸郎　1954「千葉県飯岡町付近の地形」『地理学評論』第27巻第５号　日本地理学会
４）　鈴木正博　1979「『十王台式』理解のために（３）」『常総台地』10
　　小高春雄　1986「『北関東系土器』の様相と性格」『研究紀要』10

参考文献

〈２〉東総文化財センター　1997『東総文化財センター年報』平成３・４年度
〈３〉銚子市教育委員会　1978『銚子市野尻遺跡』
〈５〉岡崎文喜　1978『八祖遺跡』八祖遺跡調査団
〈６〉千葉県教育委員会　1989『銚子市余山貝塚確認調査報告書』
　銚子市教育委員会　1990『銚子市余山貝塚発掘調査報告書－住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－』
　銚子市教育委員会　2001『銚子市余山貝塚調査概要－昭和34年１月大場磐雄国学院大学教授の発掘調査概要－』
　銚子市教育委員会　2021『千葉県銚子市余山貝塚確認調査報告書』
〈７〉銚子市教育委員会　1974『粟島台遺跡－1973年発掘調査概要－』
　銚子市教育委員会　1988『粟島台遺跡　一部確認調査報告書－』
　粟島台遺跡発掘調査会　1990『銚子市粟島台遺跡発掘調査報告書』
　銚子市教育委員会　1991『千葉県銚子市　粟島台遺跡発掘調査報告書』

銚子市教育委員会　2000『粟島台遺跡－銚子市粟島台遺跡1973・75の発掘調査報告書－』
〈８〉東総文化財センター　2003『千葉県銚子市団子塚遺跡』東総文化財センター発掘調査報告書 29
〈11〉国学院大学考古学第1研究室　1975『千葉県銚子市佐野原遺跡発掘調査概報』千葉県教育委員会
〈13〉銚子市大宮戸大新田遺跡調査会　1988『銚子市大宮戸大新田遺跡第１地点調査報告書』銚子市教育委員会
銚子市教育委員会　2015『大宮戸遺跡』銚子市教育委員会発掘調査報告書
〈14〉銚子市教育委員会　1984『千葉県銚子市西町遺跡発掘調査報告書』
銚子市教育委員会　1991『千葉県銚子市西町遺跡発掘調査報告』
銚子市教育委員会　1970『銚子市赤塚古墳調査報告書』
〈15〉東総文化財センター　2000『千葉県銚子市　椎柴小学校遺跡－銚子市立椎柴小学校校舎改築工事に伴う埋蔵文化財調査－』東総文化財センター発掘調査報告書 22
〈16〉西粟１号墳発掘調査会　1989『千葉県銚子市　西粟１号墳発掘調査報告書』銚子市教育委員会
〈17〉長塚遺跡群確認調査会ほか　1987『銚子市長塚遺跡群』
〈18〉渋谷興平　1972『銚子市　柴崎台遺跡』東京文化史学会
〈20〉銚子市教育委員会　2002『銚子市大八ツ横穴群発掘調査報告書』
〈21〉大木衡　1970『銚子市赤塚古墳調査報告書』銚子市教育委員会
〈22〉長塚十二山遺跡調査会ほか　1987『千葉県銚子市長塚十二山遺跡発掘調査報告書』
〈24〉千葉県史料研究財団　1998『千葉県の歴史』資料編　中世１（考古資料）

第２章　調査の成果

第１節　調査区の概要

今回の発掘調査では、旧石器時代～中・近世まで幅広い時代の遺構を検出した。東側に細く伸びる台地の南側縁辺を中心に遺構が分布している。小さな谷を挟んだ台地北東側の突端部も調査が行われたが、耕作による削平を受けており、上層遺構は全く検出されず、確認調査で終了した。

時代ごとの成果としては、旧石器時代は計２か所のブロックを検出し、それぞれ剥片２点が出土した。そのほか、上層遺構の覆土中より旧石器時代に帰属するとみられる石器１点と剥片６点、石核６点が出土した。

縄文時代は陥穴２基が検出されたが、散漫とした分布である。陥穴からの遺物の出土はなかった。遺物は、前期、後期、晩期の土器片のほか、石鏃６点が出土した。

弥生時代は、後期の竪穴住居跡が２軒、土坑８基、方形周溝墓１基が検出された。竪穴住居跡と土坑の多くは台地南側縁辺でも西側にまとまって分布するが、方形周溝墓と墓坑とみられる土坑１基が東側に位置している。

古墳時代は最も多くの遺構が確認され、竪穴住居跡11軒、土坑８基、方墳１基が検出された。主体となるのは中期であるが、後期の遺構も少数ながら認められる。住居跡は台地東側に、方墳と土坑墓とみられる土坑３基は西側にそれぞれまとまって分布している。

奈良・平安時代は竪穴住居跡５軒、土坑14基が検出され、土坑１基以外は台地東側に位置している。奈良時代の遺構は１軒のみで、その他の遺構は大半が、９世紀後半～10世紀初頭に帰属する。

中・近世は土坑７基と溝状遺構６条が検出された。土坑は全て台地東側に位置し、比較的近接して分布する。溝状遺構は東西に延びるものがほとんどで、西側にも続くものとみられる。溝状遺構の覆土からは古墳時代の土師器片が多数出土しており、調査段階では古墳時代の溝状遺構が含まれることを想定していたが、整理作業段階で記録類を精査し、土師器は流れ込みで全て中・近世の溝状遺構と判断した。南北を区画する溝であったと考えられ、ほぼ重なっており、繰り返し作り直された様子がうかがえる。

第２節　旧石器時代の遺構と遺物

大久保遺跡における立川ローム層の基本層序として、10D-60グリッド土層断面を第７図に示した。

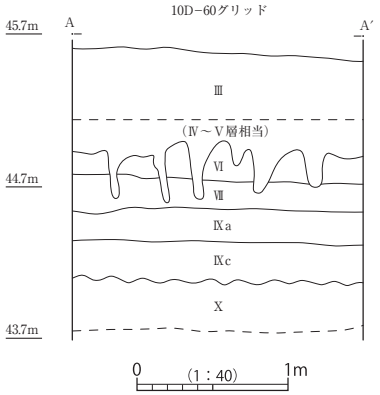
Ⅲ　層　黄褐色のソフトローム層である。軟質化が進行しており、下部はⅣ～Ⅴ層相当と考えられるが、明確な分層は困難である。

Ⅵ　層　明黄褐色のハードローム層である。姶良丹沢パミスが含まれる。

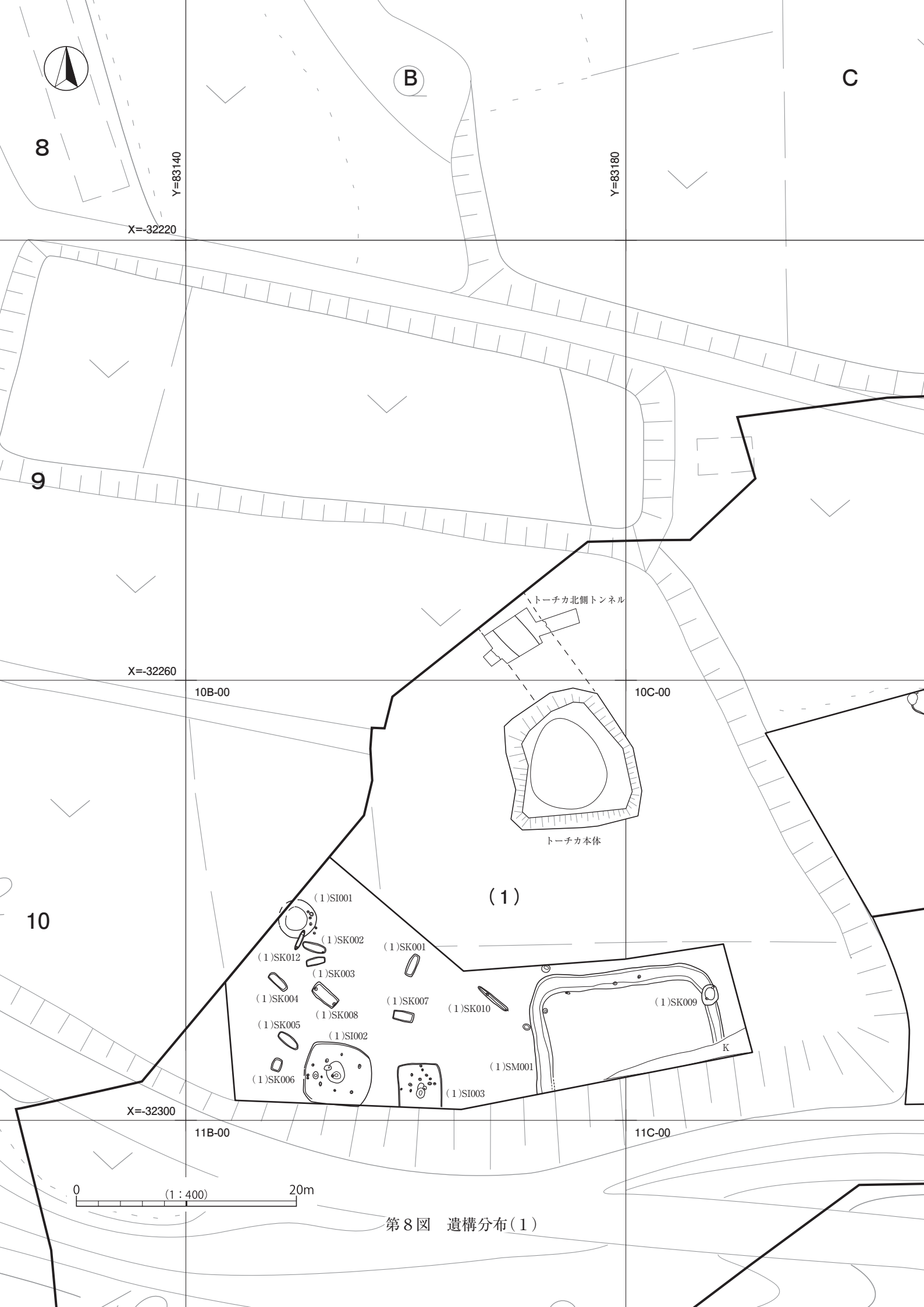
Ⅶ　層　にぶい黄褐色のハードローム層である。第２黒色帯上部に当たる。径１～３mm程度の黒色・赤色スコリアを含む。

Ⅸ　層　暗褐色のハードローム層である。第２黒色帯下部に当たる。径１mm～４mm程度の比較的大粒の赤色スコリア、径１mm～３mm程度の黒色スコリアを含む。Ⅸa層とⅨc層に分かれ、Ⅸc層はⅨa層に比べて、色調がより暗く、スコリアは量・大きさともに増加する傾向にある。間層として知られるⅨb層は本遺跡では明瞭に観察されなかった。

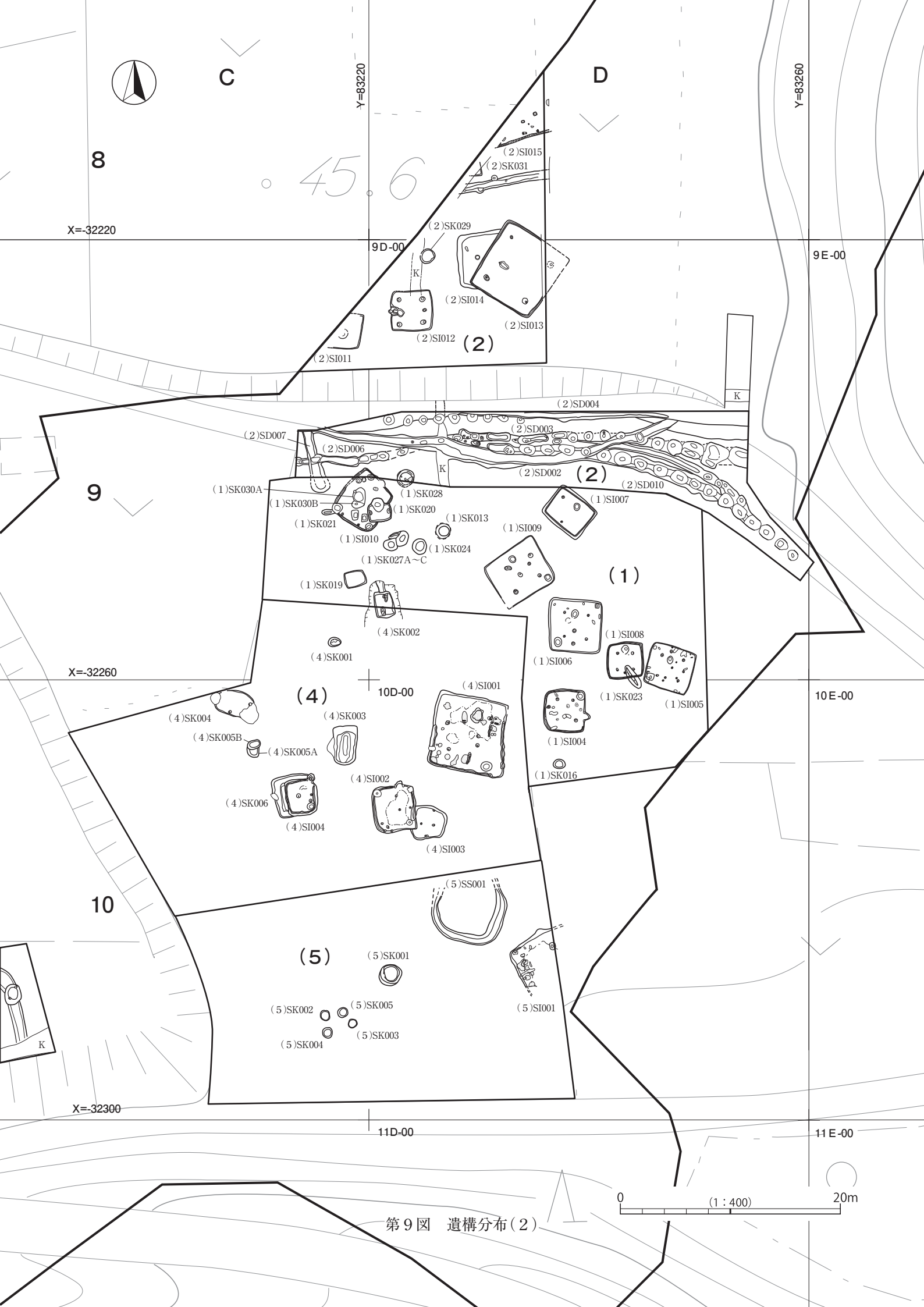
Ⅹ　層　褐色のハードローム層である。立川ローム層の最下部層にあたる。Ⅸ層に比べてやや軟化し、スコリアは径１mm～２mmの小粒のものが少量みられる程度になる。



第７図　基本層序


B
C
8
9
10
Y=83140
Y=83180
X=-32220
X=-32260
X=-32300
10B-00
10C-00
11B-00
11C-00
トーチカ北側トンネル
トーチカ本体
(1)
(1)SI001
(1)SK002
(1)SK012
(1)SK001
(1)SK003
(1)SK004
(1)SK008
(1)SK007
(1)SK010
(1)SK009
(1)SK005
(1)SI002
(1)SK006
(1)SM001
(1)SI003
K
0
(1：400)
20m

第８図　遺構分布（１）


C
D
Y=83220
Y=83260
8
9
10
X=-32220
X=-32260
X=-32300
9D-00
9E-00
10D-00
10E-00
11D-00
11E-00
(2)SI015
(2)SK031
(2)SK029
(2)SI014
(2)SI013
(2)SI012
(2)SI011
(2)
(2)SD004
(2)SD003
(2)SD007
(2)SD006
(2)SD002
(2)SD010
(1)SK030A
(1)SK030B
(1)SK028
(1)SK020
(1)SK021
(1)SK013
(1)SI007
(1)SI009
(1)SI010
(1)SK024
(1)SK027A～C
(1)SK019
(1)
(4)SK002
(4)SK001
(1)SI008
(1)SI006
(1)SK023
(1)SI005
(4)
(4)SI001
(4)SK004
(4)SK003
(4)SK005B
(4)SK005A
(1)SI004
(1)SK016
(4)SI002
(4)SK006
(4)SI004
(4)SI003
(5)SS001
(5)
(5)SK001
(5)SK002
(5)SK005
(5)SK003
(5)SK004
(5)SI001
K
0
(1：400)
20m

第９図　遺構分布（２）

1　第１ブロック（第10図、第２表、図版２・13）

標高約50mの台地南端付近に設定した10B-66グリッドおよび10B-67グリッドに位置する。ローム層の堆積はほぼ水平である。遺物総数は２点、出土位置を土層断面に投影するとIX層下部にあたるが、本地点では立川ローム層第二黒色帯下部（＝IX層）での色調・スコリア等の変化が乏しく、単一の様相を呈するためIXa・IXcの分層が困難である。またVI層より上の残存がなくローム層の堆積が浅いため、比定される時期はIX層下部に限定されない可能性が指摘される。遺物は２点とも剥片であり、遺物の特徴から時期を推定することは難しい。

１はチャート製の不整形な縦長の剥片で、背面に広く角礫面を残す。背面から見て右側縁上部は調査時のガジリとみられ、使用痕にはあたらない。２は珪質頁岩製の剥片である。礫の角部を打面として剥離された不定型剥片で、背面に広く角礫面を残す。

2　第２ブロック（第11図、第２表、図版２・13）

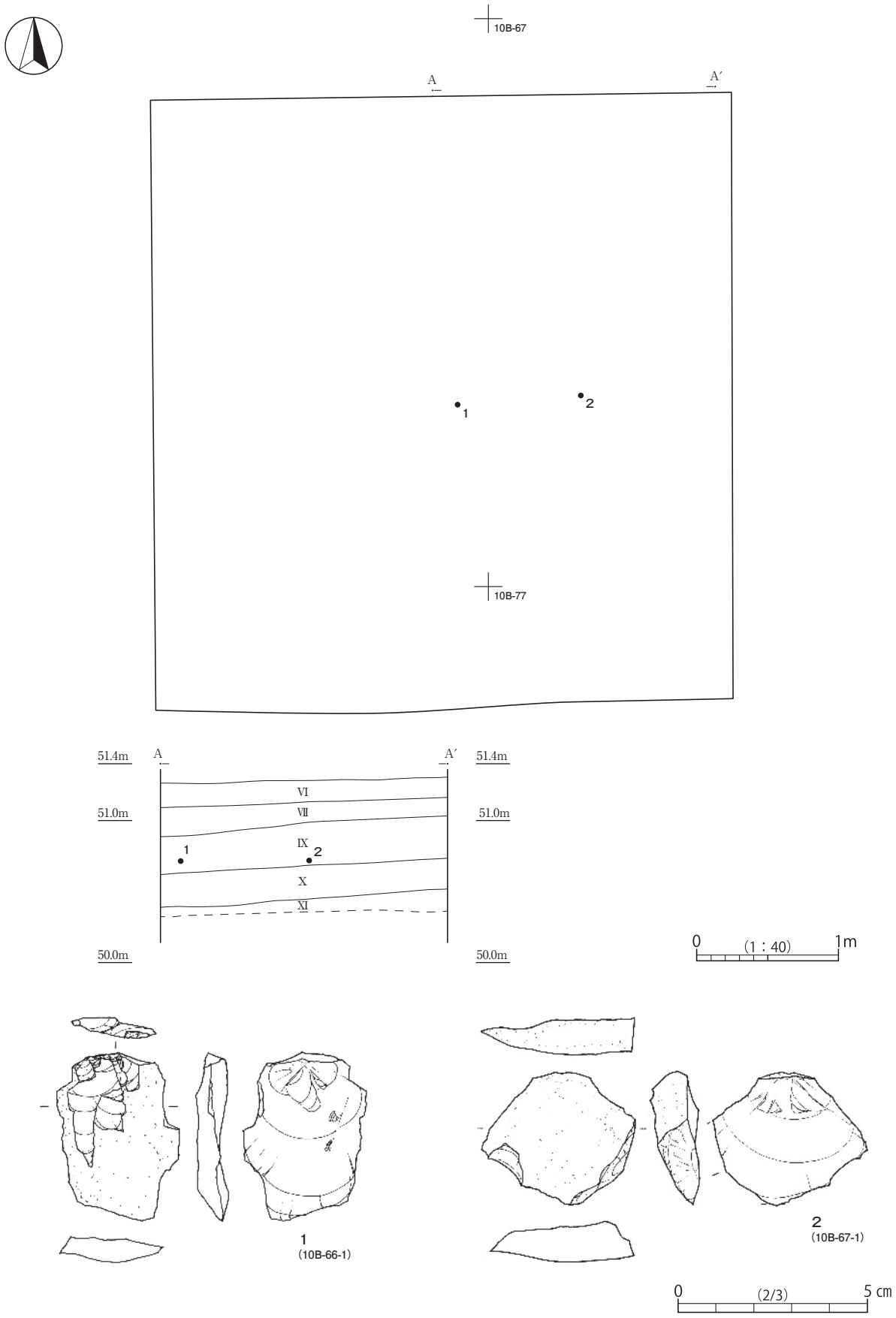
北東に伸びた舌状台地の先端部の2I-02グリッドに位置する。遺物総数は２点である。２点とも、調査時に搬入口としていた場所近くのローム層最上部（Ⅲ層）から出土した。そのため、出土状況から帰属時期を判断する材料に乏しく、また、遺物の特徴からも時期を特定するのは難しい。出土地点から可能な範囲（主に西方向）を拡張したが、他に石器は出土しなかった。石材は２点ともホルンフェルスであり、チャートを主体とした台地南部の他の出土石器とは様相が異なる。

１は泥岩質ホルンフェルス製の剥片である。背面左側に円礫面を残す。右側縁の端部からの打撃によって剥離されている。２も泥岩質ホルンフェルス製の剥片である。背面の一部に円礫面を残す。剥離時に打面中央から２分されたうちの一方の資料である。

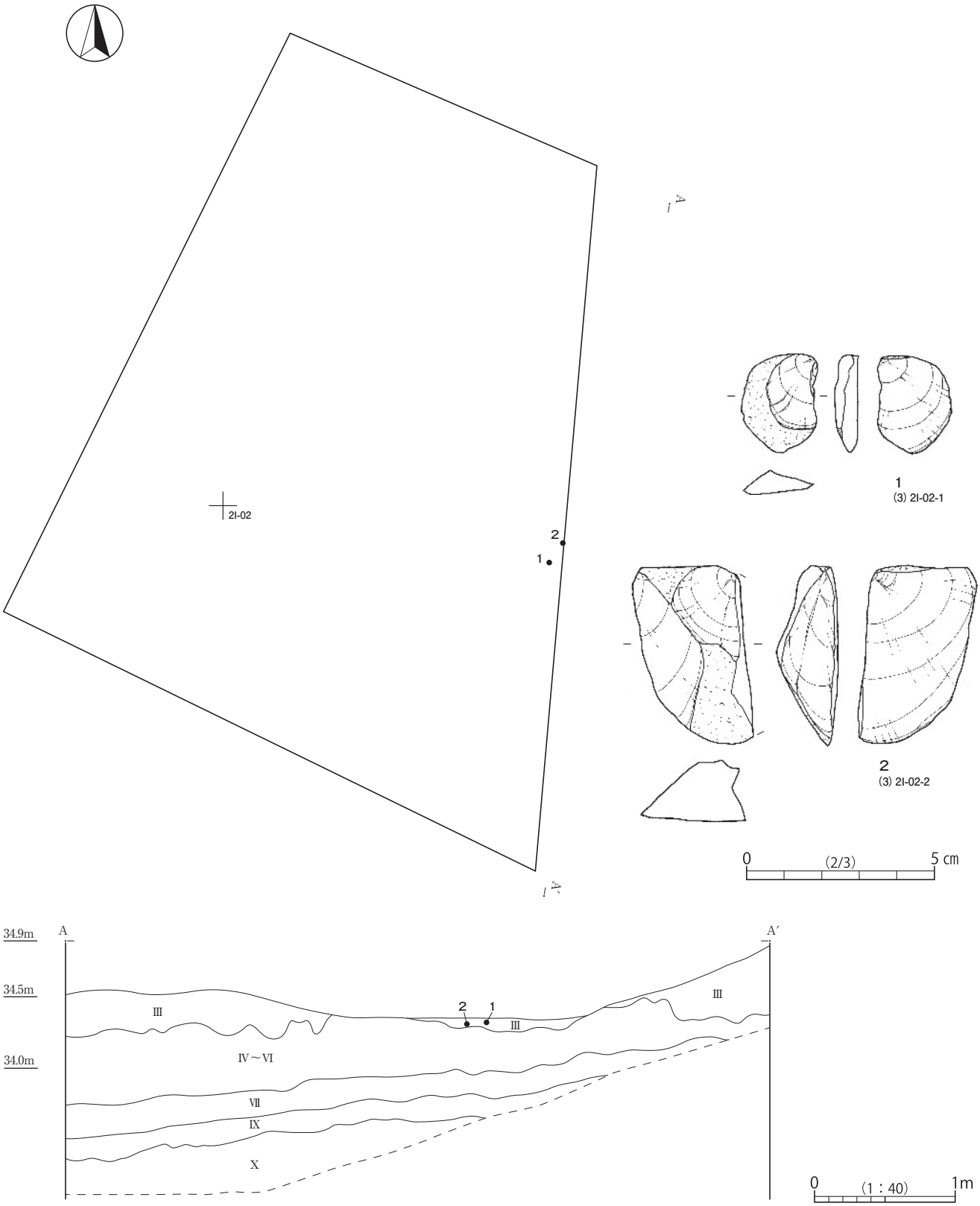
3　上層遺構中出土遺物（第12・13図、第２表、図版13）

第１ブロックより南、遺跡範囲の南端で検出した上層遺構中より旧石器時代に帰属すると想定される石器が13点出土した。

１～９は古墳SM001の周溝中より出土した。１は灰褐色に風化したガラス質黒色安山岩製の両面加工尖頭器である。中央で最大幅となる木葉形で、上下対称の形状のため、先端と基部の判別がつきにくい。先端部が５mm程度欠損しているが、剥離は微小であり、使用による衝撃で生じたとは考えにくい。断面は凸レンズ形をしている。大型厚手の剥片を素材とすると考えられるが、表裏の調整加工により素材時の剥離面は残されていない。旧石器時代終末期～縄文時代草創期のものと推察される。２はチャート製の調整痕のある剥片である。腹面側の上部縁辺に沿って微細な剥離がみられる。調整の施された縁辺は楔形石器の縁辺に類似するが、下部からの剥離や破損の痕跡は見られない。３は白色を呈する良質なチャートによる不定型の剥片を利用した使用痕ある剥片である。背面には広く原礫面を残す。鋭利な縁辺には使用の痕跡がみられる。４は珪質頁岩製の使用痕のある剥片である。背腹どちらの面もポジティブバルブを形成するという特徴を持ち、この両剥離面とも打点は異なるが同一方向からの剥離により形成される。打面には複数の打撃により微細剥離が形成され、楔形石器の縁辺に近似した稜がみられる。また、背面からみて右側縁には使用による刃こぼれが見られる。５はチャート製の小型横長剥片である。節理走行に対抗する角度で剥離したことで、段を多く形成している。６はチャート製の小型縦長剥片である。背面方向の打面


10B-67
A
A′
1
2
10B-77
51.4m
51.0m
50.0m
VI
VII
IX
X
XI
0
(1：40)
1m
1
(10B-66-1)
2
(10B-67-1)
0
(2/3)
5 cm

第10図　第１ブロック


A
A′
2I-02
2
1
1
(3) 2I-02-1
2
(3) 2I-02-2
0
(2/3)
5 cm
34.9m
34.5m
34.0m
A
A′
Ⅲ
Ⅲ
Ⅲ
2
1
Ⅳ～Ⅵ
Ⅶ
Ⅸ
Ⅹ
0
(1：40)
1m

第11図　第２ブロック

周辺には、剥離時につけられたと思われる微小な剥離が複数確認できる。下端部は極端に薄くなる。７はチャート製の小型剥片である。特に小さく、背面の下半分と腹面全ては浅黄色の節理面である。打面側は折損している。石器製作時の石材の末端部と思われる。８はチャートの小型の円礫を素材とする石核である。上面以外は小型、不定型の剥離面がみられるが、礫面が各所に残されていることから、いずれの面でも剥片生産は低調だったと考えられる。９はチャートの分割礫を用いた石核で、実測図正面が主な作業面である。平坦な節理面を打面として、不定型な縦長剥片が剥離されたと考えられるが、石質が悪く、良好な剥片はあまり得られていないようである。打面は、石核の分割面をそのまま利用した可能性がある。裏面は礫面が広く残されている。

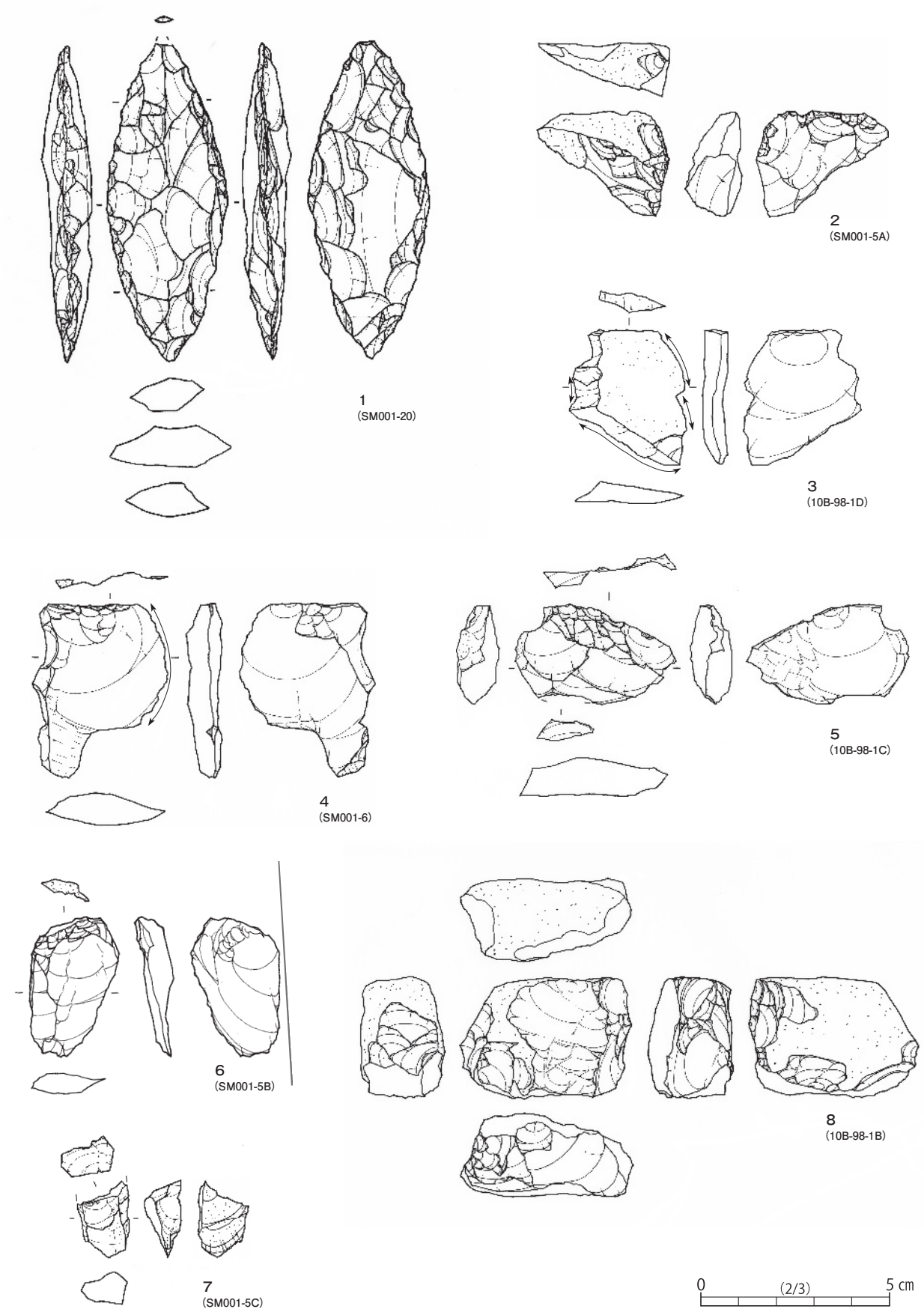
10～13は弥生時代後期の竪穴住居跡（１）SI002中より出土した。10は白色のチャート製石核で、板状の剥片を素材とする。背面は節理面、腹面には素材時の主要剥離面が広く残されている。上端には小型の剥離痕が連続するが、これは素材剥片の打面を切断して作り出した平坦円を打面としている。下端、右側面は腹面の平坦面を打面とする剥離痕がみられるが、いずれも良質な剥片は得られていないようである。11は白色と緑がかった灰色の部分に分かれるチャート製石核であり、円礫面の一部で浅黄色に強く風化している。ほとんどが自然面であり、正面中央の縦長で幅の狭い剥離の他はめぼしい剥片製作は行われなかったものと思われる。12もチャート製石核であり、自然面は浅黄色で強く風化した部分と、灰白色～暗灰色が縞状に重なる風化の進んでいない部分のある角礫面である。内部も同様に灰白色と暗灰色が縞状にみられる。正面左端と右側縁上部にのみ剥離がみられ、剥片製作は限定的であったと考えられる。13は赤褐色のチャート製石核である。端部が被熱による破損を受けたことで角錐状をしている。平坦な節理面を打面とし、並列して小型不整形の縦長剥片が剥離されている。並列剥離は被熱破損した面以外の全方位で確認できる。

なお、２・３・５～12は白色を基調とし、一部で暗灰色を呈す節理の発達したチャートであり、在地の石材と考えられる。また、２～13は剥片、石核であり、遺物の特徴から時期を推定することは難しい。

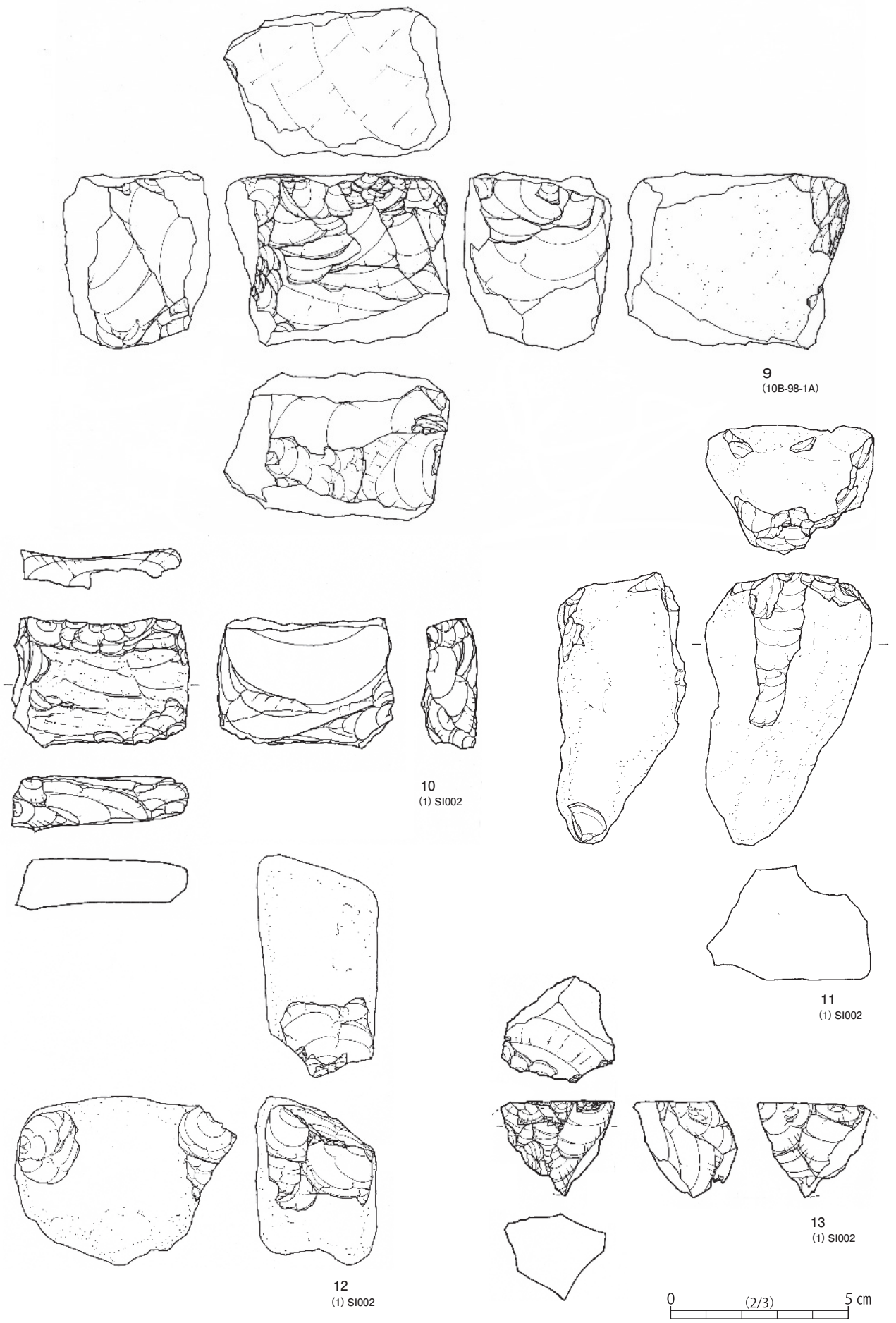
第２表　旧石器時代石器属性表

現存値＜　＞

挿図番号	グリッド	遺物番号	出土層位	器種	石材	計測値：mm　g				備　考
						最大長	最大幅	最大厚	重量	
第10図-１	10B-66		Ⅸ層？	RF	チャート	44.0	32.5	8.1	11.11	
第10図-２	10B-67		Ⅸ層？	FL	珪質頁岩	35.0	40.0	12.5	14.23	
第11図-１	2I-02		不明	FL	ホルンフェルス	25.5	20.0	6.0	3.54	
第11図-２	2I-02		不明	FL	ホルンフェルス	47.0	＜38.0＞	17.0	24.85	
第12図-１	SM001	20	不明	PO	ガラス質黒色安山岩	＜80.4＞	31.8	12.2	30.71	遺物の形態から旧石器終末～縄文草創期初頭か
第12図-２	SM001	5A	不明	RF	チャート	28.0	35.0	15.0	8.89	
第12図-３	10B-98	1D	不明	UF	チャート	35.5	30.9	8.0	6.51	
第12図-４	SM001	6	不明	UF	珪質頁岩	45.5	35.5	9.5	13.05	
第12図-５	10B-98	1C	不明	FL	チャート	＜26.5＞	42.5	11.5	10.80	
第12図-６	SM001	5B	不明	FL	チャート	36.6	23.5	10.5	5.40	
第12図-７	SM001	5C	不明	FL	チャート	＜10.0＞	14.0	10.5	2.0	
第12図-８	10B-98	1B	不明	CO	チャート	31.6	45.6	22.5	40.72	
第13図-９	10B-98	1A	不明	CO	チャート	48.5	62.8	40.5	194.41	
第13図-10	SI002		不明	CO	チャート	36.4	49.9	16.0	37.73	
第13図-11	SI002		不明	CO	チャート	76.2	46.6	36.0	122.03	
第13図-12	SI002		不明	CO	チャート	47.1	34.2	62.0	121.48	
第13図-13	SI002		不明	CO	チャート	26.1	31.7	29.3	17.80	被熱による破砕



第12図　（1）上層遺構中出土石器（1）



第13図　（1）上層遺構中出土石器（2）

第３節　縄文時代の遺構と遺物

大久保遺跡では、縄文時代の遺構・遺物は少ない。遺構は、陥穴とみられる土坑２基のみで、竪穴住居跡は検出されなかった。遺物は量が少ないものの、当該時期の遺構外から土器と石鏃などの石器が出土した。土器は前期、後期、晩期のものがある。

第３表　縄文時代陥穴一覧表

遺構番号	種　別	位　　置	長軸方向	計測値：m			時　期	備　　考
				長軸	短軸	深さ		
（1）SK010	陥穴	10B－66・76・77	N－50°－W	3.40	0.44	0.74	早期？	
（1）SK023	陥穴	9D－95・96・10D－05・06	N－31°－W	2.38	0.84	2.00	早期？	

1　陥穴

（1）SK010（第14図、図版２）

10B-66・76・77に位置する。長軸方向は、N-50°-Wである。長軸長3.40m、短軸長0.44m、確認面からの深さは0.74mである。平面形は長楕円形であり、短軸方向の断面はV字形である。底面にピット状の掘り込みを検出した。遺構の形状から、陥穴と考えられる。

遺物は出土しなかった。

（1）SK023（第14図、図版２）

９D-95・96・10D-05・06に位置する。長軸方向は、N-31°-Wである。長軸長2.38m、短軸長0.84mである。遺存状況が良く、確認面からの深さは2.00mである。平面形は楕円形であり、短軸方向の断面はV字形である。遺構の形状から、陥穴と考えられる。

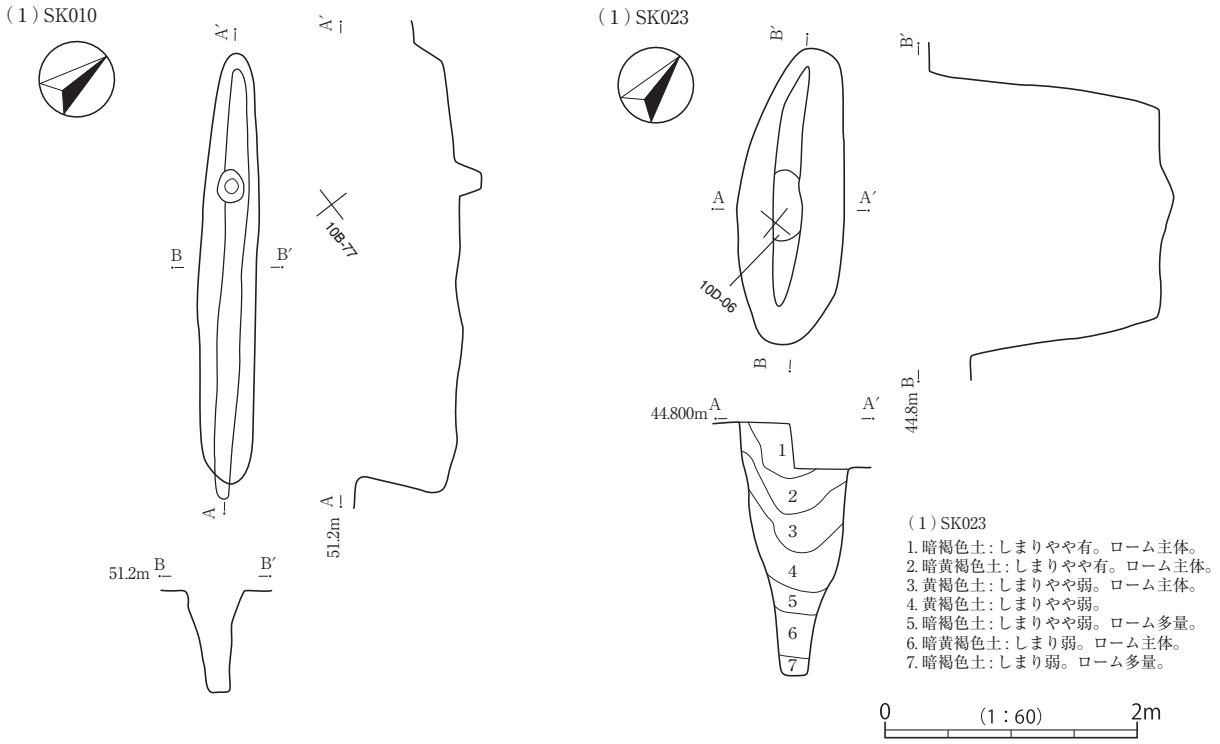
遺物は出土しなかった。

2　遺構外出土の遺物（第15・16図、図版13・14）

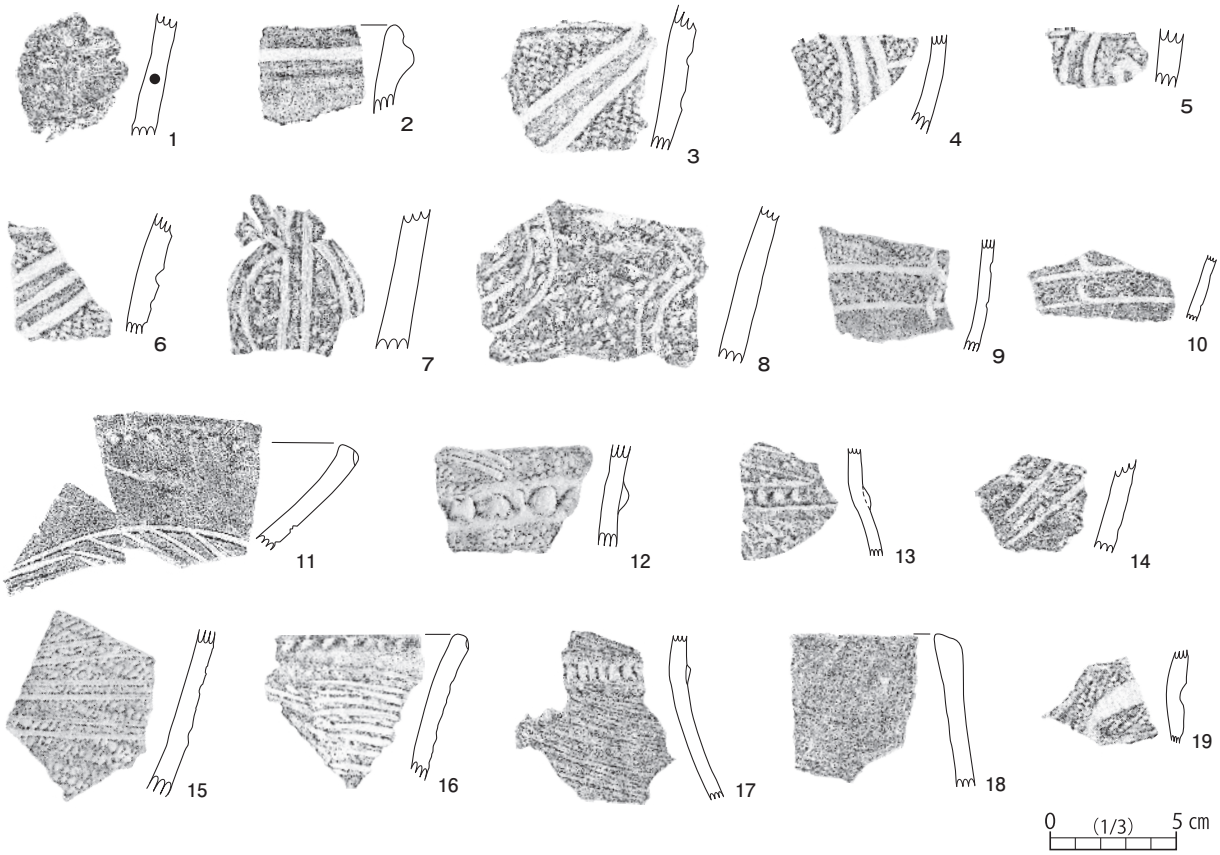
今回の調査範囲における縄文時代の遺構は陥穴のみで、遺物は出土していない。本遺跡全体としても縄文時代の遺物は少ないが、グリッド一括や遺構に伴わない遺物のうち、27点を図示することができた。

土器は19点を図示することができた。１は前期前半・黒浜式土器である。深鉢の胴部片で、浅い沈線が施される。２～８は後期前半・堀之内式土器で、全て深鉢である。２は口縁部で、口唇部直下に横位の沈線が施される。３～８は縄文を地文とする胴部である。３・６は磨消縄文、４は３本単位、５・７・８は２本単位の沈線による文様が施される。９～11は後期中葉・加曽利B式の精製土器である。９・10は横帯文に縄文が充填される。11は口唇端部に連続刺突がみられ、口縁部は無文である。横位の沈線で口縁部下を区画し、以下には斜位の沈線が施される。12・13は加曽利B式の紐線文系の粗製深鉢である。紐線部分が遺存しないが、14・15も同様であろう。16・17は安行１式の粗製深鉢である。16は口唇端部に押捺が連続的に加えられ、口縁部には条線が施される。17は口縁部と胴部の間に紐線文をもつ深鉢の一部である。18は内傾する口縁部に紐線文をもたない粗製の深鉢である。斜行する条線が認められる。19は晩期中葉の前浦式土器の浅鉢の一部である。太い沈線とその中に単節LRの縄文が施文される。

石器・石製品は８点を図示することができた。１～６は石鏃である。１・２は、基部の抉りが小さい無茎鏃である。１は黒曜石製で先端をわずかに欠損する。２の石材はチャートで完存する。３～６は凹基無茎鏃である。３はチャート製で完存する。４はガラス質黒色安山岩製で、先端部が欠損し、側縁の一部に

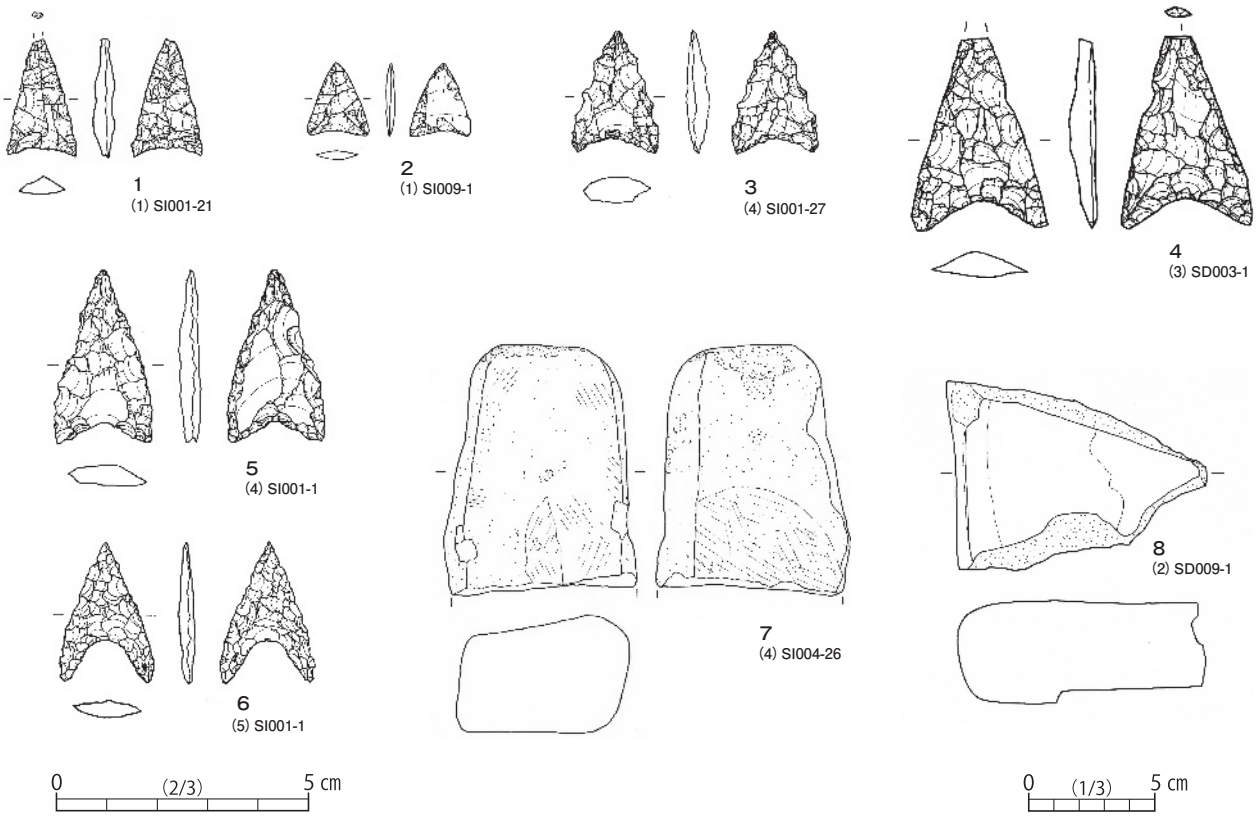


第14図　(1) SK010・SK023



第15図　遺構外出土の遺物(1)

ガジリが認められる。５はチャート製で、先端部をわずかに欠損する。６はガラス質黒色安山岩製で、精緻な作りの二等辺三角形で先端は細く鋭く、基部は深く抉られ、完存である。薄い剥片を用いている。７は砂岩製の磨石類である。両面が使用されており、さらに上端部には敲打痕が認められる。全体に被熱により変色している。８は砂岩製の石皿の一部である。両面とも使用していた可能性が高いが、裏面の大部分が剝がれている。やや黒色を帯びており被熱によると考えられる。



第16図　遺構外出土の遺物（２）

第４表　縄文時代石器属性表

現存値＜　＞

遺構番号	挿図番号	遺物番号	種　類	石　材	法量：mm　g				備　考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
（1）SI001	第15図－1	21	石鏃	黒曜石	＜23.2＞	13.6	4.5	＜1.0＞	先端欠損
（1）SI009	第15図－2	1	石鏃	チャート	14.3	11.9	1.7	0.2	
（4）SI001	第15図－3	27	石鏃	チャート	24.0	17.0	4.5	1.5	
（3）SD003	第15図－4	1	石鏃	ガラス質黒色安山岩	＜32.0＞	26.0	5.0	＜3.61＞	先端欠損
（4）SI001	第15図－5	1	石鏃	チャート	34.5	19.0	4.0	2.44	先端欠損
（5）SI001	第15図－6	1	石鏃	ガラス質黒色安山岩	27.5	19.0	3.0	1.08	
（4）SI004	第15図－7	26	磨石類	砂岩	99.0	77.0	50.0	518.0	被熱している
（2）SD009	第15図－8	1	石皿	砂岩	102.0	74.0	40.0	357.9	被熱している

第４節　弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、竪穴住居跡２軒、土坑８基、方形周溝墓１基を検出した。出土した土器は、大半がいわゆる「北関東系土器」の甕とみられ、ごく一部に「南関東系土器」とみられる壺や甕が混じる。炉の検出されている竪穴住居跡については、炉を通る遺構の長軸線を主軸として、その方向を測定した。炉の検出されなかった住居跡や土坑については、長軸方向を測定した。

第５表　弥生時代竪穴住居跡一覧表

（　）推定値：＜　＞現存値　単位：主軸・幅m　床面積㎡

遺構番号	位　置	主軸方向	主軸	幅	床面積	炉・カマド	貯蔵穴	壁溝	時　期	備　考
（1）SI002	10B-83・84・93・94	N-84°-E	(6.00)	(5.00)	30.00	中央	なし	なし	後期	
（1）SI003	10B-84・85・94・95	N-3°-W	＜3.40＞	3.80	－	中央？	なし	なし	後期	

第６表　弥生時代土坑一覧表

（　）推定値

遺構番号	種　別	位　　置	長軸方向	計測値：m			時　期	備　考
				長軸	短軸	深さ		
（1）SI001	土坑	10B-52	N-8°-W	(3.70)	3.40	0.30	後期	
（1）SK002	土坑	10B-52・62・63	N-62°-W	2.20	0.74	0.04	後期	
（1）SK003	土坑	10B-62・63	N-78°-E	1.76	0.70	0.12	後期	
（1）SK004	土坑	10B-61・62・72	N-44°-W	2.06	0.74	0.33	後期	
（1）SK005	土坑	10B-82	N-47°-W	2.20	0.88	0.20	後期	
（1）SK006	土坑	10B-81・82	N-20°-E	1.20	0.90	1.10	後期	
（1）SK012	土坑	10B-52・62	N-23°-E	1.94	0.40	0.25	後期	
（4）SK003	土坑	9D-19	N-1°-W	3.55	(2.00)	1.20	後期	

第７表　弥生時代方形周溝墓一覧表

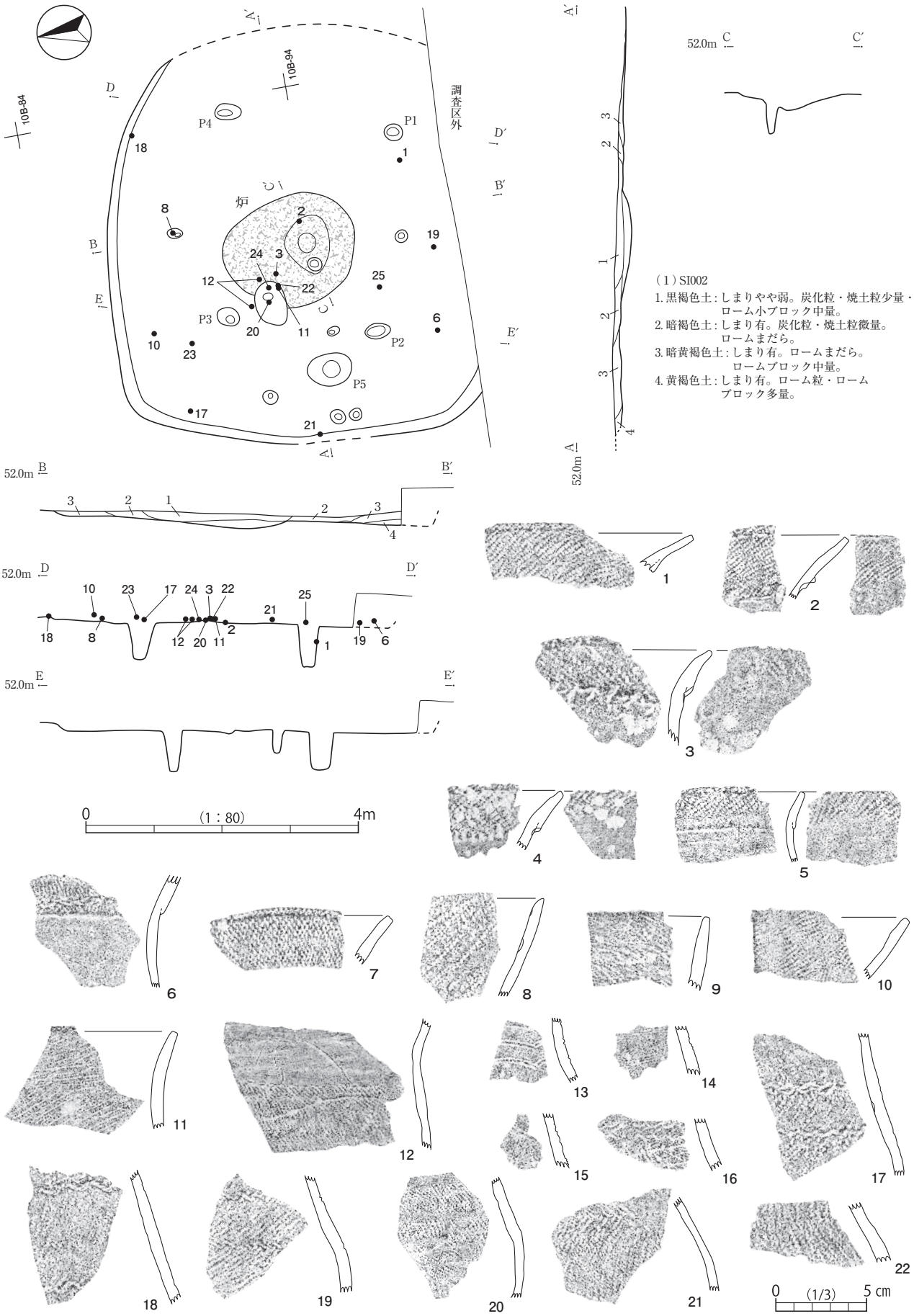
遺構番号	位　置	周溝形態	計測値：m			時　期	備　考
			規模	周溝幅	周溝深さ		
（5）SS001	10D-51・52・62	全周？	6.50×6.50	0.44～1.24	0.07～0.37	後期	墳丘・埋葬施設遺存せず 旧（5）SD001

１　竪穴住居跡

（1）SI002（第17・18図、図版３・15）

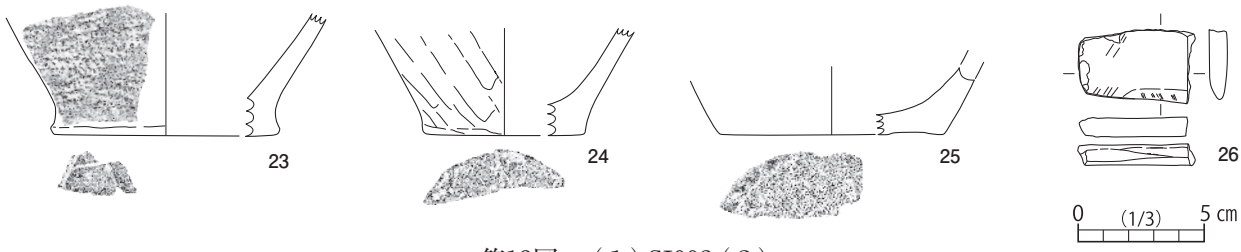
10B-83・84・93・94に位置する。主軸方向はN-84°-Eで、主軸長は6.00m（推定）を測る。平面形は隅丸方形を呈するが、東側の一部は削平により残存していない。炉は床面中央で検出された。確認面から床面までの深さは0.13mである。主柱穴はP1～P4とみられ、床面からの深さは、それぞれ0.59m、0.53m、0.60m、0.55mとかなり深い。P5は確認面からの深さが0.06mと浅いが、壁面に近い位置にあることから、出入口ピットの可能性がある。

遺物は、26点を図示することができた。１～11は甕の口縁部である。１～６は複合口縁で、口唇部と肥厚部に縄文が施されており、２～５は内面側にも縄文が認められる。２・３の肥厚部下端には指頭押圧による刻み、４には半裁竹管による刺突が施されている。５は肥厚部の下半の縄文が潰れており、頸部の調整時に一緒にナデ消されてしまったとみられる。６は外面にススが付着している。７～11は素口縁で、いずれも縄文が施文されている。７・８・11は口唇部にも縄文が認められ、内面はナデの痕跡が明瞭である。９・11の縄文は附加条縄文であるが、11の口唇部は単節LRが施文される。10は外面にススが付着し、内面も黒色を呈する。12～16は甕の頸部である。12は胴部上半まで遺存しており、頸部は無文、胴部は縄文である。頸部外面はミガキののちに縄文が施されている。内面はヘラによる調整の痕跡が認められ、粘土紐の単位が凹凸として明瞭に現れている。13は２条線の連弧文、14・15は４条線による横走文・垂直文・斜



(1) SI002
1. 黒褐色土：しまりやや弱。炭化粒・焼土粒少量・ローム小ブロック中量。
2. 暗褐色土：しまり有。炭化粒・焼土粒微量。ロームまだら。
3. 暗黄褐色土：しまり有。ロームまだら。ロームブロック中量。
4. 黄褐色土：しまり有。ローム粒・ロームブロック多量。

第17図　(1) SI002 (1)



第18図　（１）SI002（２）

行文が櫛描きされている。16は２段のＳ字結節文の下位に、ヘラ描きによる斜格子文が描かれている。17～22は甕の肩部～胴部上半である。いずれも縄文を地文とし、17・18はＳ字、19はＺ字の結節文が２段認められる。19の外面にはススが付着している。20は横方向の軽いナデ消しが複数条加えられている。21にはＳ字結節文が重ねられている。22は内外面が摩耗しとろけている。23～25は甕の胴部下半～底部である。23は縄文が施文され、24は内外面ともヘラケズリの痕跡が明瞭である。底面には23・25に木葉痕、24に網代痕が残る。26は欠損部分が多いため全体像が不明だが、刃部に相当するとみられる縁辺の一部に鋭利に研ぎだしている箇所が認められるため、石包丁様石器と考えられる。砂岩製である。

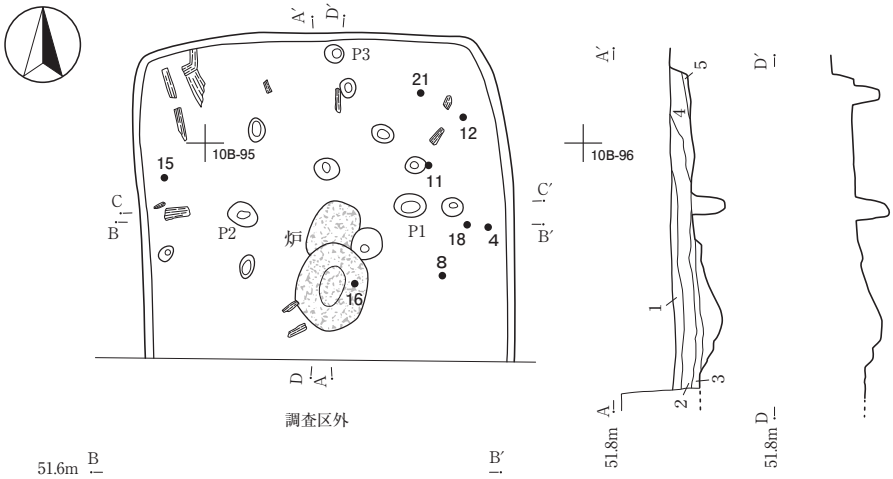
（１）SI003（第19図、図版３・16）

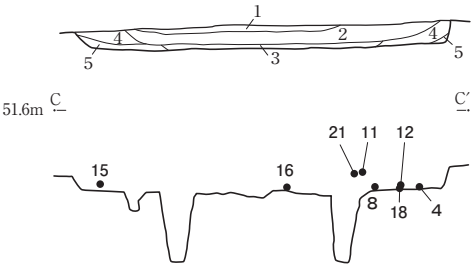
10B-84・85・94・95に位置し、南側の一部は調査区外となっている。主軸方向はN-3°-Wで、主軸長は検出した範囲で3.40mである。平面形は長方形とみられる。確認面から床面までの深さは0.30mで、主柱穴P1とP2の床面からの深さは0.70mを超える。炉は床面中央で検出された。P3は床面からの深さが0.27mで、壁面に極めて近い位置にあることから、出入口ピットの可能性が高い。覆土はレンズ状堆積で、自然堆積によるものと考えられる。床面直上で長軸方向を遺構の中心に向けた炭化材が放射状に検出されており、焼失住居の可能性がある。

遺物は、21点を図示することができた。３の壺を除き、北関東系の甕とみられる。１～８は土器の口縁部である。１～３は複合口縁で、１・２は肥厚部に縄文が施されている。１は口唇部にも縄文が認められ、内面上端部はナデにより低い段が生じている。３は南関東系の壺とみられ、口唇部に網目状撚糸文が施されるとともに、円形浮文が２箇所に貼り付けられている。内外面ともに赤彩が認められる。４は口唇部に指頭押捺による刻みが施され、下端部には結節文様の施文が認められるものの風化により鮮明ではない。５は波状文と垂線が２条線により櫛描きされ、口唇部には棒状工具による刻みが認められる。６も２条線の波状文が櫛描きされ、頸部転換点付近には縄文が施されている。７・８は２条線による連弧文が櫛描きされ、７の口唇部には棒状工具による刻みが施されている。いずれも内面は丁寧に磨かれており、８の外面はナデによる調整痕が明瞭に残っている。９は甕の頸部で、２条線の櫛描きによる連弧文が認められ、最小径部付近には断面三角形の突帯が貼り付けられている。10は甕の肩部で、S字結節文を境に上位は無文、下位に縄文が施されている。11～14は甕の胴部で、縄文が施文されている。15・16は甕の底部で、15は木葉痕、16は布目痕が底面に認められる。

17は土製紡錘車の欠損品で、中央部から放射状に延びる櫛描き条線が確認できる。

18～21は砂岩製の砥石で、18は上下面とも、19は扁平な面と側縁のそれぞれ片側、20は曲面部分、21は平坦な面が摩耗している。21には部分的に打痕が認められることから、台石としても使用されていたとみられる。

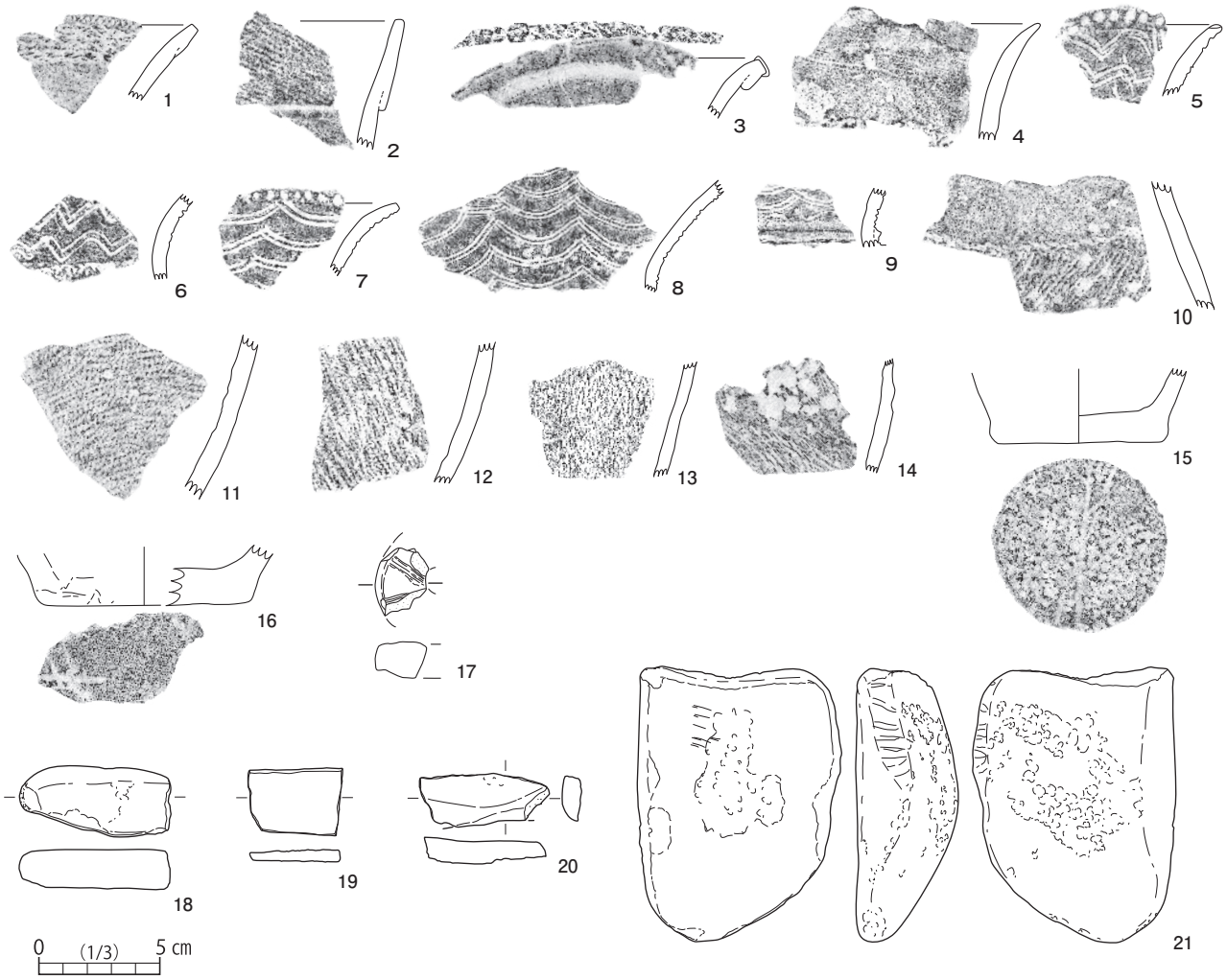




（1）SI003

1. 黒褐色土：しまり弱。ローム小ブロック微量。
2. 黒色土：しまり弱。炭化粒・焼土粒微量。ローム中ブロック少量。
3. 黒褐色土：しまり弱。焼土粒・炭化粒少量。ローム中ブロック微量。
4. 暗黄褐色土：しまりやや有。ローム中ブロック多量。
5. 黄褐色土：しまりやや有。ローム主体。

0 (1：80) 4m



第19図　（1）SI003

2　土坑

（1）SI001（第20図、図版３・17）

10B-52に位置し、北西側の一部は調査区外となっている。長軸方向はN-8°-Wで、長軸長は推定で3.70m、幅は3.40mである。平面形は楕円形とみられる。確認面から床面までの深さは0.30mである。調査段階では、遺構規模や遺物量から竪穴住居跡としていたが、炉と明確な柱穴が認められないことや、壁面崩落土がなく水平な土層堆積であることから、調査段階の遺構名のままだが、大型の土坑として報告する。

ピットは深さ0.20m ～ 0.30mのものが４基検出された。壁面近くに集中してみえるが、本遺構に伴うか不明である。

遺物は、25点を図示することができた。１～７は甕の口縁部で、６を除いて肥厚部と口唇部に縄文の施された複合口縁である。肥厚部の下端には、１・２・５は指頭押捺による刻み、３は半裁竹管による刺突が施されている。２・４～６は内面にも縄文が認められる。１は肥厚部以下に４条線による垂線が描かれているが、線の間隔が不安定であるので櫛描きではない。３は複数条線による斜交文が櫛描きされている。７は外面ナデ、内面はヘラによる調整の痕跡が明瞭である。８～ 14は甕の頸部である。８は無文だが、ヘラミガキが認められる。９は３条線の垂線、10は２条線の垂線と斜線、11は８条線の横走線が櫛描きされている。12には三角文様のヘラ描きが認められる。13・14は縄文が施文された肩部をもつ頸部片で、13は頸部に３条線による垂線が櫛描きされ、14は口縁部との転換点付近に指頭押捺による刻みの一部が残存している。15は甕の肩部で、櫛描きによる羽状文が施されている。16 ～ 18は甕の胴部で、縄文が施文されている。18は附加条縄文で、内面はヘラナデの痕跡が明瞭である。19 ～ 21は甕の底部で、20・21の外面は附加条縄文である。底面は19・20に木葉痕、21に布目痕が認められる。

22は土製紡錘車である。無文であるが、整形時の指頭圧痕が上下面に認められる。

23 ～ 25は砥石で、23・25が砂岩製、24が安山岩製である。23・24は上下面とも摩耗が認められる。25は俯瞰側上面が摩耗し、部分的に敲打痕が確認できる。

（1）SK002（第21図、図版３）

10B-52・62・63に位置する。長軸方向はN-62°-Wで、長軸長2.20m、短軸長0.74mの長楕円形を呈する。確認面から底面までの深さは0.04mで、極めて浅い。

遺物は、ごくわずかに弥生土器の小破片が出土したが、図示できるものはなかった。

（1）SK003（第21図、図版３・18）

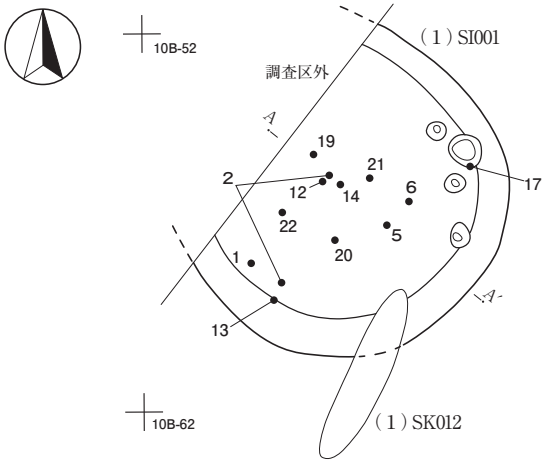
10B-62・63に位置する。長軸方向はN-78°-Eで、長軸長1.76m、短軸長0.70mの長方形の土坑である。平坦な底面で、確認面からの深さは0.12mである。

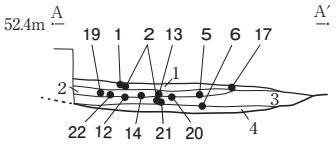
遺物は、土器４点を図示することができた。１は甕の口縁部で、複合口縁である。口唇部と肥厚部に縄文が施文され、肥厚部の下端には刻みがみられる。２は甕の頸部～肩部で、頸部にS字結節文が２段、肩部以下に縄文が施文されている。３は甕の胴部で、縄文が施文される。４は甕の底部である。胴部には撚糸文が施文され、底面には木葉痕がみられる。

（1）SK004（第21図、図版３・18）

10B-61・62・72に位置する。長軸方向はN-44°-Wで、長軸長2.06m、短軸長0.74mの長方形の土坑である。おおむね平坦な底面で、確認面から底面までの深さは0.33mである。覆土はレンズ状堆積である。

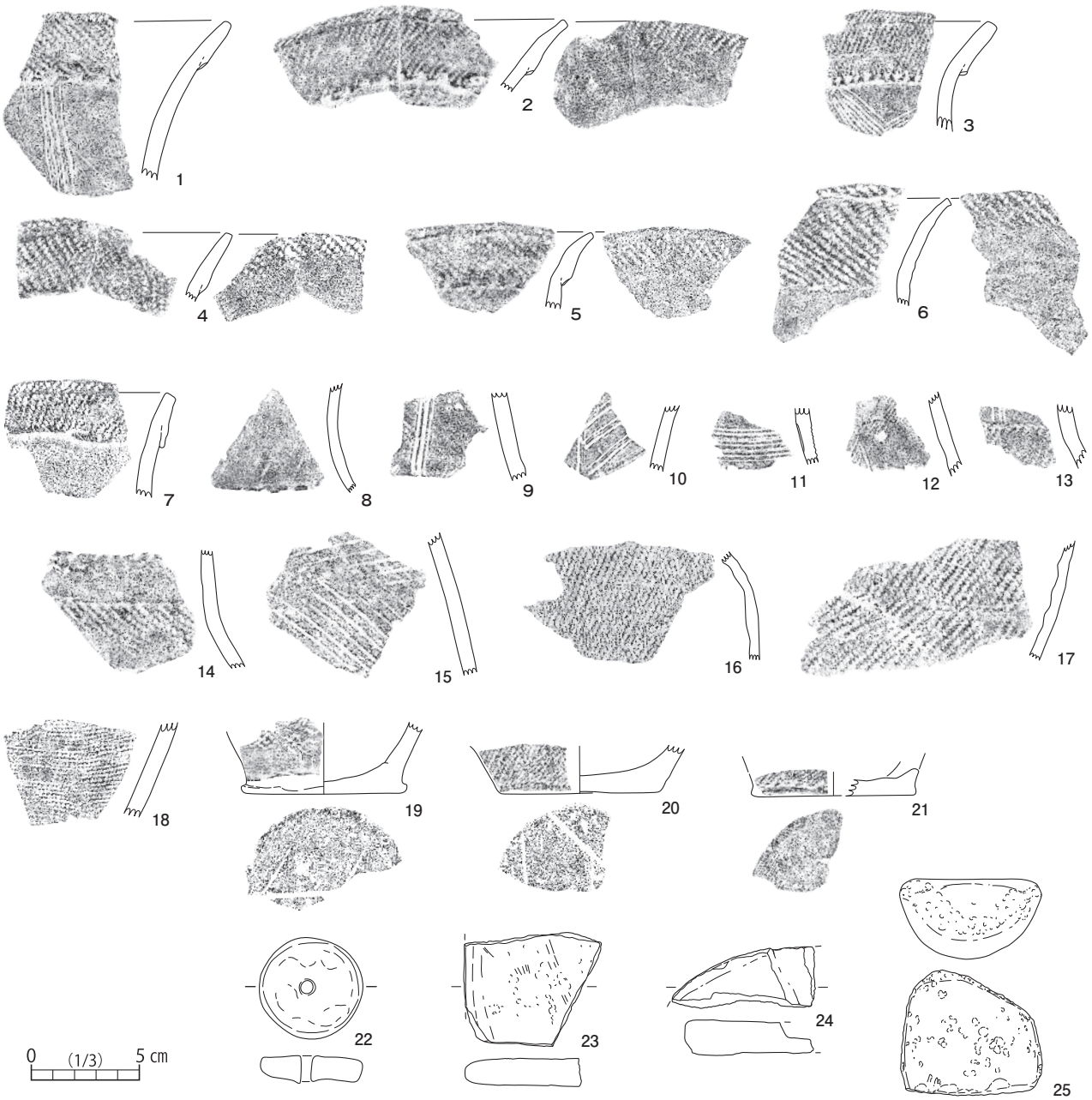
遺物は、土器２点を図示することができた。１・２はともに甕の胴部で、撚糸文が施文される。２の外





(1)SI001
1. 暗褐色土：現耕作土下部。しまりなし。
2. 黒褐色土：しまり有。炭化粒・焼土粒微量・ローム粒少量。
3. 暗黄褐色土：しまり有。炭化粒・焼土粒微量・ローム粒多量。
4. 黄褐色土：しまり強。炭化粒・焼土粒子微量。

0 (1：80) 4m



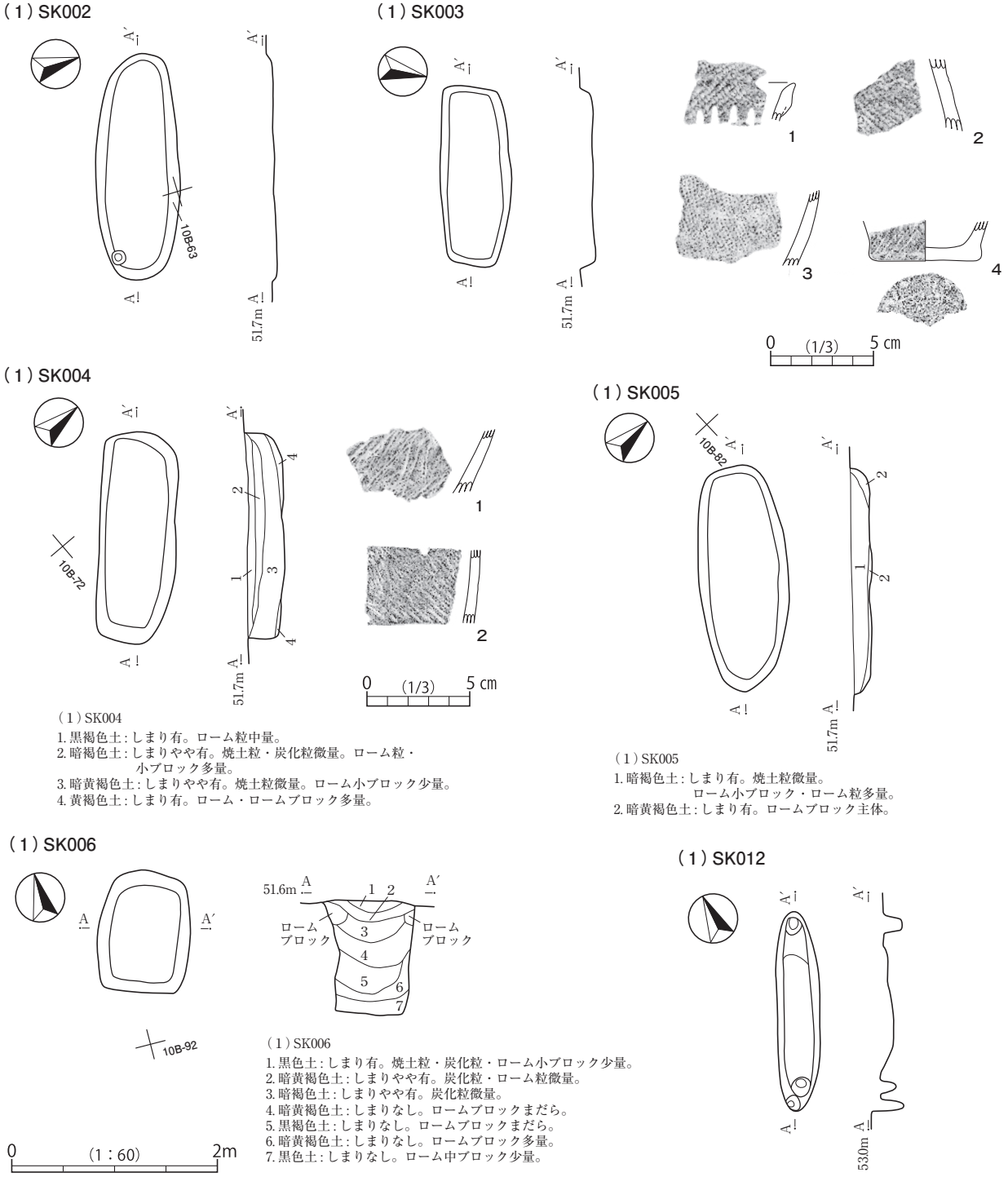
第20図　(1)SI001

面は摩滅が激しい。

（１）SK005（第21図、図版３）

10B-82に位置する。長軸方向はN-47°-Wで、長軸長2.20m、短軸長0.88mの長楕円形を呈する。確認面から底面までの深さは0.20mである。

遺物は、弥生土器の小破片が出土したが、図示できるものはなかった。



第21図　（１）SK002 ～ SK006・SK012

（1）SK006（第21図、図版３）

10B-81・82に位置する。長軸方向はN-20°-Eで、長軸長1.20m、短軸長0.90mの長方形を呈する。平坦な底面で、確認面からの深さは1.10mと他の土坑に比べてかなり深い。

遺物は、弥生土器の小破片が出土したが、図示できるものはなかった。

（1）SK012（第21図、図版３）

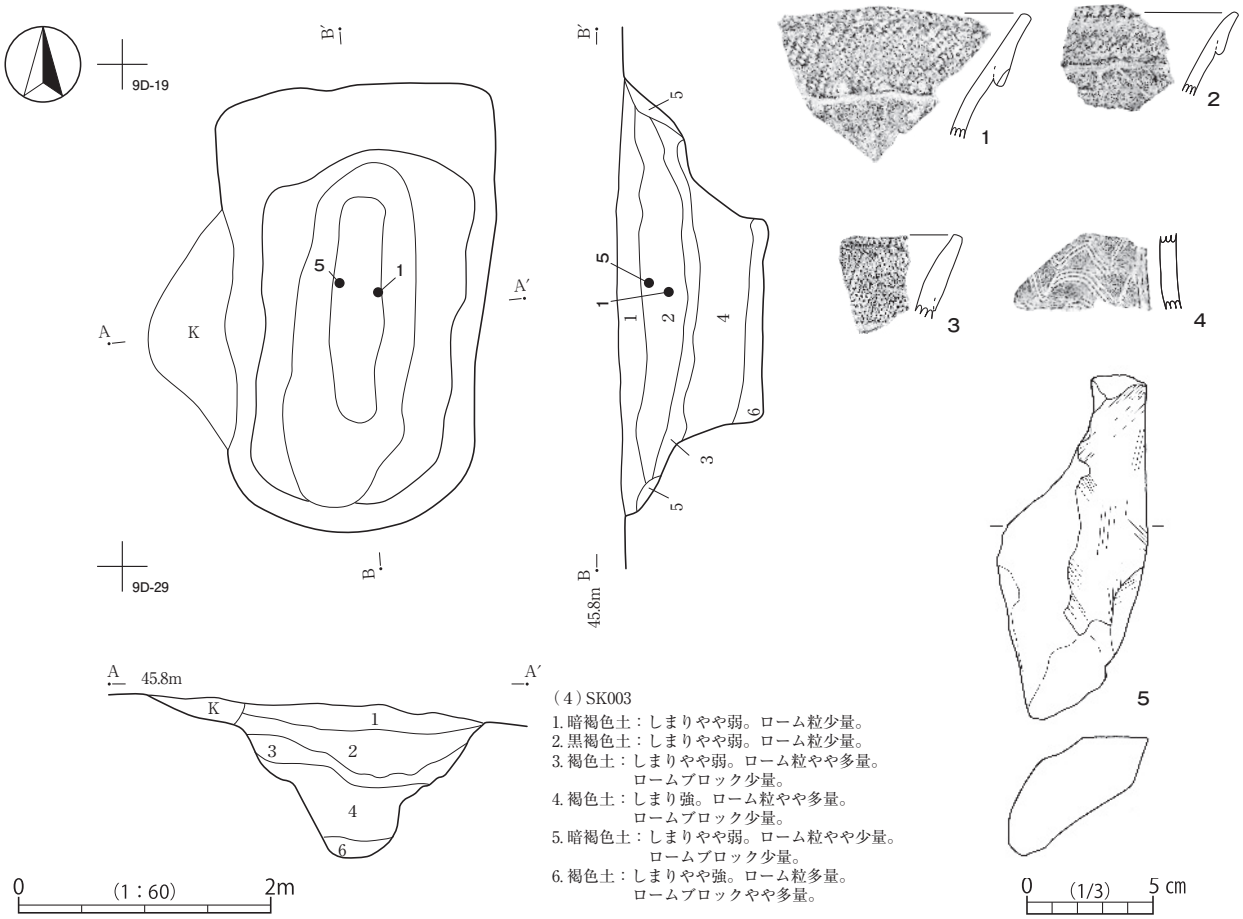
10B-52・62に位置する。長軸方向はN-23°-Eで、長軸長1.94m、短軸長0.40mの長楕円形を呈する。一見すると縄文時代の陥穴のような平面形だが、確認面から底面までの深さは0.25mと浅い。遺構の両端からピットが３基検出され、北東側の１基は深さ0.20m、南西側の２基は深さ0.40mと0.10mである。

遺物は、弥生土器の小破片が出土したが、図示できるものはなかった。

（4）SK003（第22図、図版３・４）

９D-19に位置する。長軸方向は、N-１°-Wである。確認面は長軸長3.55m、短軸長2.00m（推定）の不整な長方形を呈する。中央部は長軸2.75m、短軸0.95mの長楕円形状に１段深くなっており、その形状から墓坑の可能性が高い。墓坑とみられる部分は平らな底面で、確認面からの深さは1.20mを測る。

遺物は、５点を図示することができた。１～４は甕で、１～３は口縁部である。複合口縁で、口唇部と肥厚部に縄文が施される。１は肥厚部下端に指頭押圧が認められ、爪の痕が明確に残る。４は頸部で、波状文と垂線が３条線で櫛描きされる。５は凝灰岩製の砥石である。被熱を受け、一部赤色を呈する。



第22図　（4）SK003

3　方形周溝墓

（5）SS001（第23図、図版４・18）

10D-51・52・62に位置する。平面形は、一辺6.50m前後と推定される隅丸方形様を呈する。確認面が東側に下がっており、溝の幅も0.44 ～ 1.24mと一定ではないが、底面の標高自体も東側が低くなっているので、緩斜面上を選んで構築されたものとみられる。検出面からの深さは0.07 ～ 0.37mで、断面形は丸底あるいは箱形である。遺構自体の形態的な特徴に加え、（１）SI001・002と同時期の遺物を伴うこと、またこれらとは空閑地を隔てて構築されていることなどから、方形周溝墓と判断したが、他時期の遺構の可能性も残る。遺構の北側は検出できなかったが、周溝が全周、あるいは北西隅にブリッジを造る形態のものであろう。

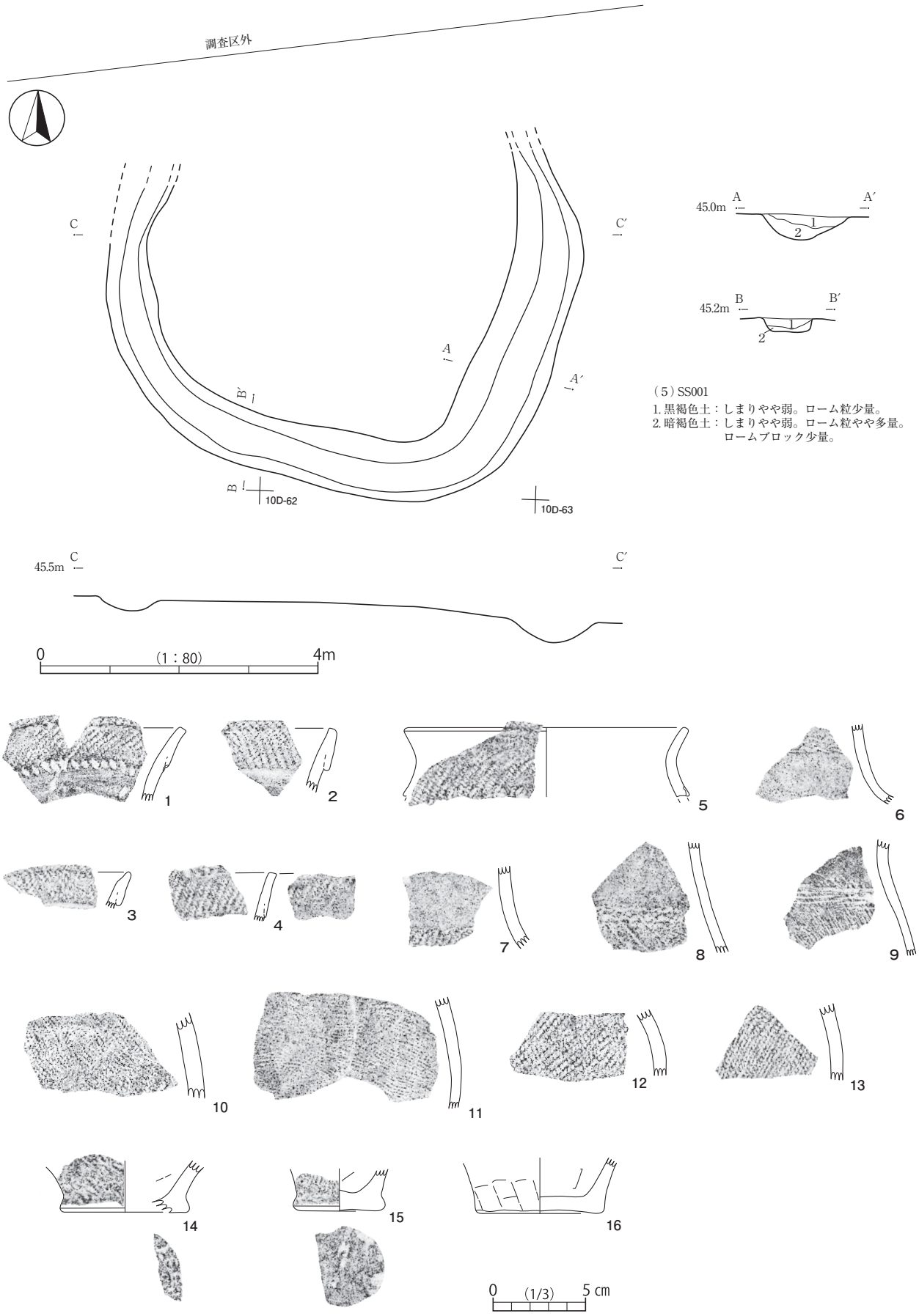
遺物は、土器16点を図示することができた。１～５は甕の口縁部である。いずれも複合口縁で、肥厚部と口唇部に縄文が施されている。１は肥厚部の下端に棒状工具による刻みが認められ、内面はナデによる調整痕が明瞭である。４は内面にも縄文が認められる。５の上端部付近は、縄文が軽くナデ消されているが、内面調整の際に触れたことによるものであろう。肩部との転換点付近には、指頭押捺による刻みが認められる。６～９は甕の頸部である。６～８はＳ字結節文が施され、７では結節文以下に縄文（単節LR）、８はヘラ描き斜行文が認められる。９には撚糸文が密に施され、横方向の施文により無文帯を区画している。10 ～ 13は甕の胴部である。10は附加条縄文、11は撚糸文、12・13は単節縄文LRが施されている。14 ～ 16は甕の底部である。14・15は外面に縄文が認められる。

4　遺構外出土の遺物（第24図・図版19）

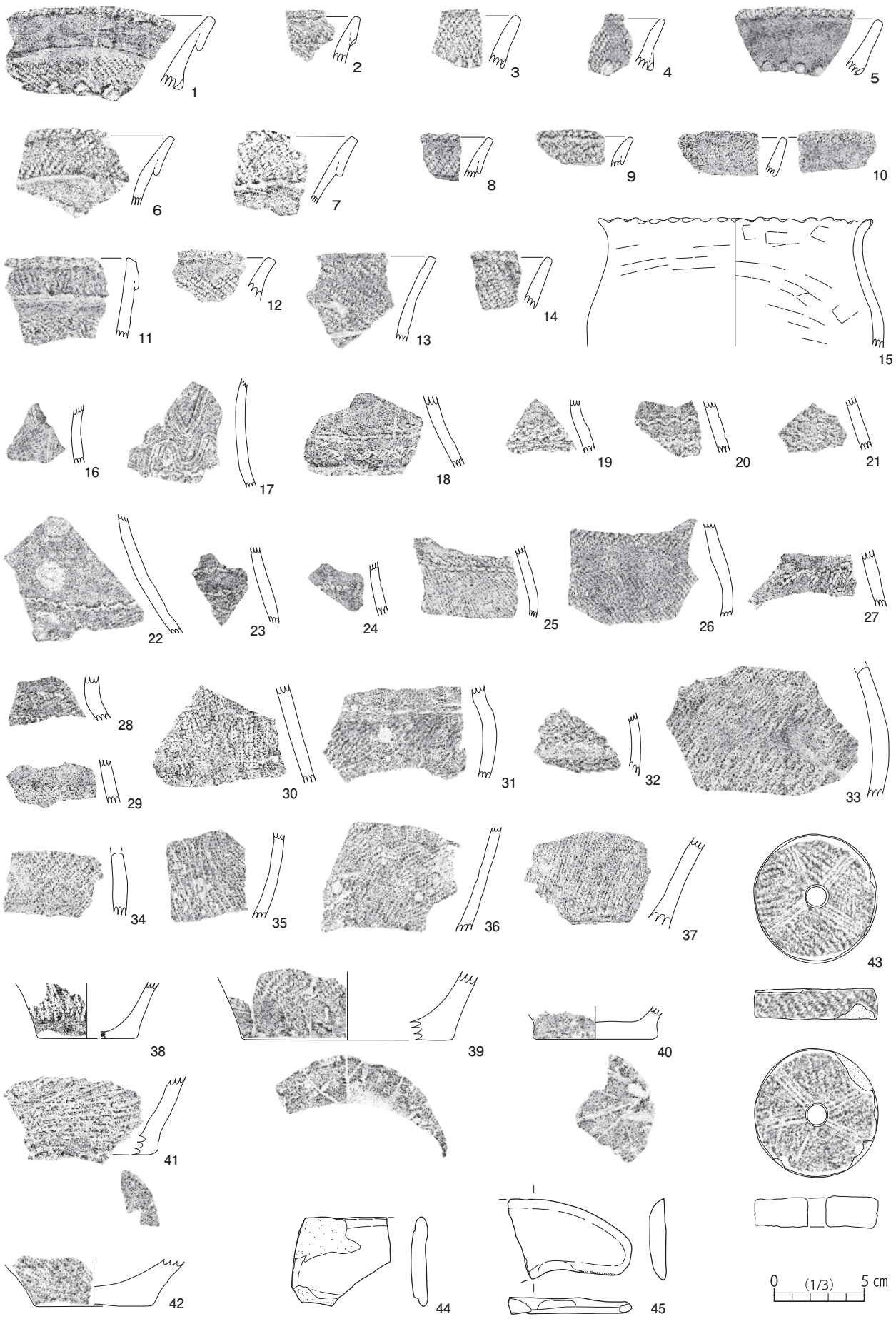
ここではグリッド一括や遺構に伴わない遺物をまとめ、土器42点、土製品１点、石器２点を図示することができた。土器については、部位、文様の特徴で分けて記載した。

１～ 14は甕の口縁部である。１～ 11は複合口縁で、いずれも口唇部（11を除く）と肥厚部に縄文が施されている。１は頸部転換点に指頭押捺がみられ、爪の痕が明瞭に残る。２の肥厚部は上半部の縄文が軽くナデ消され、下端部は指頭押捺による刻みが施されている。３の肥厚部下端には棒状工具による刻みが認められる。４・５は肥厚部の下端に指頭押捺による刻みが施され、５も肥厚部の下端に指頭押捺による刻みが施されており、外面のナデによる調整痕が明瞭である。６は肥厚部から頸部にはみ出た粘土を掻き取った痕跡が、斜め方向のヘラ痕として残っている。７は肥厚部の中央を横方向に軽くナデている。無文部分はナデによる調整痕が明瞭である。８は肥厚部の上半の縄文が軽くナデ消されている。10は縄文が不鮮明であるが、風化かナデ等よるものかは判別できない。11は肥厚部直下にヘラとみられるナデで横方向に調整されており、下位の縄文の結節部付近をナデ消していると思われる。12 ～ 14は素口縁である。12は上半の縄文が軽くナデ消されている。口唇部には縄文が施されるとともに、角がナデにより面取りされている。内外面とも赤彩がわずかに認められる。13・14の内面上端にはナデ調整による低い段ができており、対応する外面の一部は横方向に軽くナデられている。口唇部には縄文が施されている。15は甕の口縁部～胴部上半部で、口唇部は指頭押捺による刻みが施されている。南関東系の土器とみられる。

16・17は甕の頸部である。16は複数条、17は３条線により、波状線と垂線が櫛描きされている。18 ～ 31は甕の頸部～肩部である。18はＳ字結節文と櫛描きによる波状文が認められる。19はＺ字結節文が少なくとも連続して４段以上施され、これより上位は赤彩されている。20は上下に無文帯を挟んでＳ字結節文が


調査区外
C
C′
A
A′
B′
B
10D-62
10D-63
45.0m
A
A′
1
2
45.2m
B
B′
2
（5）SS001
1. 黒褐色土：しまりやや弱。ローム粒少量。
2. 暗褐色土：しまりやや弱。ローム粒やや多量。
ロームブロック少量。
45.5m
C
C′
0
（1：80）
4m
1
2
5
6
3
4
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
0
（1/3）
5 cm

第23図　（5）SS001



第24図　遺構外出土の遺物

１条施され、下位には密接して多段施文されている。21も複数条のＳ字結節文が密に施されている。22は頸部と肩部の転換点にＳ字結節文を施し、下位に縄文を施文している。23はＺ字結節文が３段認められるとともに、ススの付着が確認できる。24は竹管を横方向に連続して施文している。27は縄文原体の端部を連続的に施文している。 28･29は地文の縄文を帯状にナデ消している。30は全面を単節縄文により施文し、赤彩している。25・26・31は縄文（31は附加条縄文）をナデ消した無文帯を持つ。25・26にはススの付着が認められる。

32 ～ 37は甕の胴部である。32は幅の狭い無文帯を挟んで、上下に結節文が多段施文されている。33 ～ 35は附加条縄文、36・37は単節縄文が施されている。

38 ～ 42は甕の底部である。外面は38・41が撚糸文、39が単節縄文、42が附加条縄文で、底面には39・40に木葉痕、41に布目痕が認められる。

43は土製紡錘車である。単節縄文を向きを変えながら施文したのち、３条線による直線を上面に４本・下面に５本、放射状に櫛描きしている。

44･45は砂岩製の石包丁様石器である。一部が欠損するため全体像がわからないが、全体に磨かれており、特に下側縁辺が強く磨かれて鋭くなっている。45の下側縁辺には、強く磨かれてできた凹みがある。

第８表　弥生時代石製品観察表

＜　＞現存値

遺構番号	挿図番号	遺物番号	種類	石材	法　量：㎜　g				備考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
（1）SI002	第17図-26	1	石包丁様石器	砂岩	＜29.8＞	＜45.5＞	7.8	18.81	
（1）SI003	第19図-18	11	砥石	砂岩	28.3	＜62.7＞	16.8	16.8	
（1）SI003	第19図-19	1	砥石	砂岩	27.6	＜38.8＞	5.5	9.15	
（1）SI003	第19図-20	1	砥石	砂岩	21.9	＜53.3＞	10.4	14.8	
（1）SI003	第19図-21	10	砥石	砂岩	83.3	113.7	41.8	496.5	台石としても使用
（1）SI001	第20図-23	1	砥石	砂岩	＜53.2＞	63.5	13.4	64.2	
（1）SI001	第20図-24	1	砥石	安山岩	＜28.5＞	＜66.2＞	16.7	32.3	
（1）SI001	第20図-25	1	砥石	砂岩	57.1	65.2	37.8	189.9	
（4）SK003	第22図- 5	5	砥石	凝灰岩	136.0	60.0	47.0	284.0	被熱している
遺構外	第24図-44	2	石包丁様石器	砂岩	49.0	＜55.0＞	9.0	248.5	
遺構外	第24図-45	3	石包丁様石器	砂岩	44.0	＜69.0＞	9.0	33.7	

第９表　弥生時代土製品観察表

＜　＞現存値

遺構番号	挿図番号	種類	法　量：㎜　g					色調	備考
			最大長	最大幅	最大厚	孔径	重量		
（1）SI003	第19図-17	紡錘車	＜28.0＞	＜21.0＞	15.0	-			
（1）SI001	第20図-22	紡錘車	47.0	47.0	12.5	6.0	26.7	橙色（7.5YR7/6）	
（1）SM001	第24図-43	紡錘車	71.0	68.0	18.0	11.0	100.5	にぶい黄褐色（10YR5/4）	

第５節　古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、竪穴住居跡11軒、土坑８基、方墳１基が検出された。主体となる時期は中期で、集落は調査範囲東側に展開している。

炉の検出されている竪穴住居跡については、炉を通る遺構の長軸線を主軸として、その方向を測定した。炉の検出されなかった住居跡や土坑については、正円形のものを除き長軸方向を測定した。

第10表　古墳時代竪穴住居跡一覧表

（　　）推定値：＜　＞現存値　単位：主軸・幅m　床面積㎡

遺構番号	位　置	主軸方向	主軸	幅	床面積	炉・カマド	貯蔵穴	壁溝	時　期	備　考
（1）SI005	9D-96・97・10D-06・07	N-14°-E	4.00	4.18	16.72	北東寄り	南西	なし	中期	
（1）SI006	9D-84・85・94・95	N-2°-E	4.80	4.80	23.04	北寄り	南西	なし	中期	臼玉・勾玉，転用羽口・鍛造剥片出土
（1）SI007	9D-54・64・65	N-36°-E	3.42	4.16	14.23	北東寄り	なし	全周	中期	
（1）SI008	10B-95・96	N-4°-W	3.29	3.34	10.76	北寄り	なし	全周	後期	
（1）SI009	10B-72・73	N-33°-W	4.56	5.40	24.62	北西寄り	南東	なし	中期	
（2）SI013	8D-92・93・9D-02・03・12・13	N-57°-W	(6.60)	6.88	(45.40)	西寄り	不明	全周？	中期	（2）SI014と重複
（2）SI014	8D-92・9D-02・12	不明	－	(5.12)	－	不明	不明	なし？	中期	（2）SI013と重複
（2）SI015	8D-63・72・73	不明	－	－	－	不明	不明	あり	後期	
（4）SI001	10D-01～03・11～13・22	N-9°-E	6.88	6.47	45.16	北東寄り	南東	一部	中期	
（4）SI003	10D-21・30・31	不明	－	3.32	9.00	なし	なし	なし	中期	
（5）SI001	10D-53·54·63・64	N-31°-W	＜2.48＞	＜3.88＞	－	北西寄り	不明	なし？	中期	

第11表　古墳時代土坑一覧表

遺構番号	種　別	位　置	長（主）軸方向	計測値：m　（　）推定値			時　期	備　考
				長軸	短軸	深さ		
（1）SK001	土坑	10B-64・65	N-24°-E	2.10	0.80	0.44	中期	
（1）SK007	土坑	10B-74・75	N-77°-W	1.86	0.90	0.20	中期	
（1）SK008	土坑	10B-62・63・72・73	N-46°-W	2.60	1.20	0.60	中期	
（4）SK004	土坑	10C-06・07	N-75°-W	(3.59)	2.36	0.12	中期	
（5）SK002	土坑	10C-79	－	0.90	0.90	0.25	－	
（5）SK003	土坑	10C-79	－	0.90	0.90	0.17	－	
（5）SK004	土坑	10C-79・89	－	0.90	0.90	0.44	－	
（5）SK005	土坑	10C-79	－	0.80	0.80	0.33	－	

第12表　古墳一覧表

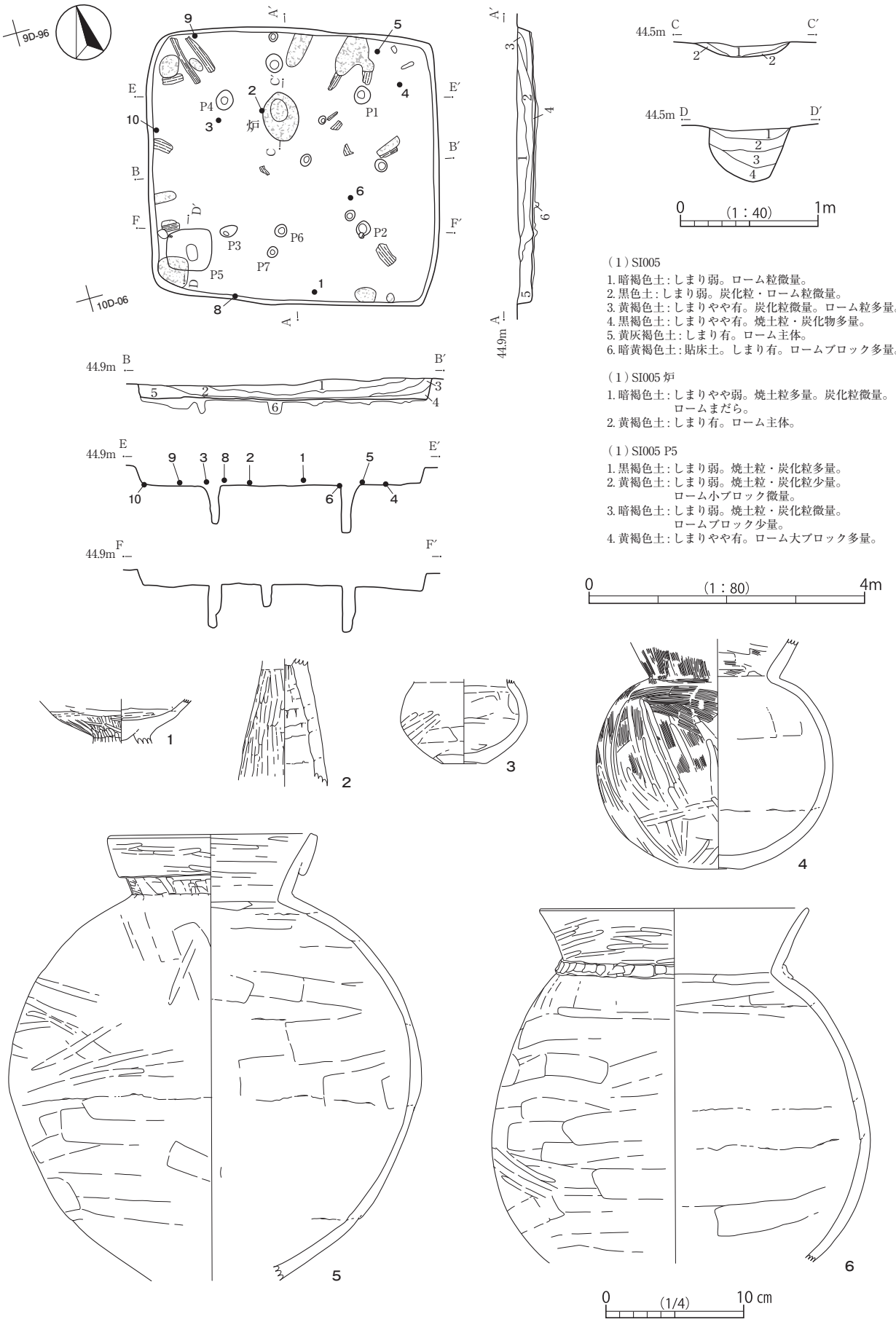
遺構番号	位　置	周溝形態	計測値：m			時　期	備　考
			全長	周溝幅	周溝深さ		
（1）SM001	10B-68～10C-82	方形	17.20	1.00～1.75	0.12～0.60	中期	墳丘・埋葬施設遺存せず

１　竪穴住居跡

（１）SI005（第25・26図、図版４・20・23）

9D-96・97・10D-06・07に位置する。主軸方向はN-14°-Eで、一辺4.00m前後の隅丸方形の竪穴住居跡である。確認面からの深さは0.26mである。遺構の中央北側寄りで炉を検出した。主柱穴はP1～P4とみられ、住居床面からの深さは0.53m～0.69mである。南側壁面に近いP6・P7は、床面からの深さが0.31m、0.20mで、出入口ピットの可能性がある。遺構の南西角に位置するP5が貯蔵穴と考えられ、深さは0.43mである。覆土はレンズ状堆積であり、自然堆積によるものとみられる。床面直上で放射状に分布する炭化材と焼土が検出されており、焼失住居と考えられる。

遺物は、10点を図示することができた。１～６は土師器である。１・２は高杯で、１は杯部下端が遺存し、口縁部に向かって直線的に大きく開くとみられる。内外面ともにミガキ調整だが、内面は部分的に剥落している。脚部は遺存しないが、中空のようである。２は脚柱部のみが遺存する、エンタシス状脚であ



（1）SI005

1. 暗褐色土：しまり弱。ローム粒微量。
2. 黒色土：しまり弱。炭化粒・ローム粒微量。
3. 黄褐色土：しまりやや有。炭化粒微量。ローム粒多量。
4. 黒褐色土：しまりやや有。焼土粒・炭化物多量。
5. 黄灰褐色土：しまり有。ローム主体。
6. 暗黄褐色土：貼床土。しまり有。ロームブロック多量。

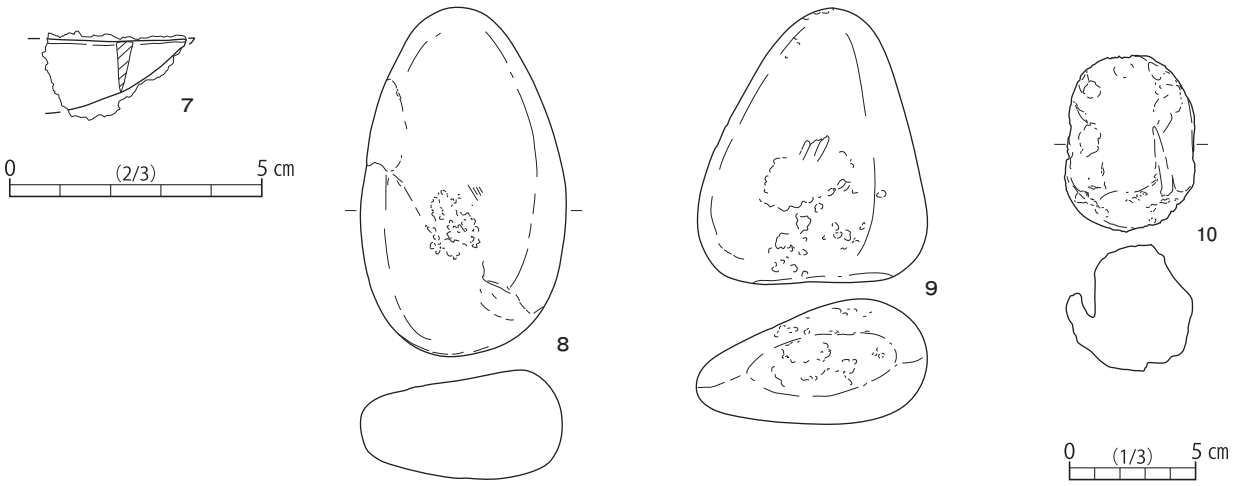
（1）SI005 炉

1. 暗褐色土：しまりやや弱。焼土粒多量。炭化粒微量。ロームまだら。
2. 黄褐色土：しまり有。ローム主体。

（1）SI005 P5

1. 黒褐色土：しまり弱。焼土粒・炭化粒多量。
2. 黄褐色土：しまり弱。焼土粒・炭化粒少量。ローム小ブロック微量。
3. 暗褐色土：しまり弱。焼土粒・炭化粒微量。ロームブロック少量。
4. 黄褐色土：しまりやや有。ローム大ブロック多量。

第25図　（1）SI005（1）



第26図　（１）SI005（２）

る。外面は丁寧なミガキである。内面は全体にナデているものの、輪積み痕が明瞭に残る。胎土には、わずかに雲母粒子を含む。３は坩であり、体部～底部が遺存する。体部中位でやや張り出して、最大径をとる。上げ底気味の平底である。内面ナデ、外面は部分的にミガキがみられる。４は小型の壺である。口縁部～底部まで遺存する。丸みの強い球胴形で、頸部が「く」字形に強く屈曲し、口縁部は直線的に開く。底部はかなり径の小さい平底である。口縁部の内外面、胴部上半の外面にハケメが残る。胴部外面はハケ調整ののちミガキを施している。胎土に雲母粒子を含む。５は大型の二重口縁の壺である。胴部中位に最大径をもつ球胴形で、頸部は「く」字形に屈曲するが、４ほどではない。胴部も４と同様、全体に丸みを帯びている。胴部外面は、全体をヘラケズリしたのち、部分的にミガキを施している。胎土に雲母粒子を含む。６は甕である。最大径が胴部下半にある下膨れの器形であり、頸部の屈曲はあまり強くない。口縁部は長く直線的に広がる。頸部の屈曲部には粘土紐をめぐらせており、指頭押圧による指や爪の痕が確認できる。胴部外面は、ヘラケズリののち、部分的にミガキを施している。胎土に雲母粒子を含む。

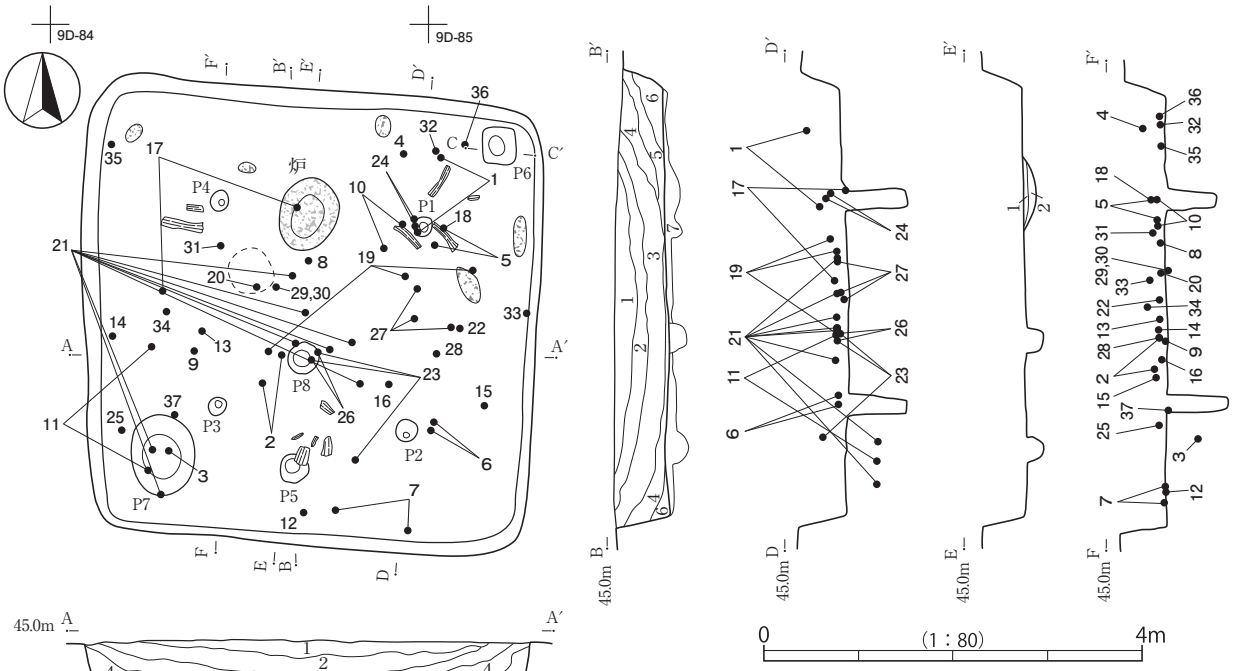
７は刀子である。８は砂岩製の台石である。上面の中央部に敲痕が残る。９は安山岩製の台石で、側縁部にも敲痕がみられる。10は軽石である。

土器の特徴から、古墳時代中期の遺構とみられる。

（１）SI006（第27・28・29図、図版４・５・20・23・24）

9D-84・85・94・95に位置する。主軸方向はN-２°-Eで、一辺4.80mの隅丸方形の竪穴住居跡である。確認面からの深さは0.58mである。炉は遺構の中央部北側寄りで検出された。主柱穴はP1～P4とみられ、床面からの深さは0.44m～0.64mである。南側壁寄りのP5が出入口ピット、南西角のP7が貯蔵穴と考えられ、深さは0.52mである。北東角に位置するP6は深さ0.48mの方形の土坑で、もうひとつの貯蔵穴となるのか、性格は不明である。覆土はレンズ状堆積で、自然堆積によるものであろう。床面直上で炭化材と焼土が検出されており、焼失住居の可能性がある。

遺物は多数出土し、37点を図示することができた。１～28は土師器で、１は杯である。丸底とみられ、口縁部が内傾しており、いわゆる須恵器模倣杯である。内外面ともに赤彩され、体部外面はヘラケズリののちミガキを施す。胎土に雲母粒子が目立つ。２も杯である。丸底で、体部は丸みを帯びており、口縁部はやや内傾して立ち上がる。体部外面は部分的にミガキがみられ、内外面が赤彩される。胎土に雲母粒子

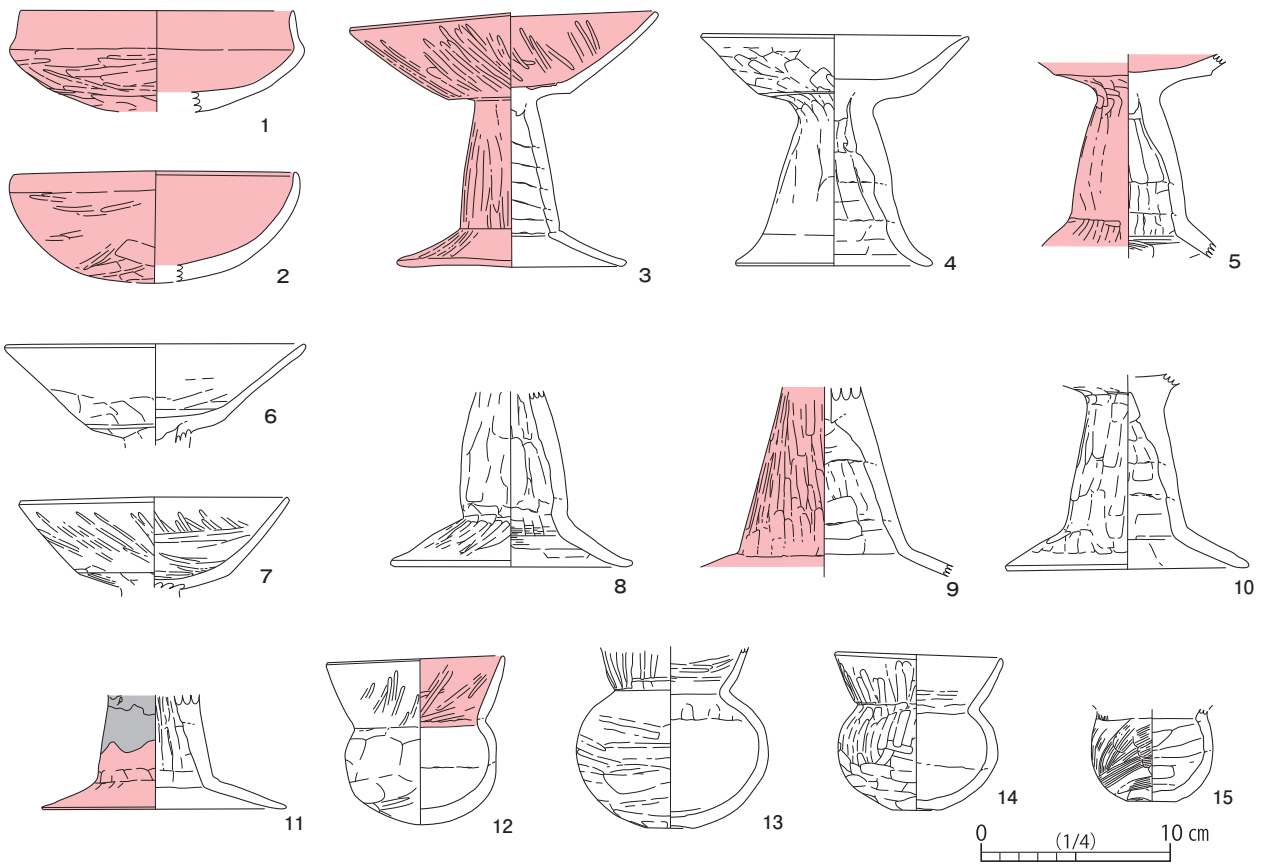


（1）SI006

1. 暗褐色土：しまり弱。ローム粒微量。
2. 黒褐色土：しまり弱。炭化粒・ローム粒微量。
3. 黒色土：しまり弱。炭化粒・ローム粒少量。
4. 暗褐色土：しまりやや有。ローム多量。
5. 黒褐色土：しまり弱。焼土粒少量。ロームまだら。
6. 黄褐色土：しまり有。ローム主体。
7. 暗黄褐色土：貼床土。しまり強。ロームブロック多量。

（1）SI006 炉

1. 暗褐色土：しまりやや有。焼土粒中量。
2. 赤褐色土：しまり有。焼土主体。



（1）SI006 P6

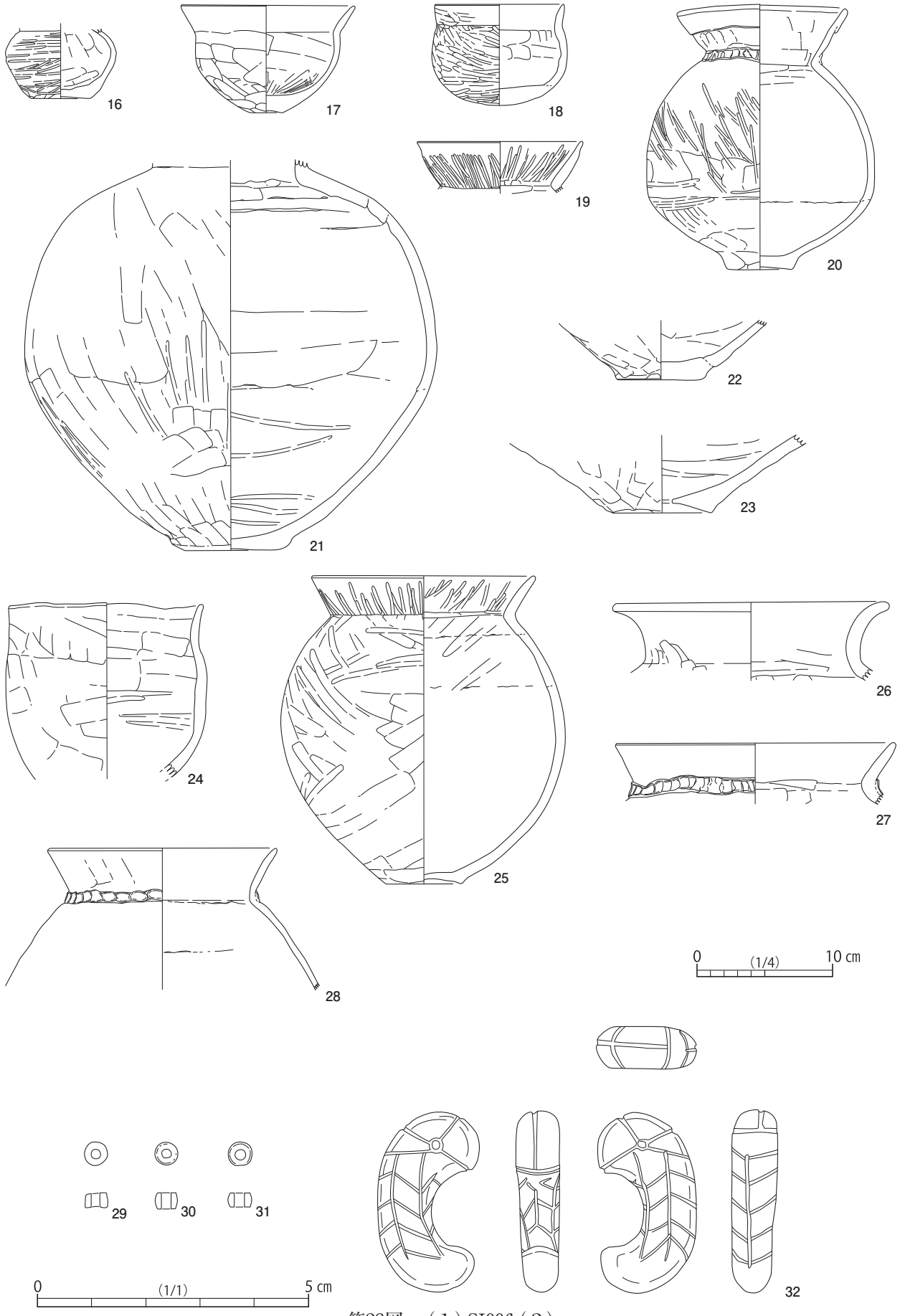
1. 暗褐色土：しまり弱。炭化粒少量。
2. 黒褐色土：しまり弱。炭化物少量。
3. 暗黄褐色土：しまりやや有。ローム主体。

第27図　（1）SI006（1）

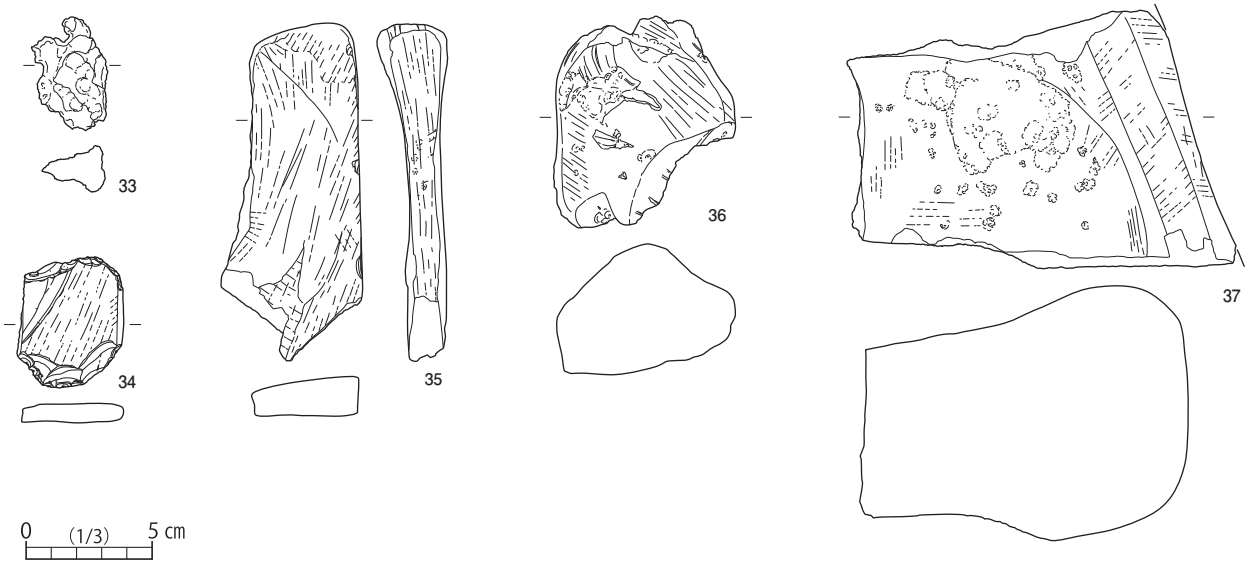
が目立つ。口縁部と体部にススが目立つ。３～10は高杯で、３・４はほぼ完形である。３はエンタシス状の脚部である。杯部は口縁部に向かって直線的に大きく広がり、口径は16.6cmと大きい。杯部下端で鋭く屈曲し、底径は小さい。杯部内面はナデ調整で、赤彩される。剥落が激しい。外面は全体に縦方向のミガキを施し、赤彩される。全体的に、薄手で丁寧な作りである。胎土には砂粒の混入がみられるものの、わずかである。４も中空だが、３に比べて太く短い脚部である。また、脚部の広がり方も「ハ」字形で、３と異なる。杯部底面の径は大きく、口縁部に向かって直線的に開くが、器高は浅い。全体に厚手である。杯部内面はナデ調整とみられるが、剥落が多く、器面が荒れている。外面はヘラケズリのちナデで、脚部内面は縦方向のナデで輪積み痕を消している。赤彩はみられない。胎土に雲母粒子を含む。５は杯部底面～裾部にかけて遺存する。脚部はエンタシス状だが、やや太く短い。杯部下端の屈曲が強く、段ができている。脚部は縦方向のナデ調整だが、裾部にはミガキが施される。脚部内面は上部は輪積み痕をナデで消しているものの、裾部近くの輪積み痕は消えておらず、粗雑な印象である。杯部内面と外面全体に赤彩がみられるが、杯部内面は剥落が激しい。胎土に雲母粒子を含む。６・７は杯部のみが遺存する。ともに下端で屈曲し、口縁部に向かってまっすぐに開く。６は口縁部の開き方が大きい。６は内外面ナデ、７は内外面にミガキを施す。赤彩はみられず、６は砂粒が目立つ胎土である。８～10は脚部である。８はエンタシス状脚である。内面は基本的にナデだが、脚部の下端と裾部の一部に明瞭にハケメが残る。裾部外面はミガキである。赤彩はみられない。胎土に雲母粒子を含む。９も中空だがエンタシス状ではなく、「ハ」字形に直線的に広がり、裾部で屈曲して、大きく張り出す器形である。上部は一度閉塞した状態で作ったのち、棒状工具で穿孔したようである。内面はヘラケズリである。外面はミガキを施し、赤彩がみられる。胎土に混入物が少ない。10はわずかに杯部底部も遺存する。脚部は中空で、あまり弯曲せず裾部に向かってわずかに広がる。赤彩はみられない。

11は高杯を転用した羽口である。脚部外面の割れ口に近い部分には、鉄滓が付着している。一部は灰白色となっており、かなりの高い温度で被熱を受け、還元焼成となったことがわかる。かなり硬質である。

12～16は坩で、12はほぼ完形である。口縁部に最大径をもち、器高に対する口縁部の割合が大きい。体部はあまり張り出さず、丸底である。頸部でわずかに屈曲し、口縁部はほぼ直線的に広がる。口縁部は部分的にミガキが施され、赤彩がみられる。口縁部を赤彩する過程で塗布物が１滴垂れたような痕が体部にみられるが、体部を赤彩した痕跡は確認できない。赤味を帯びた胎土で、砂粒が目立つ。13は口唇部を欠くが、最大径は体部中位にあるとみられる。平底で、体部中位が丸く張り出す。頸部で屈曲し、口縁部が広がる。口縁部はわずかに内弯する。外面は全体に丁寧なミガキが施され、平滑である。赤彩はみられない。胎土に砂粒が少ない。14は完形で、口縁部で最大径となるが、体部最大径と大きくは変わらない。平底で、体部中位が張り出す。頸部で屈曲し、口縁部が広がる。口縁部はわずかに内弯する。外面は全体が丁寧なミガキである。赤彩はみられない。胎土には少量だが砂粒を含む。15は口縁部を欠くが、坩とみられる。非常に小型で、体部に丸みがなく寸胴、平底である。外面にはハケメが残る。赤彩はみられない。16も15と同様、口縁部を欠く。体部の中位よりやや上で張り出す器形である。小ぶりな体部に対して底径は大きく、平底である。外面は横方向のミガキである。17・18は鉢である。17は完形で、平底で内弯する体部である。頸部でわずかに屈曲し、口縁部は外に張り出す。口縁部に最大径をもつ。内外面ともに基本的にナデ調整だが、内面に横方向のナデの痕が強く残っている。また、底部内面はミガキを施している。内面には大きな黒斑があり、胎土に細かな砂粒を含む。18は丸底だが、底部内面は平らに整えられている。体部



第28図　（1）SI006（2）



第29図　（1）SI006（3）

は丸みを帯びているが張り出さず、頸部はほとんど屈曲せずに口縁部が直立的に短く立ち上がる。外面は全体的に、ヘラケズリののち磨かれている。19 ～ 23は壺である。19は頸部から下が遺存しない。つまみ上げたような口唇部である。20は二重口縁の壺で、完形である。突出した平底の底部を有し、胴部の下半に最大径をもつ下膨れの器形である。頸部で強く屈曲し、口縁部は逆「ハ」字形に広がる。頸部の屈曲部には、SI005の６と同様に粘土紐をめぐらせており、指頭押圧の痕が残る。胎土にわずかに雲母粒子を含む。21は口縁部が遺存しないが、頸部がすぼまっており、大型の壺と考えられる。胴部中位に最大径があり、底部は平底で突出する。外面が摩耗している。胎土に雲母粒子をわずかに含む。22は壺の底部とみられる。20・21と同様、平底で突出している。器面の調整は内外面ともに荒く、胎土に砂粒が目立ち、焼成はやや不良である。23は底部穿孔の壺とみられる。胴部下半は逆「ハ」字形に大きくまっすぐに広がるようである。焼成後に、底部のみをさらに被熱させ、外面から内面に向かって穿孔したようである。24 ～ 28は甕である。24は小型の甕で、胴部は寸胴で丸みがなく、頸部は屈曲しない。口縁部はやや外反して立ち上がる。口唇部は指でつまみながらナデでており、波状を呈する部分もある。25はほぼ完形である。上げ底状の底面で、中位に最大径をもつ丸みのある胴部である。頸部で「く」字形に屈曲し、口縁部が外に広がる。内外面ともに部分的にミガキが施される。26は強く外弯する口縁部で、厚手である。内面と口唇部にヨコナデの痕が明瞭に残る。27は「く」字形に屈曲する頸部から直線的に広がる口縁部が遺存する。20の壺と同様に、頸部に粘土紐をめぐらせており、指頭押圧の痕が残る。胎土に砂粒を多く含む。28は口縁部から胴部上半が遺存する。胴部は丸みがなく、頸部で「く」字形に屈曲する。口縁部はわずかに外反する。頸部には、20の壺や27の甕と同様、粘土紐をめぐらせていたとみられ、指頭の痕が残る。全体的に薄手で硬質である。

29 ～ 31は滑石製の臼玉、32は滑石製の勾玉である。32は頭部だけでなく、腹部から背面にも矢羽根状の線刻がみられる。33はスラグで、一部がガラス化している。34は砂岩製の砥石、35は粘板岩製の砥石である。35の上面と右側面はよく磨られている。36は軽石である。37は安山岩製の台石とみられるが、完存しない。自然面である側面を除き、赤茶色を呈しており被熱した可能性がある。このほか図示はできないが、炉のすぐ南西側の床面直上（第27図点線部分）で、鍛造剥片が集中して検出された。

主体となる土器の特徴から、古墳時代中期の遺構とみられる。

（１）SI007（第30図、図版５・21・24）

9D-54･64･65に位置する。主軸方向はN-36°-Eで、主軸長3.42m、幅4.16mの長方形の竪穴住居跡である。確認面からの深さは0.74mである。炉は北東側壁面寄りで検出した。検出位置だけみれば、P2は柱穴、P1は出入口ピットであろうが、本遺構はこの２基以外にピットが検出できておらず、構造が明確でない。床面からの深さは、P1が0.09m、P2が0.39mである。周溝は壁面を全周する。覆土はレンズ状堆積であり、自然堆積によるものとみられる。

遺物は、12点を図示することができた。１～11は土師器で、１～２は杯身である。口縁部が内傾する器形である。内外面にミガキを施す。胎土に雲母粒子を含む。２は１に比べて、やや厚手で口縁部が短い。１よりも強く内傾する。３は杯蓋で、体部下端で屈曲する。口縁部は外傾する。口径が大きく、器高は浅い。内外面に丁寧なミガキを施す。かなり薄くなっているが、内外面漆塗りである。胎土への混入物が少ない。４は杯である。器高が深く、口縁部は外反する。胎土に砂粒が目立つ。５は坩の体部とみられる。底部は丸底である。内面が赤彩される。６～９は甕である。６は小型の甕である。底部は厚手で、口径に対する底径の割合が大きい。胴部は内弯気味で、口縁部は短く外弯する。内面は全体にナデているが、輪積み痕が明瞭に残る。胴部外面は縦方向のヘラケズリである。底部に木葉痕がみられる。胎土に雲母粒子を含む。

７～８は甕の口縁部である。７はやや厚手の口縁部である。内面に輪積み痕が残る。胎土に砂粒を含む。８は大きく外弯する器形である。硬質で、全体に丁寧にナデられている。胎土に雲母粒子を多く含む。９は甕の底部とみられる。厚手で、胎土に砂粒を含む。10・11は甑である。10は口縁部～胴部が遺存する。胴部は上半に最大径をもち、口縁部はほぼ水平に広がる。口縁部は稜が複数みられる。胎土に砂粒を多く含む。11は甑の把手である。12は砂岩製の砥石である。５を除き、出土した土器はみな古墳時代後期のものである。本遺構は炉が検出されているが、カマドの燃焼面であった可能性も考慮しておく必要があるだろう。

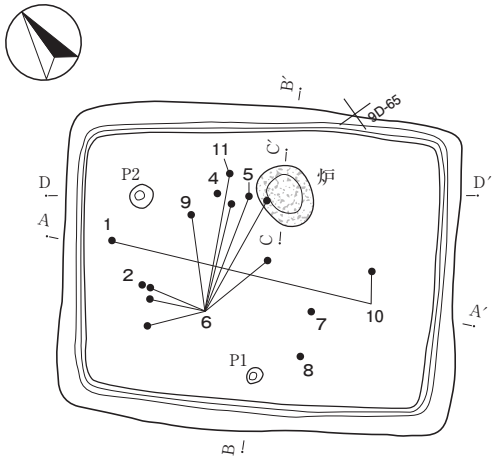
遺構の時期は、古墳時代後期と考えられる。

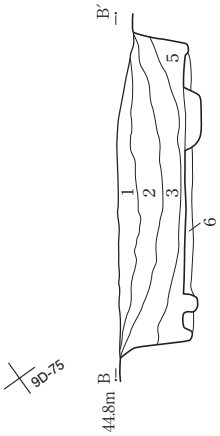
（１）SI008（第31図、図版６・20・25）

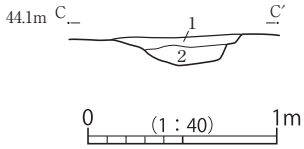
10B-95・96に位置する。主軸方向はN-４°-Wで、一辺3.28mの隅丸方形の竪穴住居跡である。確認面からの深さは0.56mである。炉は北側壁面寄りで検出された。主柱穴はP1～P4で、床面からの深さはそれぞれ0.47m、0.44m、0.58m、0.44mである。P5は出入口ピットで、深さは0.43mである。周溝は壁面を全周する。覆土はレンズ状堆積であり、自然堆積によるものとみられる。

遺物は、９点を図示することができた。１～７は土師器で、１～２は椀である。１は器高が深く、大ぶりである。体部は内弯する。内外面に部分的にミガキがみられる。口縁部外面にわずかにススが付着する。胎土に混入物が少ない。２は底部である。平底で底径が大きい。内面はミガキを施し、外面にも部分的にミガキがみられる。１と同様、胎土に混入物が少ない。３は高杯の脚柱部で、中実である。胎土に砂粒が目立つ。４～７は甕である。４は小型の甕で、口縁部から胴部中位が遺存する。頸部の屈曲はあまり強くなく、口縁部は外弯する。口縁部は内外面にヨコナデが明瞭に残る。胎土に細かな砂粒が目立つ。５・６は底部である。５は胴部があまり張り出さずに立ち上がる。５・６ともに胎土に細かな砂粒を含む。７は胴部上半から底部が遺存する。胴部中位に最大径をもち、やや丸みのある器形である。胎土に細かな砂粒を含む。８・９は、スラグである。

土器の特徴から、古墳時代後期の遺構とみられる。

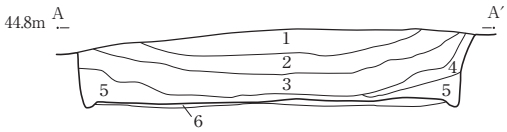


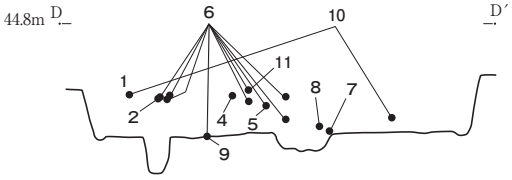




（1）SI007 炉

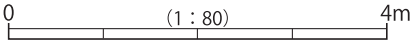
1. 暗褐色土：しまりやや有。焼土粒少量。
2. 赤褐色土：しまり弱。焼土多量。
ロームブロック少量。

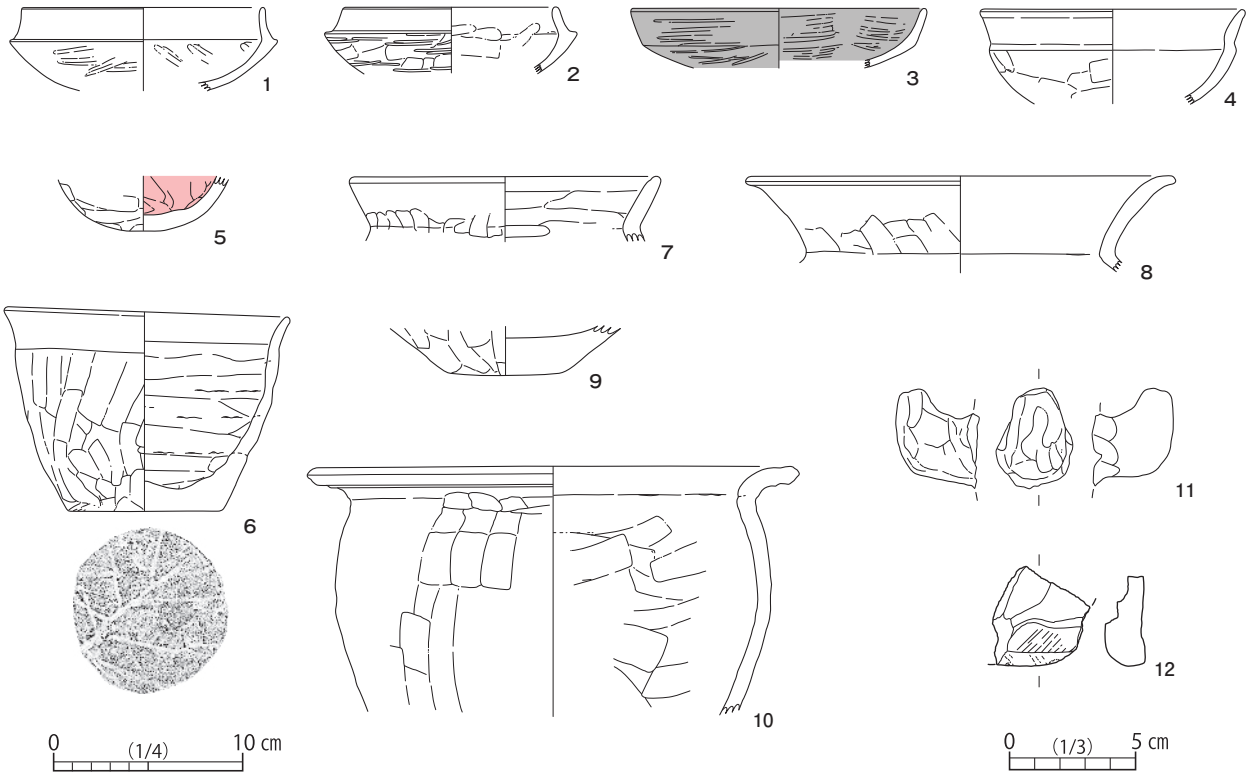




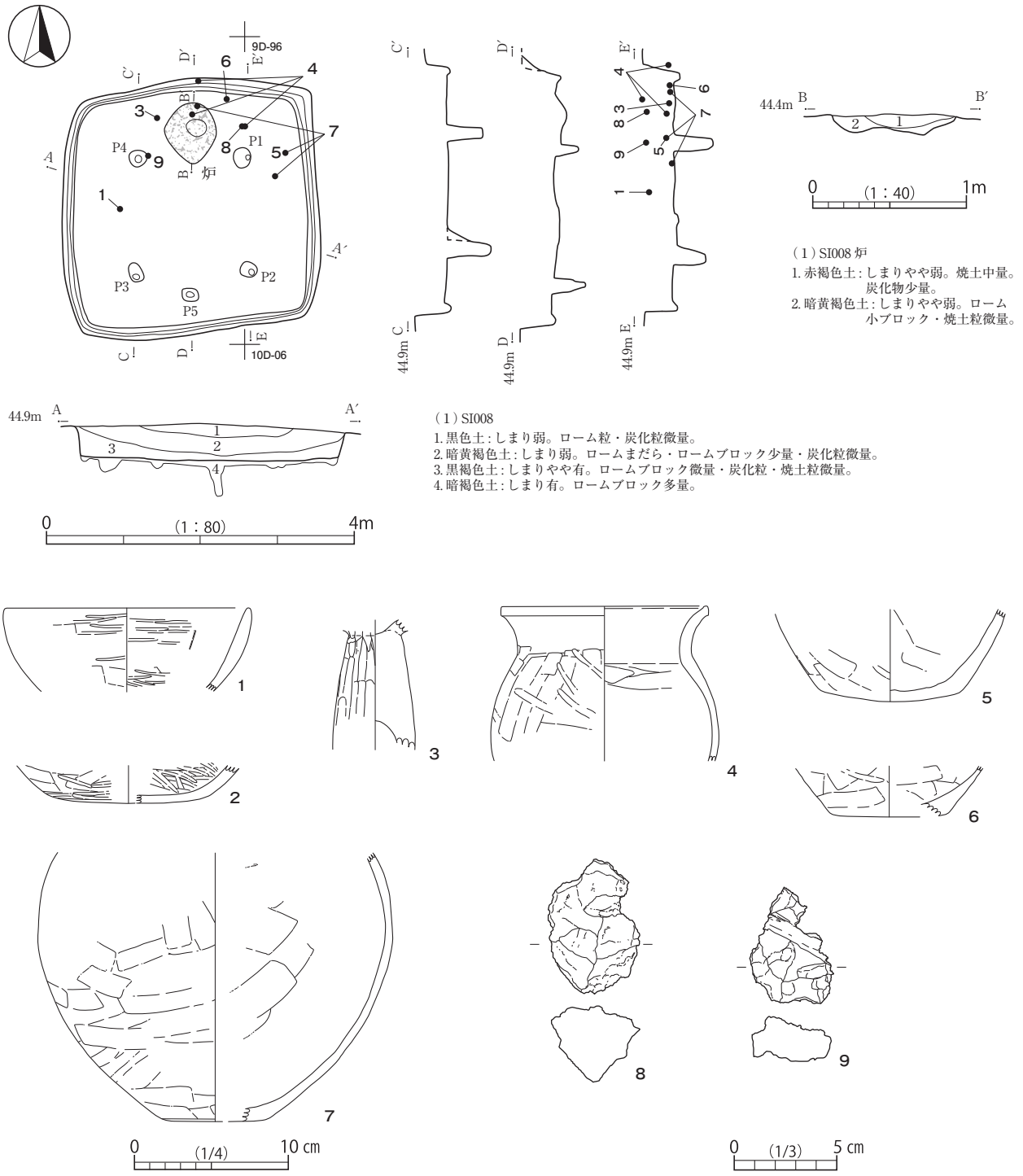
（1）SI007

1. 暗褐色土：しまり弱。ローム粒微量。
2. 黒褐色土：しまり弱。ローム・炭化粒少量。
3. 暗黄褐色土：しまり弱。炭化粒少量。ロームブロック中量
4. 黄褐色土：しまりやや有。焼土粒微量。ロームブロック多量。
5. 明黄褐色土：しまり有。ローム主体・焼土粒・炭化粒微量。
6. 黄褐色土：貼床土。しまり強。ロームブロック多量。





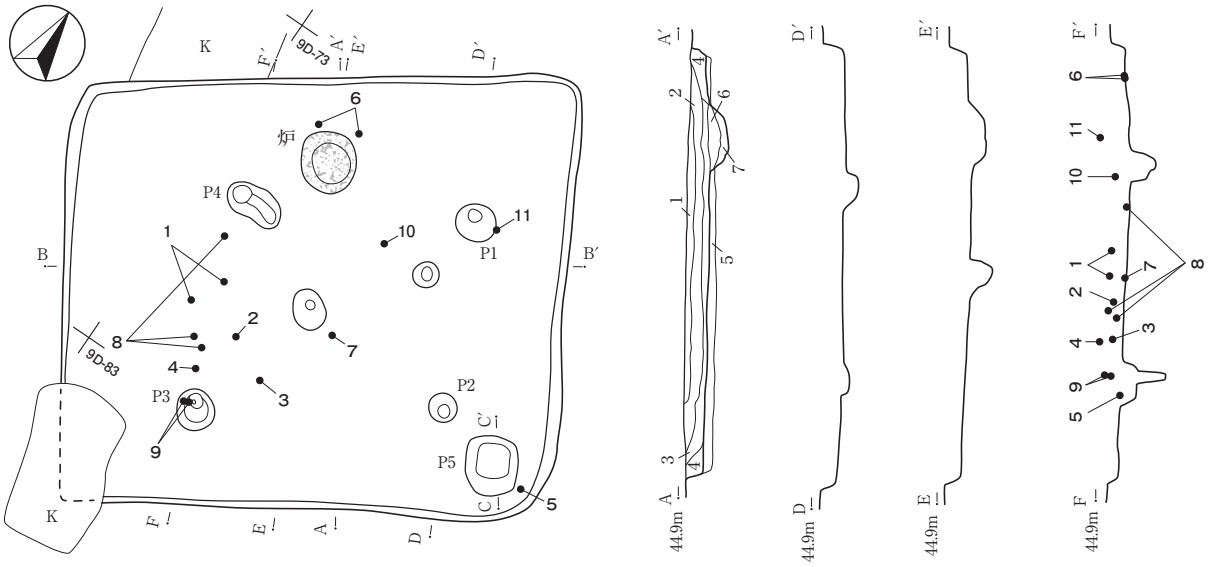
第30図　（1）SI007

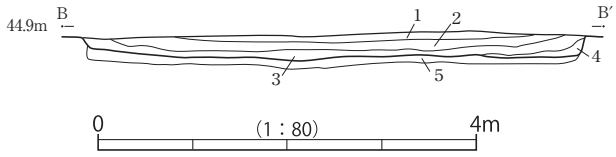


第31図　(1)SI008

(1)SI009（第32図、図版6・21・25）

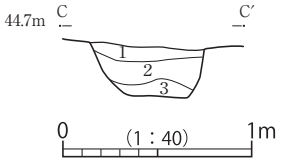
10B-72・73に位置する。主軸方向はN-33°-Wで、主軸長4.56m、幅5.40mの長方形である。確認面からの深さは0.24mである。炉は北西側壁寄りで検出された。主柱穴はP1～P4とみられ、床面からの深さはそれぞれ、0.19m、0.16m、0.45m、0.28mである。出入口ピットとなりうるものは検出されなかった。南東隅のP5が貯蔵穴とみられ、深さは0.31mである。覆土はレンズ状堆積であり、自然堆積によるものとみられる。





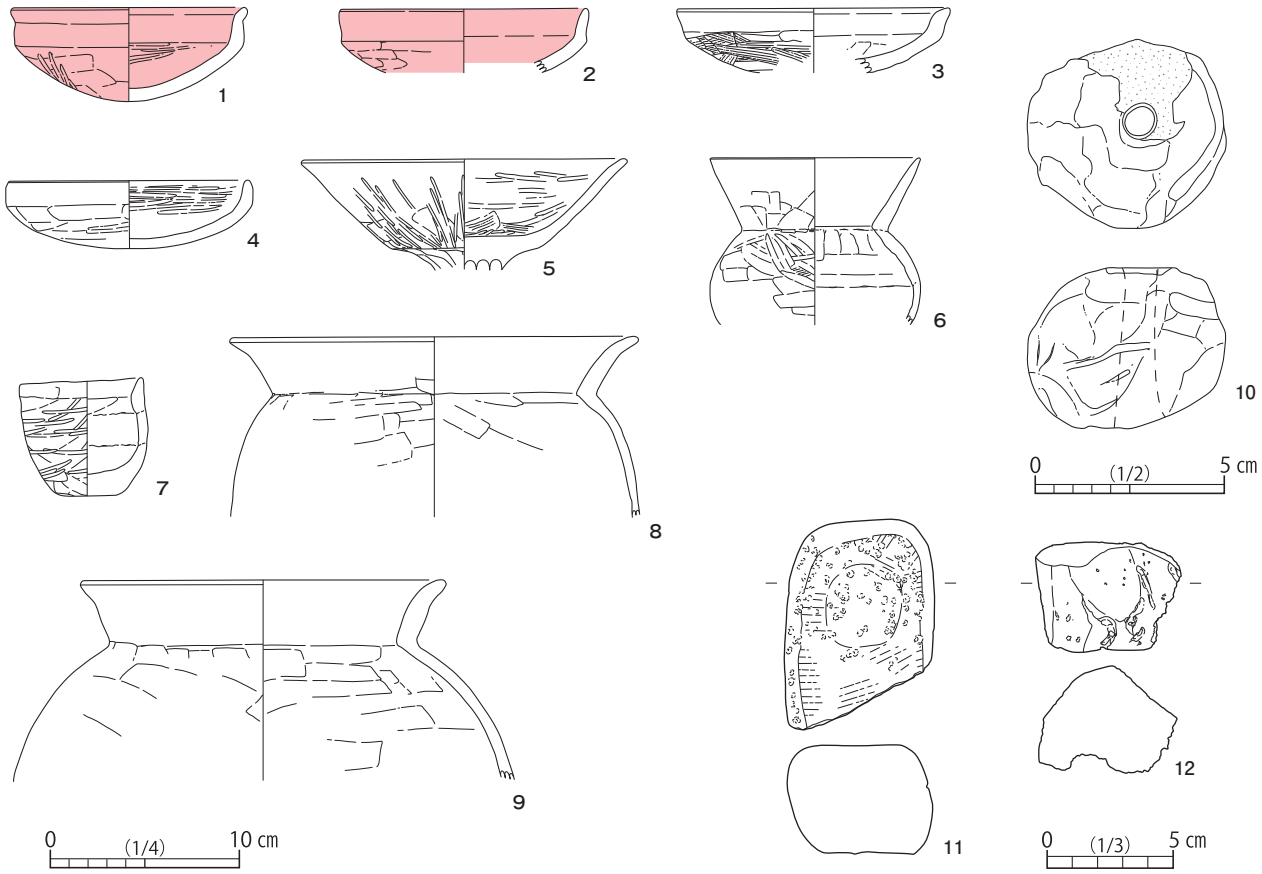
（1）SI009

1. 黒褐色土：しまり弱。ローム粒微量。
2. 黒色土：しまりやや弱。炭化粒微量。ローム粒少量。
3. 暗褐色土：しまりやや有。焼土粒・炭化粒少量。ローム粒中量。
4. 暗黄褐色土：しまりやや有。ローム粒多量。
5. 黄褐色土：貼床土。しまり強。ローム主体。
6. 暗黄褐色土：炉覆土。しまりやや弱。焼土粒・ロームブロック少量。
7. 明黄褐色土：炉覆土。しまり有。ローム主体。焼土粒微量。



（1）SI009 P5

1. 暗褐色土：しまり弱。ロームまだら。
2. 黒褐色土：しまり弱。炭化粒微量。ローム粒少量。
3. 暗黄褐色土：しまりやや有。ローム主体。



第32図　（1）SI009

遺物は、12点を図示することができた。１～９は土師器で、１～４は杯である。１はやや尖ったような底部で、器高は深めである。口縁部は直立して立ち上がり、口唇部が短く外反する。内外面にミガキが施され、赤彩の痕跡がある。胎土に砂粒を含む。２は須恵器杯蓋模倣の杯で、口縁部はほぼ直立して立ち上がる。内外面ともに赤彩される。３は口縁部が短く、わずかに外弯する。器高は浅く、口径は大きい。外面はミガキである。４も器高が浅い、扁平な器形である。丸底で、口縁部は短く直立する。体部内面は点状に剥落しているが、口縁部含め内面全体にミガキが施される。５は高杯の杯部である。口径・器高ともに大きい。体部下端で屈曲する。６は坩である。体部は丸く、中位で張り出す。口縁部と体部中位がほぼ同じ径で、頸部の径も比較的大きい。口縁部は、逆「ハ」字形に広がる。内面は部分的に剥落している。外面は一部にミガキ痕が残る。胎土に雲母粒子をわずかに含む。７はミニチュア土器で、甕である。胴部に丸みがなく頸部は屈曲しない。口縁部は内面がわずかに外反するが、外形としては短く直立する。全体に丁寧な作りで、内面はナデ、外面はヘラケズリのち部分的にミガキが施される。胎土に雲母粒子を含む。８・９は甕である。８は口縁部～胴部上半が遺存する。頸部は「く」字形に鋭く屈曲し、口縁部は外弯する。胴部の器厚が薄く、口縁部が厚めである。９も口縁部から胴部上半が遺存する。丸みのある肩部で、頸部が屈曲するが、８ほど鋭くない。口縁部はやはり外弯する。８と同様、胴部は薄手で口縁部が厚い。胎土に雲母粒子を含む。10は土玉である。11は砂岩製の砥石である。上面の一部および左側面に敲打痕がみられる。12は軽石である。部分的にガラス質の部分を含む。

主体となる土器の特徴から、古墳時代中期の遺構と考えられる。

（２）SI013（第33・34図、図版６・22）

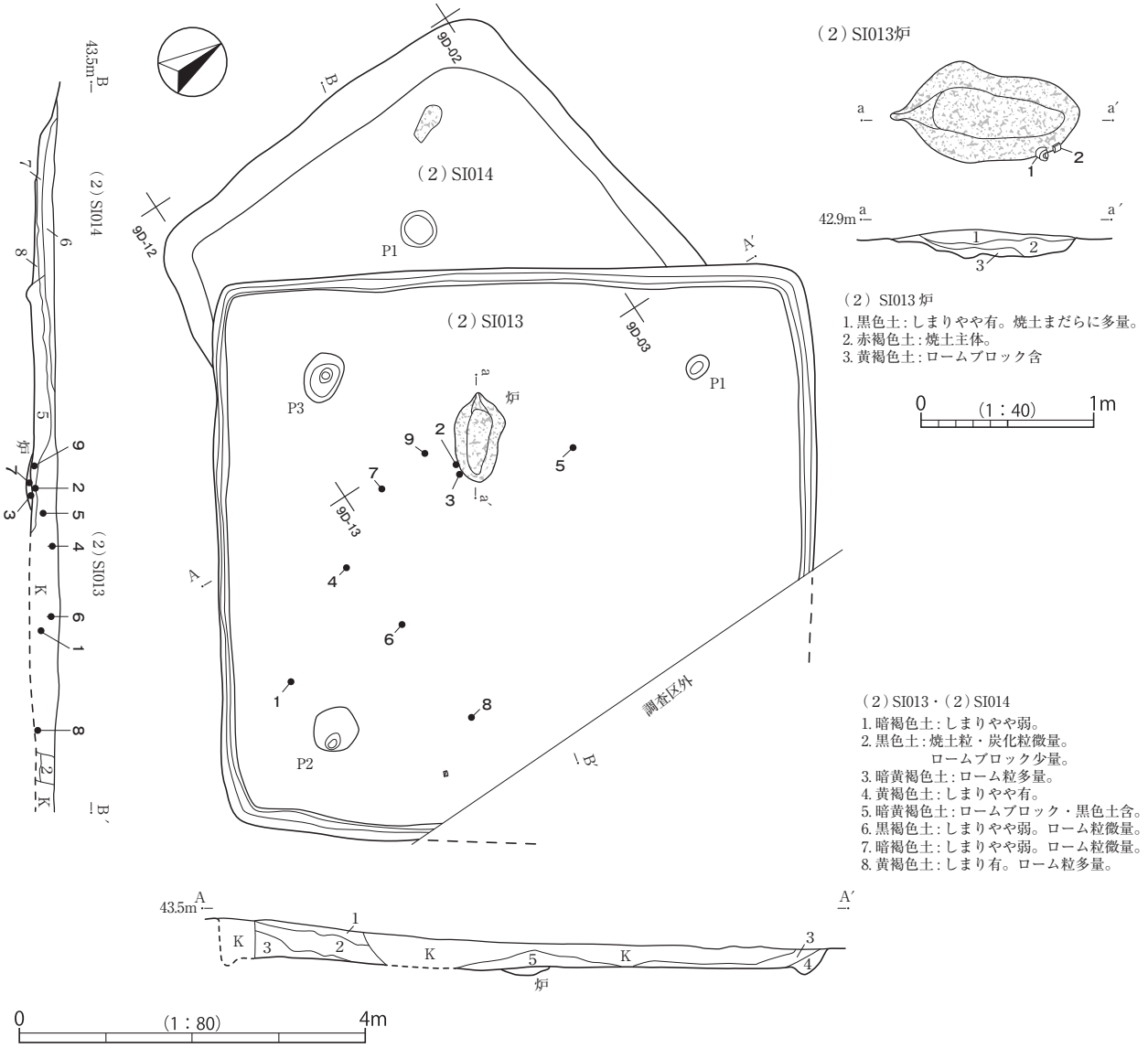
8D-92・93・9D-02・03・12・13に位置する。（２）SI014と重複するが、覆土に明瞭な違いはなく、時期の隔たりはほとんどないと思われる。主軸方向はN-57°-Wで、主軸長6.60m（推定）、幅6.88mの方形に近い長方形を呈する。確認面から床面までの深さは0.40mである。炉は中央部西側寄りで検出した。主柱穴はP1～P3で、床面からの深さはそれぞれ、0.72m、0.71m、0.60mである。周溝は壁面を全周するものとみられる。全体的に攪乱を受けており、覆土の遺存状況が悪い。

遺物は、11点を図示することができた。１～４は土師器である。１は杯の底部とみられる。平底で、胎土に砂粒を含む。２～３は高杯で、２は杯部である。体部下端に明瞭な稜を有する。内外面ともに丁寧なミガキで、赤彩が施される。３は脚部である。中空のエンタシス状脚とみられる。棒状工具によって芯部を穿孔している。外面は丁寧なミガキで、赤彩されている。２と３は同一個体の可能性がある。ともに、胎土にわずかだが雲母粒子を含んでいる。４は甕である。口縁部～頸部が遺存する。頸部は「く」字形に屈曲し、口縁部は外弯する。厚手である。頸部内面に輪積み痕が明瞭に残る。５・６は土玉である。５は半分欠けているが、片側穿孔とみられる。６も片側穿孔だが、小ぶりな作りである。７は凝灰岩製の砥石である。８・９は軽石である。８の上面には、刃物で付いたとみられる筋状の痕が確認できる。10はスラグである。11は炉壁とみられる。

土器の特徴から、古墳時代中期の遺構と考えられる。

（２）SI014（第33・34図、図版６・22）

8D-92・9D-02・12に位置する。（２）SI013と重複するが、覆土に明瞭な違いはなく、時期の隔たりはほとんどないと思われる。炉が検出されていないが、（２）SI013との重複により消失した可能性を考慮し、竪穴住居跡として報告する。平面形は一辺4.50mの方形ないしは、4.50mの短辺をもつ長方形とみられる。



第33図　(2)SI013･SI014(1)

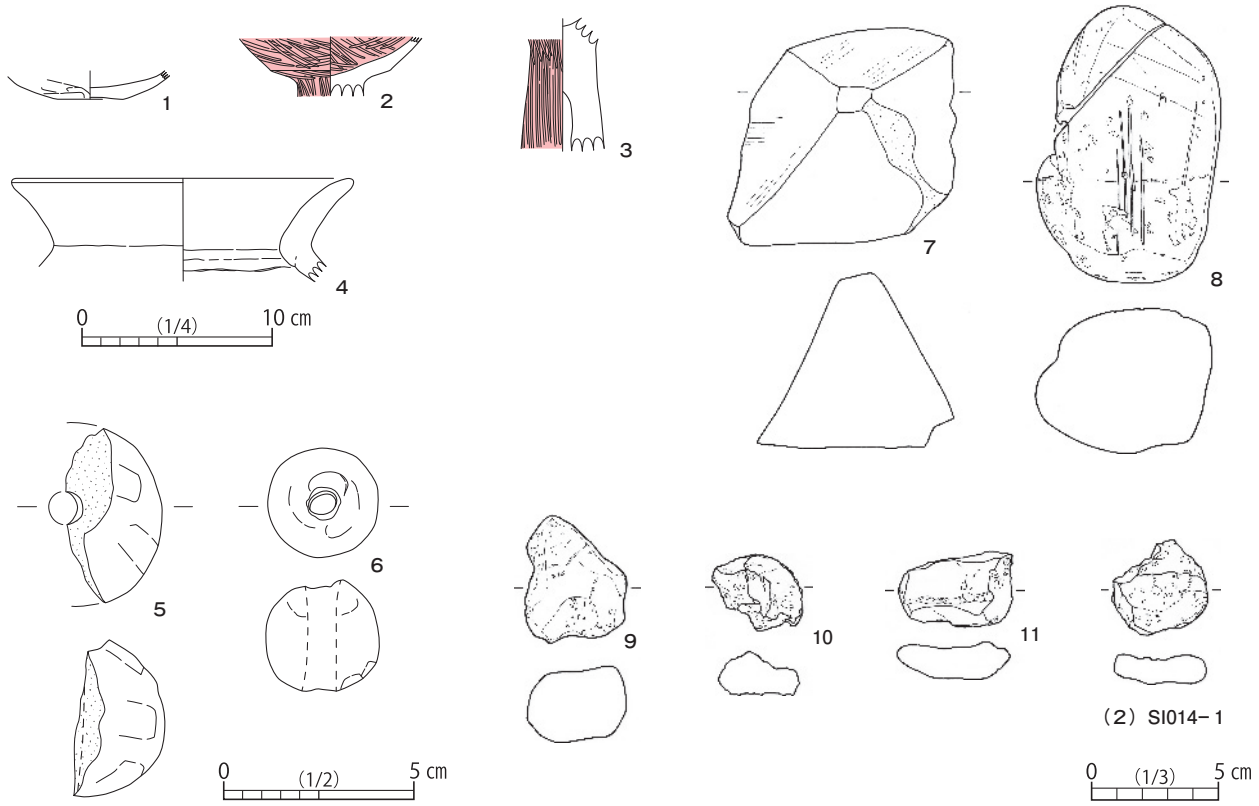
確認面から床面までの深さは0.28mである。性格不明のピットが1基検出されており、床面からの深さは0.27mである。覆土はレンズ状堆積のようにみえるが、遺存状況は悪く、明瞭でない。

遺物はスラグ1点を図示した。土師器の小破片が出土していることや(2)SI013と時期差がみられないことから、古墳時代中期の遺構と考えられる。

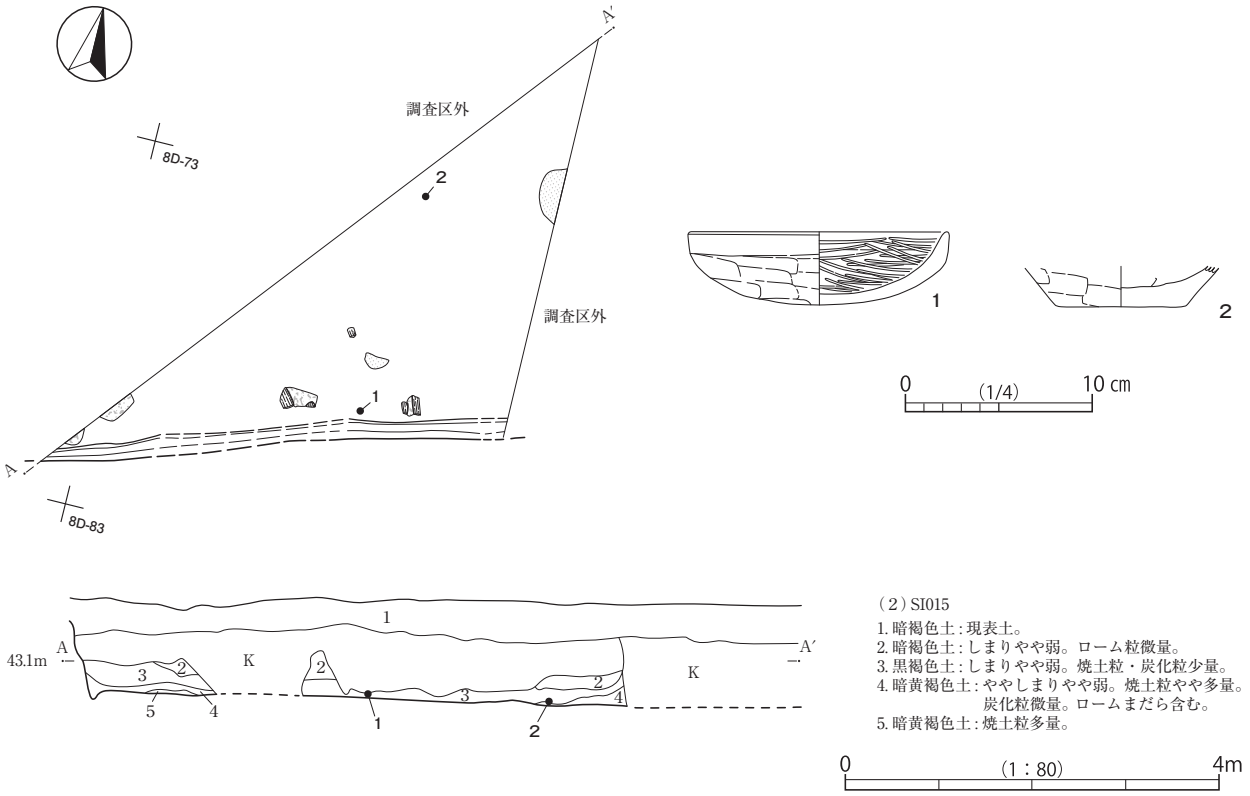
(2)SI015(第35図、図版6・22・25)

8D-63・72・73に位置する。炉と主柱穴が検出できていないが、遺構の規模や壁際で周溝が検出されたことから、竪穴住居跡として報告する。遺構のごく一部しか調査ができていないため、主軸方向や主軸長、平面形は不明である。確認面から床面までの深さは0.40mである。攪乱を受けており、覆土の遺存状況が悪い。床面直上で炭化材と焼土が検出されており、焼失住居の可能性がある。遺構の東側や南側寄りでは、粘土が検出された。

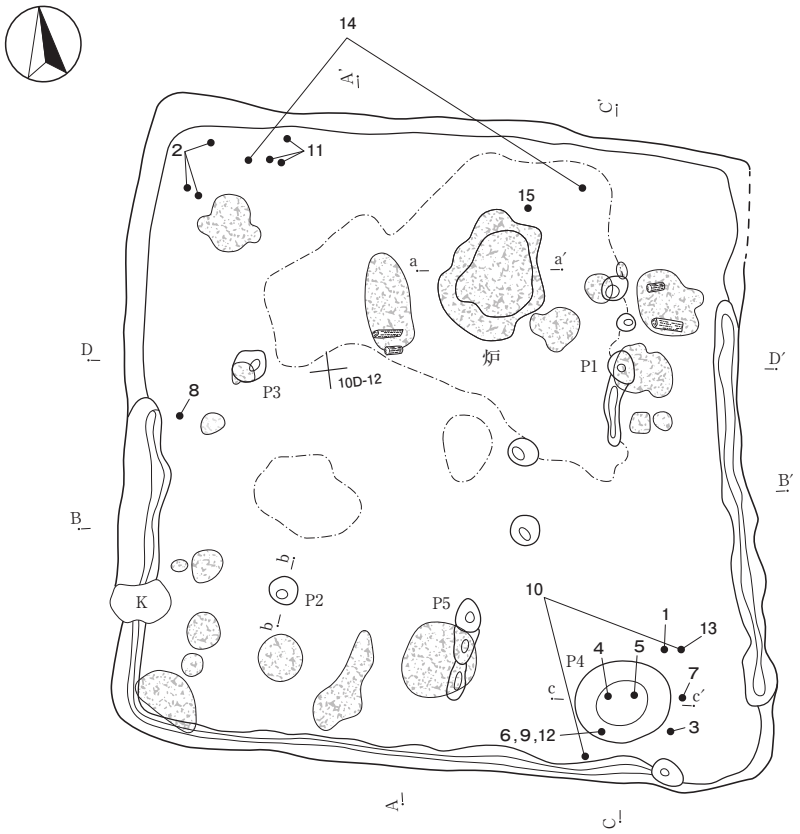
遺物は、土師器2点を図示することができた。1は杯である。やや扁平な器形で、厚手の口縁部が直立

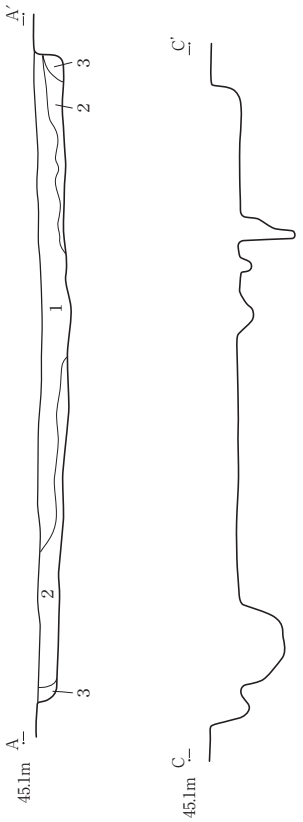


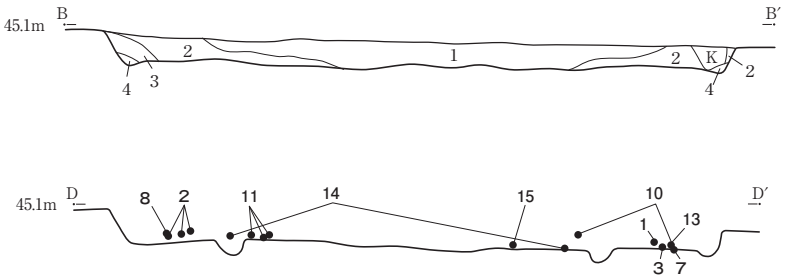
第34図　（2）SI013･SI014（2）



第35図　（2）SI015



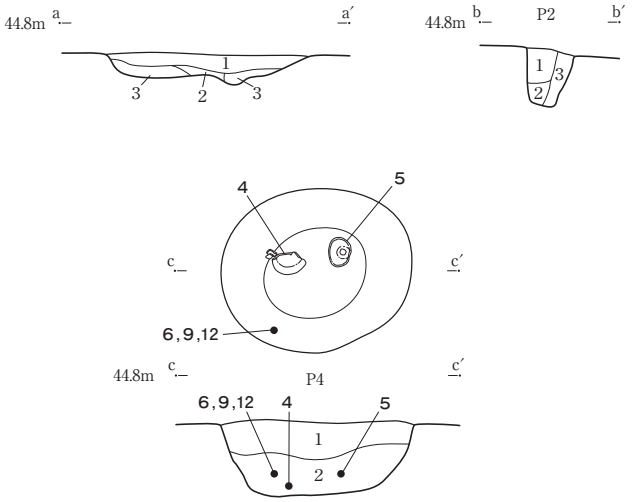




（4）SI001

1. 黒褐色土：しまり弱。ロームブロック微量・ローム粒少量。
2. 褐色土：しまりやや強。炭化粒・焼土粒少量。ロームブロック少量。
3. 褐色土：しまりやや弱。炭化粒・焼土粒微量。ローム粒多量。
4. 褐色土：しまりやや弱。焼土粒微量。ローム粒多量。ロームブロックやや多量。

0 (1：80) 4m



（4）SI001 炉

1. 黒褐色土：しまりやや弱。炭化粒・焼土粒やや少量。ローム粒少量。
2. 褐色土：しまりやや強。炭化粒・焼土粒微量。ローム粒多量。
3. 赤褐色土：しまり強。焼土粒多量。

（4）SI001 P2

1. 暗褐色土：しまり弱。炭化粒・焼土粒微量。ローム粒微量。
2. 黒褐色土：しまり弱。焼土粒微量。ローム粒微量。
3. 褐色土：しまり強。ローム粒多量。ロームブロック多量。

（4）SI001 P4

1. 暗褐色土：しまり弱。炭化物・焼土粒少量。ローム粒少量。
2. 褐色土：しまり弱。炭化物・焼土粒少量。ローム粒少量。

0 (1：40) 1m

第36図　（4）SI001（1）

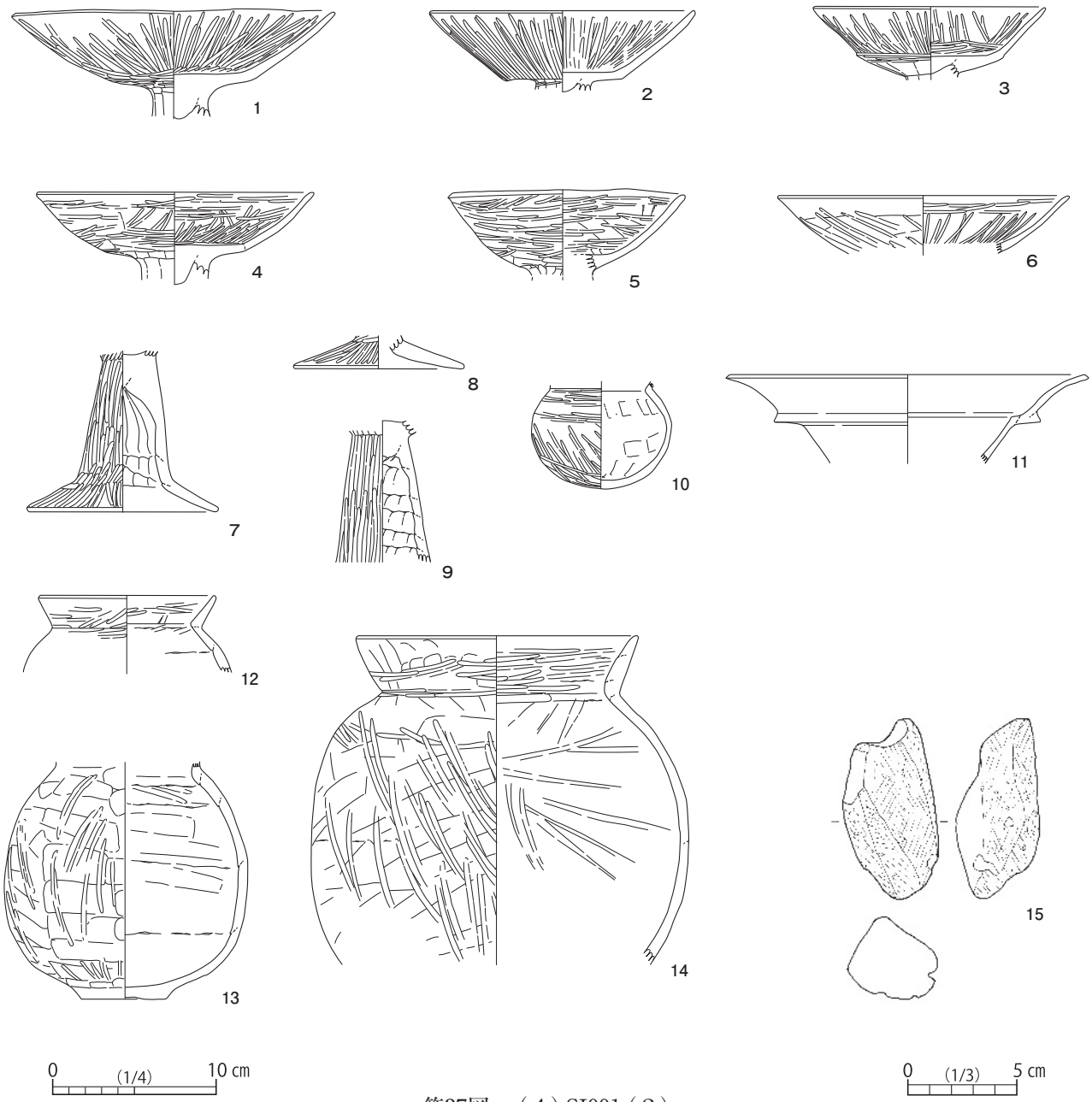
する。２は甕の底部とみられる。

土器の特徴から、古墳時代後期の遺構とみられる。

（４）SI001（第36・37図、図版７・22・25）

10D-01・02・03・11・12・13・22に位置する。主軸方向はN-9°-Eで、一辺が6.72m前後の方形の竪穴住居跡である。確認面から床面までの深さは0.24mである。炉は中央部北東寄りで検出され、炉の周辺では硬化面が確認された。主柱穴はP1～P3とみられ、床面からの深さはそれぞれ、0.16m、0.53m、0.16mである。P4は貯蔵穴で、遺物も多く出土しており、深さは0.46mである。間仕切り溝がP1、P5と接して検出された。竪穴住居跡の東壁と南壁から西壁にかけて、周溝も検出されている。覆土はレンズ状堆積であり、自然堆積によるものとみられる。床面全体で炭化材と焼土が検出されており、焼失住居の可能性が高い。

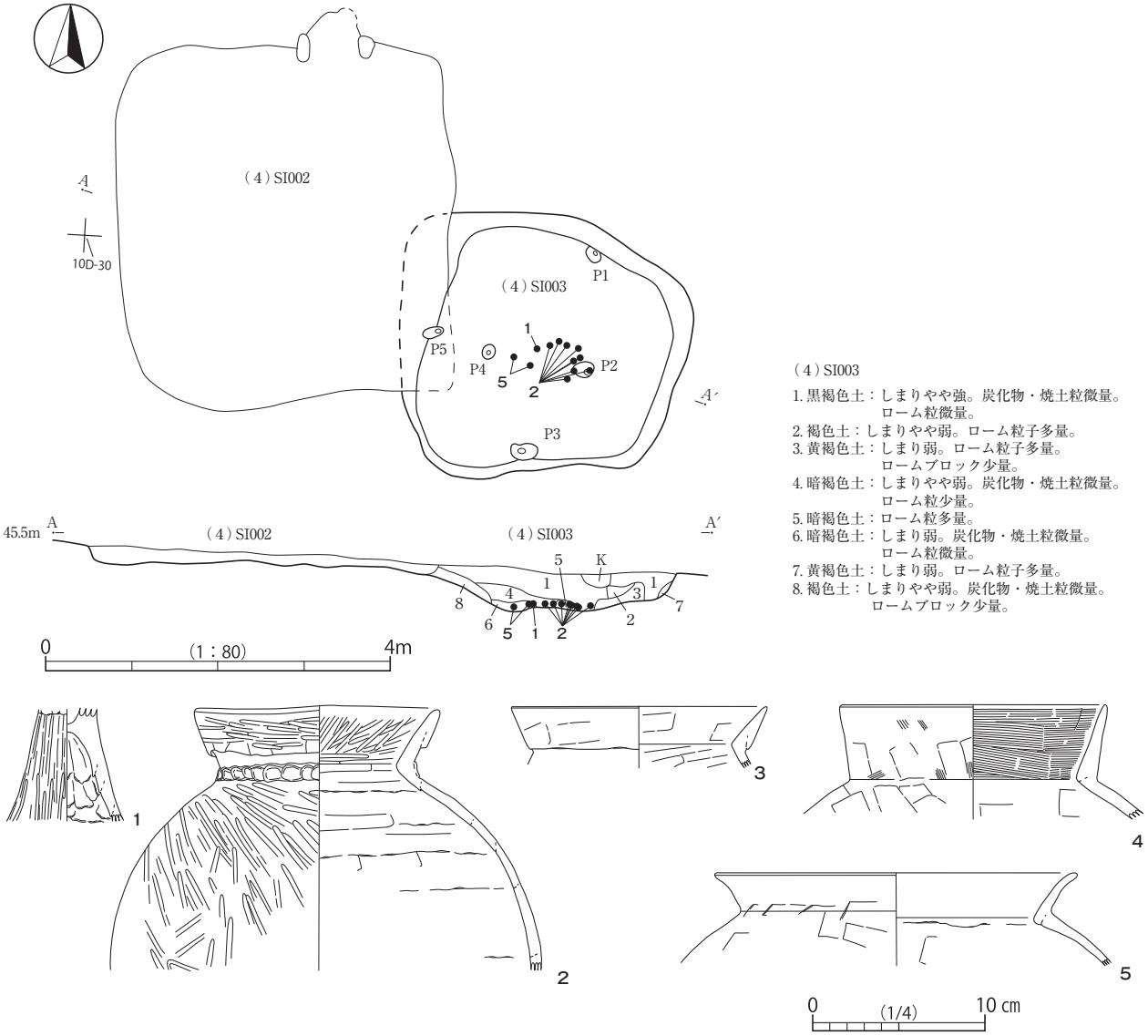
遺物は、土師器14点と軽石１点を図示することができた。１～９は高杯である。１～６は杯部、７～９



第37図　（４）SI001（２）

は脚部のみが遺存する。１は、体部下端で弱く屈曲する。口縁部の開きが大きく、口径が大きい。全体的に薄手である。内外面ともにミガキが施される。２は底部が平らに整形される。体部下端の屈曲は１よりも鋭く、明瞭な稜が形成され、口縁部は直線的に広がる。厚みが均質で、全体的に薄手である。内外面ともにミガキが施される。３も体部下端で屈曲し、段が形成されている。口縁部～体部が薄手である。内外面に部分的にミガキがみられる。胎土に雲母粒子をわずかに含む。４は１と同様に、体部下端で弱く屈曲する。体部は内弯気味だが、口縁部でわずかに外弯する。内外面ともにミガキが施される。５は椀形の杯部で、器高が深く、内弯気味の器形である。内外面ともにミガキを施す。６は底部が遺存しない。非常に薄手で、浅い扁平な器形と考えられる。７は、エンタシス状の脚部である。内面は縦方向のナデ、外面は全体に丁寧なミガキがみられる。胎土に雲母粒子を含む。８は裾部、９はエンタシス状の脚柱部である。

９の内面には輪積み痕が明瞭に残る。外面は縦方向のミガキを施す。10は口縁部を欠損する坩である。丸底で、丸みのある体部である。外面にミガキが施される。11は有段口縁の壺である。口縁部のみが遺存する。頸部から口縁部に向かって大きく広がる器形で、段部は断面形が三角形の突帯をめぐらせており、内面にも段が形成されている。段より上部は外弯する。薄手で硬質である。胎土に混入物が少ない。



第38図　（４）SI003

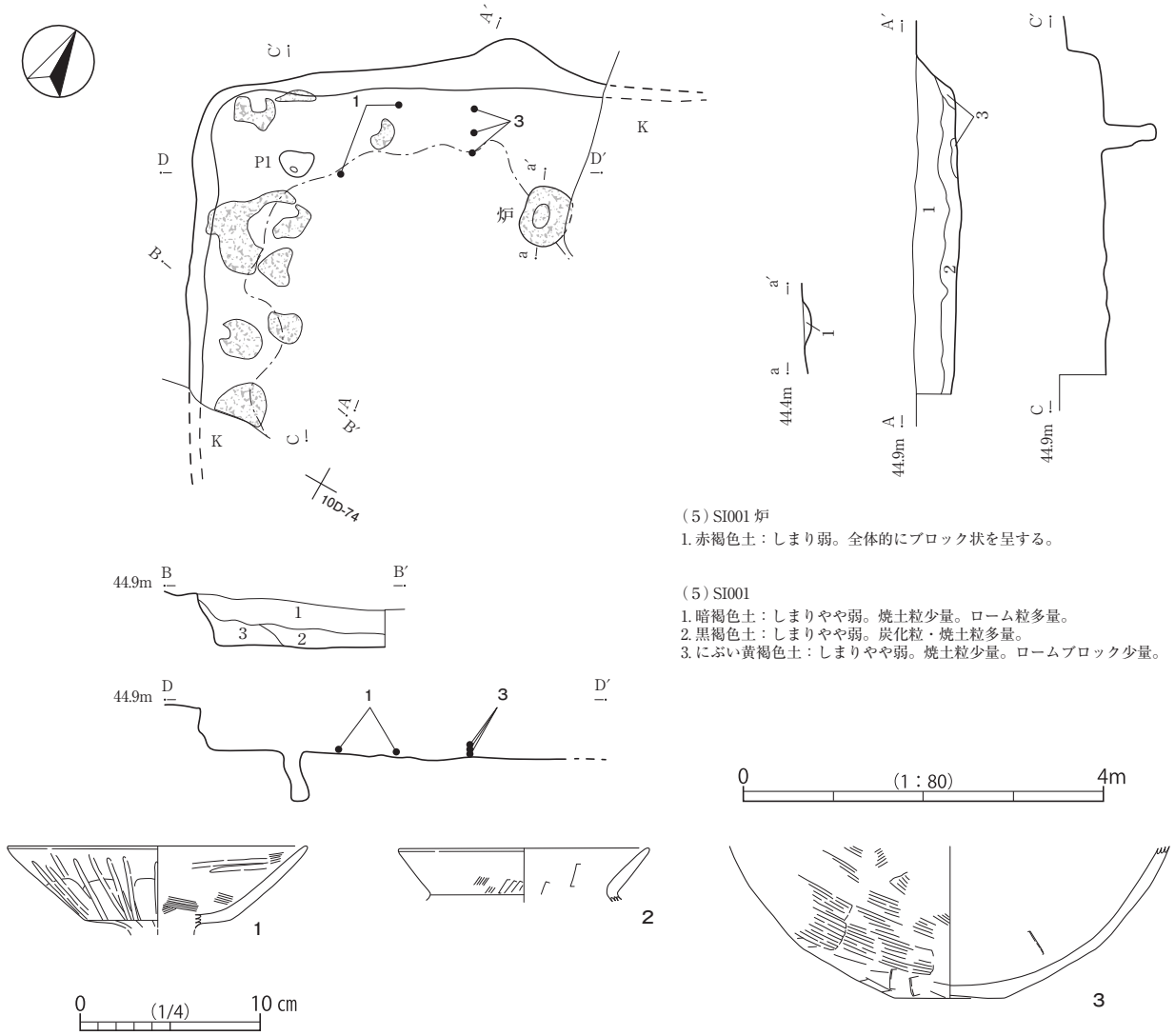
12 ～ 14は甕である。12は小型の甕で、口縁部から胴部上半が遺存する。頸部で「く」字形に屈曲し、口縁部は外反する。内外面にミガキが施される。13は頸部より上を欠損する。胴部下半に最大径をもつ下膨れの器形である。底部は突出した平底である。外面に部分的にミガキがみられ、ススが付着している。14は胴部下半～底部を欠損する。丸みを帯びた胴部で、中位に最大径をもつ。頸部で「く」字形に屈曲し、口縁部は外反し、胴部に比べて厚手である。内外面ともに部分的にミガキが施される。15は軽石である。

土器の特徴から、古墳時代中期の遺構とみられる。

（4）SI003（第38図、図版７・22・25）

10D-21・30・31に位置し、一辺3.00mほどの不整な方形を呈する。炉やカマドが検出されず、全体に不整形であり、竪穴住居跡の可能性は低い。底面は平坦ではなく、確認面からの深さは深いところで0.50mを測る。ピットはP1・P3・P5がそれぞれ遺構の北壁・南壁・西壁際で、P2とP4が中央部寄りで検出されている。遺構底面からの深さはP3とP4が0.20m弱だが、P2とP5は0.30mを超える。覆土は複数の土層が入り乱れており、人為的な埋め戻しの可能性がある。

遺物は、土師器５点を図示することができた。１は高杯の脚柱部である。裾部を欠損しているが、短脚化したラッパ状の器形とみられる。胎土に砂粒を含む。２～４は壺である。２は胴部中位以下を欠損する



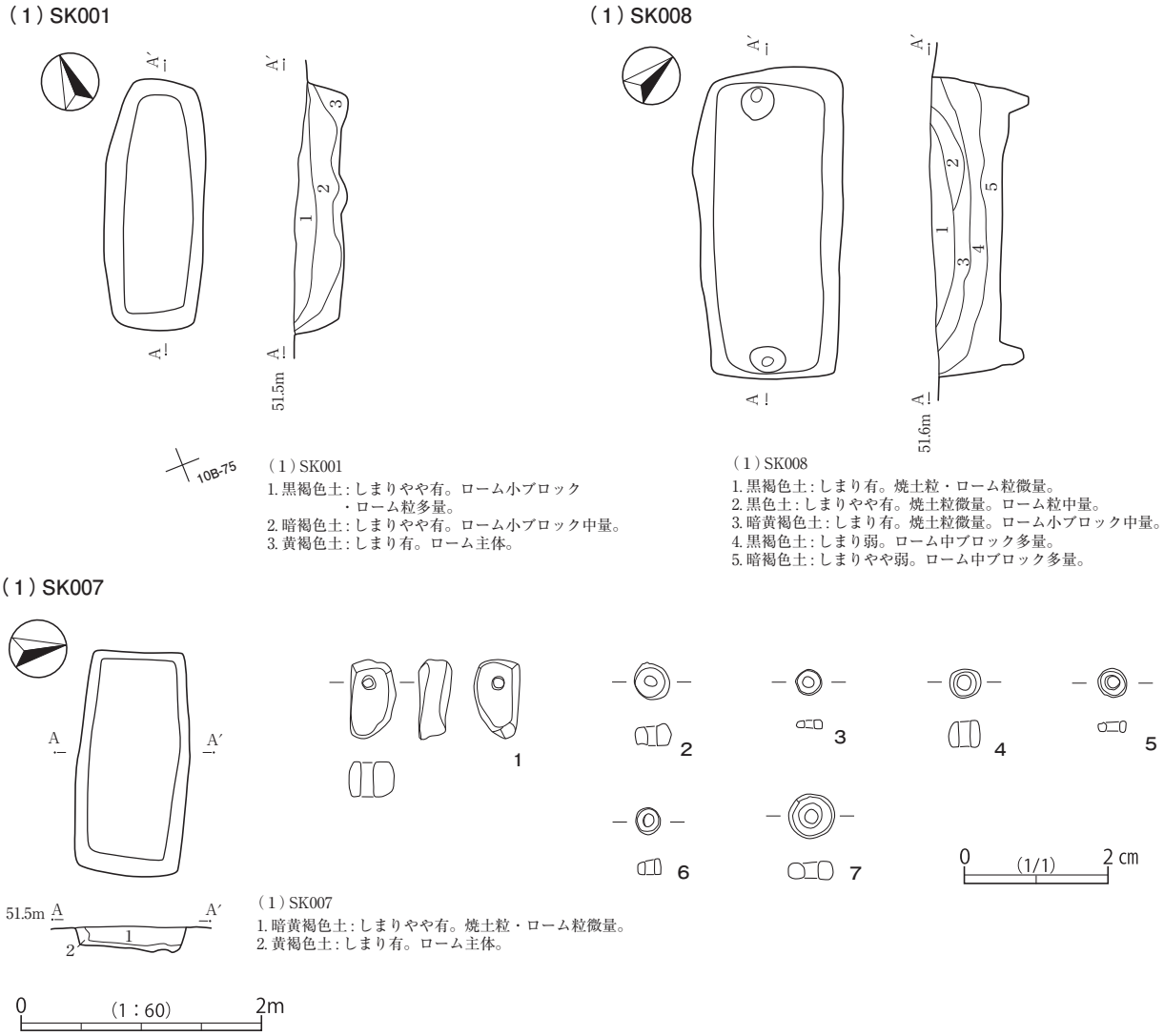
第39図　（5）SI001

二重口縁の壺で、逆位に置かれた状態で出土した。丸みを帯びた胴部で、中位に最大径をもつとみられる。頸部で「く」字形に屈曲し、口縁部で外反する。段部に厚みがある。頸部には粘土紐をめぐらせていたようで、指頭押圧の痕が残る。この粘土紐が削られている部分もある。内外面にミガキを施す。胎土に雲母粒子を含む。３も二重口縁の壺である。口縁部～頸部が遺存する。２とは異なり、段差は低い。４は口縁部～肩部が遺存する。頸部で屈曲し、わずかに外反して長く立ち上がる口縁部である。口縁部内面にハケメが残る。内外面ともに摩滅している。５は甕である。口縁部～肩部が遺存する。口径が大きい。頸部は「く」字に強く屈曲し、外弯する口縁部である。全体に薄手である。胎土に混入物が少ない。

土器の特徴から、古墳時代中期の遺構と考えられる。

（５）SI001（第39図、図版７・22・26）

10D-53・54・63・64に位置する。主軸方向はN-31°-Wで、主軸長2.48m（現存値）、幅3.88m（現存値）の方形ないしは長方形とみられる竪穴住居跡である。確認面から床面までの深さは0.46mである。炉は北西側壁寄りで検出された。平面形は方形ないしは長方形とみられるが、撹乱により遺存状態が悪いため不明である。床面からの深さ0.58mのピットが１基検出されており、主柱穴の可能性がある。床面から焼土が広く検出されたほか、図示できていないが、炭化材も検出されており、焼失住居の可能性が高い。覆土は



第40図　（１）SK001・SK007・SK008

自然堆積によるものと考えられる。

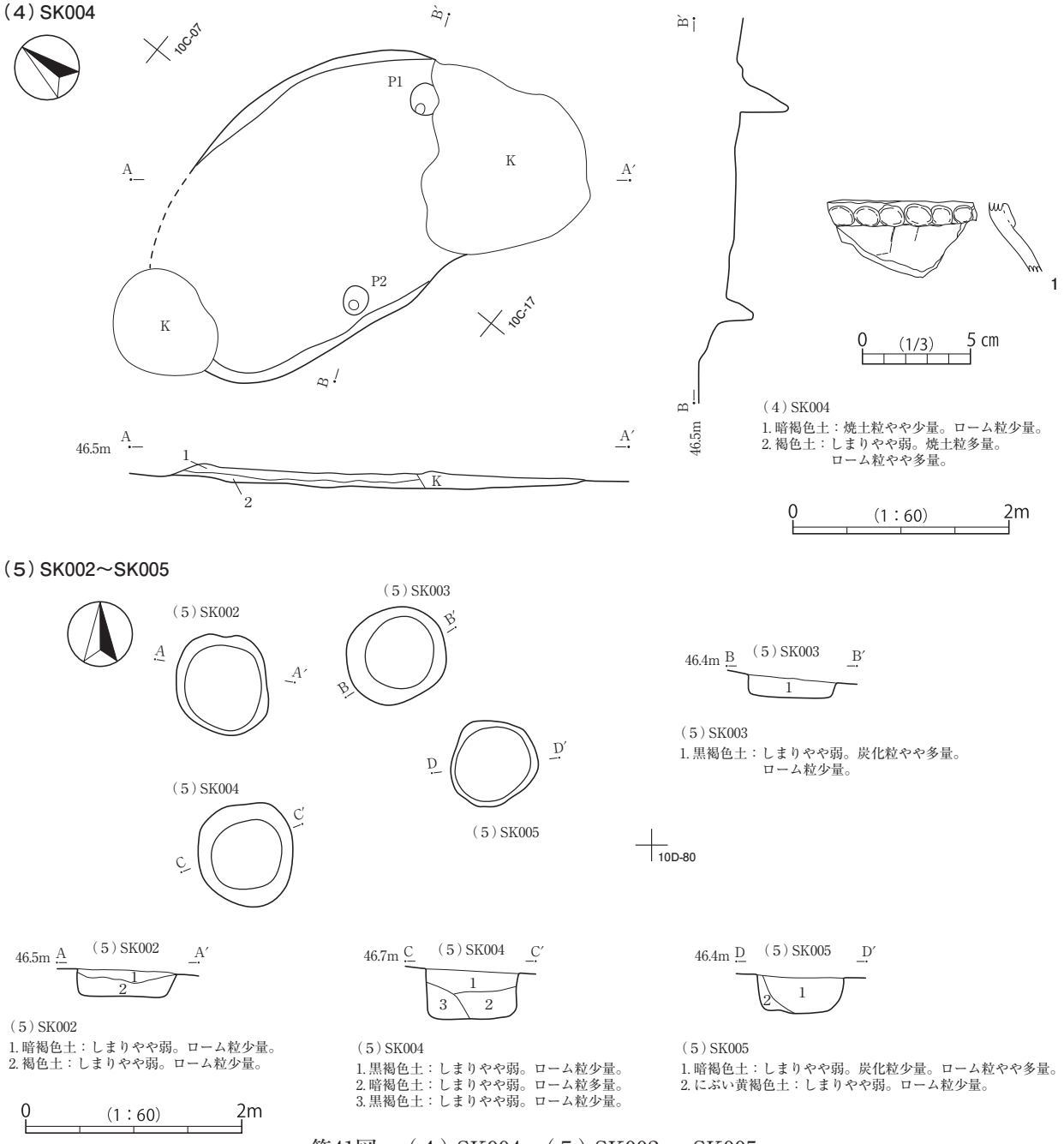
遺物は、土師器３点を図示することができた。１は高杯の杯部である。体部下端で屈曲し、口径は17cmと大きい。２は甕の口縁部である。逆「ハ」字形に大きく外に広がる器形である。ナデの工具痕が内外面に残る。胎土に砂粒を含む。３は甕の底部とみられる。球胴形の器形か。外面に幅広のハケメが残る。

土器の特徴から、古墳時代中期の遺構と考えられる。

２　土坑

（１）SK001（第40図、図版７）

10B-64・65に位置する。長軸方向はN-24°-Eで、長軸長2.10m、短軸長0.80mの長方形を呈する。底面は



第41図　（４）SK004・（５）SK002 ～ SK005

中央部に若干の窪みがあり、確認面からの深さは0.44mである。覆土はレンズ状堆積である。

遺物は図示できるものはなかったが、弥生土器、土師器、須恵器の小破片が出土した。

（1）SK007（第40図、図版７・28）

10B-74・75に位置する。長軸方向はN-77°-Wで、長軸長1.86m、短軸長0.90mの長方形を呈する。底面はおおむね平坦で、確認面からの深さは0.20mである。

遺物は、７点を図示することができた。１は勾玉である。琥珀製で不定形、非常に小ぶりである。２・３は滑石製の臼玉である。黒味の強い灰色を呈し、２は厚みがある一方、３は薄手で小さい。４～７はガラス小玉である。４～６は浅葱色、７は紺青色である。大きさは3.6㎜～6.3㎜と幅がある。厚みは1.2㎜～1.7㎜で、４を除いて扁平な形状のものが多い。

（1）SK008（第40図、図版８）

10B-62・63・72・73に位置する。長軸方向はN-46°-Wで、長軸長2.60m、短軸長1.20mの長方形を呈する。確認面からの底面までの深さは0.60mである。底面は平坦だが、土坑の北西側と南東側の両壁際に深さ0.20m前後のピットが１基ずつ検出された。覆土はレンズ状堆積である。

遺物は、土師器の小破片が出土したが、図示できるものはなかった。このほかに弥生時代土器・石器が出土しており、石器は弥生時代の遺構外出土遺物として記載した。

（4）SK004（第41図、図版８）

10C-06・07に位置する。長軸方向はN-75°-Wで、長軸長3.59m（推定値）、短軸長2.36mの楕円形を呈している。確認面から底面までの深さは0.12mで、非常に浅い。南西から北東に向かって傾斜している。東側と南西側にピットがあり、底面からの深さはP1が0.45m、P2が0.30mである。削平・攪乱を受けているとみられ、覆土の遺存状況は良くない。遺存する覆土を観察する限り、上下2層に分かれ、乱れていないことから、自然堆積によるものである可能性が高いだろう。

遺物は、土器１点を図示することができた。１は土師器甕とみられる頸部破片である。頸部に指頭押圧が残る粘土紐がみられ、（１）SI006の27や28などと同様のタイプと考えられる。薄手である。このほかにも、土師器の小破片が少量出土している。

土器の特徴から、古墳時代中期の遺構と考えられる。

（5）SK002（第41図、図版８）

10C-79に位置し、径0.90mの正円形を呈する。確認面から底面までの深さは0.25mで、覆土は暗褐色土と褐色土の上下２層に分かれる。

遺物は図示できるものはなかったが、土師器が出土した（５）SK003・005と近接し、同様の規模・形態であるため、古墳時代の土坑と判断した。

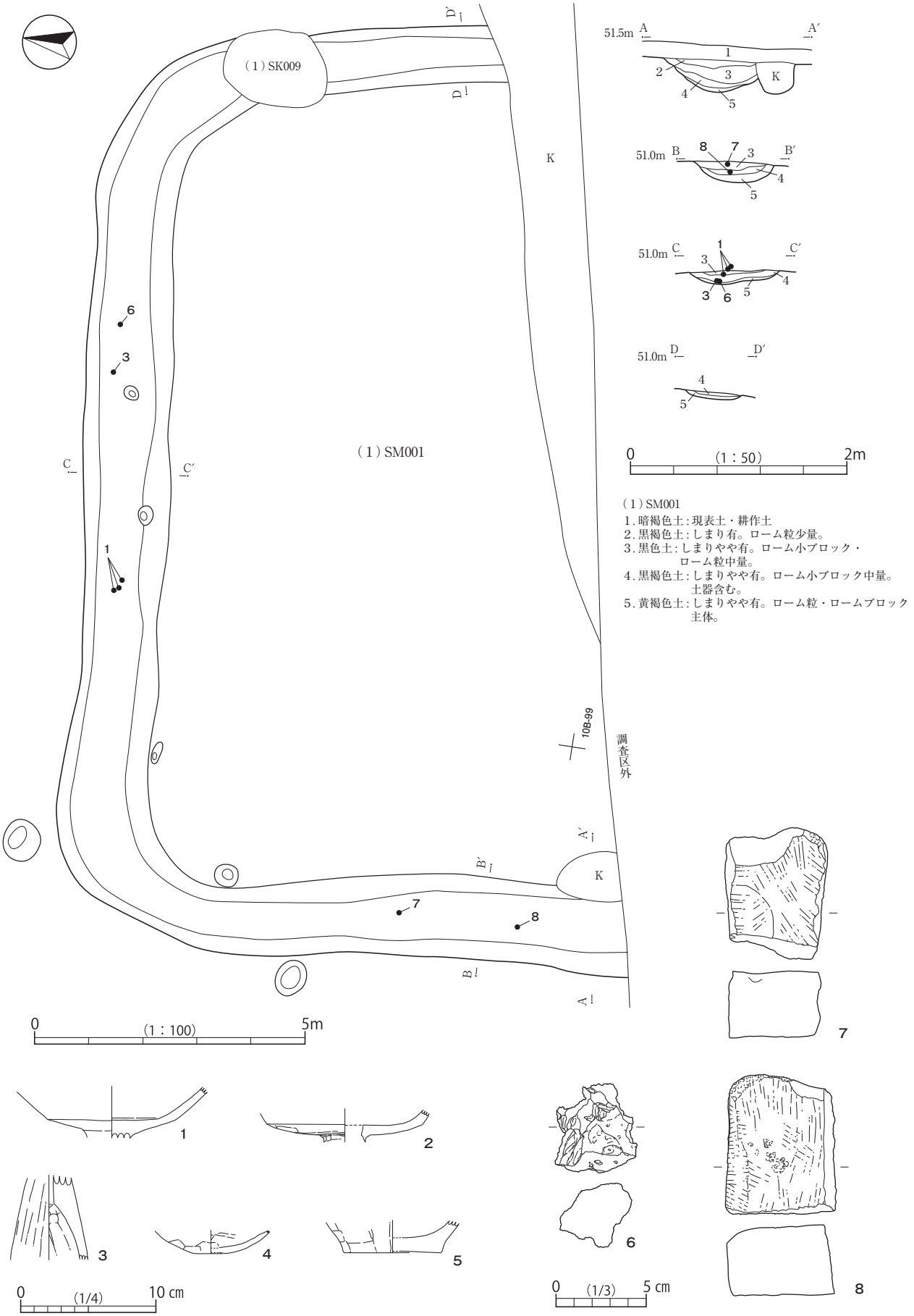
（5）SK003（第41図、図版８）

10C-79に位置し、径0.90mの正円形を呈する。確認面から底面までの深さは0.17mで、覆土は黒褐色の単一土層である。

遺物は図示できるものはなかったが、出土した土師器から、古墳時代の土坑と判断した。

（5）SK004（第41図、図版８）

10C-79・89に位置し、径0.90mの正円形を呈する。確認面から底面までの深さは0.44mである。人為的な埋め戻しの可能性がある。



(1)SM001
1.暗褐色土:現表土・耕作土
2.黒褐色土:しまり有。ローム粒少量。
3.黒色土:しまりやや有。ローム小ブロック・ローム粒中量。
4.黒褐色土:しまりやや有。ローム小ブロック中量。土器含む。
5.黄褐色土:しまりやや有。ローム粒・ロームブロック主体。

第42図　(1)SM001

遺物は図示できるものはなかったが、土師器が出土した（５）SK003・005と近接し、同様の規模・形態であるため、古墳時代の土坑と判断した。

（５）SK005（第41図、図版８）

10C-79に位置し、径0.80mの正円形を呈する。確認面から底面までの深さは0.33mである。覆土は、遺構壁際の崩落土とみられる黄褐色土と、その上位にある暗褐色土からなる。

図示できる遺物はなかったが、わずかに出土した土師器から古墳時代の土坑と判断した。

３　古墳

（１）SM001（第42図、図版８・９・22・26）

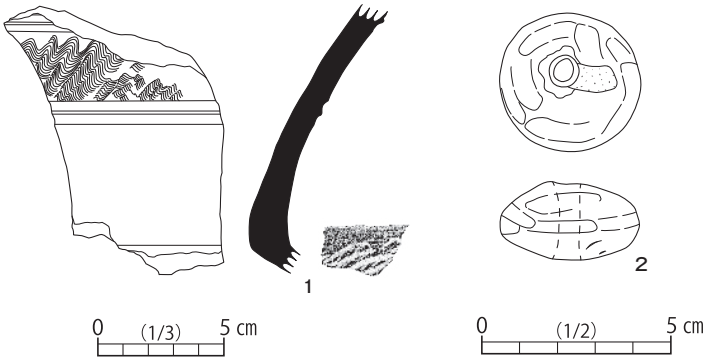
10B-68 ～ 10C-82に位置する。攪乱や調査区外となるために周溝の南側が検出できていないが、方形にめぐる溝状遺構であり、方墳の周溝とみられる。墳丘は削平を受けており遺存しておらず、埋葬施設も検出されなかった。周溝を含めた全長は17.2mを測る。周溝の幅は1.00m ～ 1.75m、確認面から底面までの深さは0.12m ～ 0.60mである。東側が西側に比べて浅く、溝の幅が小さいのは、上部が削平されて周溝の下部しか遺存していないためであろう。覆土はレンズ状堆積であり、自然堆積によるものと考えられる。本遺構に伴う可能性は低いが、６基のピットを検出した。確認面からの深さは東側のピットから順に、0.26m、0.34m、0.59m、0.40m、0.22m、0.07mである。最も西側のピットは覆土に焼土を含んでいたようである。

遺物は、土師器５点をはじめとする８点を図示することができた。全て周溝から出土した遺物である。１・２は高杯である。ともに杯部のみが遺存する。１は体部下端で屈曲し、口縁部に向かって直線的に開く器形である。内外面ともに凹凸のある器面で、最低限のナデをしたのみで調整が粗雑である。焼成はやや不良で、軟質である。２の杯部の底径は大きく、体部は外に広がる器形とみられる。焼成はやや不良で、軟質である。全体をナデで調整する。３は器台の脚柱部である。エンタシス状の脚部とみられ、輪積み痕を丁寧に消している。焼成はやや不良で、軟質である。４は坩とみられる底部片である。体部はほとんど遺存しないため、器形はわからない。平底である。全体に薄手で、軟質である。５は甕とみられる底部片である。やや突出する底部と考えられる。焼成がやや不良なため、内側の器面はひび割れている。６はスラグである。７・８は砂岩製の砥石である。割れた後に再加工されたとみられる磨痕が、７は下面に、８は左側面・下面に確認できる。８の上面は非常によく磨られている。

土器の特徴から、古墳時代中期初頭の遺構と考えられる。

４　遺構外出土の遺物（第43図、図版22）

１は須恵器甕の口縁部～頸部破片である。２本の太い沈線が口縁部上部と中位の２段にめぐるとみられ、これら沈線に挟まれた部分に櫛描き波状文が施される。わずかに遺存する頸部下端の内面には叩き痕が残る。胎土には白い砂粒が目立つ。２は土玉である。押しつぶされたような扁平な形をしている。片側穿孔である。全体的に丁寧にナデ調整される。



第43図　遺構外出土の遺物

第13表　古墳時代土器観察表

（　　）推定値　　<　　>現存値

遺構	挿図番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
（1） SI005	第25図 -1	土師器	高杯	口径　－ 底径　－ 器高　<3.2>	30%	砂粒	内面　にぶい褐色（7.5YR5/4） 外面　にぶい赤褐色（5YR5/4） 焼成　良好	内面　ナデ ミガキ 外面　ナデ ヘラ削り	
（1） SI005	第25図 -2	土師器	高杯	口径　－ 底径　－ 器高　<9.2>	脚部95%	白色砂粒	内面　にぶい褐色（7.5YR5/4） 外面　にぶい橙色（7.5YR6/4） 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ ミガキ	
（1） SI005	第25図 -3	土師器	坩	口径　－ 底径　3.2 器高　<6.1>	55%	石英・砂粒	内面　黄褐色（10YR5/6） 外面　にぶい黄橙色（10YR6/4） 焼成　良好	内面　ヘラナデ 外面　ナデ ヘラ削り ミガキ	
（1） SI005	第25図 -4	土師器	壺	口径　－ 底径　3.4 器高　<16.6>	90%	砂粒・雲母	内面　にぶい橙色（7.5YR6/4） 外面　にぶい赤褐色（5YR5/4） 焼成　良好	内面　ハケ ヘラナデ 外面　ハケ ヘラ削り ミガキ	
（1） SI005	第25図 -5	土師器	壺	口径　（14.4） 底径　－ 器高　<32.2>	60%	白色針状物・砂粒・雲母	内面　明赤褐色（5YR5/6） 外面　橙色（5YR6/6） 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ ミガキ 外面　ナデ ヘラ削り ミガキ	
（1） SI005	第25図 -6	土師器	甕	口径　（19.2） 底径　－ 器高　<25.6>	口縁部～胴部下位55%	白色針状物・砂粒・雲母	内面　橙色（7.5YR6/6） 外面　にぶい黄橙色（10YR6/4） 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ 外面　ナデ ヘラ削り ミガキ	内外面すす付着
（1） SI006	第27図 -1	土師器	杯	口径　（14.4） 底径　－ 器高　<5.3>	40%	砂粒・雲母	内面　赤褐色（5YR4/6） 外面　明赤褐色（5YR5/6） 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ ヘラ削り ミガキ	内外面赤彩
（1） SI006	第27図 -2	土師器	杯	口径　14.8 底径　－ 器高　5.9	80%	砂粒・雲母	内面　赤褐色（5YR4/6） 外面　明赤褐色（5YR5/6） 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ ヘラ削り ミガキ	内外面赤彩
（1） SI006	第27図 -3	土師器	高杯	口径　16.1 底径　12.0 器高　13.4	95%	砂粒	内面　明赤褐色（5YR5/6） 外面　明赤褐色（25YR5/6） 焼成　良好	内面　ナデ ミガキ 外面　ナデ ミガキ	内外面赤彩
（1） SI006	第27図 -4	土師器	高杯	口径　14.0 底径　（10.4） 器高　12.2	95%	砂粒・雲母	内面　にぶい赤褐色（7.5YR5/4） 外面　橙色（5YR6/8） 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ ヘラ削り ヘラナデ	
（1） SI006	第27図 -5	土師器	高杯	口径　－ 底径　－ 器高　<10.7>	65%	砂粒・雲母	内面　にぶい褐色（7.5YR5/3） 外面　明赤褐色（25YR5/6） 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ 外面　ナデ ヘラ削り ミガキ	内外面赤彩
（1） SI006	第27図 -6	土師器	高杯	口径　15.7 底径　－ 器高　<5.3>	杯部80%	砂粒	内面　明褐色（7.5YR5/6） 外面　橙色（5YR6/6） 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ 外面　ナデ ヘラ削り	
（1） SI006	第27図 -7	土師器	高杯	口径　14.0 底径　－ 器高　<4.7>	杯部85%	砂粒	内面　橙色（7.5YR6/6） 外面　橙色（7.5YR6/6） 焼成　良好	内面　ナデ ミガキ 外面　ナデ ヘラ削り ミガキ	
（1） SI006	第27図 -8	土師器	高杯	口径　－ 底径　（12.7） 器高　5.7	脚部70%	砂粒・雲母	内面　橙色（7.5YR6/6） 外面　橙色（7.5YR6/6） 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ 外面　ナデ ヘラ削り ミガキ	
（1） SI006	第27図 -9	土師器	高杯	口径　－ 底径　－ 器高　（10.0）	脚部90%	砂粒	内面　明黄褐色（10YR6/6） 外面　橙色（7.5YR6/6） 焼成　良好	内面　ナデ ヘラ削り 外面　ナデ ヘラ削り ミガキ	
（1） SI006	第27図 -10	土師器	高杯	口径　－ 底径　12.8 器高　<10.3>	脚部70%	砂粒	内面　明褐色（7.5YR5/6） 外面　橙色（7.5YR6/6） 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ 外面　ナデ ヘラ削り	
（1） SI006	第27図 -11	土師器	高杯	口径　－ 底径　（12.8） 器高　<6.0>	脚部70%		内面　明黄褐色（10YR6/6） 外面　明黄褐色（10YR6/6） 焼成　良好	内面　ナデ ヘラ削り 外面　ナデ	外面赤彩、羽口転用
（1） SI006	第27図 -12	土師器	坩	口径　9.2 底径　－ 器高　8.9	100%	砂粒	内面　明赤褐色（25YR5/8） 外面　明赤褐色（25YR5/8） 焼成　良好	内面　ナデ ミガキ 外面　ナデ ミガキ	内面口縁部赤彩
（1） SI006	第27図 -13	土師器	坩	口径　－ 底径　2.6 器高　<9.6>	80%	砂粒	内面　にぶい黄橙色（10YR6/4） 外面　にぶい黄橙色（10YR6/4） 焼成　良好	内面　ナデ ミガキ 外面　ナデ ヘラナデ ミガキ	
（1） SI006	第27図 -14	土師器	坩	口径　8.6 底径　2.6 器高　8.3	100%	砂粒	内面　明褐色（7.5YR5/6） 外面　橙色（7.5YR6/6） 焼成　良好	内面　ナデ ミガキ 外面　ナデ ヘラ削り ミガキ	
（1） SI006	第27図 -15	土師器	坩	口径　－ 底径　（2.6） 器高　<4.8>	体部40%	砂粒	内面　にぶい褐色（7.5YR5/4） 外面　灰黄褐色（10YR4/2） 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ ハケ	
（1） SI006	第28図 -16	土師器	坩	口径　－ 底径　4.6 器高　<5.5>	体部45%	砂粒	内面　にぶい黄橙色（10YR5/3） 外面　にぶい赤褐色（5YR5/4） 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ ヘラ削り ミガキ	
（1） SI006	第28図 -17	土師器	鉢	口径　12.7 底径　2.4 器高　7.9	95%	砂粒	内面　橙色（5YR6/8） 外面　橙色（5YR6/8） 焼成　良好	内面　ナデ ミガキ 外面　ナデ ヘラ削り	内面に黒斑
（1） SI006	第28図 -18	土師器	鉢	口径　（9.4） 底径　－ 器高　7.4	55%	砂粒	内面　橙色（7.5YR6/6） 外面　橙色（7.5YR6/6） 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ ヘラ削り ミガキ	
（1） SI006	第28図 -19	土師器	壺	口径　（11.1） 底径　－ 器高　<3.8>	口縁部90%	砂粒	内面　明赤褐色（5YR5/6） 外面　明赤褐色（5YR5/6） 焼成　良好	内面　ナデ ミガキ 外面　ナデ ヘラナデ ミガキ	
（1） SI006	第28図 -20	土師器	壺	口径　12.2 底径　4.8 器高　19.1	90%	砂粒・雲母	内面　褐灰色（7.5YR5/1） 外面　にぶい橙色（7.5YR6/6） 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ 外面　ナデ ヘラ削り ミガキ	頸部に粘土紐
（1） SI006	第28図 -21	土師器	壺	口径　－ 底径　8.6 器高　<28.6>	胴部45%	砂粒・雲母	内面　にぶい黄橙色（10YR6/4） 外面　にぶい黄橙色（10YR6/4） 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ 外面　ナデ ヘラナデ ミガキ	
（1） SI006	第28図 -22	土師器	甕	口径　－ 底径　6.4 器高　<4.4>	底部100%	砂粒	内面　にぶい黄褐色（10YR4/3） 外面　にぶい褐色（7.5YR5/3） 焼成　やや不良	内面　ヘラナデ 外面　ナデ ヘラ削り	
（1） SI006	第28図 -23	土師器	甕	口径　－ 底径　7.2 器高　<5.7>	底部90%	砂粒・雲母	内面　にぶい褐色（7.5YR5/4） 外面　褐灰色（7.5YR4/2） 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ 外面　ナデ ヘラ削り	底部に焼成後の穿孔
（1） SI006	第28図 -24	土師器	甕	口径　14.0 底径　－ 器高　<12.8>	85%	微砂粒	内面　にぶい黄橙色（10YR6/4） 外面　にぶい橙色（7.5YR6/4） 焼成　良好	内面　ヘラナデ ミガキ 外面　ナデ ヘラ削り	
（1） SI006	第28図 -25	土師器	甕	口径　16.2 底径　5.6 器高　22.6	95%	微砂粒	内面　明黄褐色（10YR6/6） 外面　橙色（7.5YR6/6） 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ ミガキ 外面　ナデ ヘラ削り ミガキ	
（1） SI006	第28図 -26	土師器	甕	口径　19.7 底径　－ 器高　<5.8>	口縁部100%	砂粒・雲母	内面　にぶい橙色（7.5YR7/4） 外面　にぶい橙色（7.5YR7/4） 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ 外面　ナデ	
（1） SI006	第28図 -27	土師器	甕	口径　20.2 底径　－ 器高　4.5	口縁部100%	砂粒	内面　明褐色（7.5YR5/6） 外面　にぶい黄褐色（10YR5/4） 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ ミガキ 外面　ナデ	頸部に粘土紐
（1） SI006	第28図 -28	土師器	甕	口径　（16.5） 底径　－ 器高　<10.1>	口縁部～胴部上位20%	砂粒	内面　明褐色（7.5YR5/6） 外面　明赤褐色（5YR5/6） 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ	頸部に粘土紐
（1） SI007	第30図 -1	土師器	杯	口径　（12.6） 底径　－ 器高　<4.4>	25%	微砂粒・雲母	内面　にぶい黄褐色（10YR5/4） 外面　明黄褐色（10YR6/4） 焼成　良好	内面　ナデ ミガキ 外面　ナデ ヘラ削り ミガキ	
（1） SI007	第30図 -2	土師器	杯	口径　（11.2） 底径　－ 器高　<3.5>	15%	砂粒・雲母	内面　にぶい黄橙色（10YR6/4） 外面　橙色（7.5YR6/6） 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ ヘラ削り ミガキ	

（　）推定値　＜　＞現存値

遺構	挿図番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
（1） SI007	第30図 -3	土師器	杯	口径　(15.4) 底径　－ 器高　<3.2>	20%	砂粒	内面　にぶい褐色 (7.5YR5/3) 外面　にぶい褐色 (7.5YR5/3) 焼成　良好	内面　ナデ ミガキ 外面　ナデ ヘラ削り ミガキ	内外面黒色処理
（1） SI007	第30図 -4	土師器	椀	口径　(13.6) 底径　－ 器高　<5.0>	25%	微砂粒	内面　橙色 (5YR6/6) 外面　橙色 (5YR6/6) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ　ヘラ削り	
（1） SI007	第30図 -5	土師器	椀	口径　－ 底径　(2.8) 器高　<2.9>	50%	砂粒	内面　橙色 (2.5YR6/6) 外面　にぶい黄橙色 (10YR7/4) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ ヘラ削り	外面赤彩
（1） SI007	第30図 -6	土師器	甕	口径　14.8 底径　8.2 器高　10.8	100%	砂粒	内面　灰褐色 (7.5YR5/2) 外面　にぶい褐色 (7.5YR5/3) 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ 外面　ハケ ヘラ削り	
（1） SI007	第30図 -7	土師器	甕	口径　16.0 底径　－ 器高　<3.4>	口縁部40%	砂粒	内面　にぶい褐色 (7.5YR5/4) 外面　にぶい褐色 (7.5YR5/4) 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ 外面　ナデ ヘラ削り ミガキ	
（1） SI007	第30図 -8	土師器	甕	口径　(22.2) 底径　－ 器高　<5.1>	口縁部30%	雲母・砂粒	内面　にぶい橙色 (7.5YR6/4) 外面　にぶい橙色 (7.5YR6/4) 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ 外面　ナデ ヘラナデ	
（1） SI007	第30図 -9	土師器	甕	口径　－ 底径　(6.0) 器高　<2.6>	底部100%	微砂粒	内面　にぶい橙色 (5YR6/4) 外面　にぶい橙色 (5YR6/4) 焼成　良好	内面　ヘラナデ 外面　ヘラ削り	
（1） SI007	第30図 -10	土師器	甕	口径　(25.0) 底径　－ 器高　<13.2>	15%	砂粒	内面　にぶい黄橙色 (10YR7/4) 外面　にぶい橙色 (7.5YR6/4) 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ 外面　ナデ ヘラ削り	
（1） SI007	第30図 -11	土師器	甑	口径　－ 底径　－ 器高　<5.4>	－	砂粒	内面　橙色 (7.5YR6/6) 外面　橙色 (7.5YR6/6) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ	甑の把手
（1） SI008	第31図 -1	土師器	椀	口径　(16.0) 底径　－ 器高　<5.5>	30%	砂粒	内面　にぶい褐色 (7.5YR5/4) 外面　にぶい褐色 (7.5YR5/4) 焼成　良好	内面　ナデ ミガキ 外面　ナデ ヘラ削り ミガキ	
（1） SI008	第31図 -2	土師器	椀	口径　－ 底径　(9.4) 器高　<2.9>	25%	砂粒・赤褐色スコリア	内面　橙色 (5YR6/6) 外面　橙色 (5YR6/6) 焼成　良好	内面　ナデ ミガキ 外面　ヘラ削り ミガキ	
（1） SI008	第31図 -3	土師器	高杯	口径　－ 底径　－ 器高　<8.4>	脚部80%	砂粒	内面　橙色 (7.5YR7/6) 外面　橙色 (7.5YR7/6) 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ 外面　ナデ ヘラ削り	
（1） SI008	第31図 -4	土師器	甕	口径　(13.3) 底径　－ 器高　<10.0>	40%	砂粒	内面　にぶい褐色 (7.5YR5/4) 外面　明赤褐色 (2.5YR5/6) 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ 外面　ナデ ヘラ削り ミガキ	
（1） SI008	第31図 -5	土師器	甕	口径　－ 底径　(9.0) 器高　<6.0>	底部60%	砂粒	内面　明赤褐色 (2.5YR5/6) 外面　明赤褐色 (2.5YR5/6) 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ 外面　ナデ ヘラナデ	
（1） SI008	第31図 -6	土師器	甕	口径　－ 底径　(7.6) 器高　<3.3>	底部30%	砂粒	内面　灰黄褐色 (10YR4/2) 外面　にぶい赤褐色 (5YR4/3) 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ 外面　ナデ ヘラ削り	
（1） SI008	第31図 -7	土師器	甕	口径　－ 底径　(7.0) 器高　<17.5>	60%	砂粒	内面　褐色 (7.5YR4/6) 外面　明赤褐色 (5YR5/6) 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ 外面　ナデ ヘラ削り	
（1） SI009	第32図 -1	土師器	杯	口径　(12.1) 底径　－ 器高　<5.0>	45%	微砂粒	内面　赤褐色 (2.5YR4/6) 外面　明赤褐色 (2.5YR5/6) 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ ミガキ 外面　ナデ ヘラ削り ミガキ	内外面赤彩
（1） SI009	第32図 -2	土師器	杯	口径　(12.9) 底径　－ 器高　<3.4>	15%	砂粒	内面　にぶい赤褐色 (5YR5/4) 外面　明赤褐色 (2.5YR5/6) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ ヘラ削り	内外面赤彩
（1） SI009	第32図 -3	土師器	杯	口径　(14.3) 底径　－ 器高　<3.4>	25%	白色針状物	内面　にぶい黄褐色 (10YR5/3) 外面　橙色 (5YR6/6) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ ヘラ削り	
（1） SI009	第32図 -4	土師器	杯	口径　(12.6) 底径　－ 器高　<3.6>	30%	砂粒	内面　にぶい橙色 (7.5YR6/4) 外面　にぶい橙色 (7.5YR7/4) 焼成　良好	内面　ナデ ミガキ 外面　ナデ ヘラ削り ミガキ	
（1） SI009	第32図 -5	土師器	高杯	口径　(17.0) 底径　－ 器高　<5.8>	杯部40%	砂粒	内面　橙色 (7.5YR6/6) 外面　明赤褐色 (5YR5/6) 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ ミガキ 外面　ナデ ヘラナデ ミガキ	
（1） SI009	第32図 -6	土師器	坩	口径　(11.0) 底径　－ 器高　<8.9>	60%	砂粒・雲母	内面　橙色 (2.5YR6/8) 外面　橙色 (2.5YR6/8) 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ 外面　ナデ ヘラ削り ミガキ	
（1） SI009	第32図 -7	土師器	甕	口径　6.4 底径　3.0 器高　6.4	95%	砂粒・雲母	内面　明赤褐色 (5YR5/6) 外面　明赤褐色 (5YR5/6) 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ 外面　ナデ ヘラ削り ミガキ	ミニチュア
（1） SI009	第32図 -8	土師器	甕	口径　(21.2) 底径　－ 器高　<5.6>	15%	砂粒	内面　橙色 (2.5YR6/8) 外面　橙色 (5YR6/6) 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ 外面　ナデ ヘラナデ	
（1） SI009	第32図 -9	土師器	甕	口径　(19.0) 底径　－ 器高　<10.6>	40%	砂粒・礫・雲母	内面　にぶい赤褐色 (5YR5/4) 外面　にぶい橙色 (7.5YR6/4) 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ 外面　ナデ ヘラナデ	
（2） SI013・014	第34図 -1	土師器	杯	口径　－ 底径　3.4 器高　<2.1>	底部70%	砂粒	内面　橙色 (7.5YR6/6) 外面　橙色 (7.5YR6/6) 焼成　良好	内面　ヘラナデ 外面　ナデ ヘラ削り	
（2） SI013・014	第34図 -2	土師器	高杯	口径　－ 底径　－ 器高　<3.1>	15%	砂粒	内面　赤褐色 (2.5YR4/6) 外面　にぶい赤褐色 (2.5YR4/4) 焼成　良好	内面　ナデ ミガキ 外面　ナデ ミガキ	内外面赤彩
（2） SI013・014	第34図 -3	土師器	高杯	口径　－ 底径　－ 器高　<7.1>	脚部60%	砂粒	内面　にぶい黄橙色 (10YR6/4) 外面　赤褐色 (2.5YR4/6) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ ミガキ	外面赤彩
（2） SI013・014	第34図 -4	土師器	甕	口径　(18.0) 底径　－ 器高　<5.4>	口縁部25%	砂粒	内面　明赤褐色 (2.5YR5/6) 外面　明赤褐色 (2.5YR5/6) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ ヘラナデ	胎土自体赤く発色する
（2） SI015	第35図 -1	土師器	杯	口径　14.0 底径　－ 器高　3.9	60%	砂粒	内面　にぶい黄橙色 (10YR7/4) 外面　にぶい橙色 (7.5YR6/4) 焼成　良好	内面　ナデ ミガキ 外面　ナデ ヘラ削り ミガキ	
（2） SI015	第35図 -2	土師器	甕	口径　－ 底径　7.0 器高　<2.2>	底部50%	砂粒・白色針状物	内面　にぶい黄橙色 (10YR7/4) 外面　にぶい黄橙色 (10YR6/4) 焼成　良好	内面　ヘラナデ 外面　ヘラ削り	
（4） SI001	第37図 -1	土師器	高杯	口径　(19.4) 底径　－ 器高　<6.7>	40%	白色砂粒・雲母	内面　明褐色 (7.5YR5/6) 外面　明褐色 (7.5YR5/6) 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ ミガキ 外面　ナデ ヘラ削り ミガキ	
（4） SI001	第37図 -2	土師器	高杯	口径　(16.0) 底径　－ 器高　<5.0>	45%	白色砂粒・雲母・石英・長石	内面　明赤褐色 (5YR5/6) 外面　明赤褐色 (5YR5/6) 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ ミガキ 外面　ナデ ヘラナデ ミガキ	
（4） SI001	第37図 -3	土師器	高杯	口径　14.2 底径　－ 器高　<4.5>	40%	白色砂粒・赤色砂粒・雲母	内面　橙色 (7.5YR6/6) 外面　橙色 (7.5YR6/6) 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ ミガキ 外面　ナデ ヘラ削り ミガキ	
（4） SI001	第37図 -4	土師器	高杯	口径　(16.9) 底径　－ 器高　<5.7>	25%	白色砂粒・雲母	内面　橙色 (7.5YR6/6) 外面　橙色 (7.5YR6/6) 焼成　良好	内面　ナデ ヘラ削り ミガキ 外面　ナデ ヘラ削り ミガキ	
（4） SI001	第37図 -5	土師器	高杯	口径　(14.1) 底径　－ 器高　<5.8>	40%	砂粒・雲母・石英・長石	内面　橙色 (7.5YR6/6) 外面　橙色 (7.5YR6/6) 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ ミガキ 外面　ナデ ヘラ削り ヘラナデ ミガキ	

（　）推定値　＜　＞現存値

遺構	挿図番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
（4）SI001	第37図-6	土師器	高杯	口径 (17.8) 底径 － 器高 <3.6>	25%	白色粒子・雲母	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り ミガキ	
（4）SI001	第37図-7	土師器	高杯	口径 － 底径 11.5 器高 9.8	45%	白色粒子・砂粒・雲母	内面 明褐色(7.5YR5/6) 外面 明褐色(7.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラナデ ミガキ	
（4）SI001	第37図-8	土師器	高杯	口径 － 底径 (10.2) 器高 <2.0>	10%	石英・長石・雲母	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ミガキ	
（4）SI001	第37図-9	土師器	高杯	口径 － 底径 － 器高 <8.7>	20%	白色粒子・雲母	内面 明赤褐色(5YR5/6) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ハケ ミガキ	
（4）SI001	第37図-10	土師器	坩	口径 － 底径 － 器高 <6.6>	30%	白色粒子・雲母・石英・長石	内面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 外面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り ミガキ	
（4）SI001	第37図-11	土師器	壺	口径 (21.7) 底径 － 器高 <5.5>	口縁部40%	砂粒	内面 にぶい黄褐色(10YR5/4) 外面 にぶい黄褐色(10YR5/4 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	
（4）SI001	第37図-12	土師器	甕	口径 (10.6) 底径 － 器高 <4.8>	10%	白色粒子	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ミガキ 外面 ナデ ミガキ	
（4）SI001	第37図-13	土師器	甕	口径 － 底径 5.2 器高 <14.5>	80%	白色粒子・雲母・石英・長石	内面 赤褐色(5YR4/6) 外面 赤褐色(5YR4/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り ミガキ	
（4）SI001	第37図-14	土師器	甕	口径 (17.0) 底径 － 器高 <20.1>	60%	白色粒子・雲母	内面 明赤褐色(5YR5/6) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラナデ ミガキ	
（4）SI003	第38図-1	土師器	高杯	口径 － 底径 － 器高 <6.6>	20%	白色粒子・雲母	内面 橙色(5YR6/6) 外面 橙色(5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ミガキ	
（4）SI003	第38図-2	土師器	壺	口径 (14.0) 底径 － 器高 <15.4>	40%	白色粒子・雲母	内面 褐色(7.5YR4/3) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/3) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り ヘラナデ ミガキ	
（4）SI003	第38図-3	土師器	壺	口径 (14.6) 底径 － 器高 <3.6>	5%	砂粒	内面 明赤褐色(5YR5/6) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
（4）SI003	第38図-4	土師器	壺	口径 (15.3) 底径 － 器高 <6.6>	10%	砂粒・雲母	内面 にぶい黄橙色(10YR6/6) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ハケ 外面 ナデ ヘラナデ	
（4）SI003	第38図-5	土師器	甕	口径 (20.7) 底径 － 器高 <5.4>	10%	白色粒子・雲母	内面 橙色(5YR6/6) 外面 橙色(5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ	
（5）SI001	第39図-1	土師器	高杯	口径 (16.4) 底径 － 器高 <4.6>	40%	白色粒子	内面 橙色(5YR6/6) 外面 橙色(5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ハケ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り ミガキ	
（5）SI001	第39図-2	土師器	甕	口径 (13.8) 底径 － 器高 <3.1>	5%	白色粒子・雲母	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ ハケ 外面 ナデ ヘラナデ ハケ	
（5）SI001	第39図-3	土師器	甕	口径 － 底径 (6.0) 器高 <8.4>	10%	白色粒子・雲母	内面 褐色(7.5YR4/6) 外面 にぶい赤褐色(5YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ ハケ	
（4）SK004	第41図-1	土師器	甕	口径 － 底径 － 器高 －	5%	砂粒	内面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラ削り 外面 ナデ ヘラ削り	頸部に粘土紐
（1）SM001	第42図-1	土師器	高杯	口径 － 底径 － 器高 <3.8>	杯部25%	砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面 にぶい黄橙色(10YR7/4) 焼成 やや不良	内面 不明 外面 不明	
（1）SM001	第42図-2	土師器	高杯	口径 － 底径 － 器高 <2.4>	杯部40%	砂粒・赤色スコリア	内面 橙色(5YR7/6) 外面 にぶい橙色(5YR6/4) 焼成 やや不良	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
（1）SM001	第42図-3	土師器	器台	口径 － 底径 － 器高 <6.5>	脚部40%	砂粒・スコリア・白色針状物	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 やや不良	内面 ナデ 外面 ナデ ミガキ	
（1）SM001	第42図-4	土師器	坩	口径 － 底径 (2.4) 器高 <1.7>	底部60%	砂粒・白色針状物	内面 灰黄色(2.5YR6/2) 外面 橙色(7.5YR7/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
（1）SM001	第42図-5	土師器	甕	口径 － 底径 (7.2) 器高 <2.4>	15%	砂粒・スコリア	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 にぶい褐色(7.5YR5/4) 焼成 やや不良	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
遺構外	第43図-1	須恵器	壺	口径 － 底径 － 器高 <10.7>	5%	白色砂粒	内面 灰色(5Y5/1) 外面 灰色(5Y5/1) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラナデ	外面櫛描波状文

第14表　古墳時代玉類観察表

遺構番号	挿図番号	種類	石材	法量：mm　g					備考
				最大長	最大幅	最大厚	孔径	重量	
（1）SI006	第28図-29	臼玉	滑石	4.0	4.0	2.8	1.5	0.08	
（1）SI006	第28図-30	臼玉	滑石	4.0	4.0	3.0	2.0	0.08	
（1）SI006	第28図-31	臼玉	滑石	4.2	4.0	2.8	2.0	0.08	
（1）SI006	第28図-32	勾玉	滑石	33.0	18.0	8.0	1.5	76.0	
（1）SK007	第40図-1	勾玉	琥珀	10.3	6.3	4.6	1.5	0.21	
（1）SK007	第40図-2	臼玉	滑石	5.1	4.8	3.9	1.2	0.14	
（1）SK007	第40図-3	臼玉	滑石	3.9	4.1	1.6	1.5	0.02	
（1）SK007	第40図-4	ガラス玉	－	4.3	4.7	3.9	1.7	0.09	
（1）SK007	第40図-5	ガラス玉	－	3.6	3.5	1.2	1.2	0.03	
（1）SK007	第40図-6	ガラス玉	－	3.8	3.5	2.3	1.5	0.04	
（1）SK007	第40図-7	ガラス玉	－	6.3	6.2	2.7	1.7	0.14	

第15表　古墳時代石製品観察表

＜　＞現存値

遺構番号	挿図番号	遺物番号	種類	石材	法　量：㎜　g				備　考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
(1)SI005	第26図-8	26	台石	砂岩	139.8	81.3	42.8	705.0	
(1)SI005	第26図-9	16	台石	安山岩	118.5	92.1	47.6	660.0	
(1)SI005	第26図-10	15	軽石	−	69.1	50.9	48.9	41.01	
(1)SI006	第29図-34	13	砥石	砂岩	42.2	52.0	8.0	22.91	
(1)SI006	第29図-35	8	砥石	粘板岩	133.0	57.0	28.0	182.82	
(1)SI006	第29図-36	18	軽石	−	83.0	72.8	52.2	48.96	
(1)SI006	第29図-37	7	台石	安山岩	107.2	154.0	101.1	2065.0	
(1)SI007	第30図-12	1	砥石	砂岩	＜39.6＞	＜38.3＞	16.4	23.34	
(1)SI009	第32図-11	37	砥石	砂岩	＜83.0＞	60.0	43.0	265.44	
(1)SI009	第32図-12	39	軽石	−	＜43.5＞	＜58.0＞	＜42.0＞	24.86	
(2)SI013	第34図-7	16	砥石	凝灰岩	＜85.0＞	＜90.0＞	＜68.0＞	436.2	
(2)SI013	第34図-8	3	軽石	−	108.0	72.0	56.0	77.9	
(2)SI013	第34図-9	18	軽石	−	50.0	39.0	30.0	14.4	
(4)SI001	第37図-15	68	軽石	−	82.0	44.0	38.0	18.0	
(1)SM001	第40図-7	17	砥石	砂岩	＜73.0＞	57.0	36.8	211.37	
(1)SM001	第40図-8	45	砥石	砂岩	＜77.0＞	62.0	40.0	299.53	

第16表　古墳時代土製品観察表

＜　＞現存値

遺構番号	挿図番号	種類	法　量：㎜　g					色　調	備　考
			最大長	最大幅	最大厚	孔径	重量		
(1)SI009	第32図-10	土玉	50.0	52.5	43.0	7.5	90.93	明褐色 (7.5YR 5/6)	
(2)SI013	第34図-5	土玉	＜48.0＞	＜25.0＞	43.0	8.5	32.6	明赤褐色 (5YR 5/6)	
(2)SI013	第34図-6	土玉	28.0	30.0	28.0	9.0	22.4	にぶい黄橙色 (10YR 6/4)	
(2)SD002	第43図-2	土玉	37.0	37.0	21.0	9.0	28.1	明赤褐色 (2.5YR 5/6)	

第17表　古墳時代鉄製品観察表

(　)推定値

遺構番号	挿図番号	種類	法　量：㎜　g				備　考
			最大長	最大幅	最大厚	重量	
(1)SI005	第26図-7	刀子	(17.7)	(29.2)	2.5	2.04	
(1)SI006	第29図-33	スラグ	45.0	30.0	13.0	8.43	一部ガラス化している
(1)SI008	第31図-8	スラグ	65.0	45.0	37.0	142.81	
(1)SI008	第31図-9	スラグ	57.0	41.0	22.0	41.83	
(1)SI013	第34図-10	スラグ	35.0	29.0	16.0	22.0	
(1)SI013	第34図-11	炉壁	28.9	45.8	14.5	18.7	
(1)SI014	第34図-12	スラグ	37.6	38.3	12.3	27.2	
(1)SM001	第42図-6	スラグ	49.2	45.5	35.2	98.45	

第６節　奈良・平安時代の遺構と遺物

奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡５軒、土坑14基を検出した。（２）SI012は奈良時代（７世紀末～８世紀初頭）に帰属し、そのほかの竪穴住居跡は平安時代に帰属する。

第18表　奈良・平安時代竪穴住居跡一覧表

（　　）推定値　単位：主軸・幅m　床面積㎡

遺構番号	位　置	主軸方向	主軸	幅	床面積	炉・カマド	貯蔵穴	壁溝	時　期	備　考
（1）SI004	10D-04・05・14	N－88°－W	3.90	3.92	15.29	東	北東	全周	平安	
（1）SI010	9C-59・69・9D-50・60	N－43°－E	(4.96)	(4.12)	(20.44)	北東？	不明	全周	平安	（1）SK020・030と重複
（2）SI011	9C-19・29	－	－	(3.28)	－	不明	北東	あり	平安	竪穴状遺構か
（2）SI012	9D-10・11・20・21	N－88°－E	4.00	3.60	12.96	西	なし	なし	奈良	
（4）SI002	10D-20・30	N－6°－W	4.38	3.80	16.64	北	北西	一部	平安	（4）SI003と重複
（4）SI004	10C-28・38	N－32°－E	4.20	2.80	7.78	北東	南東	全周	平安	（4）SK006と重複・隅カマド 旧（4）SK006A

第19表　奈良・平安時代土坑一覧表

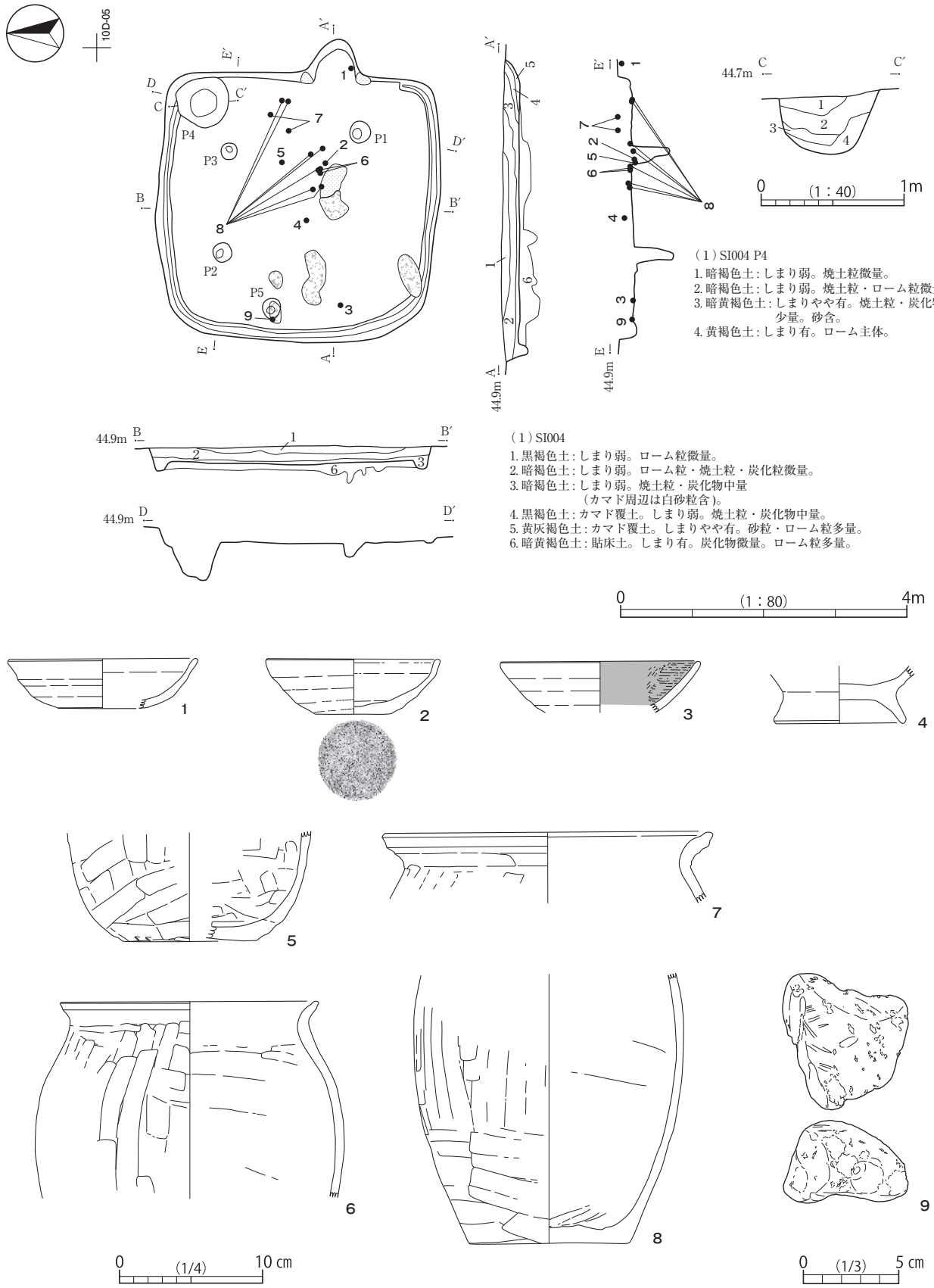
遺構番号	種　別	位　置	長(主)軸方向	計測値：m　（　）推定値			時　期	備　考
				長軸	短軸	深さ		
（1）SK009	土坑	10C－71・72	N－31°－E	1.90	1.60	0.38	平安	
（1）SK013	土坑	9D－61	－	2.60	2.60	0.60	平安	
（1）SK016	土坑	10D－14	N－71°－W	1.10	0.84	0.26	平安	
（1）SK021	土坑	9C－68・69	N－84°－E	(1.20)	0.49	0.98	平安	
（1）SK024	土坑	9D－61・71	－	1.40	1.40	0.33	平安	
（1）SK027A	土坑	9D－60	N－72°－E	1.03	0.46	0.51	平安	
（1）SK027B	土坑	9D－60	N－35°－E	1.50	1.00	0.90	平安	
（1）SK027C	土坑	9D－60	N－80°－E	1.20	1.05	0.84	平安	
（1）SK030A	土坑	9C－59	N－13°－E	1.31	1.08	1.76	奈良・平安	旧（1）SI010ピット
（1）SK030B	土坑	9C－69	N－89°－E	1.08	0.60	1.76	奈良・平安	旧（1）SI010ピット
（2）SK028	土坑	9D－50・51	－	1.95	1.95	1.09	平安	
（2）SK029	土坑	9D－01	－	1.35	1.35	0.81	奈良・平安	
（4）SK006	土坑	10C－27・28・37・38	N－14°－W	3.64	3.64	0.40	平安	旧（4）SK006B
（5）SK001	土坑	10D－60・61	－	2.00	2.00	1.40	平安	

１　竪穴住居跡

（１）SI004（第44図、図版９・26・27）

10D-04・05・14に位置する。主軸方向はN-88°-Wで、主軸長は3.90mを測る。平面形は隅丸方形である。確認面から床面までの深さは0.26mで、主柱穴はP1～P3の床面からの深さはそれぞれ、0.29m、0.57m、0.52mである。東壁でカマドが検出されたが、遺存状況は悪い。北東隅のP4は貯蔵穴とみられ、床面からの深さは0.47mである。西壁寄りに位置するP5は出入口ピットとみられ、床面からの深さは0.09mである。北壁～南壁では、周溝が検出された。住居の中央部と西側では、部分的に焼土が検出されている。覆土はレンズ状堆積であり、自然堆積によるものと考えられる。

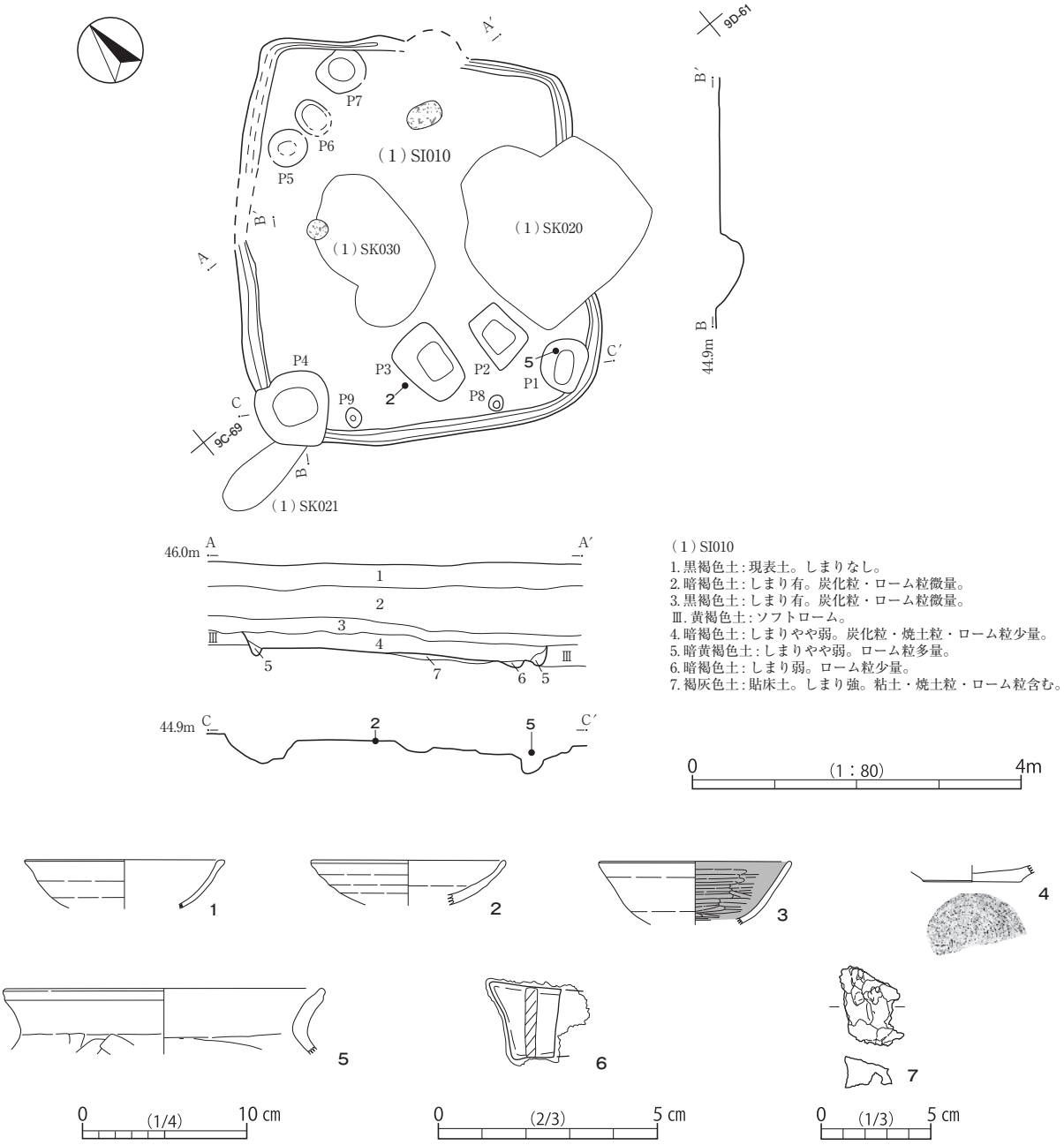
遺物は、９点を図示することができた。１～８は土師器で、１～３はロクロ成形の杯である。１はカマドから出土し、体部が内弯する器形である。胎土に混入物が少ない。２は完形である。体部で内弯し、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。平底で、底部は回転糸切り未調整である。胎土に混入物が少ない。３はわずかに内弯しながら「ハ」字形に広がる器形で、内面に細かなミガキ、黒色処理が施される。胎土に混入物が少ない。４は足高高台付きの椀とみられる。全体的に厚手である。内外面ともに丁寧なナデ調整であ



（1）SI004 P4
1. 暗褐色土：しまり弱。焼土粒微量。
2. 暗褐色土：しまり弱。焼土粒・ローム粒微量。
3. 暗黄褐色土：しまりやや有。焼土粒・炭化物少量。砂含。
4. 黄褐色土：しまり有。ローム主体。

（1）SI004
1. 黒褐色土：しまり弱。ローム粒微量。
2. 暗褐色土：しまり弱。ローム粒・焼土粒・炭化粒微量。
3. 暗褐色土：しまり弱。焼土粒・炭化物中量（カマド周辺は白砂粒含）。
4. 黒褐色土：カマド覆土。しまり弱。焼土粒・炭化物中量。
5. 黄灰褐色土：カマド覆土。しまりやや有。砂粒・ローム粒多量。
6. 暗黄褐色土：貼床土。しまり有。炭化物微量。ローム粒多量。

第44図　（1）SI004



第45図　(1)SI010

る。高台の接合部外面にススが付着している。胎土に細かな砂粒を含む。5～8は甕である。5は胴部下半～底部が遺存する。長胴形の器形とみられ、内面調整はヘラナデ、外面調整は斜位のヘラケズリである。胎土に石英等の砂粒を含む。6は口縁部～胴部中位が遺存する。胴部中位で最大径をとるとみられるが、あまり張り出さず、長胴形の器形である。頸部で弱く屈曲し、口縁部は外反し、つまみ上げたような口唇部である。口縁部内面および外面の口縁部～肩部にかけてススが付着する。外面調整は縦方向のヘラケズリである。7は口縁部～頸部が遺存する。ゆるい「く」字形に屈曲する頸部で、口縁部は外反し、つまみ上げたような口唇部である。口縁部は全体に肥厚し、内外面に横ナデの痕が明瞭に残る。胎土に雲母粒子をわずかに含み、頸部内面にススが付着する。8は胴部中位～底部が遺存する。長胴形の器形で、調整は胴

部中位までが縦方向、下半は斜め方向のヘラケズリを施す。９は軽石である。「U」字状に磨られた部分や、窪みがあることから、砥石のように使用されたとみられる。

土器の特徴から、平安時代（９世紀後半）の遺構と考えられる。

（１）SI010（第45図、図版９・27）

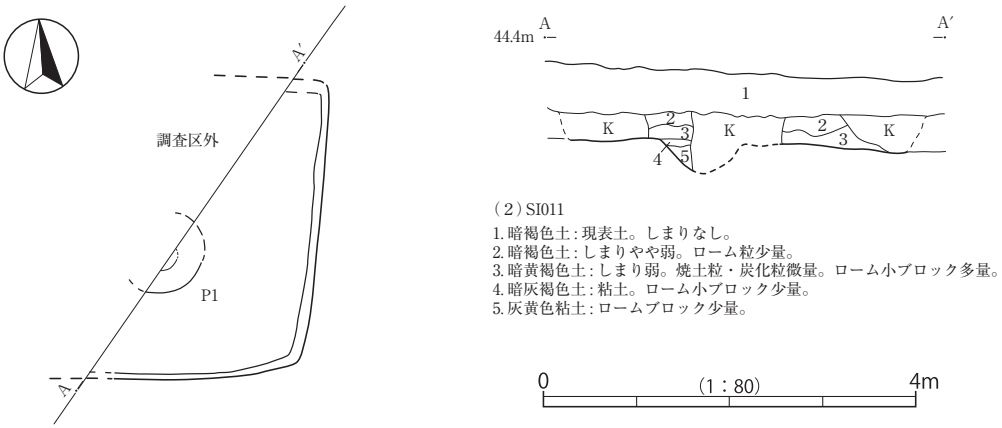
9C-59・69・9D-50・60に位置し、（１）SK020・021・030と重複する。（１）SK030との新旧関係は不明だが、（１）SK020と本遺構では、本遺構の方が古い。なお、A−A’より北側は（２）で調査をした範囲である。主軸方向はN-43°-Eと推定され、主軸長4.96m（推定）、短軸長4.12m（推定）の不整な隅丸長方形である。削平を受けており、確認面から床面までの深さは0.26mと浅い。カマドは北東壁でわずかに痕跡が認められたようである。柱穴になるようなピットはなく、規模からいえば土坑といえそうなものが９基検出された。本遺構に伴う可能性の高いものとしては、南隅のP1が挙げられる。P1は床面からの深さが0.22mで、貯蔵穴の可能性がある。P2 ～ P7の深さはそれぞれ、0.49m、0.55m、0.29m、0.11m、0.07m、0.06mである。このほかに、径の小さなピットが南西壁際に２基検出された。深さはP8が0.34m、P9が0.35mである。住居中央部の北側寄りでは焼土が検出され、周溝は全周する。

遺物は、９点を図示することができた。１～５は土師器で、１～４はロクロ成形の杯である。１・２はともにゆるやかに内弯する器形で、焼成が良く硬質である。１は全体に薄手で、口唇部が肥厚する。１・２ともに砂粒の混入が少ない。３は体部でわずかに内弯して広がる器形で、器高が深い。内面は横方向のミガキが施され、黒色処理される。４は体部が遺存しないため、器形がわからない。底面は回転糸切り未調整である。５は甕の口縁部で、つまみ上げたような口唇部である。内外面ともに部分的な剥離がみられる。口縁部の調整は内外面ともに横ナデである。６は不明鉄製品、７はスラグである。

土器の特徴から、平安時代（９世紀後半）の遺構と考えられる。

（２）SI011（第46図、図版11）

9C-19・29に位置する。炉やカマド、柱穴となりそうなピットや周溝も検出されておらず、竪穴状遺構となる可能性がある。平面形は方形ないしは長方形とみられ、南北3.04m（推定）、東西2.28mであった。確認面から床面までの深さは0.25mである。トレンチャーによる攪乱を受けており、遺存状況が悪い。なお、遺構中央部にて検出されたP1は床面からの深さが0.33mで、覆土に粘土層が確認された。この粘土層はP1の最上部の覆土で、敷き詰めたような検出状況であった。



第46図　（２）SI011

遺物はロクロ成形の土師器などが出土したが、図示できるものはなかった。土器の特徴から、平安時代の遺構と考えられる。

（2）SI012（第47図、図版11・28）

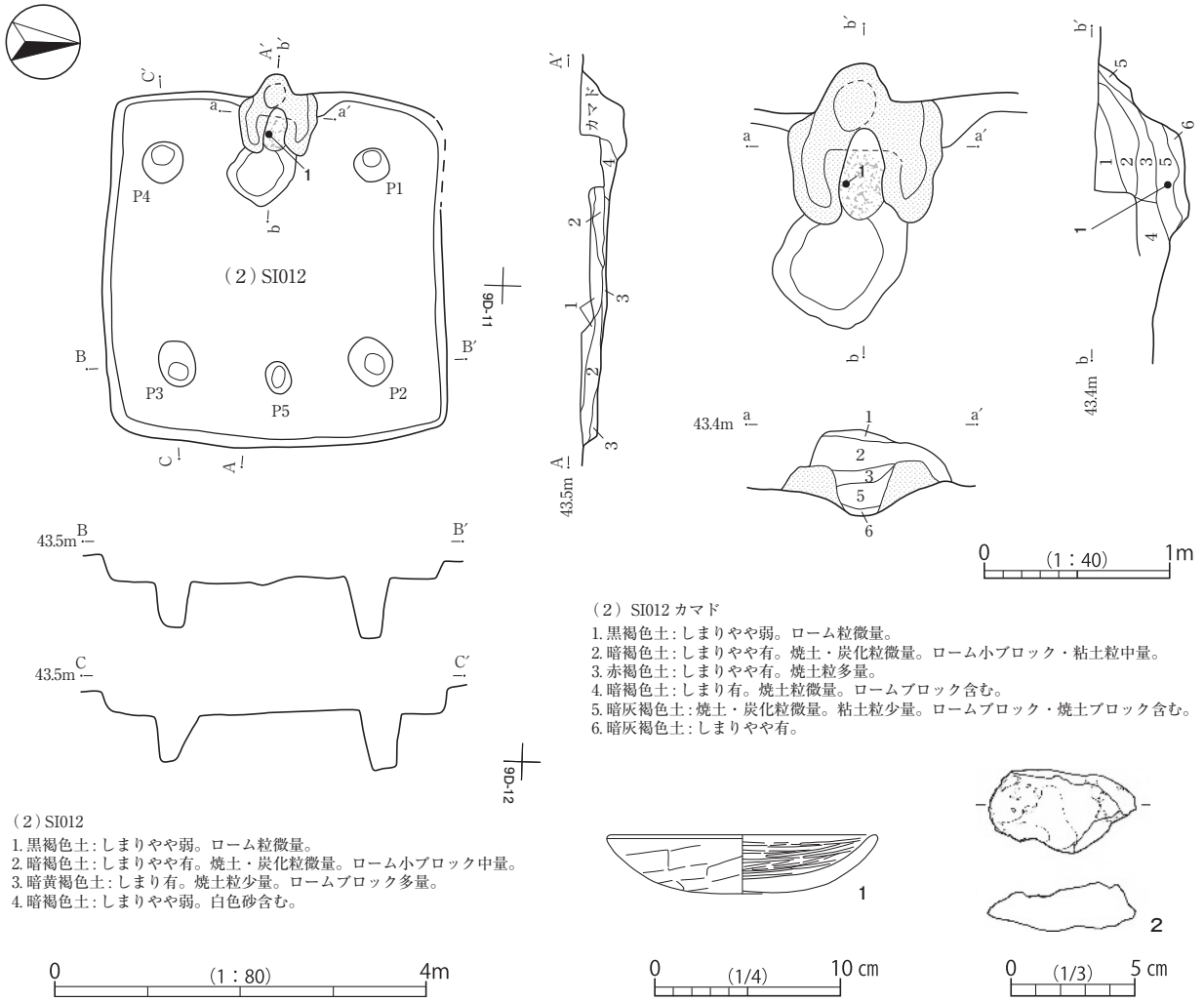
9D-10・11・20・21に位置する。主軸方向はN-88°-Eで、一辺3.60mの方形を呈する。確認面から床面までの深さは0.24mである。西壁にカマドが付帯する。主柱穴はP1～P4で、床面からの深さはそれぞれ0.81m、0.65m、0.56m、0.62mである。P5は出入口ピットとみられ、床面からの深さは0.16mである。貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は、２点を図示することができた。１は土師器の杯である。口径が大きく、器高が浅い扁平な器形である。全体に厚手である。外面はヘラケズリのちナデ、内面はミガキである。胎土に雲母粒子を含む。２はスラグである。

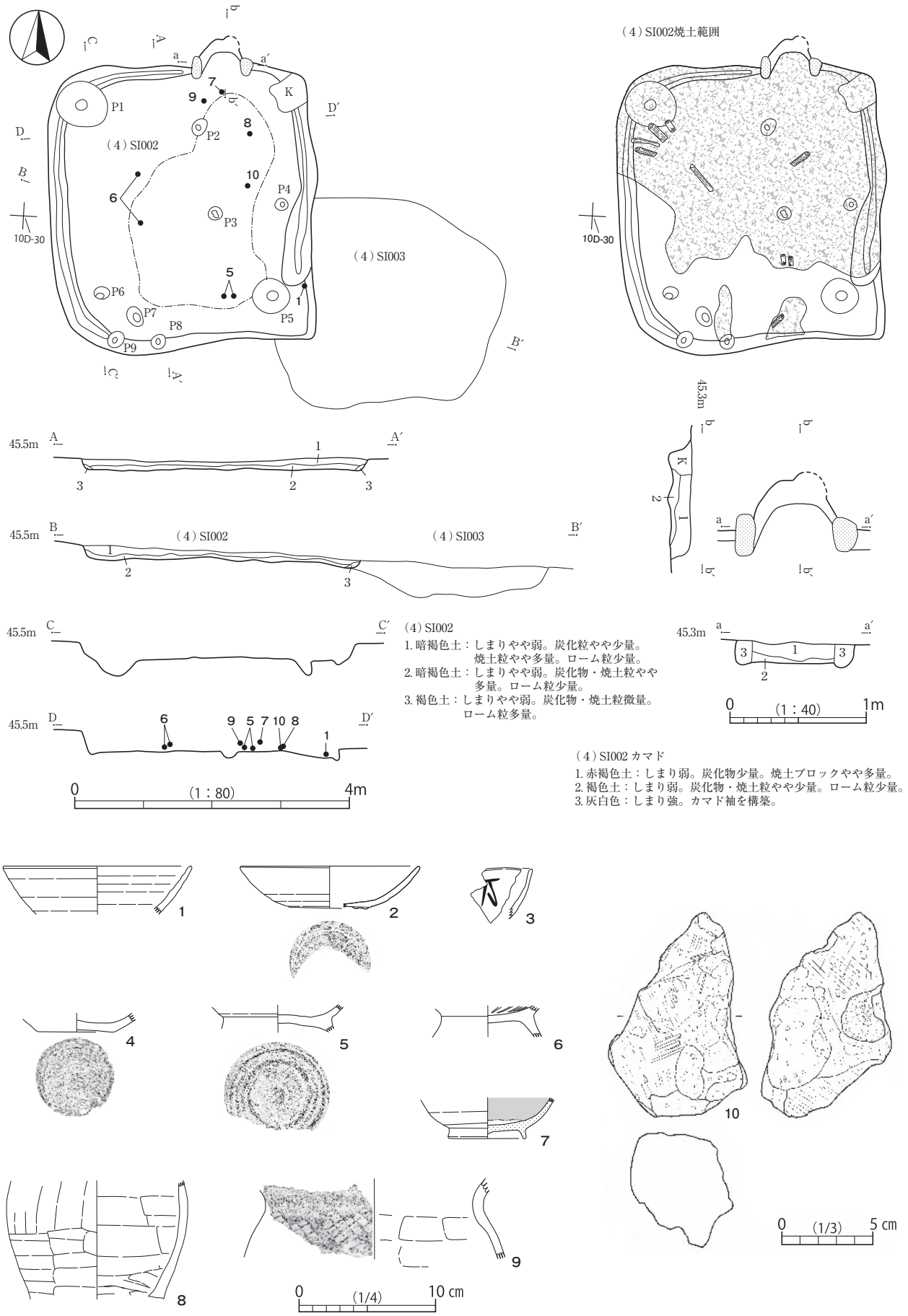
土器の特徴から、奈良時代初頭（８世紀初頭）の遺構と考えられる。

（4）SI002（第48図、図版９・26・27）

10D-20・30に位置する。主軸方向はN-６°-Wで、主軸長4.38m、短軸長3.80mの長方形を呈する。削平を受けており、確認面から床面までの深さは0.12mと浅い。カマドは北壁の東寄りで検出された。ピットは複数検出されたものの、規則的な配置ではなく、主柱穴は不明である。規模からみて柱穴となりうるピッ



第47図　（2）SI012


（4）SI002
（4）SI003
（4）SI002焼土範囲
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
K
10D-30
45.5m
45.3m
（4）SI002
1. 暗褐色土：しまりやや弱。炭化粒やや少量。焼土粒やや多量。ローム粒少量。
2. 暗褐色土：しまりやや弱。炭化物・焼土粒やや多量。ローム粒少量。
3. 褐色土：しまりやや弱。炭化物・焼土粒微量。ローム粒多量。
（4）SI002 カマド
1. 赤褐色土：しまり弱。炭化物少量。焼土ブロックやや多量。
2. 褐色土：しまり弱。炭化物・焼土粒やや少量。ローム粒少量。
3. 灰白色：しまり強。カマド袖を構築。
0 (1：80) 4m
0 (1：40) 1m
0 (1/4) 10 cm
0 (1/3) 5 cm

第48図　（4）SI002

トとしては、P2 ～ 4、6 ～ 9である。これらの床面からの深さはP2 ～ 4が0.10m ～ 0.15m、P6 ～ 9は0.19m、0.22m、0.47m、0.29m、0.44mである。P1とP5は貯蔵穴の可能性があり、深さはそれぞれ0.26m、0.19mである。南壁を除き、西壁～東壁を周溝がめぐる。覆土はレンズ状堆積とみられるが、削平で浅くなっている。住居の広範囲で焼土と炭化材が検出されており、焼失住居とみられる。

遺物は、10点を図示することができた。１～６・８・９は土師器で、１・２はロクロ成形の杯である。１は口縁部～体部の破片で、わずかに内弯する器形である。砂粒の混入が少ない。２は体部が内弯する。口径が比較的大きく、器高は浅めである。底面や体部外面には、整形時に動いた粘土が部分的に残る。３もロクロ成形の杯である。小さな口縁部片だが、外面には、「万」の墨書が確認できる。薄手で、口唇部が細長く伸びる。４もロクロ成形の杯で、底部のみ遺存する。底部中央が上がり、屈曲して体部へと続く。回転糸切り未調整である。５・６は、ロクロ成形の高台付き椀ないしは杯とみられる。５は足高高台か。５は回転ヘラ切り、６は全体をナデ調整したのちミガキを施す。７は灰釉陶器の椀で、口縁部を欠損する。低い高台が付くが、丸みを帯びた高台で稜が不鮮明である。折戸53号窯式に併行する時期か。内面には、ハケ掛けとみられる釉薬が確認できる。８は小型の甕の胴部である。長胴形とみられる。砂粒の混入が少ない。９は甕の頸部片である。頸部の屈曲は弱く、口縁部で外反する。肩部外面には格子状タタキ痕がみられ、口縁部に比べて肩部が薄手になっている。内外面ともに剥離がみられ、特に内面の剥離が激しい。10は軽石で、平らに磨られた面があり砥石のように使用されたとみられる。

土器の特徴から、平安時代（９世紀後半）の遺構と考えられる。

（４）SI004（第49図、図版10・28）

10C-28・38に位置し、（４）SK006と重複して検出された。覆土の観察から、本遺構が新しい。主軸方向N-32°-E、主軸長4.20mで、3.04m×2.56mの長方形を呈する。確認面からの深さは0.37mである。カマドは住居の北東隅で検出された。検出されたピットは少なく、規則的な配置ではない。柱穴となる可能性のあるピットはP1・2・4で、床面からの深さはそれぞれ、0.09m、0.07m、0.17mである。P3は貯蔵穴の可能性があり、床面からの深さは0.31mである。周溝が壁をめぐっている。

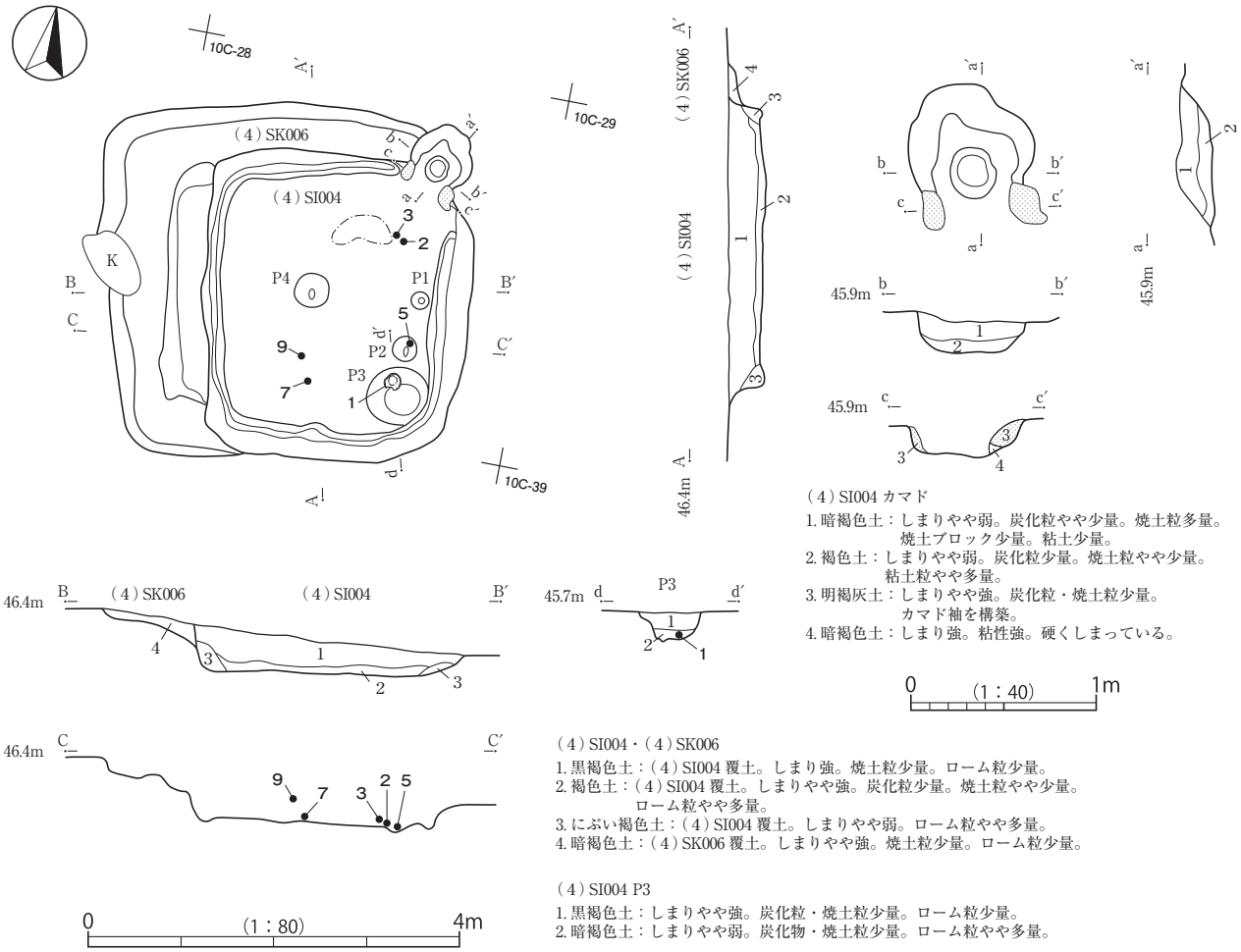
遺物は、８点を図示することができた。１～６はロクロ成形の土師器杯である。１は体部が内弯し、口縁部はわずかに外反する。底部は厚手で、手持ちヘラケズリにより調整され、丸底状を呈する。口縁部に「U」字形の欠損部が認められ、破断面の観察から人為的な打ち欠きと考えられる。胎土には雲母粒子を含む。２・３も杯で、体部は内弯気味、口縁部が外弯する器形である。４の杯は小ぶりで器高も浅い。底径と口径の差がほとんどなく、直線的な器形である。５は高台付き杯とみられる。６は杯の底部片である。外面には墨書が確認できるが、小破片のため判読できない。回転糸切り未調整である。７は須恵器甕の胴部である。外面に平行タタキ痕が残る。胎土に雲母粒子を含む。８は椀形滓である。

土器の特徴から、平安時代（10世紀初頭）の遺構と考えられる。

２　土坑

（１）SK009（第50図、図版10・26・28）

10C-71・72に位置し、長軸長1.90m、短軸長1.60mの楕円形を呈する。遺構確認面が傾斜しているため、東側が浅くみえる。床面までの深さは0.38mである。土坑の北東側と南西側に深さが約0.30mのピットが検出されたが、地面に対して垂直ではなく、土坑中央部から斜めに穿たれたようである。覆土はレンズ状



(4)SI004 カマド

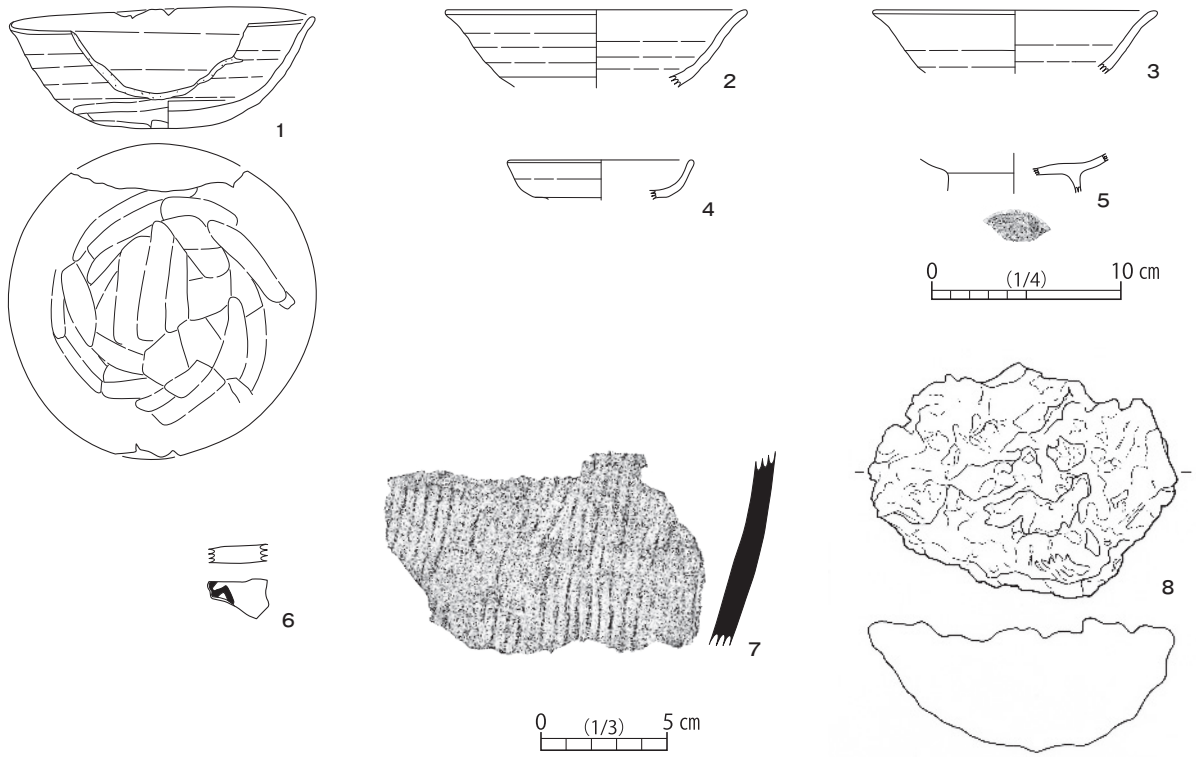
1. 暗褐色土：しまりやや弱。炭化粒やや少量。焼土粒多量。焼土ブロック少量。粘土少量。
2. 褐色土：しまりやや弱。炭化粒少量。焼土粒やや少量。粘土粒やや多量。
3. 明褐灰土：しまりやや強。炭化粒・焼土粒少量。カマド袖を構築。
4. 暗褐色土：しまり強。粘性強。硬くしまっている。

(4)SI004・(4)SK006

1. 黒褐色土：(4)SI004 覆土。しまり強。焼土粒少量。ローム粒少量。
2. 褐色土：(4)SI004 覆土。しまりやや強。炭化粒少量。焼土粒やや少量。ローム粒やや多量。
3. にぶい褐色土：(4)SI004 覆土。しまりやや弱。ローム粒やや多量。
4. 暗褐色土：(4)SK006 覆土。しまりやや強。焼土粒少量。ローム粒少量。

(4)SI004 P3

1. 黒褐色土：しまりやや強。炭化粒・焼土粒少量。ローム粒少量。
2. 暗褐色土：しまりやや弱。炭化物・焼土粒少量。ローム粒やや多量。



第49図　(4)SI004・SK006

堆積であった。

遺物は、底面直上から出土した須恵器を含む３点を図示することができた。１は須恵器の甕である。土坑の底面から、バラバラの破片で出土した。口縁部は外弯しながら長く伸び、口唇部は面取りされる。長胴形である。口径が胴部最大径とあまり変わらず、口径と底径はほぼ同じで安定感がある。口縁部の頸部寄りに、内側から穿孔したとみられる孔が１か所みられる。この孔のよりも上部に位置する場所に、未貫通の孔も１か所みられる。胴部外面には縦方向の平行タタキ痕が残る。２も須恵器甕である。口縁部は大きく開き、口径と胴部最大径がほぼ同じとみられる。胴部外面には、横方向の平行タタキ痕が残る。胎土に雲母と白色砂粒が目立つ。３はスラグである。

土器の特徴から、平安時代（９世紀後半）の遺構と考えられる。

（１）SK013（第50図、図版10・28）

9D-61に位置する。径2.60mを測る略円形の土坑である。確認面からの深さは0.60mで、平らな底面である。断面形は袋状で、確認面から0.10m程でオーバーハングして底面に至る。覆土は４～６層はほぼ水平堆積だが、１～３層はレンズ状の堆積である。

遺物は複数出土し、10点を図示することができた。１～５はロクロ成形の土師器で、杯である。１は体部が内弯する器形である。胎土に砂粒の混入が少なく、焼成が良好で硬質である。２も体部が内弯する器形である。内面は丁寧なミガキで、黒色処理を施す。底面は回転糸切り未調整である。３も内弯する体部とみられる。底部はやや突出しており、回転糸切り未調整である。胎土は砂粒の混入が少なく、１と同様、焼成が良好で硬質である。４も杯とみられる。底部しか遺存しないため、体部の器形が不明である。回転糸切り未調整である。内面に、「×」の線刻がみられる。砂粒が少なく、焼成が良好で硬質である。５は高台付き杯である。内面は丁寧なミガキで、黒色処理が施される。底部は回転ヘラ切りをナデ消している。６は足高高台の高台部分であろう。焼成が良好で硬質である。７は小型の甕である。有段口縁で、口唇部は尖がった形状である。胎土は石英などの砂粒が目立つ。８は灰釉陶器で、高台付きの壺である。底部内面と高台部分に緑がかった釉薬が、胴部外面の一部に黒っぽい釉薬が掛かる。底部は回転糸切りののち、周囲をナデ消し、高台を貼付している。９は軽石である。溝状に磨られており、砥石のように利用されたとみられる。10はスラグである。

土器の時期から、平安時代（10世紀初頭）の遺構と考えられる。

（１）SK016（第51図）

10D-14に位置する。長軸長1.10m、短軸長0.84mの楕円形の土坑である。断面形は逆台形で、確認面から底面までの深さは0.26m、平らな底面である。

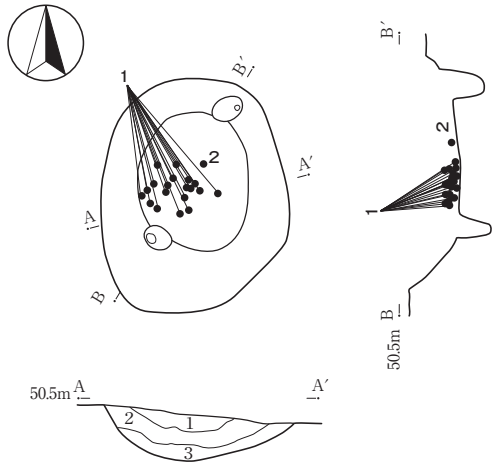
遺物はロクロ土師器の小破片がわずかに出土したものの、図示できるものはなかった。平安時代の遺構と考えられる。

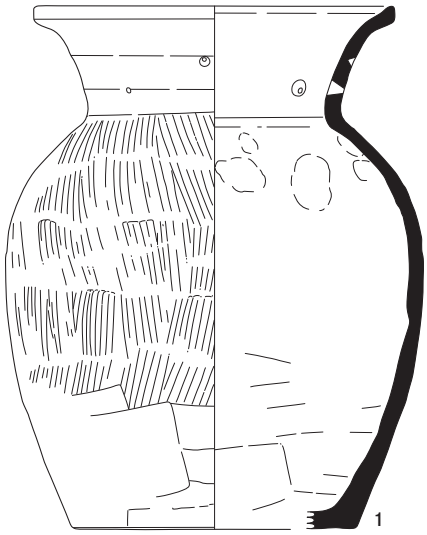
（１）SK021（第51図）

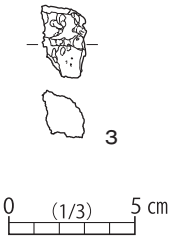
9C-68・69に位置する。長軸長1.20m（推定）、短軸長0.49m、の長楕円形の土坑である。東側が深く、確認面から0.98mを測るが、西側になるにつれて浅くなる。

遺物は、黒色処理の杯などわずかに土師器の小破片が出土したものの、図示できるものはなかった。平安時代の遺構と考えられる。

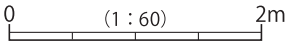
（1）SK009

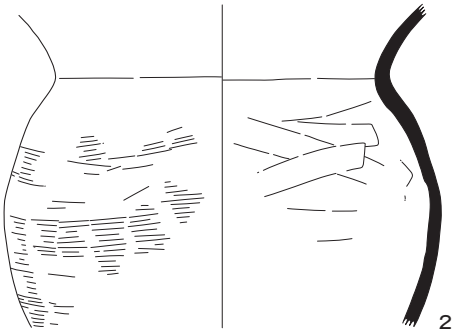


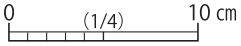




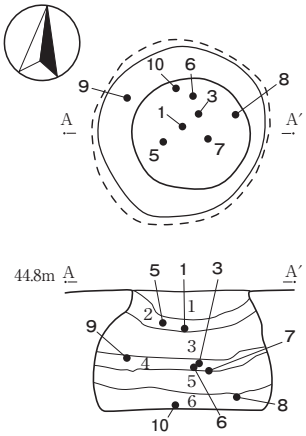
（1）SK009
1. 黒色土：しまり有。焼土粒？微量。ローム小ブロック中量。
2. 暗褐色土：しまり有。ローム小ブロック中量・ロームまだら。
3. 黒褐色土：しまりやや弱。炭化粒・ローム粒微量。

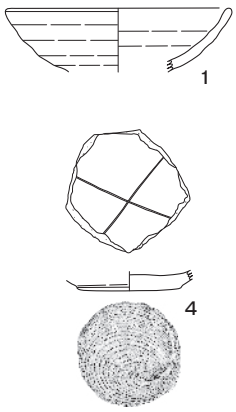


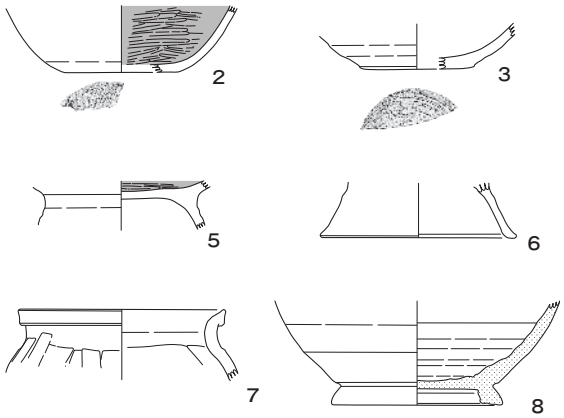


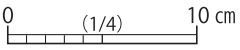


（1）SK013

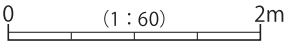


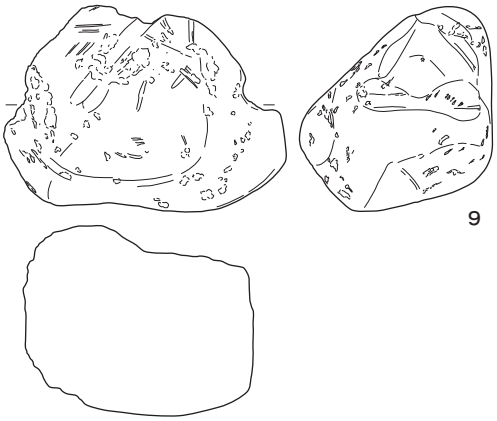


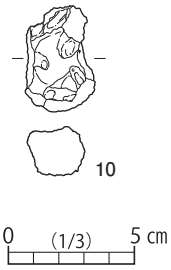




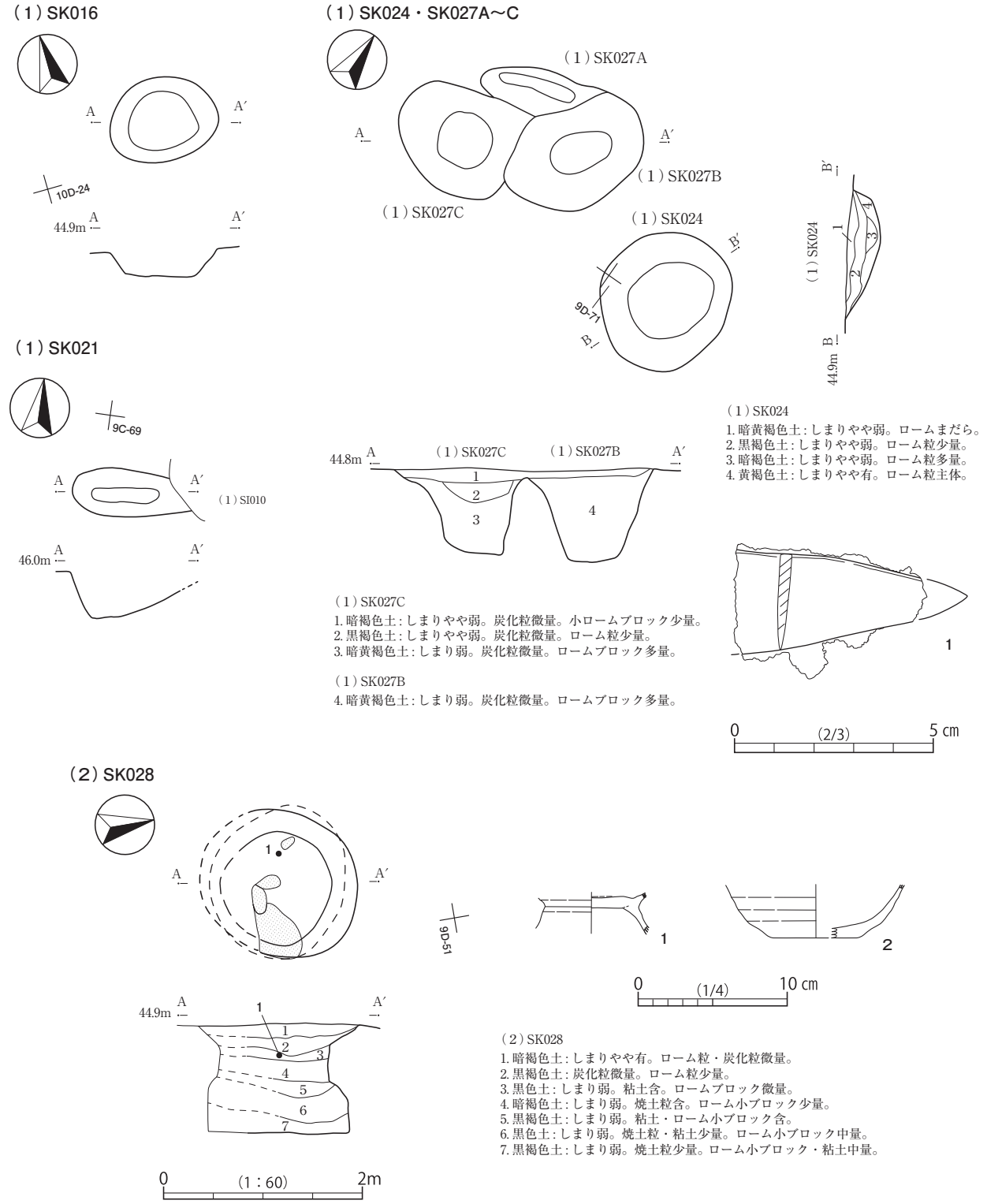
（1）SK013
1. 暗褐色土：しまりやや弱。炭化粒・ローム粒微量。
2. 黒褐色土：しまり弱。炭化粒多量。ローム粒微量。
3. 暗褐色土：しまり弱。焼土粒・炭化粒微量。
ローム小ブロック微量。
4. 暗褐色土：しまり弱。焼土粒・炭化粒微量。
5. 黒褐色土：しまり弱。焼土粒・炭化粒微量。
ローム小ブロック少量。
6. 暗黄褐色土：しまり弱。ロームブロック多量。







第50図　（1）SK009・SK013



第51図　（1）SK016・SK021・SK024・SK027A～C・（2）SK028

（1）SK024（第51図）

9D-61・71に位置する。径が約1.40mの略円形の土坑である。断面形は船底状で南西側がスロープ状に浅く、中央部～北東側が深い。確認面からの底面までの深さは、中央部で0.33mを測る。

遺物は土師器の小破片がわずかに出土したが、図示できるものはなかった。平安時代の遺構と考えられる。

（1）SK027A ～ C（第51図、図版10・28）

9D-60に位置する土坑である。３基の土坑が重複しており、北側から時計回りにA･B･Cと枝番を振った。新旧関係は不明である。Aは長軸長1.03m、短軸長0.46mの楕円形である。Bは長軸長1.50m、短軸長1.00mの不整な楕円形である。Cは長軸長1.20m、短軸長1.05mの不整な楕円形である。確認面からの底面までの深さは、Aから順に0.51m、0.90m、0.84mである。BとCの覆土はほぼ単一の土層が占めており、一気に埋め戻した後、自然堆積したものと考えられる。

遺物は、鉄製品１点を図示することができた。１は鎌とみられる。このほか、土師器の小破片がわずかに出土した。

土器の特徴から、平安時代の遺構と考えられる。

（2）SK028（第51図、図版11）

9D−50・51に位置し、径1.95mの略円形を呈する。平らな底面で、確認面からの深さは1.09mである。崩落防止のために南側を完掘できてないが、断面形は中ほどですぼまり、上部と下部が広がる袋状の形状とみられる。覆土の３層以下は粘土粒や焼土粒が混じる層であり、特に６・７層では焼土粒の面的な分布が認められた。

遺物は、ロクロ成形の土師器２点を図示することができた。１は足高高台付き杯とみられるが、体部が遺存していない。砂粒の混入が少なく、均質な胎土である。底部は回転ヘラ切りをナデ消している。２は杯である。体部は内弯して立ち上がる。底部は突出しており、回転糸切り未調整である。胎土に砂粒の混入が少ない。

土器の時期から、平安時代（10世紀初頭）の遺構と考えられる。

（1）SK030A・B（第52図、図版28）

Aが9C-59に、Bが9C-69に位置する。（１）SI010と重複しているが、新旧関係は不明である。整理作業にて（１）SI010に付帯しない独立した土坑として判断し、新たに遺構番号を振り、枝番号として北側の土坑をA、南側の土坑をBとした。Aは長軸長1.31m、短軸長1.08mで不整な楕円形である。Bは長軸長1.08m、短軸長0.60mでやはり不整な楕円形を呈する。確認面からの底面までの深さはA・Bともに1.76mと深い。Bの底面は狭く、ピット状を呈する。

遺物は１点を図示することができた。１は須恵器甕の胴部片である。外面に平行タタキ目、内面はヘラケズリによってあて具痕を消している。

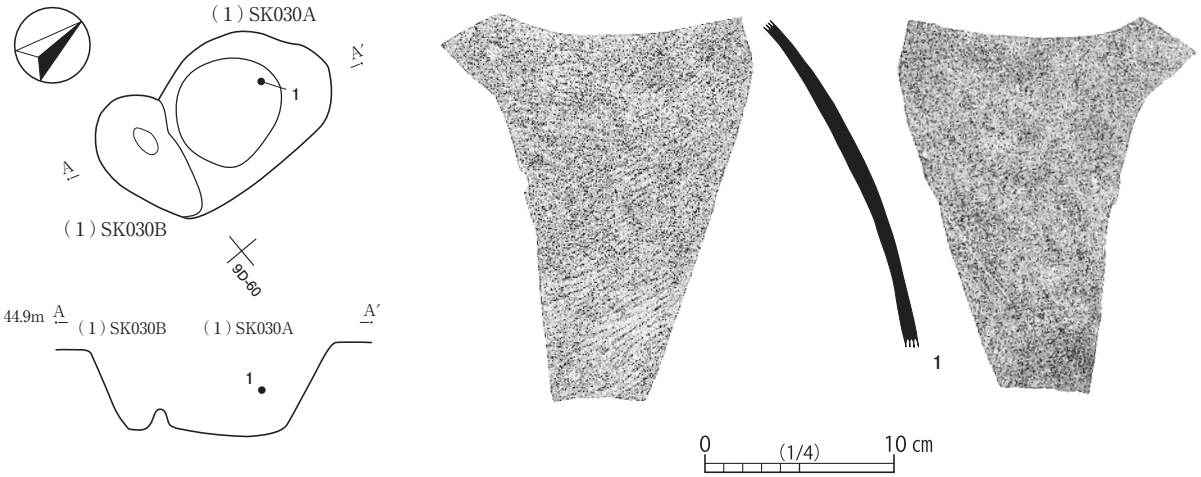
土器の特徴から、平安時代の遺構と考えられる。

（2）SK029（第52図、図版11）

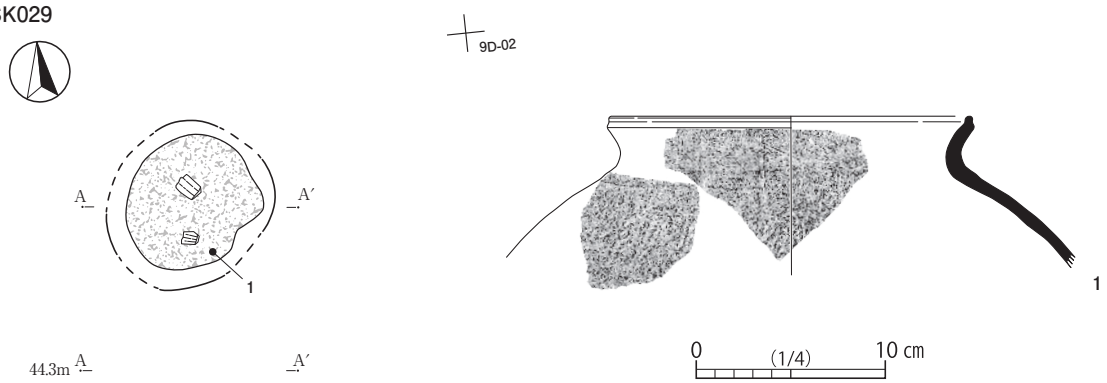
9D-01に位置し、径1.35mの略円形を呈する。底面は西側にわずかに傾斜しており、確認面からの深さは西側で0.81m、東側で0.75mである。覆土は、下層が焼土や粘土を含む土が薄く入り乱れ、その上に焼土を多量に含む４層がレンズ状に、その上には黒灰褐色の３層が厚く堆積している。最上部にはロームブロックを含む１・２層が堆積しており、人為的な埋め戻しの可能性がある。

遺物は、須恵器１点を図示することができた。大きく張り出した胴部から、頸部で一気にすぼまり、口縁部は短く外反する。口唇部は上に小さくつまみ上がるような形状である。胴部外面には縄目（撚糸文？）

（1）SK030A・B

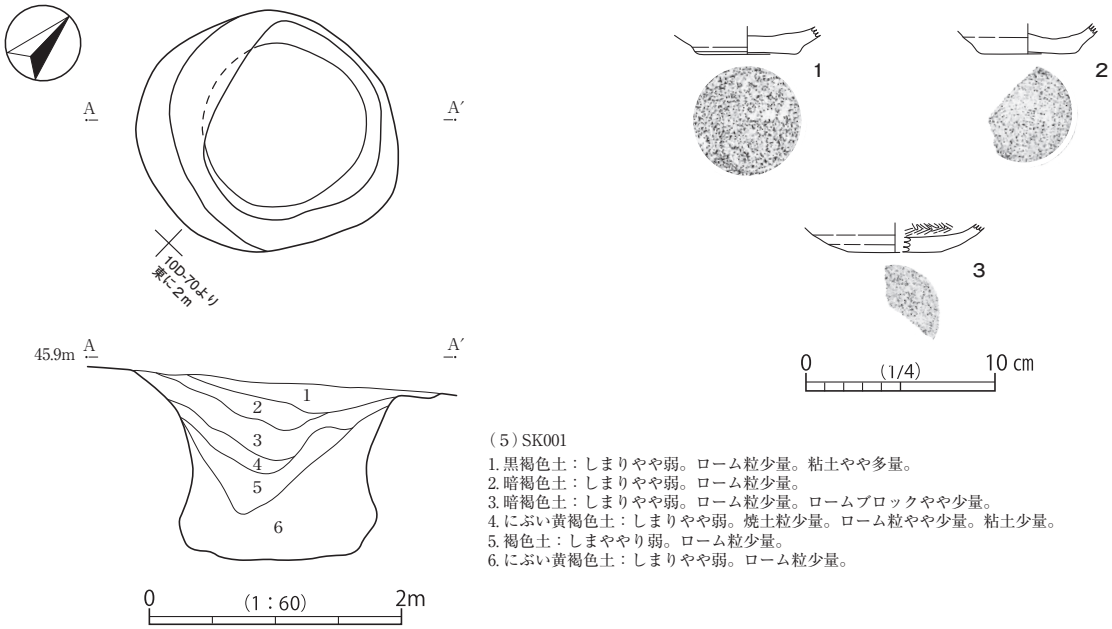


（2）SK029



（2）SK029
1. 黒褐色土：しまり非常に強い。ローム小ブロック少量。
2. 黒灰褐色土（やや明るい）：しまりやや弱。炭化粒・ローム小ブロック少量。
3. 黒灰褐色土：しまりやや弱。炭化粒・ローム小ブロック少量。
4. 赤褐色土：しまり無。焼土粒多量。
5. 暗灰褐色土：粘土含。
6. 黄褐色土：しまり弱。ローム主体。
7. 暗褐色土：焼土粒微量。

（5）SK001



（5）SK001
1. 黒褐色土：しまりやや弱。ローム粒少量。粘土やや多量。
2. 暗褐色土：しまりやや弱。ローム粒少量。
3. 暗褐色土：しまりやや弱。ローム粒少量。ロームブロックやや少量。
4. にぶい黄褐色土：しまりやや弱。焼土粒少量。ローム粒やや少量。粘土少量。
5. 褐色土：しまややり弱。ローム粒少量。
6. にぶい黄褐色土：しまりやや弱。ローム粒少量。

第52図　（1）SK030・（2）SK029・（5）SK001

を転がしている。

土器の時期から、平安時代の遺構と考えられる。

（4）SK006（第49図、図版10）

10C-27・28・37・38に位置する。（4）SI004と重複し、本遺構の方が古い。一辺3.64mの方形とみられる。底面は東側に向かって傾斜し、外形線の0.60m内側で１段下がる。確認面からの深さは段の手前の最も深いところで0.14m、１段下がった最も深いところで0.40mである。（4）SI004と方位が共通しており、関連する遺構の可能性もあるが、性格は不明である。

（4）SI004とまとめて遺物を取り上げたため、本遺構からの出土が確実な遺物はないが、（4）SI004と同様の時期の遺構とみられる。

（5）SK001（第52図、図版11・28）

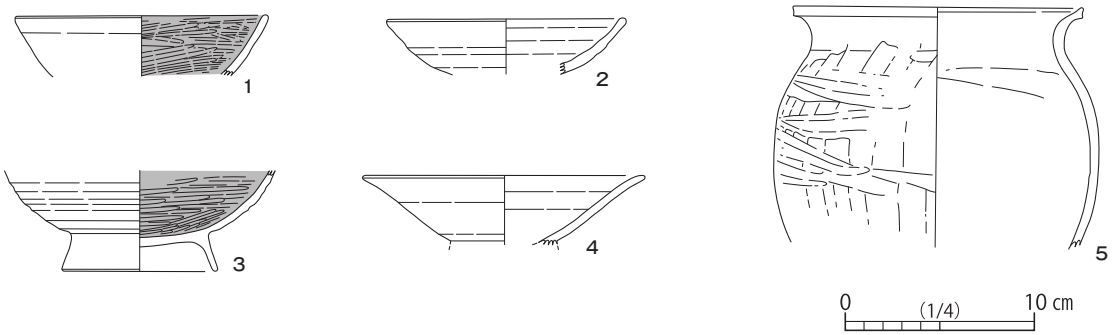
10D-60・61に位置する。径2.00m前後の略円形の土坑である。確認面から底面までの深さは1.40mで、断面形は袋状である。

遺物は、ロクロ成形の土師器杯３点を図示することができたが、３点とも底部しか遺存しない。１は回転糸切り未調整とみられるが、摩耗しており、明瞭ではない。突出した底部である。砂粒を多く含み、ざらざらとした器面である。２も回転糸切り未調整で、底部内面の中央が盛り上がっている。３も回転糸切り未調整で、内面は磨かれている。

土器の時期から、平安時代（10世紀初頭）の遺構と考えられる。

３　遺構外出土の遺物（第53図、図版26・28）

土師器５点を図示することができた。５を除き、ロクロ成形である。１～２は杯で、１はゆるやかに内弯する体部である。内面は丁寧なミガキで、黒色処理される。胎土に細かな砂粒を含む。２は底径と口径の差がやや大きく、胎土に砂粒の混入が少ない。焼成が良好で、硬質である。３は高台付き椀である。体部は内弯し、高めの高台が貼付される。内面は丁寧なミガキで、黒色処理される。全体に薄手である。底面を回転ヘラケズリしたのち、高台を貼付している。胎土に砂粒の混入が少ない。焼成が良好で硬質である。４は高台付き杯である。体部は直線的に開き、口縁部でわずかに外弯する器形である。口径が大きい。底部に剥離痕があったため、高台付きと判断した。５は小型甕である。器厚が薄く、胴部中位に最大径をもつものの張り出しておらず、長胴形の胴部とみられる。頸部はゆるやかにすぼまり、口縁部が外弯する。口唇部はつまみ上げられている。内面は部分的に剥落している。



第53図　遺構外出土の遺物

第20表　奈良・平安時代土器観察表

（　　）推定値　　<　　>現存値

遺構	挿図番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
（1） SI004	第44図 -1	土師器	杯	口径　(13.0) 底径　(6.0) 器高　<3.4>	20%	砂粒	内面　にぶい褐色 (7.5YR5/4) 外面　赤褐色 (5YR4/6) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ	ロクロ成形　底外回転糸切り
（1） SI004	第44図 -2	土師器	杯	口径　11.9 底径　5.4 器高　3.9	100%	砂粒	内面　にぶい黄橙色 (10YR7/4) 外面　明褐色 (7.5YR5/6) 焼成　良好	内面　ヘラナデ 外面　ナデ ヘラ削り	ロクロ成形　底外回転糸切り
（1） SI004	第44図 -3	土師器	杯	口径　(13.6) 底径　－ 器高　<3.5>	15%	砂粒	内面　黒色 (10Y2/1) 外面　にぶい黄橙色 (10YR6/4) 焼成　良好	内面　ナデ ミガキ 外面　ナデ	ロクロ成形　内面黒色処理
（1） SI004	第44図 -4	土師器	高台付椀	口径　－ 底径　9.1 器高　<4.0>	底部95%	白色砂粒	内面　にぶい黄褐色 (10YR5/4) 外面　橙色 (7.5YR6/6) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ	
（1） SI004	第44図 -5	土師器	甕	口径　－ 底径　(9.2) 器高　<7.6>	20%	砂粒	内面　褐色 (7.5YR4/3) 外面　にぶい褐色 (7.5YR5/4) 焼成　良好	内面　ヘラナデ 外面　ヘラ削り	
（1） SI004	第44図 -6	土師器	甕	口径　(17.8) 底径　－ 器高　<8.7>	20%	砂粒	内面　にぶい褐色 (7.5YR5/4) 外面　橙色 (7.5YR6/6) 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ 外面　ナデ ヘラ削り	
（1） SI004	第44図 -7	土師器	甕	口径　(22.5) 底径　－ 器高　<4.9>	口縁25%	砂粒・雲母	内面　灰黄褐色 (10YR4/2) 外面　にぶい黄褐色 (10YR5/4) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ ヘラ削り	
（1） SI004	第44図 -8	土師器	甕	口径　－ 底径　(11.2) 器高　<18.8>	40%	白砂粒	内面　橙色 (7.5YR6/6) 外面　にぶい橙色 (7.5YR6/4) 焼成　良好	内面　ヘラナデ 外面　ヘラ削り	
（1） SI010	第45図 -1	土師器	杯	口径　(11.8) 底径　－ 器高　<3.0>	25%	砂粒	内面　にぶい橙色 (7.5YR7/4) 外面　にぶい橙色 (7.5YR7/4) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ	ロクロ成形
（1） SI010	第45図 -2	土師器	杯	口径　(11.6) 底径　－ 器高　<2.7>	口縁部～体部 20%	砂粒	内面　にぶい黄橙色 (7.5YR7/4) 外面　にぶい黄橙色 (7.5YR7/4) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ	ロクロ成形
（1） SI010	第45図 -3	土師器	杯	口径　(11.4) 底径　－ 器高　<3.9>	95%	砂粒	内面　黒色 (7.5Y2/1) 外面　にぶい黄橙色 (7.5YR6/4) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ ミガキ	ロクロ成形　内面黒色処理
（1） SI010	第45図 -4	土師器	杯	口径　－ 底径　(6.0) 器高　<1.0>	底部50%	砂粒	内面　にぶい橙色 (7.5YR7/4) 外面　にぶい橙色 (7.5YR7/4) 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ 外面　ナデ ヘラ削り ヘラナデ	ロクロ成形　底外回転糸切り
（1） SI010	第45図 -5	土師器	甕	口径　(19.2) 底径　－ 器高　<4.0>	口縁部20%	粒子	内面　橙色 (5YR6/6) 外面　橙色 (5YR6/6) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ ヘラ削り	
（2） SI012	第47図 -1	土師器	杯	口径　(14.6) 底径　－ 器高　<3.1>	25%	雲母・砂粒	内面　にぶい黄褐色 (10YR7/4) 外面　にぶい黄褐色 (10YR7/4) 焼成　良好	内面　ナデ ミガキ 外面　ナデ　ヘラ削り	
（4） SI002	第48図 -1	土師器	杯	口径　(13.8) 底径　－ 器高　3.6	5%	白色粒子・雲母	内面　橙色 (5YR6/6) 外面　橙色 (5YR6/6) 焼成　良好	内面　ナデ　ヘラナデ 外面　ナデ ミガキ	ロクロ成形
（4） SI002	第48図 -2	土師器	杯	口径　(13.0) 底径　－ 器高　<3.1>	15%	白色粒子・石英・長石	内面　橙色 (5YR6/6) 外面　橙色 (5YR6/6) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ	ロクロ成形　底部外面回転糸切り無調整
（4） SI002	第48図 -3	土師器	杯	口径　－ 底径　－ 器高　－	5%	白色粒子	内面　橙色 (5YR6/6) 外面　橙色 (5YR6/6) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ	ロクロ成形　墨書土器破片「万」
（4） SI002	第48図 -4	土師器	杯	口径　－ 底径　5.6 器高　<1.3>	15%	石英・長石	内面　にぶい橙色 (7.5YR6/4) 外面　灰褐色 (7.5YR4/2) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ	底部外面回転糸切り無調整
（4） SI002	第48図 -5	土師器	高台付杯	口径　－ 底径　－ 器高　<2.0>	5%	白色粒子・雲母	内面　橙色 (7.5YR6/6) 外面　橙色 (5YR6/6) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ	底部外面回転ヘラ切り無調整
（4） SI002	第48図 -6	土師器	高台付杯	口径　－ 底径　－ 器高　<2.3>	10%	雲母・石英・長石	内面　にぶい褐色 (7.5YR5/4) 外面　橙色 (5YR6/6) 焼成　良好	内面　ナデ ミガキ 外面　ナデ	
（4） SI002	第48図 -7	灰釉陶器	椀	口径　－ 底径　5.4 器高　<3.0>	60%	白色粒子・黒色粒	内面　にぶい黄橙色 (10YR7/2) 外面　にぶい黄橙色 (10YR7/2) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ	内面灰釉
（4） SI002	第48図 -8	土師器	甕	口径　－ 底径　－ 器高　<8.7>	10%	白色粒子	内面　明赤褐色 (5YR5/6) 外面　明赤褐色 (5YR5/6) 焼成　良好	内面　ヘラナデ 外面　ナデ ヘラ削り	
（4） SI002	第48図 -9	土師器	甕	口径　－ 底径　－ 器高　<5.8>	5%	白色粒子	内面　明赤褐色 (5YR5/6) 外面　明赤褐色 (5YR5/6) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ 格子状タタキ痕	
（4） SI004	第49図 -1	土師器	杯	口径　16.0 底径　－ 器高　6.5	80%	白色粒子・雲母	内面　明赤褐色 (5YR5/6) 外面　明赤褐色 (5YR5/6) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ ヘラ削り	ロクロ成形　口縁部人為的な打ち欠け
（4） SI004	第49図 -2	土師器	杯	口径　(15.8) 底径　－ 器高　<4.1>	15%	白色粒子・雲母	内面　橙色 (5YR6/6) 外面　橙色 (5YR6/6) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ	ロクロ成形
（4） SI004	第49図 -3	土師器	杯	口径　(14.8) 底径　－ 器高　<3.3>	20%	白色粒子・雲母	内面　橙色 (5YR6/6) 外面　橙色 (5YR6/6) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ	ロクロ成形
（4） SI004	第49図 -4	土師器	杯	口径　(9.7) 底径　－ 器高　<2.1>	40%	白色粒子・雲母	内面　明赤褐色 (5YR5/6) 外面　明赤褐色 (5YR5/6) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ	ロクロ成形
（4） SI004	第49図 -5	土師器	高台付杯	口径　－ 底径　－ 器高　<2.2>	15%	白色粒子・雲母	内面　にぶい橙色 (7.5YR6/4) 外面　橙色 (5YR6/6) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ	底部外面回転糸切り
（4） SI004	第49図 -6	土師器	杯	口径　－ 底径　－ 器高　－	5%	白色粒子	内面　橙色 (7.5YR6/6) 外面　橙色 (7.5YR6/6) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ	墨書（文字は不明）
（4） SI004	第49図 -7	須恵器	甕	口径　－ 底径　－ 器高　－	5%	砂粒・雲母	内面　灰褐色 (7.5YR4/2) 外面　灰褐色 (7.5YR4/2) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　タタキ	
（1） SK009	第50図 -1	須恵器	甕	口径　(18.8) 底径　(14.8) 器高　27.6	60%	砂粒	内面　にぶい黄橙色 (10YR7/4) 外面　灰黄褐色 (2.5Y7/2) 焼成　良好	内面　ナデ ヘラナデ 当て具痕 外面　ナデ ヘラ削り タタキ	口縁部に穿孔１ヶあり。未貫通の穿孔も１ヶあり。
（1） SK009	第50図 -2	須恵器	甕	口径　－ 底径　－ 器高　<17.0>	20%	砂粒・雲母	内面　にぶい黄色 (2.5Y6/3) 外面　灰黄褐色 (2.5Y6/2) 焼成　良好	内面　ヘラナデ 外面　ナデ タタキ	ロクロ成形
（1） SK013	第50図 -1	土師器	杯	口径　(11.6) 底径　－ 器高　<3.4>	25%	砂粒	内面　浅黄橙色 (7.5YR8/4) 外面　浅黄橙色 (7.5YR8/4) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ	ロクロ成形
（1） SK013	第50図 -2	土師器	杯	口径　－ 底径　(5.8) 器高　<3.5>	20%	砂粒・スコリア	内面　黒色 (N2/0) 外面　にぶい橙色 (7.5YR7/4) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ ミガキ	ロクロ成形　底外回転糸切り　内面黒色処理
（1） SK013	第50図 -3	土師器	杯	口径　－ 底径　(6.0) 器高　<2.4>	20%	砂粒	内面　橙色 (7.5YR7/6) 外面　橙色 (7.5YR7/6) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ	ロクロ成形　底外回転糸切り
（1） SK013	第50図 -4	土師器	杯	口径　－ 底径　5.4 器高　<1.0>	10%	砂粒	内面　にぶい橙色 (7.5YR7/4) 外面　にぶい橙色 (7.5YR7/4) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ	ロクロ成形　底外回転糸切り 内面に×印の線刻あり

（　　）推定値　＜　　＞現存値

遺構	挿図番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
（1）SK013	第50図-5	土師器	高台付杯	口径 － 底径 － 器高 <2.6>	70%	砂粒	内面 暗灰色(N3/0) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ	ロクロ成形 内面黒色処理
（1）SK013	第50図-6	土師器	高台付杯	口径 － 底径 (10.2) 器高 <2.9>	高台30%	砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	ロクロ成形
（1）SK013	第50図-7	土師器	小型甕	口径 (10.8) 底径 － 器高 <3.7>	口縁部25%	砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 明赤褐色(2.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラ削り	
（1）SK013	第50図-8	灰釉陶器	高台付壺	口径 － 底径 (9.0) 器高 <5.5>	底部65%	砂粒	内面 黄灰褐色(2.5Y6/1) 外面 灰色(5YR5/1) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラ削り	ロクロ成形 底外回転糸切りのちナデ 内外に釉薬
（2）SK028	第51図-1	土師器	高台付杯	口径 － 底径 － 器高 <2.8>	底部80%	砂粒	内面 にぶい黄橙色(10YR6/3) 外面 にぶい黄橙色(10YR6/3) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	ロクロ成形 足高高台
（2）SK028	第51図-2	土師器	杯	口径 － 底径 (6.0) 器高 <3.5>	15%	砂粒	内面 橙色(5YR6/6) 外面 橙色(5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	ロクロ成形 回転糸切り無調整
（1）SK030A	第52図-1	須恵器	甕	口径 － 底径 － 器高 －	5%	砂粒	内面 灰黄褐色(2.5Y7/2) 外面 灰白色(5YR7/1) 焼成 良好	内面 ヘラ削り 外面 タタキ	内面当て具痕
（2）SK029	第52図-1	土師器	甕	口径 (19.2) 底径 － 器高 <5.8>	口縁部25%	砂粒	内面 にぶい赤褐色(5YR4/4) 外面 にぶい赤褐色(5YR4/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラ削り 縄目	縄目は撚糸文か
（5）SK001	第52図-1	土師器	杯	口径 － 底径 (5.1) 器高 <1.5>	15%	砂粒・白色粒子	内面 明赤褐色(5YR5/6) 外面 明赤褐色(5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	ロクロ成形 回転糸切り無調整
（5）SK001	第52図-2	土師器	杯	口径 － 底径 (5.1) 器高 <1.5>	15%	白色砂粒・雲母	内面 橙色(5YR6/6) 外面 橙色(5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	ロクロ成形 回転糸切り無調整
（5）SK001	第52図-3	土師器	杯	口径 － 底径 (5.1) 器高 <1.5>	15%	白色砂粒	内面 明赤褐色(5YR5/8) 外面 明赤褐色(5YR5/8) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ミガキ	ロクロ成形 回転糸切り無調整
遺構外	第53図-1	土師器	杯	口径 (13.2) 底径 － 器高 <3.2>	30%	砂粒	内面 黒色(N2/0) 外面 明黄褐色(10YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	ロクロ成形 内面黒色処理
遺構外	第53図-2	土師器	杯	口径 (12.4) 底径 － 器高 <2.9>	15%	砂粒	内面 橙色(7.5YR7/6) 外面 橙色(7.5YR7/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	ロクロ成形
遺構外	第53図-3	土師器	高台付椀	口径 － 底径 (8.0) 器高 <5.3>	30%	砂粒	内面 黒色(7.5YR2/1) 外面 にぶい橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ヘラ削り	ロクロ成形 底外回転糸切り無調整 内面黒色処理
遺構外	第53図-4	土師器	高台付杯	口径 (15.0) 底径 － 器高 <3.7>	25%	砂粒	内面 橙色(7.5YR6/6) 外面 橙色(7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ	ロクロ成形
遺構外	第53図-5	土師器	小型甕	口径 (15.0) 底径 － 器高 <12.7>	40%	砂粒	内面 赤褐色(5YR4/6) 外面 赤褐色(5YR4/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ ヘラ削り ミガキ	

第21表　奈良・平安時代石製品観察表

遺構番号	挿図番号	遺物番号	種類	石材	法量：mm　g				備考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
（1）SI004	第44図-9	23	軽石	－	72.5	65.3	43.2	28.66	
（4）SI002	第48図-10	8	軽石	－	111.0	76.0	71.0	64.0	
（1）SK013	第50図-9	9	軽石	－	81.1	111.3	76.4	108.12	

第22表　奈良・平安時代鉄製品観察表

＜　　＞現存値

遺構番号	挿図番号	種類	法量：mm　g					色調	備考
			最大長	最大幅	最大厚	孔径	重量		
（1）SI010	第45図-6	不明	＜17.8＞	16.2	2.5	－	2.95		
（1）SI010	第45図-7	スラグ	36.8	29.5	14.2	－	18.22		
（1）SI012	第47図-2	スラグ	33.5	59.0	19.0	－	70.2		
（4）SK006	第49図-8	スラグ	93.0	122.0	54.0	－	570.0		
（1）SK009	第50図-10	スラグ	29.0	17.6	18.8	－	10.13		
（1）SK027	第51図-1	鎌	＜36.8＞	61.4	4.1	－	21.51		

第７節　中・近世の遺構と遺物

遺構は、中世の土坑６基と中・近世の土坑１基、溝状遺構６条を検出した。中世の土坑は、地下式坑１基と上屋が想定される大型の土坑１基が検出された。その他は小さな楕円形の土坑３基と長方形や方形の土坑２基であった。土坑は全て台地東側に位置し、比較的近接した分布が認められる。

溝状遺構は東西に延びるものが５条あり、これらは調査範囲外に続くとみられる。東西に延びる溝の覆土に硬化面はなく、南北を区画する溝であったと考えられる。SD002～004･006･010の５条もの溝が重なっているが、覆土のセクション写真を見る限りでは土層に大きな変化はなく、近接した時期に繰り返し造り直され、埋まったのだろう。

第23表　中・近世土坑一覧表

遺構番号	種　別	位　置	長(主)軸方向	計測値：m　(　)推定値			時　期	備　考
				長軸	短軸	深さ		
（1）SK019	土坑	9C－79	N－75°－E	1.96	1.50	0.45	中世	
（1）SK020	土坑	9C－69・9D－50・60	N－7°－W	2.15	2.10	0.70	中世	
（2）SK031	土坑	8D－82	―	0.72	0.60	0.50	中・近世？	旧（2）SI016
（4）SK001	土坑	9C－99	N－85°－E	1.16	0.84	0.28	中世	
（4）SK002	地下式坑	9D－70・80	N－14°－W	3.45	1.71	0.93	中世	
（4）SK005A	土坑	10C－17	N－75°－E	1.21	0.75	0.18	中世	
（4）SK005B	土坑	10C－17	N－1°－E	(1.22)	1.06	0.22	中世	

第24表　中・近世溝状遺構一覧表

遺構番号	位　置	計測値：m　<　>現存値			時　期	備　考
		長さ	幅	深さ		
（2）SD002	9C－48・49・9D－40～69	<33.5>	0.68～1.69	0.68～1.69	中・近世	
（2）SD003		<30.0>	0.65～0.70	0.13～0.27	中・近世	
（2）SD004		<20.0>	0.65～0.90	0.14～0.20	中・近世	
（2）SD006		<17.0>	0.85～1.20	0.18～0.26	中・近世	
（2）SD007		<5.7>	0.85～1.20	0.18	中・近世	
（2）SD010		<31.0>	1.60～1.65	0.16～0.29	中・近世	

１　土坑

（1）SK019（第54図、図版11）

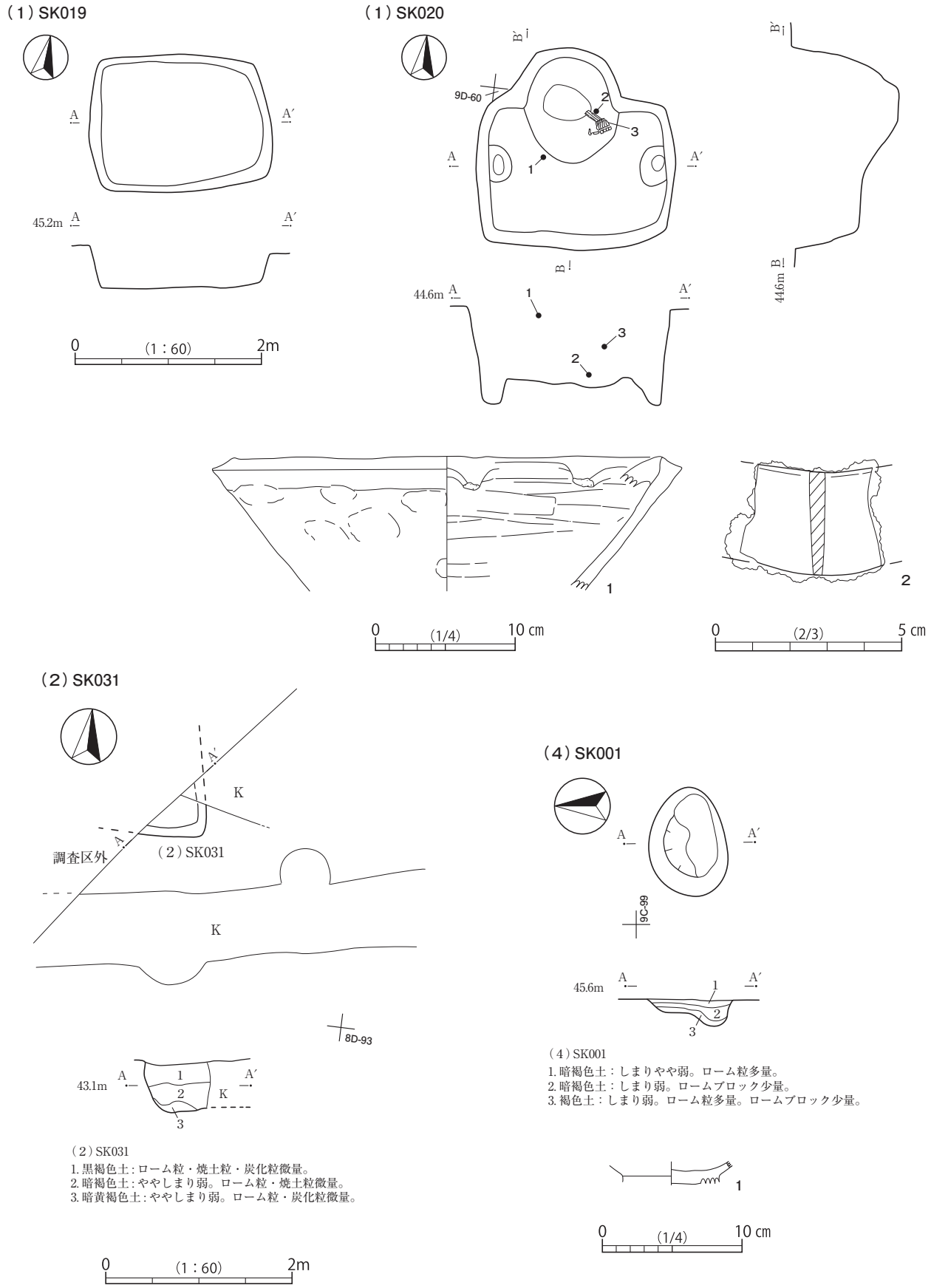
9C-79に位置し、長軸方向はN-75°-E、長軸長1.96m、短軸長1.50mの長方形を呈する。確認面から底面までの深さは0.45mである。

遺物は陶器片などがわずかに出土したが、図示できるものはなかった。

（1）SK020（第54図、図版12・26）

9C-69・9D-50・60に位置する。主軸方向はN-７°-Wで、主軸長2.15m、幅は2.16mである。北側が深く窪んでおり、北側を出入口とする地下式坑を想起させるが、天井部の痕跡は確認できなかった。西側と東側でピットが１基ずつ検出されており、遺構を覆う上屋の存在が想定される。確認面から底面までの深さは、北側の窪みで1.18m、遺構平坦部（南側）で0.70m、ピットの深さは0.30m弱である。写真（図版12）にあるように、ロームブロックと黒色土が混ざった覆土であり、一気に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は、３点を図示することができた。１は土師質の内耳鍋である。口径が大きく、器高が深い。15世紀代のものか。口唇部が厚手で、面取りされる。釣り手が２か所確認できるが、どちらも上部のみ遺存する。



第54図　（1）SK019・SK020・（2）SK031・（4）SK001

胎土に雲母粒子が目立つ。外面にはススが付着している。２は不明鉄製品で、３は馬の骨である（第54図遺構図中）。首から頭にかけての骨、歯が出土した（図版12）。首から下の骨が一切出土していないことから、首から上のみが埋められたと考えられる。

（２）SK031（第54図）

８D-82に位置する。調査できたのは遺構のごく一部で遺物も出土しておらず、時期決定が困難であるが、近世の溝と近接していることから中・近世の土坑として報告することとする。長辺0.72m、短辺0.60mであり、平面形は方形ないしは長方形か。確認面から底面までの深さは0.50mである。

（４）SK001（第54図、図版12）

9C-99に位置し、長軸長1.16m、短軸長0.84mの楕円形を呈する。南側が深く、北側は１段高くなっている。確認面から底面までの深さは北側で0.15m、南側の深いところで0.28mである。

遺物は、土師器１点を図示することができた。１は高台付き杯とみられる。高台部分が剥離しており、体部もほとんど遺存しない。底部は回転糸切り未調整である。中世初頭か。

（４）SK002（第55図、図版12・26）

9D-70・80に位置する。主軸方向はN-14°-Wで、主軸長3.45m、短軸長1.71mの土坑である。北側に1.60mほどスロープ状の部分が存在し、一段下がって平面形が長方形の空間となるが、この空間も南側に向かって傾斜している。北側と南側に１基ずつピットがある。確認面から底面までの深さは、最も深い長方形の空間部分で0.93mである。覆土は３層に分かれるが、全体にしまりが弱く、ローム粒やロームブロックを多く含む褐色土が主体であることから、本遺構は地下式坑であり、その天井部の崩落土が堆積していると考えられる。

遺物は、土器１点を図示することができた。１はカワラケである。やや外弯する器形で、底面は上げ底気味である。口縁部には油煙とみられるススが付着しており、灯明皿として使用されていたものと考えられる。中世初頭か。

（４）SK005A・SK005B（第55図、図版12・26）

10C-17に位置する楕円形の土坑である。SK-005Aは、長軸長1.21m、短軸長0.75m、確認面から底面までの深さ0.18mである。SK005Bは、長軸長1.22m（推定）、短軸長1.06m、確認面から底面までの深さ0.22mである。覆土の状況からＢが古く、Ａが新しい。

遺物は、Ａの土坑から出土したカワラケ１点を図示することができた。器高が浅く、扁平な形状である。底部は回転糸切り未調整である。中世初頭のものか。このほか、土師質土器の小破片がわずかに出土したが、図示できるものはなかった。

２　溝状遺構

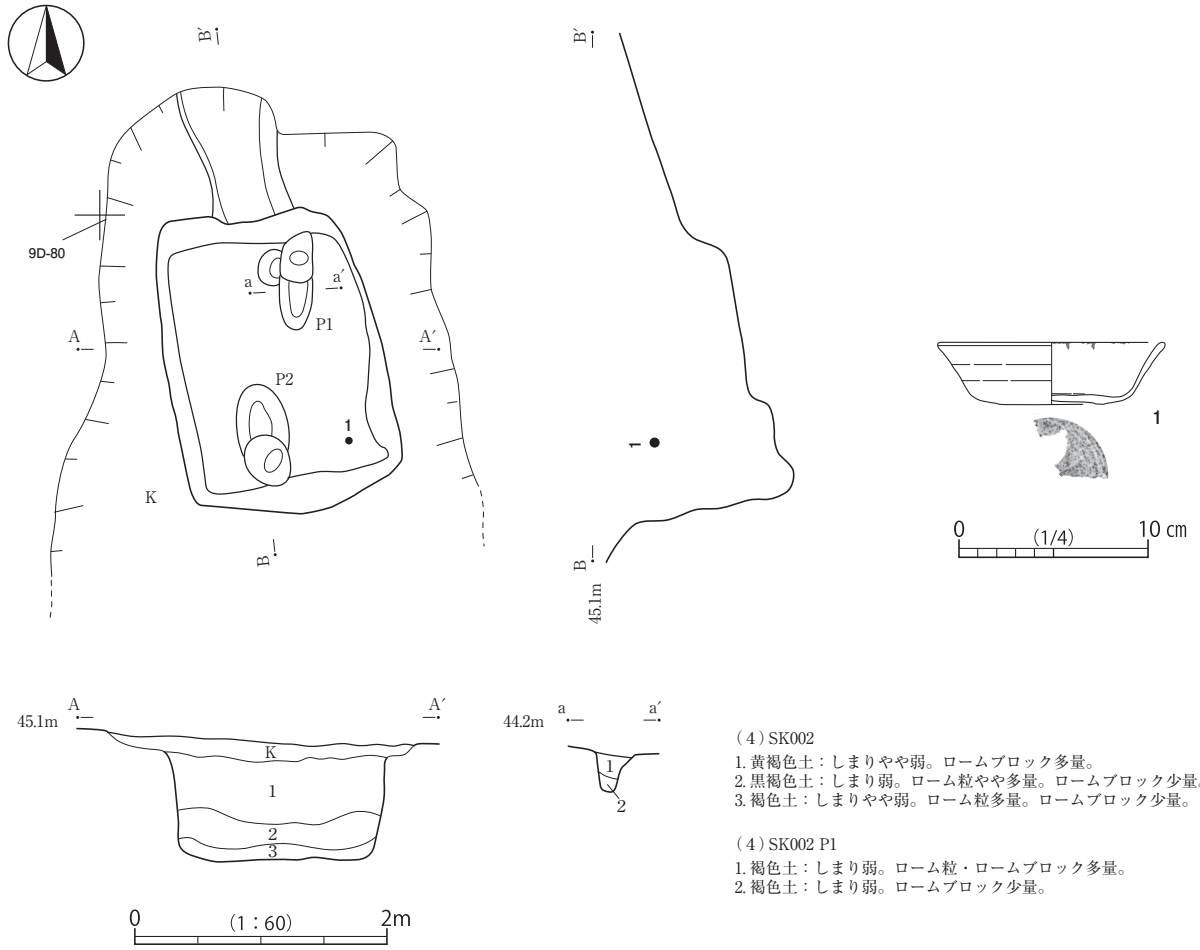
（２）SD002～SD004・SD006・SD007・SD010（第56図、図版12）

9C-48・49・9D-40～69に位置し、重複が激しい。以下、各遺構の概要を記載する。なお、溝の深さは確認面から、ピットの深さは溝の底面からの値である。

（２）SD002は、緩やかに弧を描きながら西から北東方向に延びる溝で、溝の長さは33.5mである。溝の幅は0.68m～1.69mで、深さは0.30m～0.54mである。

（２）SD003は大部分が他の重複する溝の覆土を掘り込んで作られたものと考えられ、東西に連続する

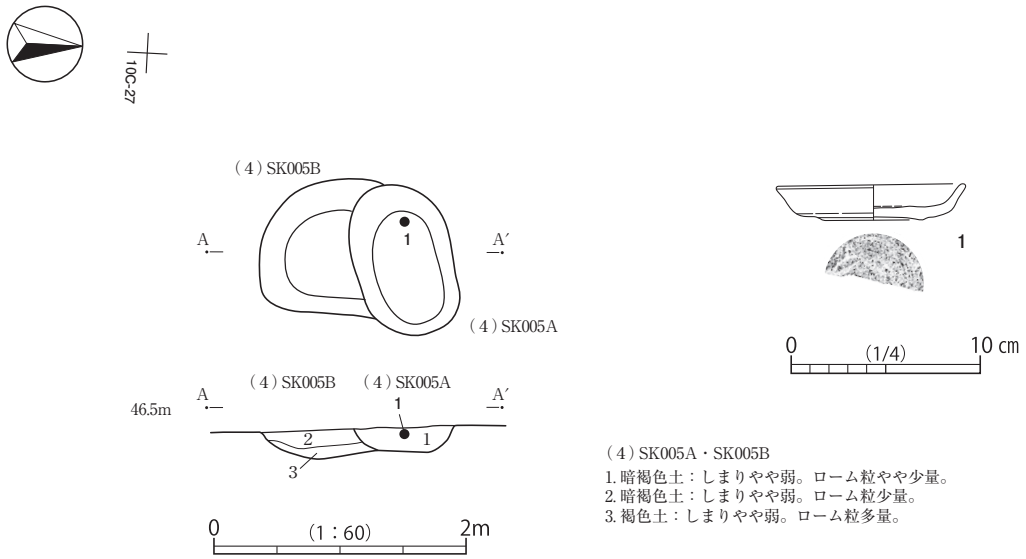
（4）SK002



（4）SK002
1. 黄褐色土：しまりやや弱。ロームブロック多量。
2. 黒褐色土：しまり弱。ローム粒やや多量。ロームブロック少量。
3. 褐色土：しまりやや弱。ローム粒多量。ロームブロック少量。

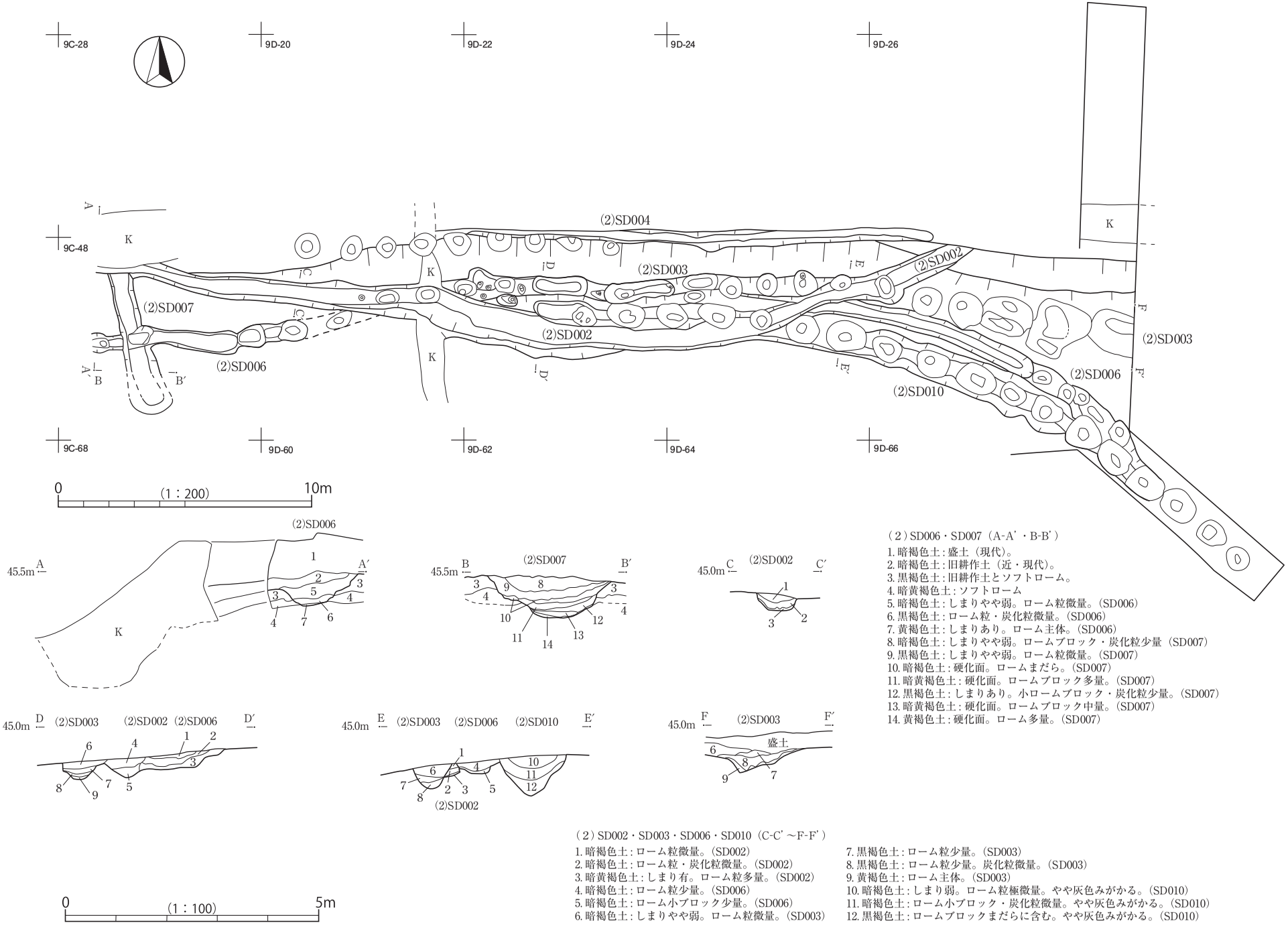
（4）SK002 P1
1. 褐色土：しまり弱。ローム粒・ロームブロック多量。
2. 褐色土：しまり弱。ロームブロック少量。

（4）SK005A・SK005B



（4）SK005A・SK005B
1. 暗褐色土：しまりやや弱。ローム粒やや少量。
2. 暗褐色土：しまりやや弱。ローム粒少量。
3. 褐色土：しまりやや弱。ローム粒多量。

第55図　（4）SK002・（4）SK005A・SK005B



（２）SD006・SD007（A-A'・B-B'）

1. 暗褐色土：盛土（現代）。
2. 暗褐色土：旧耕作土（近・現代）。
3. 黒褐色土：旧耕作土とソフトローム。
4. 暗黄褐色土：ソフトローム
5. 暗褐色土：しまりやや弱。ローム粒微量。（SD006）
6. 黒褐色土：ローム粒・炭化粒微量。（SD006）
7. 黄褐色土：しまりあり。ローム主体。（SD006）
8. 暗褐色土：しまりやや弱。ロームブロック・炭化粒少量（SD007）
9. 黒褐色土：しまりやや弱。ローム粒微量。（SD007）
10. 暗褐色土：硬化面。ロームまだら。（SD007）
11. 暗黄褐色土：硬化面。ロームブロック多量。（SD007）
12. 黒褐色土：しまりあり。小ロームブロック・炭化粒少量。（SD007）
13. 暗黄褐色土：硬化面。ロームブロック中量。（SD007）
14. 黄褐色土：硬化面。ローム多量。（SD007）

（２）SD002・SD003・SD006・SD010（C-C'～F-F'）

1. 暗褐色土：ローム粒微量。（SD002）
2. 暗褐色土：ローム粒・炭化粒微量。（SD002）
3. 暗黄褐色土：しまり有。ローム粒多量。（SD002）
4. 暗褐色土：ローム粒少量。（SD006）
5. 暗褐色土：ローム小ブロック少量。（SD006）
6. 暗褐色土：しまりやや弱。ローム粒微量。（SD003）
7. 黒褐色土：ローム粒少量。（SD003）
8. 黒褐色土：ローム粒少量。炭化粒微量。（SD003）
9. 黄褐色土：ローム主体。（SD003）
10. 暗褐色土：しまり弱。ローム粒極微量。やや灰色みがかる。（SD010）
11. 暗褐色土：ローム小ブロック・炭化粒微量。やや灰色みがかる。（SD010）
12. 黒褐色土：ロームブロックまだらに含む。やや灰色みがかる。（SD010）

第56図　（２）SD002～004・006・007・010

ピットにより溝の長さや幅を推定した。溝の長さは約30mで、溝の幅は9D-44周辺で0.68m、深さは0.15m前後である。西側のピットは0.90mほどの径をもつ略円形ないしは楕円形のピットだが、西端から6mほどで東西に長い楕円形のピットが目立つようになる。楕円形ピットの長軸長は２ｍを超える。楕円形ピットの区間は7.5mほどで終わり、再び略円形のピットが10m近く連続するが、溝の東端に近づくにつれてピットは規模が大きく、形も崩れたものになる。東端のピットは長軸長2.30m前後である。ピットの深さは浅いものは0.20m前後で、深いものだと0.60m前後になる。深いものは、東側の不整形なピットに多い。

（２）SD004は東西に延びる溝だが、西端は掘り方が途絶え、東端は9D-66周辺で収束している。溝の長さは約20mである。溝の幅は0.65m前後で、深さは0.13m～ 0.27mである。溝と同一方向に連続するピット列が（２）SD004に伴う可能性があり、併せて記載する。ピットは径0.75m～ 1.00mの略円形であり、深さは0.17m～ 0.59mと幅があるが、0.30m ～ 0.45mに収まるものが多い。

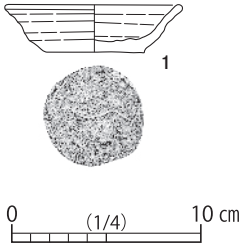
（２）SD006も東西に延びる溝で、途中SD002・003と重複して追えなくなるが、東側で再び確認される。東側では、（２）SD010と並行するように弧を描いて南東方向に振れる。溝の長さは約17mである。溝の幅は0.65m～ 0.90mで、深さは0.14m～ 0.20mである。（２）SD006も略円形ないしは楕円形のピットが連続して造られており、ピットの径は0.75m前後で、深さは0.23m ～ 0.54mと幅があるが、0.30m前後までのものが多い。

（２）SD007は南北に延びる溝で、長さは約６ｍである。南側で浅くなり、立ち上がる。溝の幅は0.85m～ 1.20mで、確認面からの深さは0.18m前後である。覆土中層以下は繰り返し硬化面になっており、道として使用されていた可能性がある。

（２）SD010は東西に延びる溝で、長さは約31mである。掘り込みは9D-66周辺では認識できるものの、西側では溝の重複がひどく、掘り込みの明瞭な東側から続くピット列を追える範囲を溝の総延長とした。溝は東側でゆるやかな弧を描き、南東方向に振れる。溝の幅は1.6m前後で、深さは0.16m～ 0.29mである。ピットは略円形を呈し、径は1.00m～ 1.50mで、深さは0.37m～ 0.68mである。深いものは東側に目立つ。

３　遺構外出土の遺物（第57図、図版26）

１は、カワラケである。小ぶりで、体部が内弯したのち口縁部にかけて外反しながら開く。底部は回転糸切り未調整である。胎土は砂粒の混入が少ないが、わずかに雲母粒子を含む。焼成が良好で、硬質である。口縁部から体部に２か所の欠損部がみられ、破断面の状況から意図的に打ち欠いた可能性がある。底部には外面に及ぶ亀裂が入る。



第57図　遺構外出土の遺物

第25表　中・近世土器観察表

（　）推定値　＜　＞現存値

遺構	挿図番号	種類	器種	法量(cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
（1）SK020	第54図-1	土師器	内耳鍋	口径　(30.8) 底径　－ 器高　<9.6>	30%	砂粒・雲母	内面　にぶい黄褐色(10YR5/3) 外面　黒褐色(10YR3/1) 焼成　良好	内面　ヘラナデ 外面　ナデ	
（4）SK002	第55図-1	土師器	杯	口径　12.0 底径　5.5 器高　3.2	30%	砂粒	内面　橙色(7.5YR6/6) 外面　橙色(7.5YR6/6) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ	ロクロ成形　回転糸切り無調整 灯明の油煙あり
（4）SK005A	第55図-1	土師器	カワラケ	口径　(9.9) 底径　(5.2) 器高　<1.9>	40%	砂粒	内面　橙色(7.5YR6/6) 外面　橙色(7.5YR6/6) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ	ロクロ成形　回転糸切り無調整
遺構外	第57図-1	土師器	カワラケ	口径　9.3 底径　5.3 器高　2.5	70%	砂粒・雲母	内面　橙色(5YR6/6) 外面　橙色(5YR6/6) 焼成　良好	内面　ナデ 外面　ナデ	ロクロ成形　回転糸切り無調整

第26表　中・近世鉄製品観察表

＜　＞現存値

遺構番号	挿図番号	種類	法量：mm　g					色調	備考
			最大長	最大幅	最大厚	孔径	重量		
（1）SK020	第54図-2	不明	＜29.0＞	38.0	4.0	－	12.03		

第３章　総括

第１節　弥生時代

確認された遺構は竪穴住居跡２軒、土坑７基、方形周溝墓１基であった。出土した土器は中期末のものが一部含まれるものの、後期前葉を主体としており、遺構の時期は後期前葉と考えられる。土器はいずれも小破片で、頸部の櫛描き文や頸部～胴部無文、胴部に附加条縄文などの縄文といった文様構成をもつ、いわゆる「北関東系」と呼ばれる土器群を主体とする。土製紡錘車が複数出土しているが、これも「北関東系土器」に伴う傾向が指摘されてきた[1)]。竪穴住居跡と土坑は調査範囲の南西側（台地南側の縁辺）に集中して検出された。

竪穴住居跡と近接して形成された土坑群（（１）SK002 ～ 006・012）は、（１）SK006を除き、長軸長2.00m前後の長楕円形ないしは長方形で、形状・規模ともに似通ったものである。一部遺構で中期末の土器が混じるものの、竪穴住居跡・土坑ともに主体となる土器は後期前葉のものであり、遺構に明確な時期差は認められなかった。当初は、その形状と規模から土坑墓の可能性を考えたが、同一時期に居住域と重なる形で墓域が形成されるとは考えにくく、土坑群の性格は不明といわざるを得ない。（１）SK001・007・008のような、古墳時代の土坑墓に弥生土器が流れ込んだ可能性も考慮する必要がある。

一方、竪穴住居跡・土坑群から北東側に70mほど離れた場所で、方形周溝墓１基（（５）SS001）と土坑１基（（４）SK003）が検出されている。（４）SK003は、平面形が長方形で２段掘りの土坑である。県内では弥生時代に帰属する２段掘りの土坑の確認例は少ないが、草刈遺跡K区における方形周溝墓の埋葬施設で検出され[2)]、古墳時代になると土坑墓として類例が増加する。このような形態と規模からみて（４）SK003も土坑墓であると考えられるが、時期的には珍しい事例といえる。集落域は台地の南側縁辺を中心に展開しており、集落域の北東側を墓域としていたものと考えられる。集落及び墓域の主体となる時期は後期前葉であるが、中期末の資料も出土しており、その開始時期は中期末段階までさかのぼる可能性がある。今回の調査範囲では後期中葉以降の遺構・遺物は検出されず、古墳時代中期まで空白期間となっている。台地の西側を中心に未調査範囲が広くあり、今回の調査成果のみをもって集落の規模と存続時期を判断することは尚早であるが、台地東側の墓域をみる限りでは遺構の数は少なく、墓域の規模からは集落も小規模なものと推測される。

銚子地域において調査歴のある弥生時代遺跡は、佐野原遺跡や団子塚遺跡、野尻遺跡などと限られているが、これらはみな中期末～後期前葉に位置づけられるものであり[3)]、本遺跡の時期と共通する。県内では中期後葉から集落が増大するが、銚子地域では中期末以降に増加する状況が看取される。

第２節　古墳時代～奈良・平安時代

大久保遺跡においては、古墳時代及び奈良・平安時代の竪穴住居跡が合わせて17軒検出されるなど、土師器を中心に豊富な遺物が出土した。そこで本節では、出土した土器をもとに遺構の時期を細別し、集落の特徴や変遷を捉えることとしたい。なお、小破片しか出土していない遺構など、時期の細別がし難い遺構は対象外とした。土器の時期判断にあたって参考にした文献は、注に記載した[4)]。

本時代は３つに大別でき、それぞれⅠ・Ⅱ・Ⅲ期と呼称する。Ⅰ期はさらに２時期、Ⅱ期は３時期、Ⅲ

期は２時期に細別が可能であり、それぞれⅠ－１期などと枝番号をつけて記載する。それぞれの時期に帰属する遺構と出土遺物をまとめたものが、第58図と第59図である。

以下、各期の遺物の特徴を概観する。

１　古墳時代の土器について（第58図）

Ⅰ期が中期の土器群、Ⅱ期は１・２期が後期の土器群である。以下のように細別した。

Ⅰ－１期は、部分的なハケ調整の土器を伴う時期である。（１）SM001はハケ調整の土器が出土していないものの、器台の脚部が出土している点から古相と判断した。器種は高杯・坩・壺・甕だが、高杯と坩の出土量が後続するⅠ－２期に比べて少ない。高杯の調整はナデもしくはミガキを基本とするが、一部内面にハケメが残る個体が認められる。壺は二重口縁のものが目立ち、小型のものも存在する。Ⅰ－１期の時期は、４世紀後半～５世紀初頭とみている。

Ⅰ－２期は、ハケ調整の土器がなく、ミガキ調整の高杯や坩が目立つ土器群を伴う時期である。（１）SI009や（２）SI013は図化できた土器がそもそも少ないので、高杯や坩がそれほど出土していないが、ハケ調整の土器がないことからこの段階とした。器種は高杯、坩、鉢、壺、甕である。（１）SI006と（４）SI001は床面直上で出土した資料が豊富で、この時期のセット関係をみる上でも良好な事例となるだろう。高杯は、口径が大きいものが目立つようになる。体部下端に稜をもたず、丸みを帯びた椀状のものが少数存在する。エンタシス状脚が目立つが、短脚気味で「ハ」字形に開くものも認められる。高杯と坩に、赤彩されるものがある。壺は有段口縁、二重口縁、素口縁のものがある。Ⅰ－２期は、５世紀前半に位置づけられるだろう。

Ⅱ－１期は、須恵器模倣の土師器杯を指標として判断した。やや扁平化しているものの、口径はさほど大きくならず、器高も浅くない。器種は杯・甕・甑がある。６世紀後半に位置づけられる。

Ⅱ－２期は、杯類がほとんどないため時期判断が難しいが、平底で内外面にミガキを施す杯が確認できる。口唇部を面取りする甕もあり、この段階とした。７世紀代に位置づけられる。

２　古墳時代集落の特徴について

前項及び第58図で示したように、大久保遺跡における古墳時代集落の時期は、中期（４世紀後半～５世紀前半）と、後期（６世紀中葉～７世紀代）であった。各時期の遺構は、下記のとおりである。

Ⅰ－１期　（１）SI005・（４）SI003・（５）SI001・（１）SM001

Ⅰ－２期　（１）SI006・009・（２）SI013・014・（４）SI001

Ⅰ期（細別不可）（１）SK001・007・008・（４）SK004

Ⅱ－１期　（１）SI007・（２）SI015

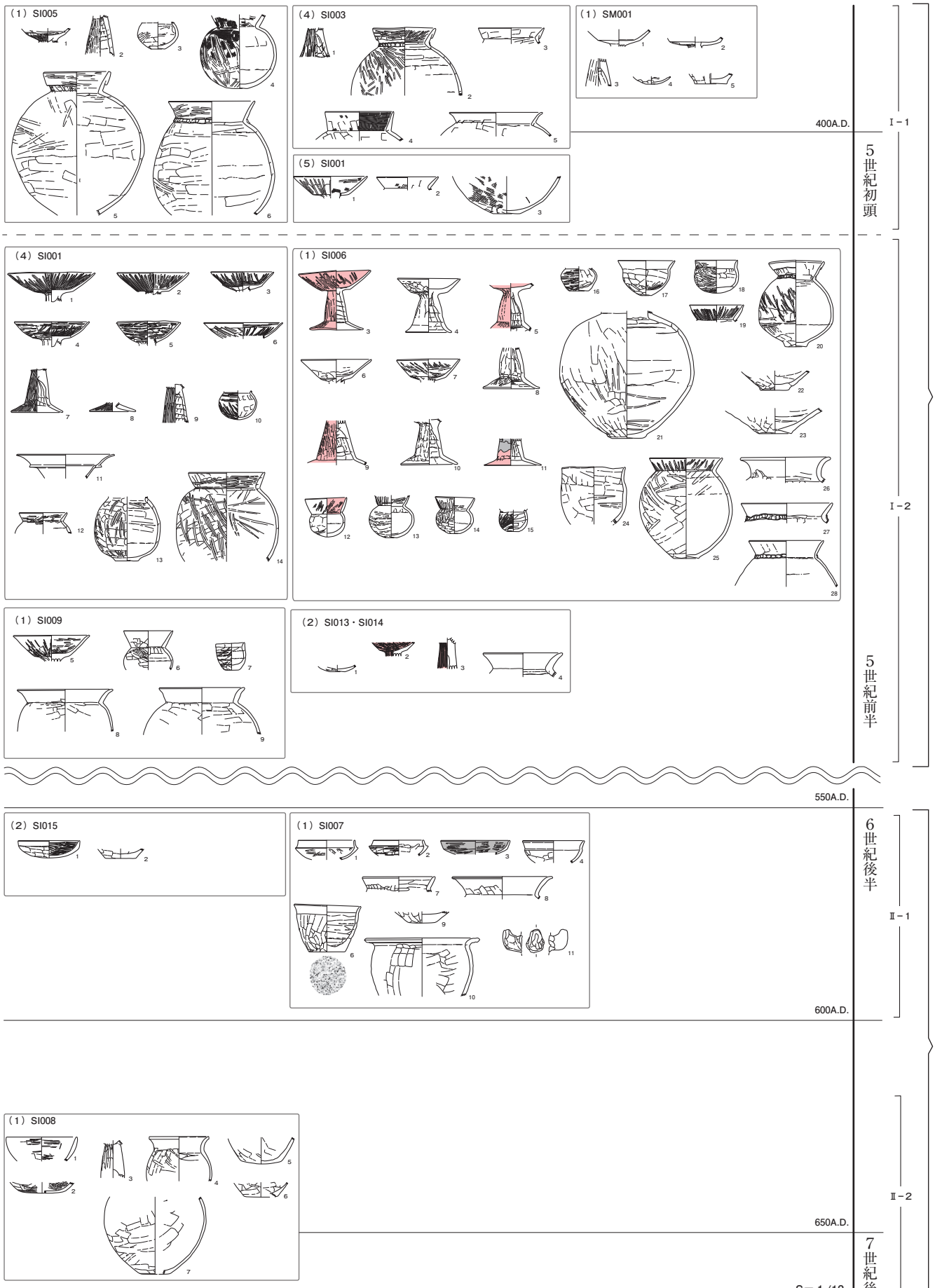
Ⅱ－２期　（１）SI008

不明　（５）SK002～005

Ⅰ期（中期）の遺構は、竪穴住居跡８軒、土坑４基、古墳１基、Ⅱ期（後期）は竪穴住居跡３軒で、古墳時代ではあるものの時期判断のできない土坑が４基であった。

今回の調査対象範囲外にも集落が展開している可能性もあり、空白期間が埋まることもありえるが、少なくとも４世紀後半には集落の形成が始まり、５世紀前半段階で一度断絶したのち、６世紀中葉に小規模ながら集落の形成が再開したようである。

竪穴住居跡は中期・後期ともに調査範囲（台地）の東側に集中して分布していて、時期による分布域の



第58図　古墳時代土器集成図

違いはみられない。主軸方向もまとまりがみいだしたいが、竪穴住居跡の規模についていえば、後期は小型化の傾向がみられる。後期の竪穴住居跡は、カマドが既に導入されている段階のはずだが、炉しか検出されなかった。工房など特殊な性格を有する可能性もあるが、関連をうかがわせる遺物は後期の遺構からは出土しておらず、特殊な遺構という判断もしがたい。なお、中期の竪穴住居跡４軒と後期の竪穴住居跡１軒で床面から炭化材や焼土が検出されており、焼失住居と考えられる。

出土遺物の中では、中期の鍛冶関連遺物と玉が注目される。鍛冶関連遺物としては、高杯脚部転用羽口と鉄滓、鍛造剥片が出土した。羽口と鍛造剥片は中期の竪穴住居跡である（１）SI006の床面で出土した。（１）SI006の炉は鍛冶炉ではなく通常の炉であったため、（１）SI006を鍛冶工房として判断することはできないが、この集落内で古墳時代中期に鍛冶が行われていたと考えてよいだろう。なお、鍛冶関連遺物と断定することはできないものの、（１）SI006をはじめ中期の竪穴住居跡の多くで床面から砥石と軽石が出土している。台石とみられる石製品も（１）SI005及び006から出土しており、鍛冶に関連した遺物の可能性がある。

玉は、（１）SI006炉付近の床面からの出土した滑石製の臼玉３点と勾玉１点で、住居廃絶時の祭祀に伴う可能性がある。なお、（１）SK007からもガラス小玉４点、琥珀製の勾玉１点とともに滑石製の臼玉２点が出土した。これらの遺物と、遺構の平面形・規模からみて（１）SK007は土坑墓と考えられる。

最後に、この集落における墓域について言及しておきたい。先述のように（１）SK007は墓の可能性が高いが、隣接する土坑が２基（（１）SK001・008）も同様の平面形と規模を有しており、墓の可能性がある。これら３基の土坑から５ｍほど離れた位置には方墳が確認され、周溝から中期の遺物が出土している。土坑から出土した土師器は小破片のみで時期判断が難しいが、明確に後期といえる破片はなく、中期の土坑と考えている。したがって、これら土坑と方墳は中期の集落に伴う墓域であり、同じ台地上の東側を集落域、南西側を墓域としたと考えられる。

今回の調査範囲は、台地全体からみれば東側を調査したに過ぎず全容を把握することはできないが、銚子地域では検出例のない古墳時代中期の集落が、墓域を伴って確認された。後期の竪穴住居跡も併せて、銚子地域の古墳時代中・後期における集落の様相を示す貴重な成果といえるだろう。

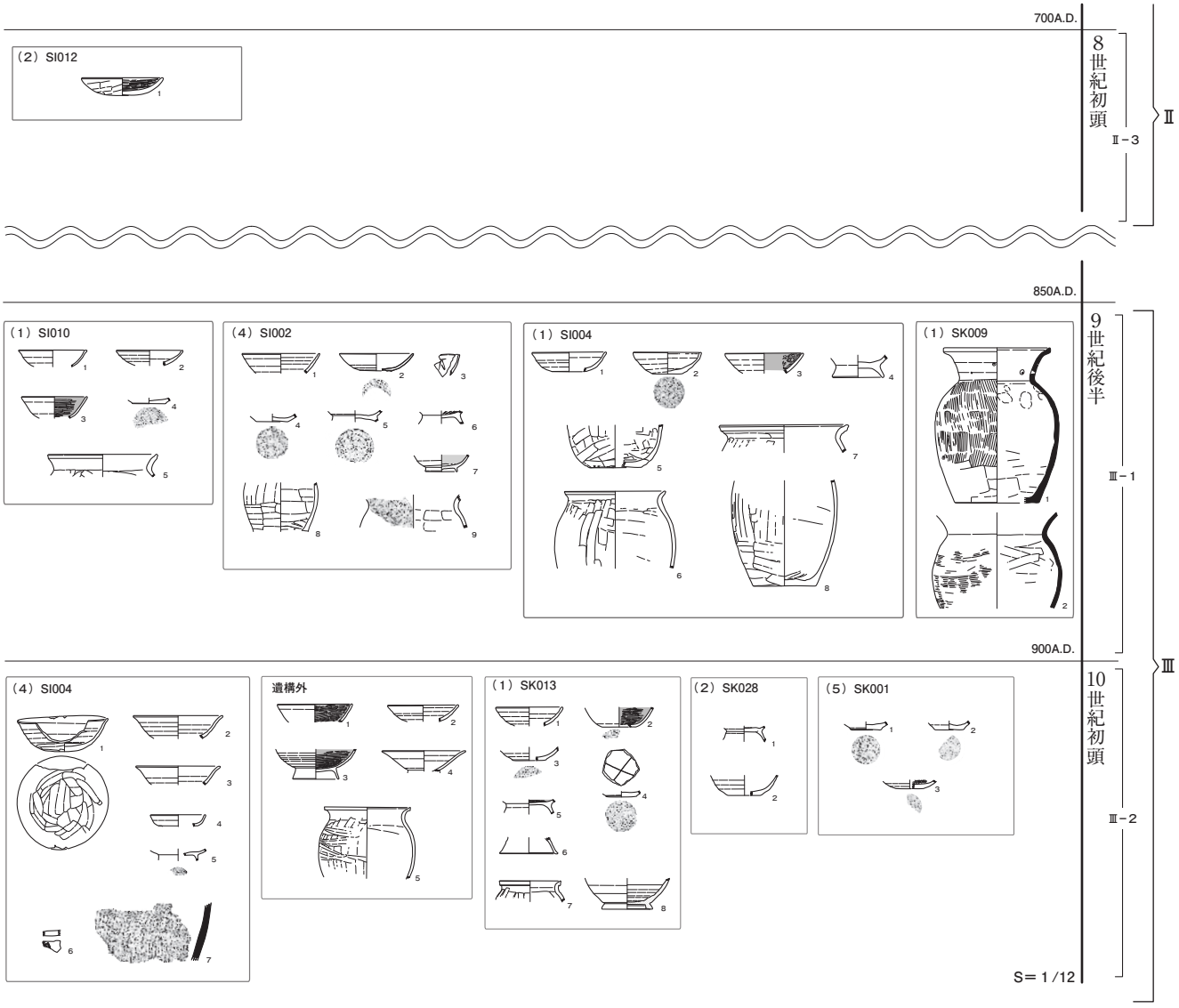
３　奈良・平安時代の土器について（第59図）

Ⅱ－３期が奈良時代、Ⅲ期が平安時代の土器群である。奈良・平安時代としては３時期に細別することができた。

Ⅱ－３期は出土遺物が乏しいが、非ロクロ成形で扁平なつくりの土師器杯を指標とした。８世紀初頭に位置づけられ、古墳時代とした（１）SI008とは時期の隔たりがあまりないのかもしれない。竪穴住居跡１軒（（２）SI012）のみが該当する。

Ⅲ期はロクロ成形の土師器杯に着目し、椀形ではない杯を主体とする土器群をⅢ－１期、体部の丸みが強く、器高が深い椀形の杯をⅢ－２期の指標とした。Ⅲ－１期は９世紀後半、Ⅲ－２期は10世紀初頭と考えられる。

Ⅲ－２期は、外反する口縁部をもつ杯、「ハ」字形に開く高台付きのものがやや目立つ。灰釉陶器は（１）SI002で出土した高台付き椀で、（１）SK013出土のものは大振りで器高が深く、高台付き壺とみられる。折戸53号窯式に併行する時期（10世紀初頭前後）の所産と思われ、共伴する土師器の時期とも整合する時期だが、口縁部が遺存せず断定しがたい。



第59図　奈良・平安時代土器集成図

4　奈良・平安時代集落の特徴について

前項及び第59図で示したように、大久保遺跡における奈良・平安時代の集落は、８世紀初頭と９世紀後半～10世紀初頭の２時期に大別され、150年ほどの空白期間がある。各時期の遺構は、下記のとおりである。

Ⅲ期の中での細別が困難な遺構は、平安時代として記載した。

Ⅱ－３　（２）SI012

Ⅲ－１　（１）SI004・010・（４）SI002・（１）SK009

Ⅲ－２　（４）SI004・（１）SK013・（２）SK028・（５）SK001

平安時代　（２）SI011・（１）SK016・021・024・027A ～ C・030A・B・（２）SK029

奈良時代（８世紀初頭）の遺構は、竪穴住居跡１軒であった。古墳時代の項で触れた６世紀後葉に始まる集落が、８世紀（奈良時代）初頭まで存続した可能性があるが、時間幅に対して遺構数が少なく、断定はできない。

平安時代は９世紀後半の竪穴住居跡が３軒、土坑１基、10世紀初頭の竪穴住居跡が１軒、土坑３基である。このほか（２）SI011と土坑９基が細分できなかったものの、ロクロ土師器の小破片が出土しており、平安時代の遺構と考えられる。

第１章第２節の周辺遺跡で触れたように、本地域において調査歴のある奈良・平安時代の遺跡は４遺跡と少ないながら、時期は８世紀代と９世紀後半～ 10世紀初頭に二分される。特に、大久保遺跡から４km ほどの距離にある長塚十二山遺跡や大宮戸遺跡では、８世紀前半の竪穴住居跡が少数確認され、空白期間を挟んだのち９世紀後半～ 10世紀初頭に住居軒数が増加しており、大久保遺跡と同様である。

９世紀後半～ 10世紀は大規模な水田開発が推進され、多くの奈良・平安時代の台地上の集落が沖積地に移動していったことが想定される時期であるという[5)]。多くの台地上の集落が急激に衰退、消滅する中、この時期に集落が拡大する遺跡には、土器や鉄の生産という特徴がみられるようである。先述した長塚十二山遺跡で鉄製品が多く出土し、隣接する仲有戸遺跡が供給先であった可能性が高いことは、この指摘に合致している。田地の耕作などで大量の鉄製品が必要となり、その供給地として大量の燃料を供給できる未開地を開墾し、生産を主体とした集落が形成されたことが想定される。銚子地域の平安時代の集落もそのような背景のもとに開発された可能性があるが、検討するには調査歴のある遺跡数が少なく、周辺の調査成果を待たねばならないだろう。

注

１）　千葉県史料研究財団　2005『千葉県の歴史　資料編　考古４』

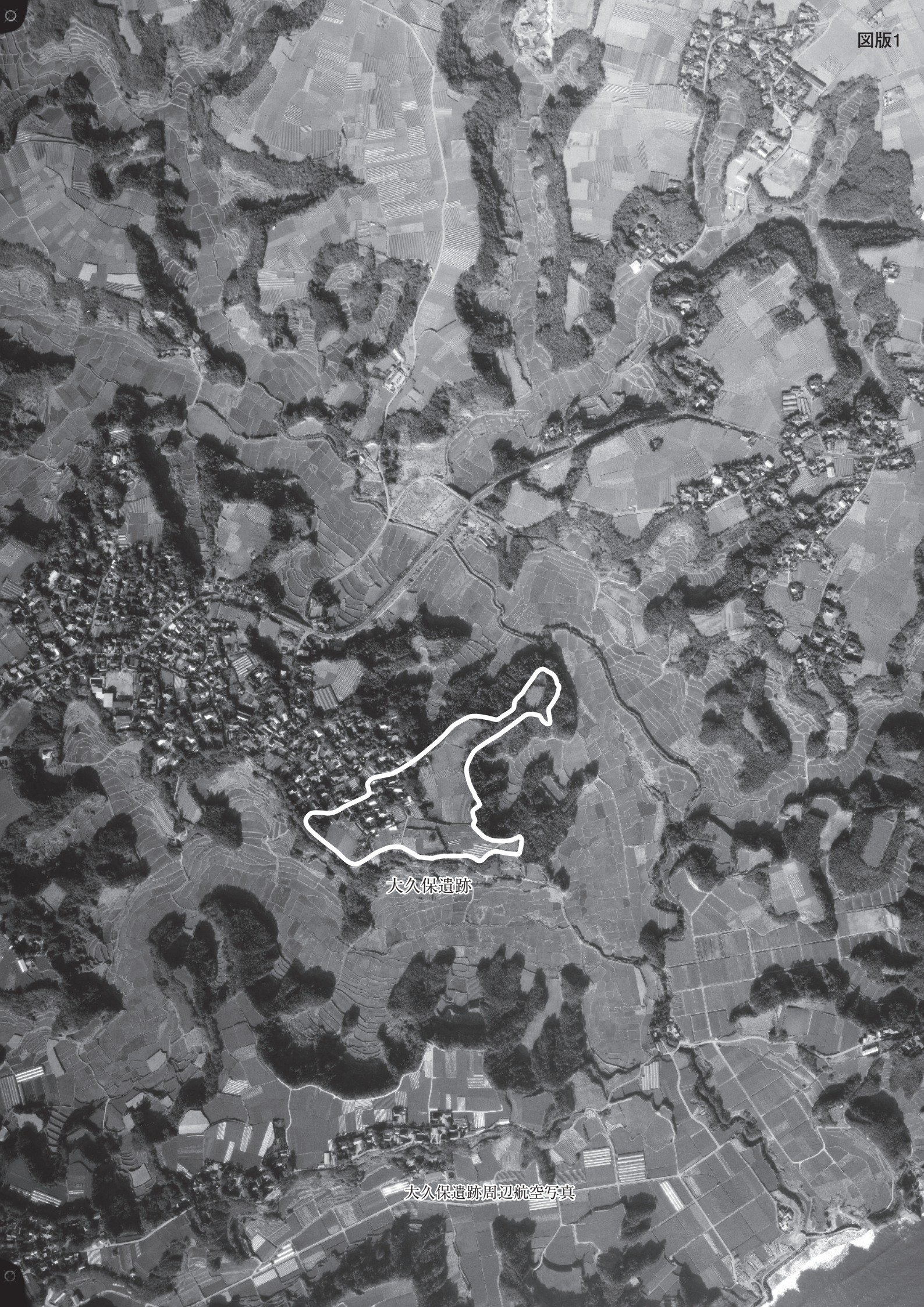
２）　千葉県教育振興財団　2007『ちはら台ニュータウンＸＶⅡ』千葉県教育振興財団調査報告書第565集

３）　椎柴小学校遺跡では弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺構が検出されている。

４）　千葉県文化財センター　2012『古墳時代中期の房総』千葉県文化財センター研究紀要27
　　上野純司　1985「鬼高式土器の細分をめぐって－我孫子市日秀西遺跡出土の土器を中心にして－」『論集　日本原史』
　　金丸　誠　1992「下総地域の鬼高式土器」『考古学ジャーナル』No.342　ニューサイエンス社
　　小沢　洋　1992「上総地域の鬼高式土器」『考古学ジャーナル』No.342　ニューサイエンス社
　　房総歴史考古学研究会　1987『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究第１集

５）　１）に同じ

写　真　図　版



大久保遺跡周辺航空写真

図版2

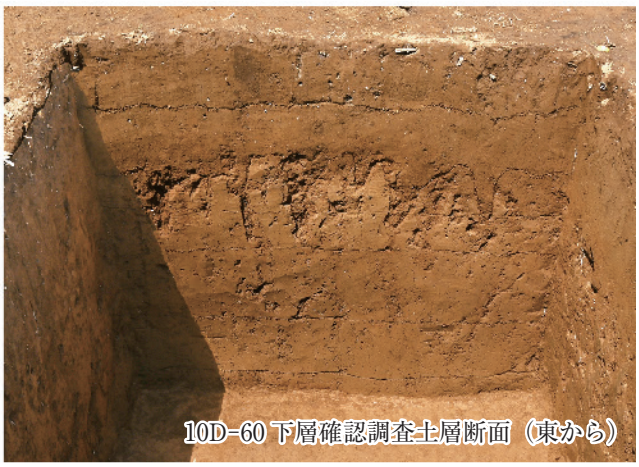
調査前風景

調査前風景

第１ブロック南壁セクション（北から）

第１ブロック遺物出土状況（北から）

第２ブロック遺物出土状況（東から）


10D-60 下層確認調査土層断面（東から）

（１）SK010（北西から）

（１）SK023（北西から）

（1）SI002（東から）

（1）SI003（北から）

（1）SI001（南から）

（1）SK002・SK003・SK012（北から）

（1）SK004（東から）

（1）SK005（北西から）

（1）SK006 セクション（北から）

（4）SK003 セクション（南から）

（4）SK003（南から）

（5）SS001 セクション（南から）

（5）SS001（南から）

（1）SI005 遺物出土状況（西から）

（1）SI005 遺物出土状況（南西から）

（1）SI005 炉セクション（東から）

（1）SI005・SI008（西から）

（1）SI006 遺物出土状況（北西から）

（1）SI006 セクション（西から）

（1）SI006 遺物出土状況（南から）

（1）SI006（北西から）

（1）SI006 掘方（南西から）

（1）SI007 セクション（南から）

（1）SI007 遺物出土状況（北東から）

（1）SI007（北から）

（1）SI007 掘方（北から）

（1）SI008 遺物出土状況（西から）

（1）SI008（西から）

（1）SI009 遺物出土状況（西から）

（1）SI009（南から）

（2）SI013 炉検出状況（東から）

（2）SI013・SI014 遺物出土状況（東から）

（2）SI013 遺物出土状況（東から）

（2）SI015（南東から）

（4）SI001 遺物出土状況（南から）

（4）SI001（西から）

（4）SI003 遺物出土状況（南から）

（4）SI003（東から）

（5）SI001（南から）

（5）SI001 セクション（北東から）

（1）SK001（南から）

（1）SK007（西から）

（1）SK008（南東から）

（4）SK004（北西から）

（5）SK002（北から）

（5）SK003（南から）

（5）SK004（南東から）

（5）SK005 セクション（南から）

（5）SK005（北から）

（1）SM001 B−B’ セクション（南から）

（1）SM001 遺物出土状況（北から）

（1）SM001（東から）

（1）SI004 カマドセクション（西から）

（1）SI004 遺物出土状況（北西から）

（1）SI004 掘方（北から）

（1）SI010（南西から）

（1）SI010 掘方・遺物出土状況（北から）

（4）SI002（南から）

（4）SI004 遺物出土状況（北から）

（4）SI004・SK006（南から）

（1）SK009 セクション（南から）

（1）SK009 遺物出土状況（南から）

（1）SK009（北から）

（1）SK013 セクション（南から）

（1）SK013 遺物出土状況（南から）

（1）SK027A～C
（北から）

（2）SK028 セクション（東から）

（2）SK028（西から）

（2）SK029 焼土検出状況（南から）

（2）SK029（南東から）

（5）SK001（南から）

（2）SI011（東から）

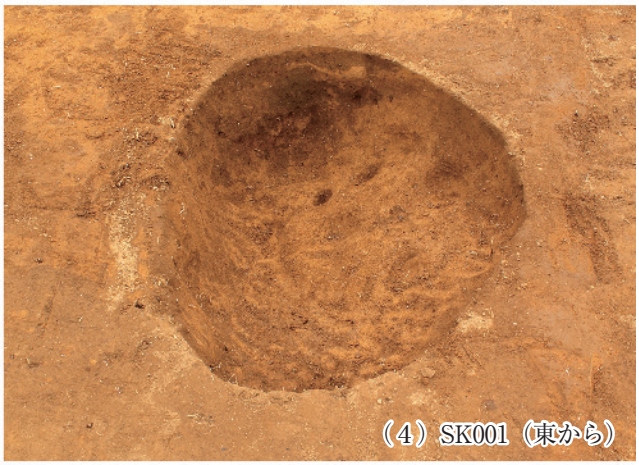
（2）SI012（東から）

（1）SK019（東から）

（1）SK020 セクション（南西から）

（1）SK020-3 遺物出土状況（南から）

（1）SK020（北から）


（4）SK001（東から）

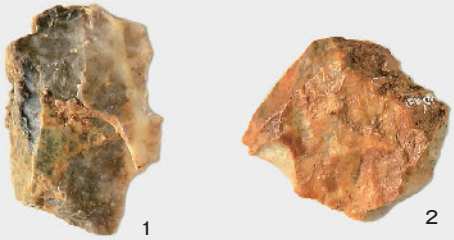
（4）SK002（北から）

（4）SK005 遺物出土状況（東から）

（4）SK005（西から）

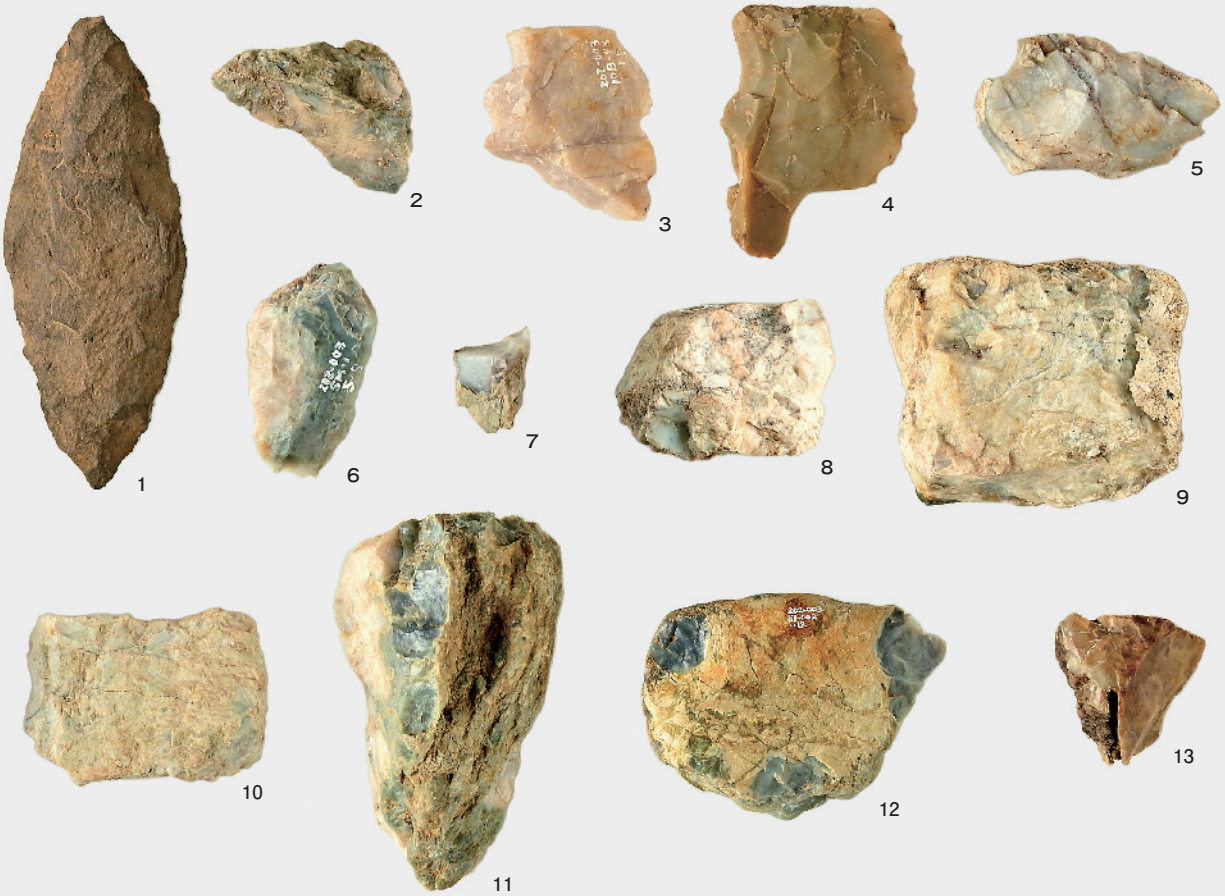
（2）SD002～004・006・007・010（北西から）

第１ブロック出土石器



第２ブロック出土石器

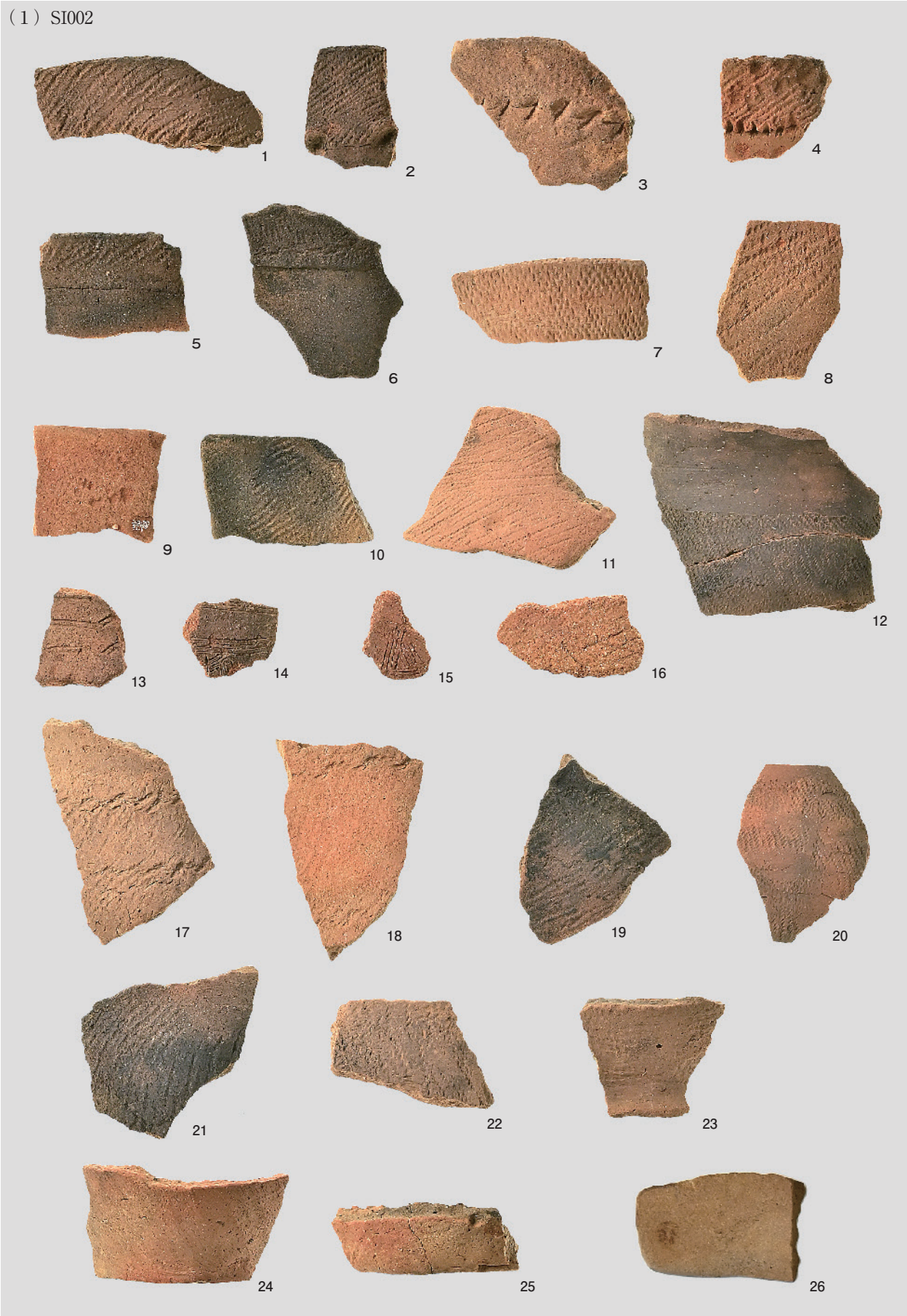
（1）上層遺構中出土石器



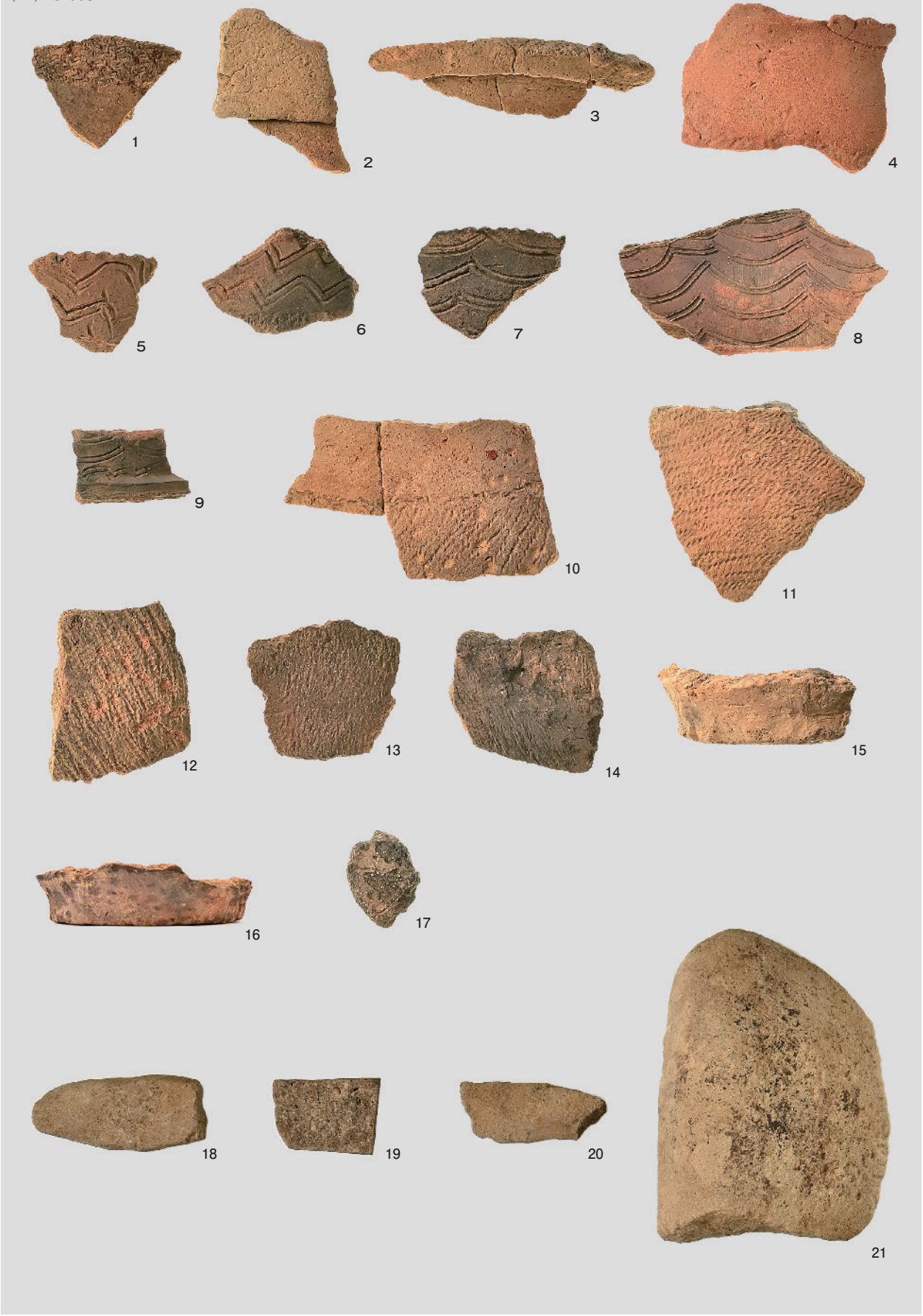
縄文時代遺構外出土の遺物（1）

縄文時代遺構外出土の遺物（２）

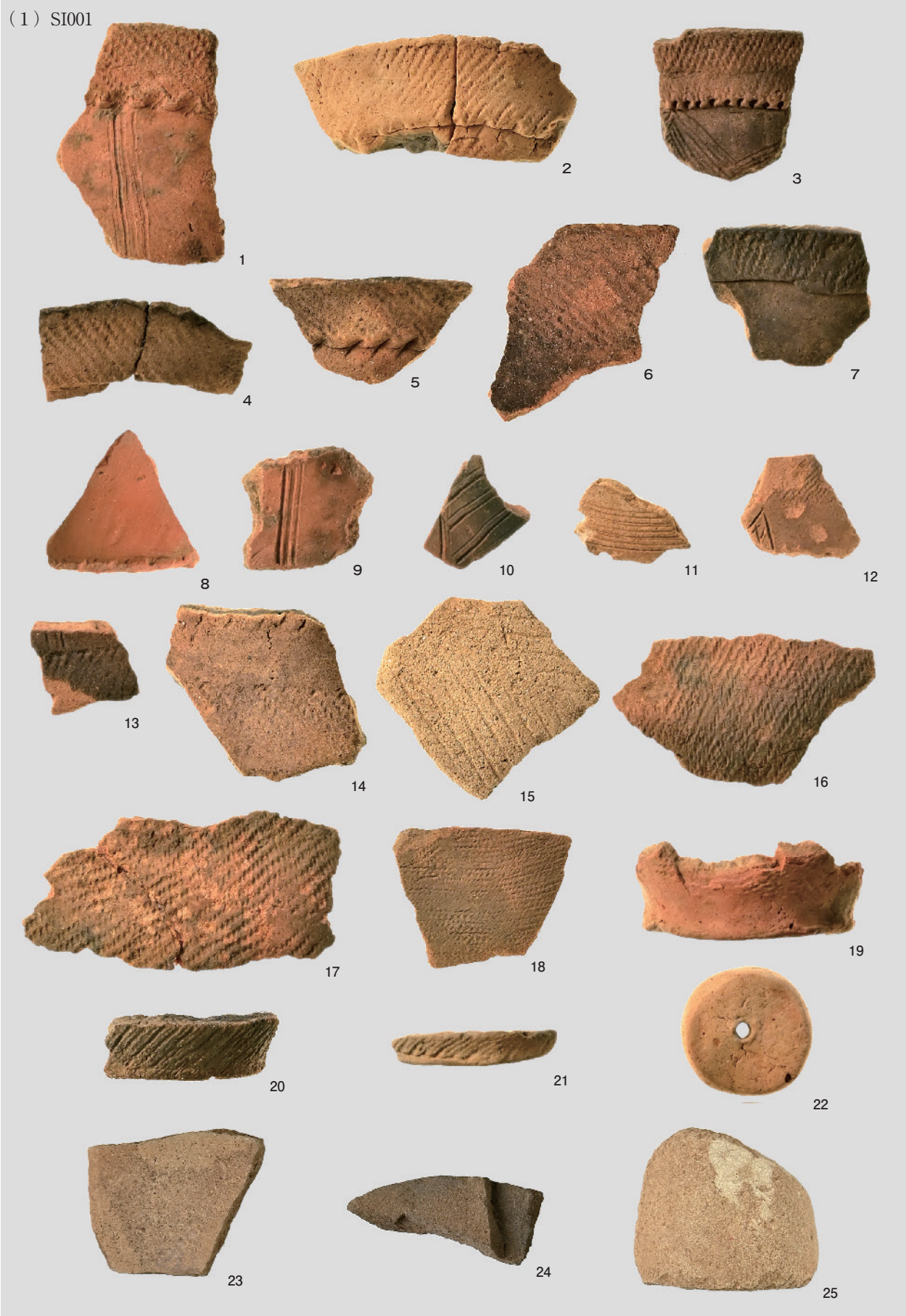
（1）SI002



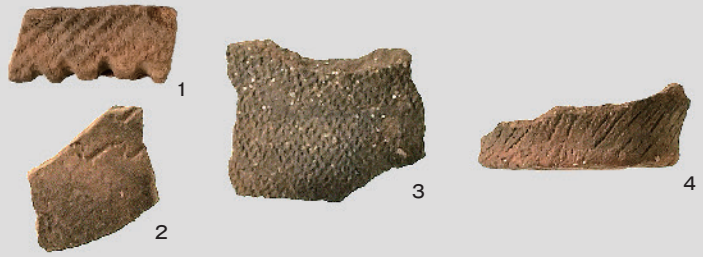
（1）SI003



（1）SI001

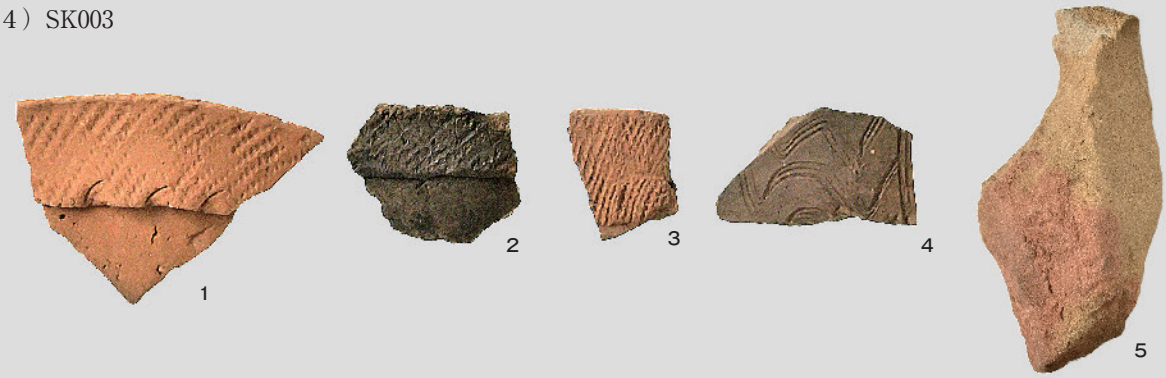


（1）SK003

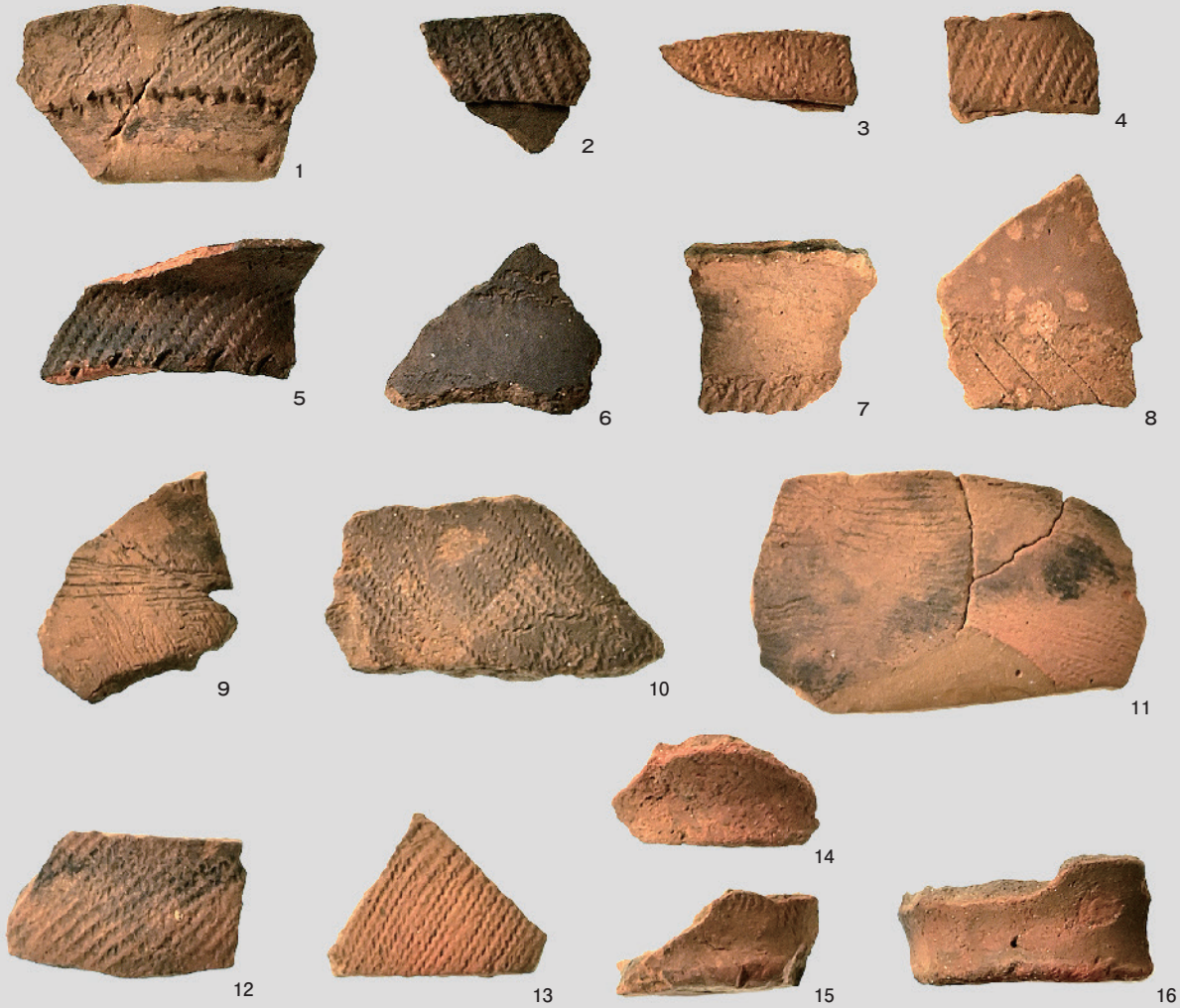


（1）SK004

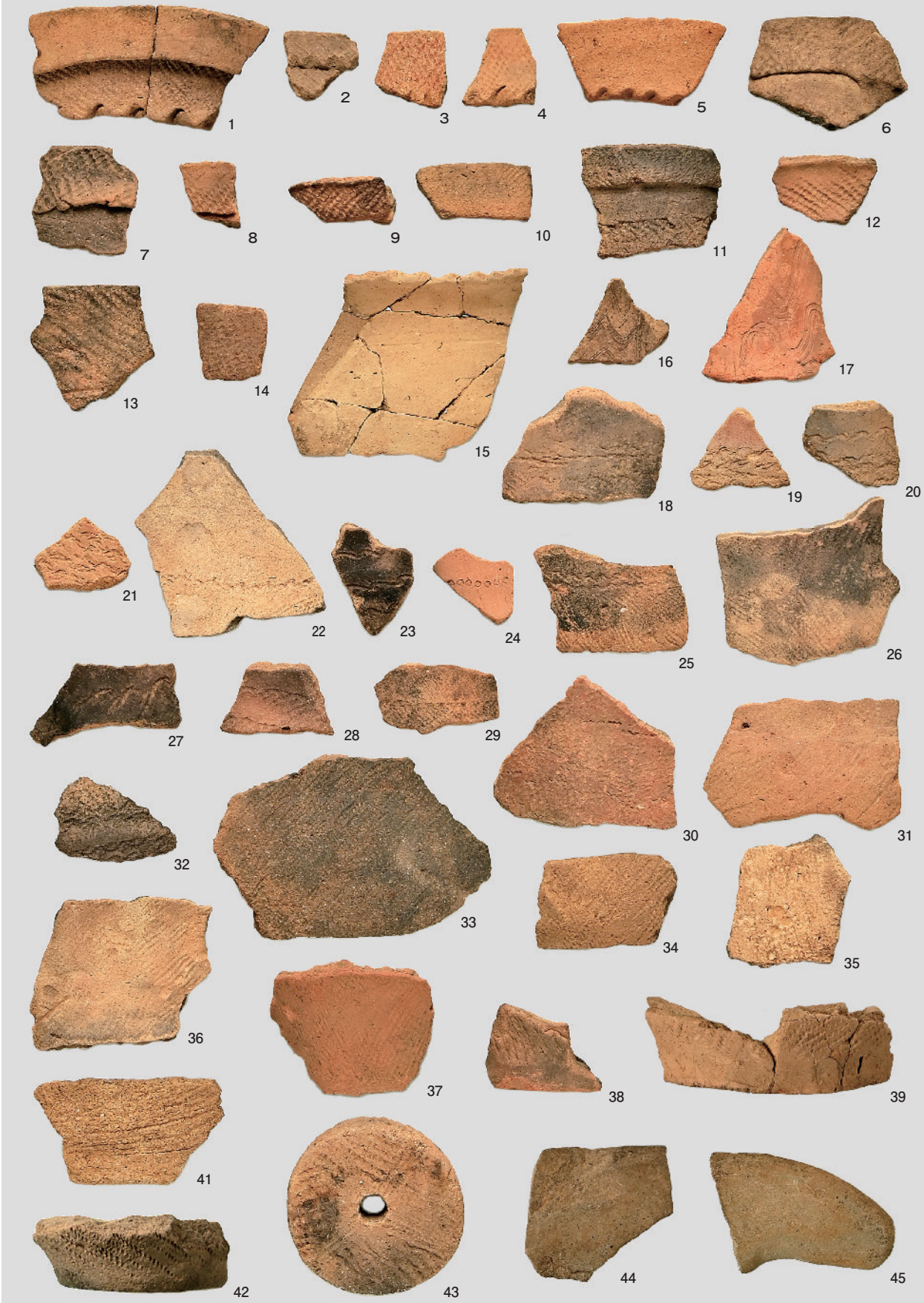
（4）SK003



（5）SS001



弥生時代遺構外出土の遺物



（1）SI005

1

2

3

4

（1）SI006

29

30

31

32

33

35

34

36

37

（1）SI008

1

2

3

6

8

9

（1）SI007

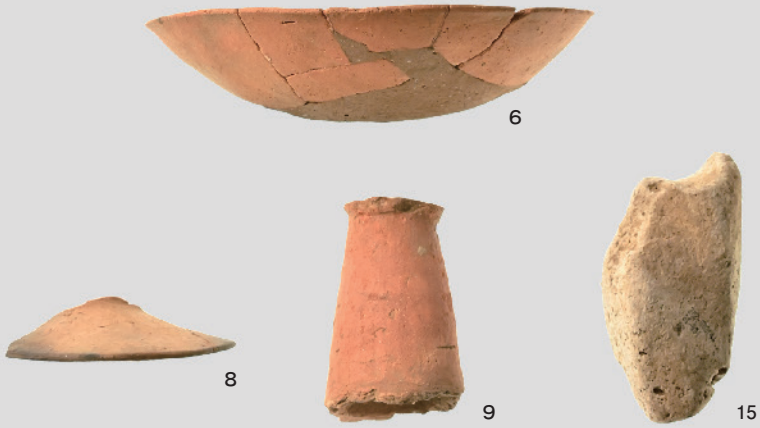
（1）SI009

（2）SI013

（2）SI014

（2）SI015

（4）SI001



（4）SI003

（1）SM001

（5）SI001

古墳時代遺構外出土の遺物

（1）SI005－1

（1）SI005－3

（1）SI005－4

（1）SI005－5

（1）SI005－6

（1）SI006－1

（1）SI006－2

（1）SI006－3

（1）SI006－4

（1）SI006－5

（1）SI006－6

（1）SI006－7

（1）SI006－8

（1）SI006－9

（1）SI006－10

（1）SI006－11

（1）SI006－12

（1）SI006－13

（1）SI006－14

（1）SI006－15

（1）SI006－16

（1）SI006－17

（1）SI006－18

（1）SI006－20

（1）SI006－21

（1）SI006－22

（1）SI006－24

（1）SI006－25

（1）SI006－26

（1）SI006－27

（1）SI006－28

（1）SI007－6

（1）SI008－4

（1）SI008－5

（1）SI008－7

（1）SI009－5

（1）SI009－6

（1）SI009－7

（1）SI009－9

（2）SI015－1

（4）SI001－1

（4）SI001－2

（4）SI001－3

（4）SI001－4

（4）SI001－5

（4）SI001－7

（4）SI001－10

（4）SI001－12

（4）SI001－13

（4）SI001－14

（4）SI003－2

（5）SI001－1

（1）SM001－1

（1）SM001－2

（1）SM001－4

（1）SI004－2

（1）SI004－4

（1）SI004－8

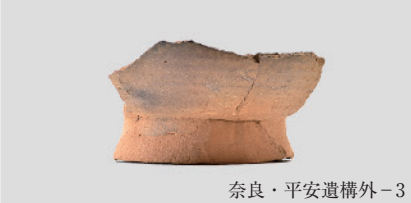
（4）SI004－1

（1）SK009－1

（1）SK009－2

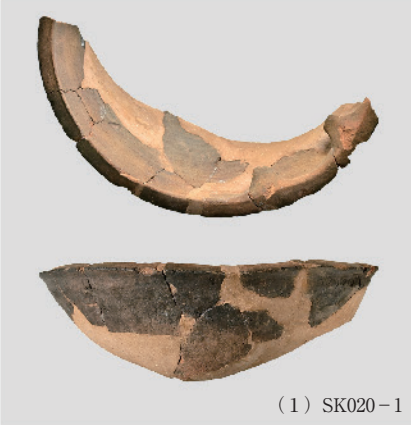
（1）SK013－8

（4）SI002－7


奈良・平安遺構外－3

奈良・平安遺構外－5

（4）SK005－1

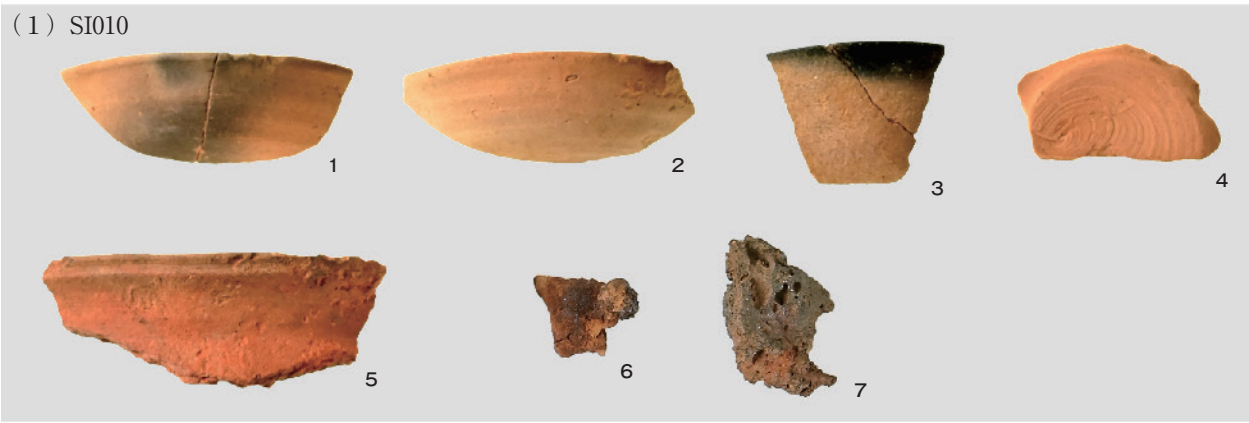

（1）SK020－1

（4）SK002－1

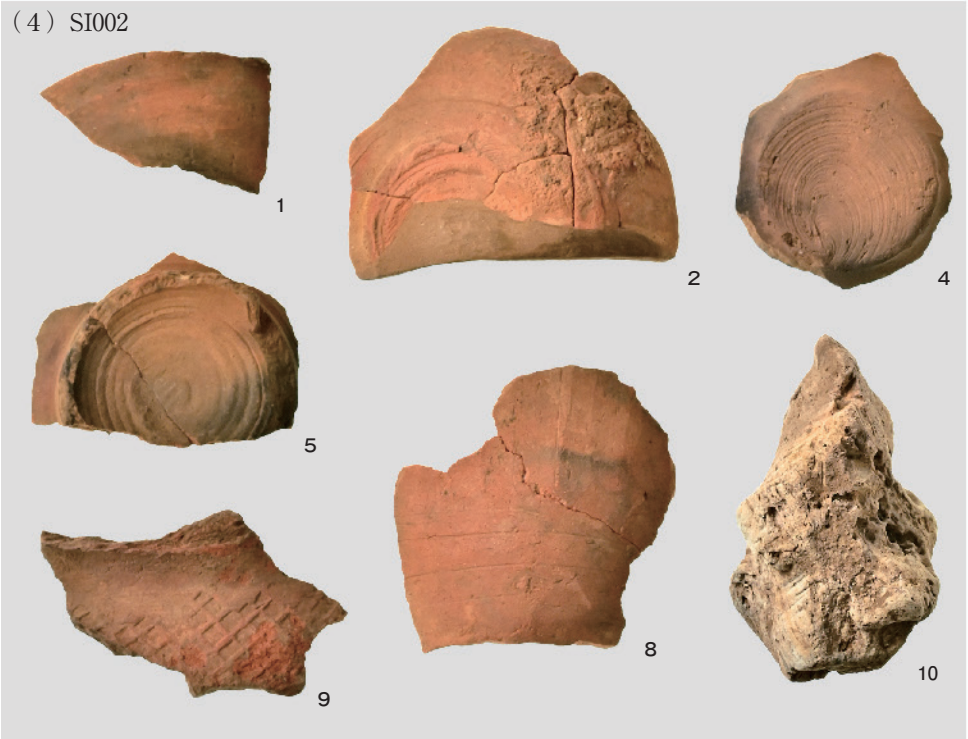
中世遺構外－1

（1）SI004

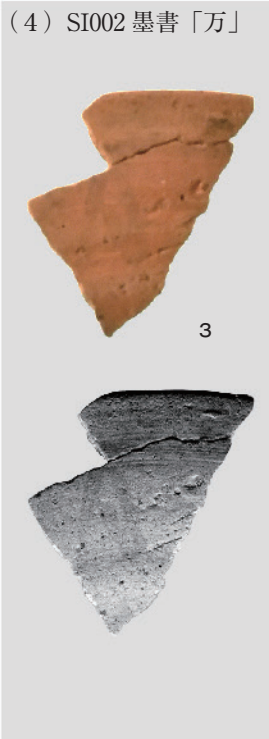
（1）SI010



（4）SI002



（4）SI002 墨書「万」



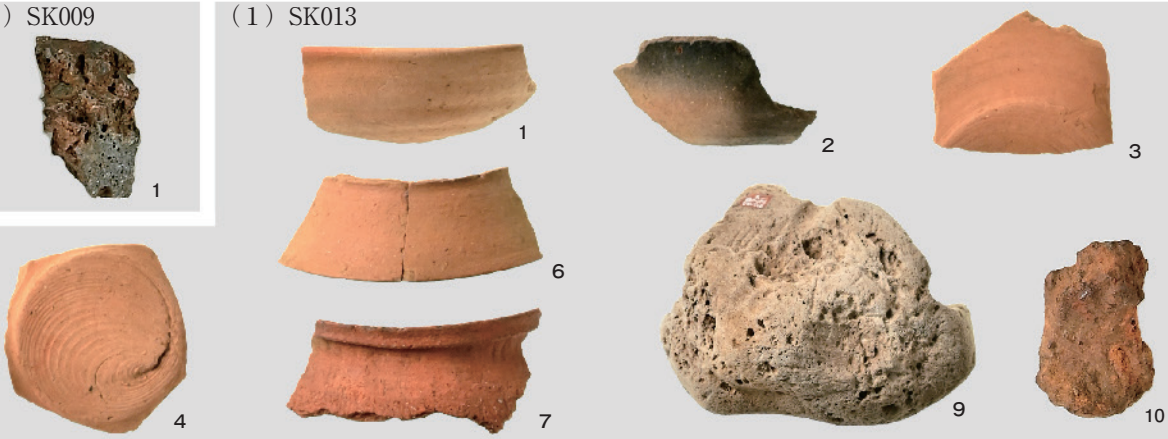
（4）SI004

（4）SI004 墨書

（1）SK007

（1）SK009

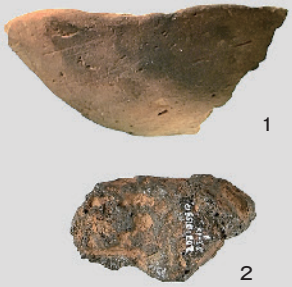
（1）SK013



（1）SK027

（1）SK030

（2）SI012



（5）SK001

奈良・平安時代遺構外出土の遺物

報告書抄録

ふりがな	ちょうししおおくぼいせき
書名	銚子市大久保遺跡
副書名	国道126号八木拡幅事業埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第55集
編著者名	鈴木彩奈・久我谷渓太・荒木昂大
編集機関	千葉県教育委員会
所在地	〒260-8662　千葉県千葉市中央区市場町１−１　TEL043-223-4129
発行年月日	西暦2025年３月10日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大久保遺跡（おおくぼいせき）	銚子市八木町（ちょうししやぎちょう）1154 ほか	12202	003	35度 42分 21秒	140度 45分 13秒	20140701 ～ 20141030 20161011 ～ 20161209 20170612 ～ 20170710 20210601 ～ 20210831 20220412 ～ 20220518	10,316㎡	道路建設
				世界測地系 WGS84				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大久保遺跡	包蔵地	旧石器時代	ブロック２か所	尖頭器、剥片、石核	
		縄文時代	土坑２基	縄文土器、石器	
		弥生時代	竪穴住居跡２軒、土坑８基、方形周溝墓１基	弥生土器、石製品、土製品	
		古墳時代	竪穴住居跡 11 軒、土坑８基、方墳１基	土師器、須恵器、土製品、石製品、玉、高杯転用羽口、スラグ、鍛造剥片、鉄製品	
		奈良・平安時代	竪穴住居跡６軒、土坑 14 基	土師器、須恵器、陶器、石製品、鉄製品	
		中・近世	土坑７基、溝状遺構６条	陶磁器、土師質土器	

要約

大久保遺跡では、旧石器時代から中・近世に至るまで各時代の遺構・遺物が確認された。

主体となる時期は古墳時代で、中期の竪穴住居跡が８軒、後期は３軒で調査範囲東側に分布していた。高杯転用羽口やスラグ、鍛造剥片など鍛冶関連遺物が出土しており、鍛冶工房の存在を示唆する成果が出ているほか、滑石製の勾玉と臼玉が中期の竪穴住居跡から出土しており、住居廃絶時における祭祀の可能性がある。中期の集落は方墳をはじめとする墓域を伴って検出されており、これまで中期の集落がほとんど知られていなかった銚子地域における貴重な成果となった。

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第55集

銚子市大久保遺跡

－国道126号八木拡幅事業埋蔵文化財発掘調査報告書－

令和７年３月10日発行

編集・発行　千葉県教育委員会
千葉市中央区市場町１－１

印　　刷　三陽メディア株式会社
千葉市中央区浜野町1397